

一般国道49号

阿賀野バイパス関係発掘調査報告書 19

石船戸東遺跡III 第4次調査

蕪木遺跡II 第3次調査

山口野中遺跡V 第6次調査

2023

一般国道 49 号

阿賀野バイパス関係発掘調査報告書 19

いしづな と ひがし
石船戸東遺跡III 第4次調査

かぶら ぎ
蕪木 遺跡 II 第3次調査

やまぐち の なか
山口野中遺跡V 第6次調査

2023

序

一般国道 49 号は、新潟市と福島県いわき市の間の 249km、日本海側と太平洋側を結ぶ主要幹線路としての役割を担っています。また、日常生活や地域経済を支える重要な基盤施設でもあるため、近年、著しく交通量が増えてきました。それに伴い、交通渋滞や交通事故の増加など生活環境に悪影響を与える様々な問題が生じています。

そこで、阿賀野市六野瀬から同市下黒瀬を結ぶ延長 13.7km の阿賀野バイパスの建設が計画されました。同バイパスは、安全で円滑な交通の確保と都市機能活性化のために重要な役割を果たすものと大いに期待されます。

本書は、阿賀野バイパスの建設に先立ち、2022（令和4）年度に本発掘調査を実施した石船戸東遺跡第4次調査、燕木遺跡第3次調査、山口野中遺跡第6次調査の報告書です。いずれの遺跡も旧阿賀野川の自然堤防に位置し、燕木遺跡と山口野中遺跡では古代から中世の道が見つかりました。これまでの阿賀野バイパス関係の発掘調査によって、古代から中世における旧阿賀野川を利用した河川交通と陸上交通の結節点に成立した遺跡群の様相が明らかになりました。

今回の調査成果が、地域の歴史を解明するための基礎資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力と御支援を賜った阿賀野市教育委員会、並びに地域住民の方々、また、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の御高配を賜った国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所に対して厚くお礼申し上げます。

2023（令和5）年 7 月

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

理事長 野上文敏

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県阿賀野市大字百津字石船戸に所在する石船戸東遺跡、阿賀野市大字堀越字熊木に所在する熊木（かぶらぎ）遺跡、阿賀野市大字月崎に所在する山口野中遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、一般国道49号阿賀野バイパス建設事業に伴い、新潟県教育委員会（以下、県教委とする）の調整を経て、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所（以下、国交省とする）からの委託を受けた公益財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、理文事業団）が実施した。
- 3 埋文事業団は2022年度に発掘調査、整理作業及び関連諸工事等を株式会社ノガミに委託した。発掘調査面積は石船戸東遺跡が上層1,306m²、下層が67m²、計1,373m²、熊木遺跡が422m²、山口野中遺跡が81m²である。
- 4 出土品及び調査・整理に係る資料は、一括して新潟県が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 5 遺物の注記は、調査年度（2022年度）の下二桁「22」と各遺跡の略称（石船戸東遺跡：「石ナ」、熊木遺跡：「カキ」、山口野中遺跡：「ヤマノ」）を組み合わせて「22石ナ」、「22カキ」、「22ヤマノ」を頭に付し、出土地点（グリッド）、遺構名・層位を併記した。
- 6 本文の図中で示す方位は、すべて国家標準VII系の座標北を示す。
- 7 遺構番号は、種別に関わりなく通し番号とした。詳細は第Ⅰ章3Aに記述している。なお、整理作業の過程で欠番としたものもある。また、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 8 引用文献は、著者及び発行年（西暦）を中心に〔　〕で示し、自然科学分析を除き巻末に一括して掲載した。
- 9 作成した図版のうち、既存の地図を使用した場合は、それぞれにその出典を記した。
- 10 調査成果の一部は、新潟県埋蔵文化財センター冬季企画展「発掘！新潟の遺跡 2022」、理文事業団年報（2022年度）、広報紙『理文にいがた』第120号で公表しているが、本書をもって正式な報告とする。
- 11 自然科学分析は、放射性炭素年代測定・樹種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、分析結果は赤堀岳人・馬場健司・田中義文・東澤　翔が執筆した。
- 12 墓庭の認められる土器は、浅井勝利氏（新潟県立歴史博物館）に鑑定を依頼し、コメントをいただいた。
- 13 本書の執筆は荒川隆史（埋文事業団）、藤本隆之・山中悟朗・高野恒一・小村正之（以上、株式会社ノガミ）、赤堀岳人・馬場健司・田中義文・東澤　翔（パリノ・サーヴェイ株式会社）が以下の分担で行った。なお、編集は藤本（株式会社ノガミ）が行った。
 - 荒川 第Ⅰ章
 - 藤本 第Ⅰ章2・3、第Ⅲ章1・2・4
 - 山中 第Ⅱ章、第Ⅲ章3
 - 藤本・山中 第Ⅲ章6
 - 高野 第Ⅳ章1・2・3・4・6、第Ⅴ章1・2A・3A・4・5
 - 小村 第Ⅴ章2B・3B
 - 赤堀・馬場・田中・東澤 第Ⅲ章5、第Ⅳ章5
- 14 遺構図のトレース及び各種図版作成・編集は株式会社ノガミが行った。
- 15 図書館等（著作権法第31条第1項に規定する図書館等をいう）の利用者は、その調査研究の用に供するために、本報告書の全体について、複製することができる。
- 16 発掘調査から本書の完成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚くお礼申し上げる。（敬称略、五十音順）
 - 浅井勝利　古澤要史　阿賀野川土地改良区　阿賀野市教育委員会　阿賀野市建設課
 - 国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所　小境集落　新潟県立歴史博物館　有限会社不二出版

目 次

第Ⅰ章 序 章

1 調査に至る経緯	1
2 調査・整理体制	2
3 調査の基本方針	3
A 遺構名の付し方	3
B 土層観察の記載方法	4
C 本書の記述方針	4

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境	7
A 遺跡周辺の地理的概観	7
B 阿賀野川の河道の変遷	8
2 歴史的環境	9
A 中世略史	9
B 白河莊の中世遺跡	9
C 古代の遺跡	13
D 繩文時代の遺跡	14

第Ⅲ章 石船戸東遺跡Ⅲ

1 調査 経過	15
A 試掘確認調査	15
B 本発掘調査（第1～3次調査）	16
C 本発掘調査の経過（第4次調査）	16
D 下層（縄文時代）の確認調査	17
E 整理作業の経過	18
2 調査の概要	18
A グリッドと調査区の設定	18
B 基本層序	19
C 遺構・遺物の検出状況	21
3 上層（中世以降）の遺構	21
A 概要	21
B 9区の調査	22
C 10区の調査	23
4 遺物	31
A 記述の方法	31
B 土器・陶磁器	31
C 石製品・木製品・金属製品	33

5	自然科学分析	33
A	はじめに	33
B	試 料	33
C	分析方法	33
D	結 果	34
E	考 察	35
6	調査のまとめ	36

第IV章 蕪木遺跡II

1	調査経過	39
A	試掘確認調査	39
B	本発掘調査(第1・2次調査)	40
C	本発掘調査(第3次調査)	41
D	整理作業の経過	42
2	調査の概要	43
A	グリッドと調査区の設定	43
B	基本層序	44
C	蕪木遺跡の旧地形について	45
3	遺 構	46
A	概 要	46
B	掘立柱建物	46
C	土 坑	46
D	溝	47
E	道	50
F	ビ ッ ト	51
G	旧 河 道	52
H	性格不明遺構	53
I	噴 砂	53
4	遺 物	54
A	概 要	54
B	遺構出土遺物	54
C	遺構外出土遺物	56
5	自然科学分析	56
A	はじめに	56
B	試 料	56
C	分析方法	56
D	結 果	57
E	考 察	58
6	調査のまとめ	60
A	古 代	60
B	中 世	62

第V章 山口野中遺跡V

1 調査経過	64
A 試掘確認調査	64
B 本発掘調査（第6次調査）	65
C 整理作業	65
2 調査の概要	65
A グリッドと調査区の設定	65
B 基本層序	65
3 遺構	67
A 概要	67
B 满	67
4 遺物	68
A 概要	68
B 出土遺物	68
5 調査のまとめ	68
A 6区・10区との関係	69
B 5区・塙跡遺跡との関係	70
《引用・参考文献》	71
《観察表》	75

挿図目次

第1図 阿賀野バイパスの路線と遺跡の位置	1	第17図 2009・2010年度の試掘トレンチ位置図	39
第2図 遺構の平・断面の分類	5	第18図 2020年度のトレンチ位置図	40
第3図 遺構埋土の堆積形状の分類	5	第19図 2014・2015年度の調査区位置図	40
第4図 掘立柱建物の計測位置	6	第20図 調査区位置図	41
第5図 梁間一間型建物の類型	6	第21図 グリッド設定と調査区	43
第6図 道路周辺における阿賀野川の河道の変遷	7	第22図 基本層序	44
第7図 越後平野の形成過程	8	第23図 薦木遺跡と旧河道	45
第8図 周辺の地形と道路分布	10	第24図 道路南部の航空写真	45
第9図 白河荘復元図	12	第25図 噴砂位置図	53
第10図 試掘トレンチ位置図	15	第26図 生材の顕微鏡写真	58
第11図 グリッド設定と調査区	18	第27図 繼年較正結果	58
第12図 基本層序	20	第28図 古代の遺構分布図	61
第13図 生材・炭化材の顕微鏡写真	35	第29図 中世の遺構分布図	62
第14図 繼年較正結果	35	第30図 試掘トレンチ位置図	64
第15図 調査区内における居住域と生産域	37	第31図 グリッド設定と調査区	66
第16図 馬小屋と推定される掘立柱建物の報告事例	38	第32図 基本層序	67
		第33図 中世の道推定図	69

挿表目次

第1表 周辺の道路.....	11	第3表 発掘調査・整理作業工程.....	42
第2表 測定試料の樹種と放射性炭素年代測定結果.....	34	第4表 測定試料の樹種と放射性炭素年代測定結果.....	57

図版目次

【画面版】

- 図版 1 石船戸東遺跡Ⅲ 調査範囲図
 図版 2 石船戸東遺跡Ⅲ 道構全体図
 図版 3 石船戸東遺跡Ⅲ 9区道構全体図
 図版 4 石船戸東遺跡Ⅲ 9区道構個別図
 図版 5 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構分割図(1)
 図版 6 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構分割図(2)
 図版 7 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構分割図(3)
 図版 8 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構個別図(1)
 図版 9 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構個別図(2)
 図版 10 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構個別図(3)
 図版 11 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構個別図(4)
 図版 12 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構個別図(5)
 図版 13 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構個別図(6)
 図版 14 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構個別図(7)
 図版 15 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構個別図(8)
 図版 16 石船戸東遺跡Ⅲ 9-10区下層トレーナー^チ
 図版 17 石船戸東遺跡Ⅲ 出土遺物(1)土器・陶磁器
 図版 18 石船戸東遺跡Ⅲ 出土遺物(2)土器・陶磁器・瓦・石製品・木製品・金属製品
 図版 19 蕉木遺跡Ⅱ 調査範囲図
 図版 20 蕉木遺跡Ⅱ 道構全体図
 図版 21 蕉木遺跡Ⅱ 道構分割図(1)
 図版 22 蕉木遺跡Ⅱ 道構分割図(2)
 図版 23 蕉木遺跡Ⅱ 道構分割図(3)
 図版 24 蕉木遺跡Ⅱ 道構個別図(1)
 図版 25 蕉木遺跡Ⅱ 道構個別図(2)
 図版 26 蕉木遺跡Ⅱ 道構個別図(3)
 図版 27 蕉木遺跡Ⅱ 道構個別図(4)
 図版 28 蕉木遺跡Ⅱ 道構個別図(5)
 図版 29 蕉木遺跡Ⅱ 道構個別図(6)
 図版 30 蕉木遺跡Ⅱ 道構個別図(7)
 図版 31 蕉木遺跡Ⅱ 出土遺物(1)土器・陶磁器
 図版 32 蕉木遺跡Ⅱ 出土遺物(2)土器・土製品・金属製品・鍛冶関連遺物・木製品
 図版 33 山口野中遺跡V 調査範囲図
 図版 34 山口野中遺跡V 道構全体図
 図版 35 山口野中遺跡V 道構分割図・道構個別図(1)
 図版 36 山口野中遺跡V 道構分割図・道構個別図(2),出土遺物

【写真図版】

- 図版 37 石船戸東遺跡Ⅲ 遺跡遠景
 図版 38 石船戸東遺跡Ⅲ 9区完掘・10区完掘
 図版 39 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構集中
 図版 40 石船戸東遺跡Ⅲ 9区道構(1)
 図版 41 石船戸東遺跡Ⅲ 9区道構(2)
 図版 42 石船戸東遺跡Ⅲ 9区道構(3)
 図版 43 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構(1)
 図版 44 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構(2)
 図版 45 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構(3)
 図版 46 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構(4)
 図版 47 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構(5)
 図版 48 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構(6)
 図版 49 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構(7)
 図版 50 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構(8)
 図版 51 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構(9)
 図版 52 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構(10)
 国版 53 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構(11)
 国版 54 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構(12)
 国版 55 石船戸東遺跡Ⅲ 10区道構(13)
 国版 56 石船戸東遺跡Ⅲ 出土遺物(1)土器・陶磁器
 国版 57 石船戸東遺跡Ⅲ 出土遺物(2)土器・陶磁器・瓦・石製品・木製品・金属製品
 国版 58 蕉木遺跡Ⅱ 調査区遠景
 国版 59 蕉木遺跡Ⅱ 調査区全景・遠景
 国版 60 蕉木遺跡Ⅱ 調査区全景
 国版 61 蕉木遺跡Ⅱ SB 4・5・噴砂7
 国版 62 蕉木遺跡Ⅱ 噴砂9・道構(1)
 国版 63 蕉木遺跡Ⅱ 道構(2)
 国版 64 蕉木遺跡Ⅱ 道構(3)
 国版 65 蕉木遺跡Ⅱ 道構(4)
 国版 66 蕉木遺跡Ⅱ 道構(5)
 国版 67 蕉木遺跡Ⅱ 道構(6)
 国版 68 蕉木遺跡Ⅱ 道構(7)
 国版 69 蕉木遺跡Ⅱ 道構(8)
 国版 70 蕉木遺跡Ⅱ 道構(9)
 国版 71 蕉木遺跡Ⅱ 出土遺物(1)土器・陶磁器
 国版 72 蕉木遺跡Ⅱ 出土遺物(2)土器・土製品・金属製品・鍛冶関連遺物・木製品
 国版 73 山口野中遺跡V 調査区遠景
 国版 74 山口野中遺跡V 調査区全景・道構(1)
 国版 75 山口野中遺跡V 道構(2)・出土遺物

第Ⅰ章 序 章

1 調査に至る経緯

一般国道49号（福島県いわき市～新潟市）は、太平洋側と日本海側を結ぶ重要な幹線道路である。新潟県内では、沿線市町村と新潟市を結ぶ地域幹線道路として重要な役割を果たしている。現道は阿賀野市街地を通過しているが、幅員が狭小なため交通混雑と交通騒音、交通事故など生活環境に与える影響が問題となってきた。これらの問題を解消し安全で円滑な交通を実現するため、「安田バイパス」（阿賀野市六野瀬～同市寺社間 5.6km）と「水原バイパス」（阿賀野市寺社～同市下黒瀬間 8.1km）（第1図）が計画された。平成16（2004）年に市町村合併によって阿賀野市が誕生してからは、両者を合わせて「阿賀野バイパス」と呼称される。水原バイパス部分は、平成11（1999）年3月に都市計画が決定、翌年4月に事業化された。これを受け、国土交通省北陸地方整備局新潟国道工事事務所（以下、国交省）と新潟県教育委員会（以下、県教委）との間で法線内の遺跡の分布調査・試掘調査に関する協議が本格化した。国交省から委託を受けた県教委は、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に水原バイパスの踏査を依頼した。埋文事業団は平成15（2003）年12月に水原バイパスの踏査を行い、阿賀野市飯森杉～寺社の区間約470,000m²について試掘調査が必要な旨を報告した。試掘確認調査は2005（平成17）年から2012（平成24）年まで断続的に行なった。その結果、新発見した村前東A遺跡・村前東B遺跡・柄目遺跡・山口遺跡・石船戸東遺跡・新町遺跡・蕉木遺跡・向田遺跡と、阿賀野市教育委員会による2008（平成20）年の県営湛水防除事業に伴う試掘調査で発見された山口野中遺跡・境塙遺跡が本調査対象となった。2012（平成24）年12月10日に「水原バイパスの建設に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する覚書」を締結し、完成4車線施工時と暫定2車線施工時の本発掘調査（以下、本調査）対象範囲を確定した。バイパスの早期開通のため、当面は暫定2車線施工範囲を対象に調査を実施することとした。

石船戸東遺跡は、2008・2009（平成20・21）年度の試掘調査によって新発見し、延べ面積31,586m²に対して本調査が必要であること、下層は上層の調査終了後に要否を判断することを県教委に報告した。本調査は2015・2016・2021



第1図 阿賀野バイパスの路線と遺跡の位置
(国土地理院発行「新潟」「新津」1:50,000 原図)

2 調査・整理体制

(平成 27・28、令和 3) 年度に実施した。そして、2022(令和 4) 年 3 月 9 日付け国北整新計第 43 号で国交省から依頼を受けた県教委は、2022 年 3 月 10 日付け教文第 1423 号で埋文事業団に本調査の実施を依頼した。調査対象面積は農道機能補償道路脇の水路予定地延べ 687m²である。本調査開始後に、国交省・新潟県・埋文事業団の三者で調査範囲について再協議を行い、当初予定していた道路法線北西側の範囲を本調査から外し、新たに南東側の範囲を追加することとした。これを受け、2022 年 8 月 30 日付け国北整新計第 12 号で国交省から依頼を受けた新潟県は、2022 年 9 月 1 日付け文第 911 号の 2 で埋文事業団に調査面積を述べ 1,537m²に変更して本調査を実施するよう依頼した。埋文事業団は 2022 年 5 月 16 日～8 月 22 日、9 月 20 日～11 月 7 日に延べ 1,373m²について本調査を行った。

蕉木遺跡は、2009・2010(平成 21・22) 年度の試掘調査によって新発見し、13,325m²の本発掘調査が必要であることを報告した。本調査は 2014・2015(平成 26・27) 年度に実施した。そして、2022 年 3 月 9 日付け国北整新計第 43 号で国交省から依頼を受けた県教委は、2022 年 3 月 10 日付け教文第 1423 号で埋文事業団に本調査の実施を依頼した。調査対象面積は農道機能補償道路脇の水路予定地 589m²である。埋文事業団は 2022 年 5 月 13 日～7 月 5 日、9 月 26 日～11 月 16 日に 422m²について本調査を行った。

山口野中遺跡は、2008 年度の試掘調査を行い、13,325m²の本発掘調査が必要であることを報告した。また、2012 年度に JR 羽越本線下に建設する地下歩道用ボックス工事に係り試掘調査を行い、山口野中遺跡の範囲が拡大することを確認した。本調査は 2012・2013・2015・2020・2021(平成 24・25・27、令和 2・3) 年度に実施した。そして、2022 年 3 月 9 日付け国北整新計第 43 号で国交省から依頼を受けた県教委は、2022 年 3 月 10 日付け教文第 1423 号で埋文事業団に本調査の実施を依頼した。調査対象面積は農道機能補償道路脇の水路予定地 144m²である。埋文事業団は 2022 年 7 月 13 日～7 月 29 日に 81m²について本調査を行った。

2 調査・整理体制

試掘確認調査、本発掘調査・整理の体制は以下のとおりである。

試掘確認調査（2008 年度 石船戸東遺跡）

調査期間	2008(平成 20) 年 6 月 9 日～7 月 2 日 2008(平成 20) 年 12 月 1 日～12 月 18 日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
統括	木村 正昭（事務局長）
管理	森藤 栄（統括課長）
庶務	長谷川 靖（庶務員）
調査統括	藤巻 正信（調査課長）
調査担当	田海 義正（担当課長代理）
調査職員	畠島 義昭（主任調査員）

試掘確認調査（2009 年度 石船戸東道路）

調査期間	2009(平成 21) 年 5 月 18 日～6 月 17 日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
統括	木村 正昭（事務局長）
管理	森藤 栄（統括課長）
庶務	松原 健二（班長）
調査統括	藤巻 正信（調査課長）
調査担当	田海 義正（担当課長代理）
調査職員	石川 智紀（主任調査員）

試掘確認調査（2009 年度 蕉木遺跡）

調査期間	2009(平成 21) 年 5 月 18 日～6 月 17 日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
統括	木村 正昭（事務局長）
管理	森藤 栄（統括課長）
庶務	長谷川 靖（庶務員）
調査統括	藤巻 正信（調査課長）
調査担当	田海 義正（担当課長代理）
調査職員	畠島 義昭（主任調査員）

試掘確認調査（2010 年度 蕉木遺跡）

調査期間	2010(平成 22) 年 6 月 3 日～6 月 17 日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
統括	木村 正昭（事務局長）
管理	森藤 栄（統括課長）
庶務	松原 健二（班長）
調査統括	藤巻 正信（調査課長）
調査担当	田海 義正（担当課長代理）
調査職員	佐藤 貴亮（班長）

試掘確認調査（2008年度 山口野中遺跡）

調査期間	2008（平成20）年5月8日～5月22日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村 正朗（事務課長）
管理	斎藤 実（秘書課長）
庶務	長谷川 靖（班長）
調査統括	藤巻 正信（調査課長）
調査担当	田海 義正（担当課長代理）
調査職員	島野 義昭（主任調査員）

本発掘調査・整理作業（2022年度）

調査期間	2022（令和4）年4月15日～11月16日
整理期間	2022（令和4）年7月 6日～2023（令和5）年 3月31日
調査主体	公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 倉尾 浩志）
総括	松田 英世（事務局長）
管理	五十嵐 大介（総務課長）
庶務	伊藤 雅美（総務課 班長）
監理	荒川 降史（調査課長）

石船戸東遺跡（第4次調査）

調査期間	2022（令和4）年5月16日～8月22日 2022（令和4）年9月20日～11月 7日
整理期間	2022（令和4）年8月23日～2023（令和5）年 3月31日
調査	株式会社 ノガミ
調査担当	藤本 隆之
現場代理人	伊藤 正紀
調査員	山中 恒朗
整理作業員	井越 真紀、高橋 雄介

蕉木遺跡（第3次調査）

調査期間	2022（令和4）年4月15日～7月 5日 2022（令和4）年9月26日～11月16日
整理期間	2022（令和4）年7月 6日～2023（令和5）年 3月31日
調査	株式会社 ノガミ
調査担当	小村 正之
現場代理人	小熊 晋介
調査員	高野 恒一
整理作業員	石倉 宗輝、中野 恵美子

山口野中遺跡（第6次調査）

調査期間	2022（令和4）年7月13日～7月29日
整理期間	2022（令和4）年7月30日～2023（令和5）年3月31日
調査	株式会社 ノガミ
調査担当	小村 正之
現場代理人	小熊 晋介
調査員	高野 恒一
整理作業員	石倉 宗輝、中野 恵美子

3 調査の基本方針

A 遺構名の付し方

遺構名は、遺構種別の略号と通し番号を組み合わせて表記した。遺構番号の略号は、柱穴・ピット=P、井戸=SE、土坑=SK、掘立柱建物=SB、溝=SD、旧河道=SR、性格不明遺構=SXとした。番号は、複

数の遺構の組み合わせからなる掘立柱建物を除き、遺構の種別・検出層位に関わりなく通して付した。また、遺構番号は各遺跡の過年度調査の番号に続けて付した。掘立柱建物を構成する個々の柱穴・ビット（小穴）番号は検出時に付した番号をそのまま用いた。過年度調査と同一の遺構については、その番号を踏襲した。調査後に欠番が生じた場合でも、その後の混乱を避けるため、番号の付け直しは行っていない。したがって、遺構番号の数が、遺構の数を示しているわけではない。なお、通し番号は、概ね調査区ごとでまとめて付した。

B 土層観察の記載方法

土層注記にあたっては、客觀性をできるだけ確保するため、次の共通認識のもと記載することとした。

表記の順番は、「土層番号」、「マンセル記号」、「色調」、「土質」、「しまり」、「粘性」、「混入物」の順である。

色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』[小山・竹原 2000]を使用したが、色調は乾燥や酸化の進行などにより著しく変化する。したがって、湿潤状態で表面を削った直後の新鮮な状態で観察した。また『標準土色帖』の分類上、上下に接する層の色調が同じ分類の場合は、相対的な違いを明記した。

土質は、基本的にはシルトであり、粘性の強い部分と弱い部分があり、「粘性」の強弱で示した。砂は粒度により、極細粒砂、細粒砂、中粒砂、粗粒砂、極粗粒砂、砾に分類した。

しまりに関する記載は、極めて感覚的な要素が強い。沖積地においては特に、乾燥の度合いによって内容が左右される。本書では、湿潤の状態を原則とし、上下との相対差を基準に「強」、「弱」で区別した。程度差において「やや…」を用いている。

混入物は、主に炭化物と地山ブロック等が認められた。混入物の含有率については 1 ~ 9 % を「微量」、10 ~ 19 % を「少量」、20 % を「中量」、21 % 以上を「多量」とした。混入物の状態についても併記することとした。ブロックの大きさは $\phi = \text{mm}$ で表記した。

調査中、常に客觀性の確保に努めたが、必ずしも十分とはいえない。そのような状況においても、上下の層位との相対的な相違を表現することに留意した。

C 本書の記述方針

本書では、各遺跡に分けて遺構・遺物の記述を行い、石船戸東遺跡のみ各調査区に分けて提示することとした。遺構・遺物の説明は、本文・観察表・図版・写真図版を用いて行う。遺構は種別ごとに記述し、掲載するものとする。詳細については観察表に委ねることとし、特徴的な点やほかの遺構との関係を中心述べることとする。遺物は土器類・土製品・石製品・木製品・金属製品の順に種別ごとに記述し、代表的なものを掲載する。

柱穴が方形ないし長方形で一定の間隔で並ぶものを掘立柱建物と認定した。建物型式は宮本 [1999] に従い、梁間一間型建物（第5図）と總柱型建物に分類する。各掘立柱建物の計測値について観察表に示した。規模及び面積は、柱穴下端の中心及び柱根下端の中心を基点として計測した（第4図）[荒川ほか 2006]。梁行柱間長及び桁行柱間長は最も長いものを示したが、柱間長の差が大きい場合は複数の長さを記した。下屋がある建物の場合は、下屋長のほか、身舎の面積を計測した。主軸方位は、主軸長の方向について真北を基準として東西に傾く角度を計測した。

遺構の図版は、全体図・分割図・個別図などで構成される。調査範囲図は 1/2,500・1/1,500・

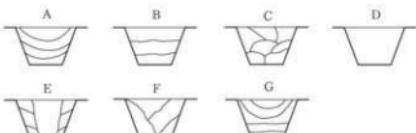
1/1,200、全体図は1/2,000・1/400・1/200、分割図は1/200または1/100で表した。個別図は平面図・セクション図・エレベーション図で構成される。掘立柱建物・道・旧河道は平面図・エレベーション図を1/80、セクション図を1/40・1/80で表した。井戸・土坑・ピットは1/40の平面図・セクション図で表した。出土状況図は、1/20・1/100で表した。溝は1/40・1/100・1/150の平面図と1/40のセクション図で表し、石船戸東遺跡の一部の溝はセクション図のみを個別図版に表し、セクションポイントは分割図に示した。セクション図の土層の色調は『新版標準土色帖』[小山・竹原2000]に基づいた。写真図版は個別図にある遺構について掲載するよう努めたが、全てを網羅していない。冒頭に全体写真と分割写真を掲載した後に、地区ごとに遺構個別図を掲載した。

観察表の項目は、位置・検出層位・所属時期・形態（第2図）・規模・底面標高・覆土の堆積形状（第3図）・出土遺物・切り合い関係である。検出層位とは遺構を確認した際の遺構上面の層位である。深度は上端標高の最高値から底面標高を引いた数値である。切り合いは「<」、「>」、「=」、「≠」の記号を用いて示した。記号の内容は、「<P100」とはP100に切られ、「>P100」とはP100を切っていることを示す。また、「=P100」はP100と同時期であり、「≠P100」はP100と切り合い関係があるものの、新旧が不明なことを示す。

図化遺物の説明は、観察表で全てについて記載し、本文で解説する。土器類は遺構出土のものについて述べた後に遺構外出土のものについて記述し、その他は器種別に記述する。図面図版の縮尺率は、土器を1/3で表し、その他は大きさに応じて1/3・1/4・1/5で表した。写真図版は図面図版とほぼ同じ縮尺で全てを掲載した。観察表は図版に掲載した全ての遺物について観察項目を設定し、その内容を記した。なお、不明なものは空白とした。出土地点及び層位は全て記した。



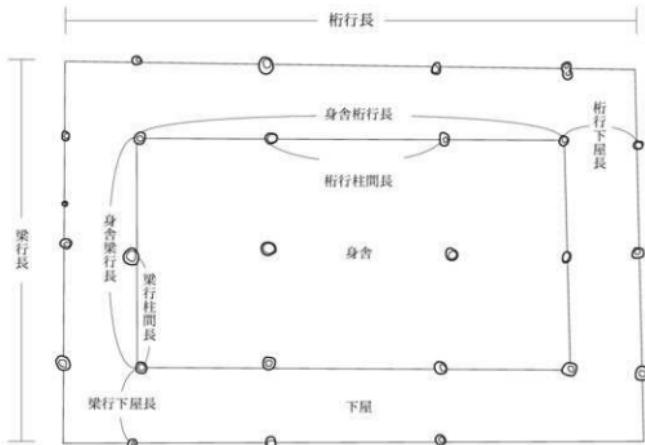
第2図 遺構の平・断面の分類
(加藤・荒川1999)



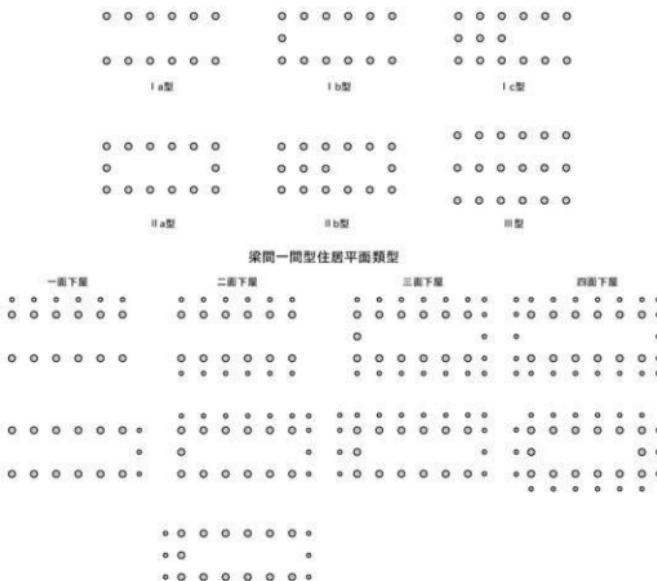
A レンズ状	複数層がレンズ状に堆積する。
B 水平	複数層が水平に堆積する。
C ブロック状	ブロック状に堆積する。
D 単層	覆土が單一層のもの。
E 垂直	柱状と思われる上層が堆積するもの。
F 刈込	斜めに堆積するもの。
G 水平・レンズ	覆土下位は水平に、上位はレンズ状に堆積するもの。

第3図 遺構埋土の堆積形状の分類

(荒川ほか2004を一部改変)



第4図 据立柱建物の計測位置（荒川ほか2006を改変）



第5図 梁間一間型建物の類型（宮本1999）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

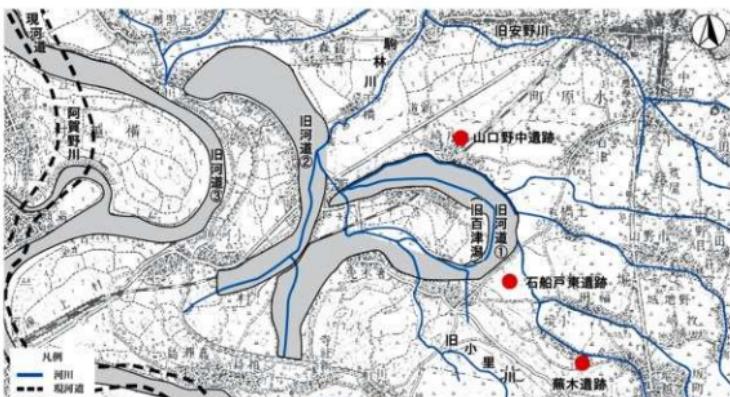
1 地理的環境

A 遺跡周辺の地理的概観

石船戸東遺跡は、新潟県阿賀野市大字百津字石船戸に所在する。この地は、阿賀野川の旧河道が閉塞されてできあがった旧百津潟の東側自然堤防上に位置している。山口野中遺跡は、この北側にあたる新潟県阿賀野市大字月崎に所在する。熊木遺跡は、新潟県阿賀野市堀越字熊木に所在する。この地は、旧百津潟の南から発する旧河道の自然堤防上に位置する小境集落の南側となる。いずれも、阿賀野川の変遷に影響された地形の自然堤防上に位置しており、またその周辺でも遺跡が多く確認されている。

阿賀野市は、新潟市の南方にあたり新潟市秋葉区、江南区、北区、五泉市、新潟田市、阿賀町に接している。2004年(平成16年)の平成の大合併により、水原郷といわれた水原町、安田町、京ヶ瀬村、笛神村の2町2村が合併して市制施行された。地形区分では、山地、丘陵、氾濫性低地、阿賀野川からなり、市の南東部には、五頭山地、笛神丘陵が分布する。五頭山地は、金鉢山、松平山、五頭山、菱ヶ岳を含む北北東～南南西に連なる標高500～1,000mの山地で、白亜紀の斑状花崗岩からなり崩壊地形が無数に分布している。ここで著しく風化した花崗岩は「まさ(真砂)」となり、頻繁に繰り返された土石流の影響で山地から扇状地を形成し、平野を広げながら日本海へ向かって流出していった。笛神丘陵は、杉林地帯によって五頭山地から分離した(延長20km、幅1～2km)丘陵で、北限を加治川、南限を阿賀野川に境され、五頭山から流出する河川によって計11の単位丘陵に分断されている【高濱・野崎1981】。この丘陵沿いには古代から中世の須恵器・陶器窯跡や製鉄遺跡が多く分布している。

阿賀野川は、福島県の荒海川などを源流とした阿賀川が新潟県境から阿賀野川と名を変え日本海に注ぐ



第6図 遺跡周辺における阿賀野川の河道の変遷

(大日本帝國陸地測量部発行 大正8年「新潟」「新津」1:50,000原図、荒川ほか2016を一部改変)

一級河川である。水量は信濃川に次ぐ全国第2位で、信濃川とともに新潟平野を形成するのに重要な役割を果たした。遺跡の所在する阿賀野市の平野部は、阿賀野川右岸低地と呼ばれ、阿賀野川が山地から平野に移る地域に形成された扇状地性の氾濫平野である。旧河道は至る所で見られ、形は三日月状を呈し、その自然堤防は連続せず島状に発達し、低地との比高差はおよそ1～2.5m位となっている〔国土地理院1988〕。これは度重なる氾濫の痕跡を示すもので、阿賀野市新保と五泉市清瀬にかかる安田橋から新潟市江南区横越にかかる旧国道49号の横雲橋の間約15kmでは、阿賀野川流域のなかでも特に乱流の様子を著しく大地に刻んでいる。

B 阿賀野川の河道の変遷

阿賀野川の河道の変遷は「第262集 境塚遺跡II」〔荒川ほか2016〕から本文を当遺跡に合わせて引用・加除し、文章を追加した。

阿賀野川は1915(大正4)年～1933(昭和8)年を始めとする4回の改修工事が行われ、現在は河道が直線化されている。かつては発達した新潟砂丘によって日本海への流出口を狭められ、河道の変更を伴う大規模な氾濫が起こり、数多くの旧河道や自然堤防が残された。遺跡の周辺には幅300m前後の大きな旧河道が3か所認められる(第6図)。ここでは、六日野一七島間に旧河道①、前山一閑屋間に旧河道②、下里一沢海間に旧河道③と呼ぶこととする(第6図)。大矢・加藤〔1984〕はこれらの年代について、旧河道①が1713(正徳3)年頃、旧河道②が1762(宝曆12)年頃、旧河道③が1911(明治44)年頃まで流れていたと推測している。しかし、1647(正保4)年「新発田領絵図」には、阿賀野川の東側に「下里村」、西側に「渡り場」・「沢海村」とある。したがって、正保年間には阿賀野川の本流はすでに旧河道③を流れていることになり、旧河道①・②はこれ以前の可能性が高いものと推測される。また、1645(正保2)年「正保越後國絵図」には六日野の近くに「百津潟」が描かれ、1816(文化13)年「越後輿地全図」にも旧河道①に該当する部分に「古川潟」と書かれた三日月状の範囲が記されており、旧河道①が阿賀野川の本流からそれで三日月湖になったものが百津潟と考えられる〔成田2000〕。

これらのことから、中世を含むそれ以前の阿賀野川は現在よりも遺跡に近い位置関係にあったと考えられる。そして、上記以外にも旧河道①へと繋がる人工河川以前の旧流路や比較的明瞭な流路の痕跡から、旧河道①は水原以南における各所に点在する遺跡の水運の中継地であった可能性は充分にあると考えられる〔小田・浦部2001〕。

また、平安時代頃の越後平野(第7図)は砂丘が海岸線に沿って大きく形成され、この砂丘によって河川から海洋への排水が著しく損なわれたため、砂丘内陸側の潟湖・沼沢が内湾状に広がったとされる〔鶴井・安井2004〕。胎内市の南部あたりから長岡市の北部あたりまでかなりの広範囲にわたって水域になって舟が安定して航行できることが前提となるが、冬場に荒れやすい外海を使わずに舟の移動ができる利点は非常に大きい。河川や潟湖・沼沢などで分断されがちな陸路と



第7図 越後平野の形成過程

(鶴井・安井2004を基に作成)

比べ、年間を通じて多くの人や物資の輸送が可能になるだけでなく、情報伝達においても近在の有力者にとっては優位性を高めるものになり、遺跡周辺の集落などの形成に影響を与えたと推測される。

2 歴史的環境

歴史的環境はA・Bを「第232集 境塚遺跡」・「第262集 境塚遺跡II」〔荒川ほか2012・2016〕から、Cを「第270集 柄目木遺跡III」〔小野本ほか2017〕から、Dを「第278集 境塚遺跡III」〔飯坂ほか2018〕から本文、図版を当遺跡に合わせて引用・加除した。

A 中世略史

阿賀野市は、中世に「白河荘」と呼ばれた範囲にほぼ相当する。白河荘は、1134（長承3）年に皇室門院領として立荘され、九条家領として代々伝領されていった。この白河荘の立荘には、阿賀北に大きな勢力のあった城氏が関わっていたと推測されている〔樋口2004〕。阿賀野市寺社には、城氏の拠点と推定される大坪遺跡（81）〔荒川ほか2006〕や平安時代末期から鎌倉時代初頭の経塚である横峯経塚〔川上1979〕がある。城氏が1201（建仁元）年の島坂山の戦いで滅亡すると、その後、越後の荘園には地頭職を得た関東御家人の大見氏が入部する。この頃の白河荘は、上条と下条に大きく二区分されており、下条には山浦四箇条・水原条・船江条が、上条には安田条が含まれている。鎌倉末期に大見氏は鎌倉幕府の御家人であった安達時顥に白河荘の地頭職を奪われるものの、白河荘に一分地頭職ともいいくべき下級の地頭職を保持していた可能性があり、これを根拠として国人領主に成長していった〔樋口2004〕。大見氏はやがて、山浦氏、安田氏、水原氏を名乗り国人領主へと転化する。

白河荘には安田氏、水原氏以外にも1504～1521（永正年間）年に作成された『蒲原郡勘定帳』に堀越氏や下条氏が存在しており、大見氏一族を含む「白河之面々」と呼ばれる集團をなすようになる。これに対し14世紀末、上杉房定が越後守護になると守護勢力の地方扶植が図られ、下条山浦には上杉憲重が入部し、山浦上杉氏となつた。越後守護上杉頼方と守護代長尾景邦の争いでは、阿賀北でも国人層を二分した争乱となつた。1423（応永30）年に、大見氏一族を含む白河荘の国人領主「白河之面々」や加地氏、新発田氏が守護代側に寝返り、山浦の守護勢力や中条氏と敵対している。このとき、堀越氏拠点の堀越館に比定される「堀越之要害」が陥落している。この大乱は、上杉房方の敗北によって終結するが、その後も大見氏一族は、阿賀北地方に勢力を伸ばす守護・守護代勢力からの強い影響を受けつつ戦国期を迎える。

B 白河荘の中世遺跡

阿賀野川右岸における中世遺跡は、福島潟以南の平野部と笛神丘陵、福島潟以東の平野部、新潟砂丘に分布する（第8図）。その多くが近代の集落近くに位置し、当地域においても中世から近世にかけての集村化の動き〔坂井1997〕があつたものと考えられる。大坪遺跡〔荒川ほか2006〕では、12世紀の水路が明治期まで維持・利用されており、当地域には中世の景観が色濃く残されている。当地域における中世遺跡の概要については、大坪遺跡や山口遺跡（221）〔荒川ほか2010〕などで詳細が記されていることから、ここでは白河荘の区分と遺跡分布について述べることとする。

白河荘の区分を検討した中野豈任〔1976〕は、山浦四箇条を阿賀野市折居から大室にかけての地域とし、折居川流域をA地域（山間部をAⅠ区、平野部をAⅡ区）、白川（大荒川）流域をB区、安野川流域をC区とした（第

9回)。また、安田条は旧安田町周辺とした。水原条・船江条は、北限を飯野一舟居一飯塚一櫻舟渡を結ぶ線、東限を櫻舟渡一千原一天神堂を結ぶ線、西限を阿賀野川と推定した。そして、安田条との境界に当たる南限は「境塙が一直線上に点在して南境を形成している」として、六日野の南側を通るラインを推定した。同論文にその根拠として写真に示された「下条の境塙」は、境塙遺跡(222)の北東約300mにある三辺稻荷神社のことである。この神社は、明治頃に水原の豪農の旧佐藤家(本泉屋)が私邸内の祠をこの地に移したのが始まりで、それ以前は畠だけの土地であった。したがって、中野の言う塙はなかったと判断される。しかし、昭和初期の土地更正図を見ると、この周囲には1955(昭和30)年の町村合併以前の水原町大字下条・堀越村大字百津・京ヶ瀬村大字前山の3か所に「境塙」の小字があり、しかも3町村が接する境界に位置する。「境塙」の字名はこれら町村の境界を指し示し、さらに中世白河莊の水原条と安田条の境界に由来する可能性はあろう。推定されたこれらの区域には、いくつかの遺跡集中域を見いだすことができる(第8図)。



第8図 周辺の地形と遺跡分布

(国土地理院発行 地形図 1:25,000 原図、旧河道は大矢・加藤 1984 を参照。)

第II章 遺跡の位置と環境

No.	名稱	時代	No.	名稱	時代	No.	名稱	時代	No.	名稱	時代
A	山1野1中 石1	縄・古・唐~宋	80	八九	平・中	158	村井	縄	240	下野山	縄
B	石1野1東	縄・平・宋	81	天津	縄・後・平・中	159	飯江	縄	241	下条跡	不明
C	坂木	平・中	82	福山	寺	160	加茂山	縄	242	小丸山	縄・後・古
1	石1野1	石	83	曾根	平	161	太夫	縄	243	小野	古
2	野1中	縄	84	下谷地	中	162	小曾根	平	244	笠下	古
3	野1山	縄	85	曾根曲	中	163	川原田	縄	245	村付	古
4	新潟	縄・平	86	東ノ裏	中	164	裏陣平丘	縄	246	山崎平	不明
5	上野1林1	縄	87	前屋	中	165	下里山	縄	247	柳谷	不明
6	中山	縄	88	鶴林寺吉跡	堂	166	日鳴	縄	248	鬼塚1世作跡	室
7	ツベタ	縄	89	七島山跡	木	167	十神	縄	249	半澤寺	室
8	山1ノ下	縄	90	下の山御跡	室	168	下一部	縄・平	250	青小路史跡	縄
9	城跡C	縄	91	城御跡	平	169	砂子	平	251	日茂山小作跡城	縄~室
10	小山崎	縄	92	石刈	平	170	青浦	平	252	青葉寺場	道~近
11	中道	縄	93	西高野谷内	平	171	神ノ脇	平	253	直那板倉	古
12	御室	縄	94	御より	木	172	御津	平	254	一本柳	古
13	行舟	縄	95	ほかに櫻	木	173	山王門	平	255	五本柳B	古
14	家政	縄	96	町道下	中	174	女堂山星羅	平	256	驚津	平
15	家政	縄	97	村下	平	175	未開	平	257	川東	古
16	千代山	縄	98	大削	中	176	梅田	平	258	中道A	古
17	丸山	縄	99	大庭川端	平	177	高御門	平	259	中道B	古
18	赤坂山	縄	100	上筑西	平・中	178	御ノ原	平	260	吳場	平
19	日除平	縄	101	西四谷谷内	中	179	伝右山正賀院跡	縄~江	261	城の塗	平
20	一本松	縄	102	森	平・中	180	アバシキ	平	262	大丸松	平
21	保田御跡	縄	103	西高野谷内C	平・中	181	大安院跡	室	263	山御野御跡A	古
22	山下T	寺	104	島山御跡	道・古・中	182	村越跡	室	264	山御野御跡B	古
23	六野原	縄・寺	105	天日・御ノ原	縄	183	女堂山御跡	室	265	菅原曾A	古
24	若御田	縄	106	石船	縄	184	六日町	平	266	未確	古
25	若野人	念	107	天日・御ノ原	縄	185	尾下	平	267	梅曾板B	古
26	寺社家業	平	108	金剛	寺	186	布施御屋	縄	268	武川渡	平
27	花川	平	109	道・通船	古・中	187	金印寺道	平	269	五本柳A	古
28	八百草	平	110	中島	平	188	山城御跡	室	270	昭須	道
29	山下B	平	111	空堀	平	189	南河内畠	縄	271	上大月	古
30	古ノ越	平・櫻	112	渡瀬	平	190	久丸	平	272	河新田	平
31	八九子塚	木	113	野牛山洋	平	191	高御門御跡	室	273	里御野	平
32	下電田	木	114	久那跡	縄	192	小中山	縄	274	池田B	古
33	寺社家業	室	115	穂	縄	193	難波	縄・室	275	上祖田	平
34	仙・郷・令跡	木	116	御伏の山	中	194	元気殿	平	276	新杵の世界城	縄~室
35	ハナツモ山御跡	木	117	ツモ岩着者間敷	平・櫻	195	上岡跡	平~室	277	鶴内	平
36	物見山御跡	木	118	向	中	196	真岐	平	278	小印中洲	道
37	子代山御跡	木	119	御田	平	197	女史ノ山	縄	279	中山	縄・古
38	赤松山御跡	木	120	赤松	平	198	越共山前	室	280	城山	縄・道・平・櫻
39	赤坂山御跡	木	121	坂下	平	199	人安院下	縄	281	豊山	縄・佛・櫻・古
40	安田城跡	平・江	122	御者	平・室	200	家の御	南	282	神明山蓋	平
41	八野御跡	海・一室	123	成田御敷	縄	201	豊岡御跡	室	283	平野	平
42	酒内御跡	木	124	山上	室	202	萩木	縄	284	蓬台野1世作跡	縄~室
43	子兒山御跡	木	125	新野	平	203	吉門	平	285	蓬具御跡	室
44	大糸1丁	江	126	高山	室	204	鏡道下南	日	286	酒り川A	古
45	御跡	縄	127	波	中	205	下知田	日	287	御跡	木
46	御跡D	縄	128	南・室	中	206	御跡	日	288	御跡C	不明
47	御跡D	縄	129	森の木	中	207	御跡	波~室	289	松原寺	平
48	上野林1	縄	130	トマ	波	208	空井跡	日・櫻	290	御跡A	古・中
49	門前	平	131	木本御家園	平	209	丙下	縄	291	山の少六	平
50	鬼沢跡	4・明	132	鬼沢御跡	室	210	御脚下	不明	292	小林上田	縄・古
51	鬼塚	平・南	133	鬼塚御跡	平	211	上山田	平	293	江尻	平
52	上野林C	平	134	川原御跡	平	212	高坂	平	294	新川繩	平
53	○T	南	135	矢条御跡	平	213	志郎	平	295	秋穴	古
54	上野林D	4・明	136	川原御跡	平	214	朱屋	古・中	296	Y跡	平
55	上野林E	日・櫻	137	大平	日	215	輪澤記	古・中	297	曾良品	平
56	上野林F	4・明	138	中谷	平	216	村前	中	298	Y御山	室・中・近
57	上野林G	4・明	139	谷内	平	217	區	古・中	299	新川南	道・室
58	上野林H	4・明	140	下前	中	218	村前A	古・中	300	鶴越御跡	室
59	古ヶ原東	木	141	大河原	平	219	村前日	不明	301	上郷D	平
60	中草下	木	142	引内	中	220	波木	古・中	302	上郷B	平
61	フベタ	平	143	御荷舟	中	221	山田	縄・古・櫻・室	303	上郷B	古
62	電田小山	縄	144	鶴原	平・中	222	堤	縄・古・中・室	304	医院跡	道・平・中・近
63	破竹林	縄	145	木倉山	日・縄	223	新町	縄・平・櫻・室	305	長崎(城跡)	室
64	川木林	縄	146	兵光寺	日	224	御野	古・中	306	今島	平・櫻
65	渡場御駆A	縄	147	足里	日	225	上橋	縄	307	中御丸佐	平
66	渡場御駆B	縄	148	赤塚	日	226	舟場	古	308	下久保	平
67	羽野日	木	149	鈴倉	日	227	北	縄	309	通上	平
68	赤坂山D	縄	150	荒沢	日	228	砂原	古・中	310	朝倉山道上	平・中・近
69	宮	縄	151	ミナ等	縄	229	山本	縄	311	西江南	平
70	秋野	縄	152	御井	縄	230	上野家跡	縄・古・平	312	人園跡	中
71	上野林I	縄	153	築造下	縄	231	足下	縄	313	高砂	平
72	上野林J	日・櫻・平	154	麻林	縄	232	足下日	平	314	人野中	平・櫻
73	上野林K	縄	155	小野	日・縄	233	上の御毎群	室	315	平	縄
74	上野林L	縄・平	156	日吹	縄	234	一明	不明	316	狂	縄
75	上野林M	縄	157	麻林	縄	235	新浜山	縄・中	317	安右庵	縄・平・中
76	上野林N	縄	158	麻林	縄	236	筋御子作跡	室	318	幸水町2丁目覚跡	日・櫻・平
77	上野林O	縄	159	中野	日・縄	237	船下	縄・古	319	幸水山世界城	中
78	内山	日・縄	160	日吹	縄	238	オダノ日	不明			
79	獅子沢	縄	161	御沢	縄	239	月曜日リオンパーク	日・中			

第1表 周辺の遺跡

水原条・船江条の範囲では、阿賀野川旧河道右岸、駒林川流域、そして水原市街に集中域が認められる。阿賀野川旧河道②右岸（第6図）には、下の橋館跡（90）を中心として町道上遺跡（96）、柄目木遺跡（220）、村前東A遺跡（218）などの集落遺跡が集中する。町道上遺跡は13～15世紀の方形堅穴状造構や井戸などがあり【古澤2002】、村前東A遺跡では13世紀中葉～14世紀前半の掘立柱建物を中心とする集落である【加藤ほか2010】。また、町道上遺跡・柄目木遺跡・村前東A遺跡・山口遺跡【荒谷ほか2010】で道跡が見つかっていることは陸上交通を知る上で注目される。駒林川流域には、駒林要害跡（88）を中心に土居内西遺跡（100）がある。土居内西遺跡は、14世紀を中心とし方形縦板組井戸が検出されている【古澤2005】。旧水原町の中心である水原市街には、水原氏の居館と推定される水原館跡（134）と下条氏の居館とされる下条館跡（135）を核とし、遺物散布地や石仏が数多く残る。水原館跡は、塚、溝、柵列、掘立柱建物、ピットが検出され、13～15世紀の珠洲焼、瓷器系陶器、常滑系陶器、瀬戸美濃焼、茶白などが出土している【川上1977】。水原条・船江条と安田条との境界に位置する境塙遺跡の周辺には、ほぼ同時期の山口野中遺跡（A）や三辻稻荷遺跡（109）、15世紀後半を主体とする新町遺跡（223）のほか、百津潟を挟んだ西側に七島館跡（89）がある。山口野中遺跡では、境塙遺跡D区で見つかった道1の続きが確認されている【古澤ほか2011】。

安田条の範囲では、野地城跡（132）、堀越館跡（133）、大坪遺跡と西側の旧河道に沿って南北に遺跡が集中する。大坪遺跡は11世紀後半～12世紀を中心とし、四面麻付總柱建物や屋敷墓と見られる木棺墓など多数の遺構が検出された【荒川ほか2006】。遺跡の時期と城氏の盛衰が一致することから、同時期の横峯経塙を含めて城氏に関係した遺跡と推定された【荒川2007】。遺跡の南地区では、13世紀後半～14世紀の堅穴状造構も見つかっている。堀越館は、1423（応永30年）に陥落した「堀越之要害」に比定され、堀跡・区画溝・廃棄土坑・土坑墓とともに白磁・青磁・中国天目茶碗などの舶載品や茶入れ・茶壺・香炉・水注・茶白などの茶道具が出土している【小田・浦部2001】。近接する鶴深甲遺跡（144）も堀越館跡と同時期の集落である【高橋保雄ほか2006】。西側の阿賀野川右岸には分田館跡（136）を中心に遺跡



第9図 白河荘復元図

(中野1976を基に作成)

集中域があり、玉泉寺の石仏など多くの石仏が散在している〔小松ほか1995〕。旧安田町の中心街には、安田氏の居城とされる安田城跡(40)を中心とする遺跡集中域が認められる。さらに南側には、六野瀬館跡(41)や赤坂山砦跡(39)を中心に遺跡集中域があり、笛神古窯のひとつで13世紀中頃～後半に操業した壺器系窯の赤坂山中世窯跡(319)〔小田ほか2002〕とその製品の積み出し場と推定される六野瀬遺跡(23)〔石川ほか1992〕を含んでいる。

山浦四箇条の範囲のうち折居川流域のA I 区には、女堂館跡(183)や上の山塚群(233)を中心に石仏や製鉄跡が分布する。一方、A II 区には北側の北沢窓に代表される一群と南側の猿沢中世窯跡(236)をはじめとする一群の窯跡があり、笛神古窯の大半が集中する。これらのうち、北沢窓・青中糸窯跡(250)は須恵器系窯、猿沢1号窯・兎沢中世窯跡(248)・堤上窯跡(230)は瓷器系窯である。また、これらの周囲には製鉄跡も多数分布しており、この地区が大規模な生産域であったことが分かる。山浦四箇条の中心とされるB区は、寺社・墓・石仏といった宗教関連遺跡が多数集中する。華報寺(249)はその中心的な寺院であり、境内には多数の石仏や1299(永仁7)年銘時宗板碑・鎌倉期の大見行定の塔と推定される法師印塔などの石造物がある。華報寺背後の急斜面には日洗沢中世墓域(251)や経沢中世墓域(276)、前面には蓮台野中世墓域(284)が営まれた。1283(弘安6)年の「大見行定讐状」では笛神丘陵での殺生禁断が記されているが、この背景にはこの地が塩場であることが考えられる。蓮台野では戦後の開墾の際に多数の石仏が出土しており、石仏の生産地と推定されている〔中川1959〕。また、阿賀野市内にある石仏207基のうち203基が華報寺周辺にある120基と同一型式であり、華報寺周辺で作られた石仏が白河莊や周辺に広がっていた可能性がある〔水澤2002〕。本地域には製鉄跡も数多くあるが、窯跡は瓷器系窯である權兵衛沢窯跡(285)のみが確認できる。C区では、平野部側の大室城跡(181)及び五頭山麓の村杉城跡(182)の周辺に製鉄跡や石仏が分布するが、窯跡は確認できない。

以上のように、各地域で認められた多数の遺跡集中域は、中世白河莊の代表的な村落を示しているものと考えられ、城館・集落遺跡・石仏などで構成され、地域によって窯跡・製鉄跡・石仏・塚が集中するなどの特徴がある。そして、こうした遺跡集中域は、境塚遺跡と山口野中遺跡とを結ぶ幹線道路に代表される陸上交通と、河川や潟を利用した内水面交通と有機的に結びついていたものと推測される。

C 古代の遺跡

律令期の遺跡周辺は越後国沼垂郡に属したと考えられる。『倭名類聚抄』によれば、沼垂郡には足羽・沼垂、加地の3郷があったとされるが、所在地については諸説あり一致を見ない。福島潟の東岸に立地する曾根遺跡(83)は、掘立柱建物を主体とする奈良・平安時代の大規模集落遺跡であり、円面鏡、墨書き土器、木簡などの存在から官衙関連遺跡と考えられる。福島潟へ流れ込む小河川の上流に位置する笛神丘陵には古代の窯業・製鉄遺跡が多く分布し、曾根遺跡ではその焼き損じも出土していることから、手工業製品の流通拠点としての役割も想定される〔鶴巻2015〕。発久遺跡(190)からも大量の木簡や墨書き土器が出土しており、特に健兒の在勤を示す木簡の存在が注目される〔相澤2004〕。また、「水人」と記された墨書き土器の存在は、遺跡と水運との関連を示唆する。柄目木遺跡は小河川によって福島潟南岸と結ばれており、曾根遺跡と同様、水運と結びついた官衙関連遺跡と考えられる。阿賀野市域でも阿賀野川の氾濫原に近い旧水原町・京ヶ瀬村のエリアでは、一般国道49号阿賀野バイパス関連の発掘調査によって古代の遺跡分布の様相が判明してきた。山口遺跡では、石製埴輪や国内で初例となる唐三彩の玩具が出土した〔荒谷ほか2010、(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団2011〕。蕉木遺跡(C)では、桁行6間で総柱の大型掘立柱

建物を検出した〔鈴木・荒川ほか2018〕。また、三辺稻荷遺跡では、竪穴建物から多くの墨書き土器や縁軸陶器が出土した〔阿賀野市教育委員会2008〕。これらの遺跡は、官衙関連あるいは有力者の居住地と推定される。一方、柄目木遺跡や村前東A遺跡〔加藤ほか2010〕は竪穴建物を主体とする小規模な集落遺跡であり、一般的なムラと評価できよう。なお、古代の遺構を伴う遺跡でなくても、発掘調査において古代の土器は普遍的に出土していることから、周辺に多くの集落が存在する可能性は高いと言える。

D 縄文時代の遺跡

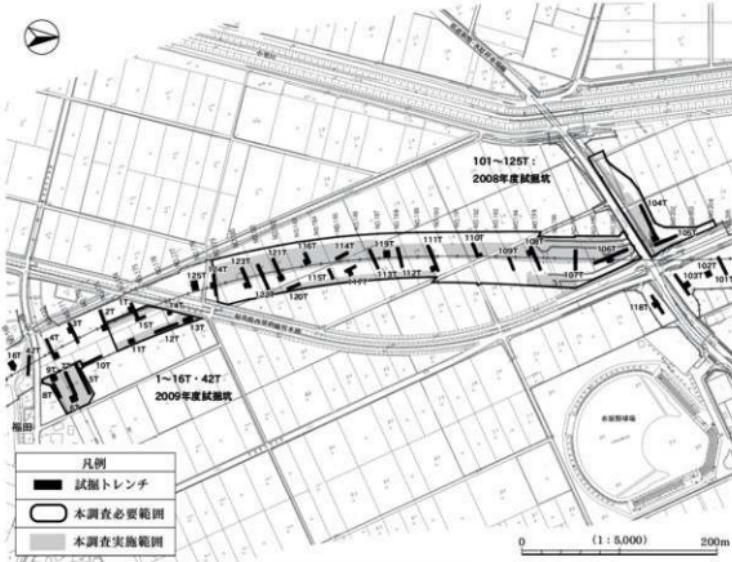
山口野中遺跡・石船戸東遺跡（B）の遺跡周辺は、土橋北遺跡（225）・^{ヒラシタ}村北遺跡（227）など、阿賀野川の旧河道が形成した自然堤防上に立地する縄文時代の後・晩期の遺跡が発見されている。山口野中遺跡では、晩期後葉の竪穴建物、堅果類・魚類などの食物残滓を燃焼した炭化物の集積、埋設土器などが検出された〔村上ほか2015〕。石船戸東遺跡は、明瞭な遺構は検出されなかつたが、晩期前半と晩期後半の遺物が出土している〔小野本・石川・加藤ほか2019〕。土橋北遺跡は、後期と晩期の2面の遺構面があり、そのうち晩期の遺構・遺物は縄文時代から平安時代まで継続して流れていた小河川の周辺に多く、土器集中・炭化物集中・炉跡・埋設土器などが見つかっている〔佐藤ほか2019〕。

第III章 石船戸東遺跡III

1 調査経過

A 試掘確認調査

当遺跡にかかる範囲の試掘確認調査は、2008・2009（平成20・21）年度に行った。2008年度は6～7月と12月の2回実施した。6～7月は、小里川～県道新聞・水原停車場線間が対象で、はじめて当遺跡に係る範囲が試掘調査対象となった。当遺跡が新発見されたのは、調査対象地の南端にある。県道新聞・水原停車場線より北側（新潟市側）の3,366m²において古代の遺構・遺物を検出したが、遺跡の縁辺部と考えられ、詳細を明らかにできなかった。遺跡は県道を挟んだ南側（福島県側）に広がることが想定されたため、遺跡範囲の確定と名称は今後の調査で検討されることになった。12月は、県道新聞・水原停車場線～福島潟西部幹線用水路間を対象に調査を行われた。対象面積23,450m²に対し、20か所のトレンチを任意に設定。実質調査面積は、826m²で確認率は3.5%であった。表土直下から古代・中世の遺構を検出し、下位から縄文時代晩期と縄文時代中期～後期の遺物包含層を検出した。縄文時代の遺物包含層は、調査対象地の広範囲に広がるが、遺物の出土は散発的であった。よって、上層（古代・中世）の本発掘調査終了後、下層（縄文時代）の確認調査を実施して取り扱いを判断することが必要とされた。この結果を



第10図 試掘トレンチ位置図

(原図：国土交通省提供 小野木・石川・加藤ほか 2019 を一部改変)

1 調査経過

受け、県道北側も含めた全体を石船戸東遺跡として周知化し、杭 No.178+10 ~ 204 付近の計 24,126 m²に対して本発掘調査が必要であると報告した。2009 年度は、福島潟西部幹線用水路～福田・小境地区の試掘調査を実施した。対象面積 50,715 m²に対し、63 か所のトレンチを任意に設定。実質調査面積は、2065.4 m²で確認率は 4.1% である。このうち、福田集落近接部まで石船戸東遺跡からの広がりが認められた。11 か所のトレンチから計 3,730 m²の範囲で古代・中世の遺構・遺物を検出し、その下位に縄文時代の遺構・遺物も検出した。この結果を受け、延べ面積 7,460 m² (3,730 m² × 2 面) の本発掘調査が必要と判断されている〔小野本・石川・加藤ほか 2019〕。

B 本発掘調査（第 1 ~ 3 次調査）

石船戸東遺跡の本発掘調査対象範囲は、総延長 700m にも及ぶ広大な範囲である。そこで、農道・水路・工事用道路を境に 1 ~ 7 区に設定した（図版 1・2）。試掘調査の結果から、上層の遺構密度は高く、下層にも遺物包含層が良好に存在すると考えられた。よって年度当初は 1・2・3 区の上層と 7 区の上層・下層のみ約 12,000 m²が調査対象となったが、2015（平成 27）年度は最終的には延べ 19,000 m² (9,500 m² × 2 面) の調査を終了している。2016（平成 28）年度は、約 4,500 m²が調査対象となった。最終的に延べ 3,826 m²（上層 2,782 m² + 下層 844 m²）の調査を実施し、2012（平成 24）年の覚書に基づく暫定 2 単線施工分の調査を終了している。2018（平成 30）年度、図版作成・原稿執筆等は、現地作業と併行して実施した整理作業ではほぼ終了していたことから、一部の原稿執筆と遺物写真撮影を実施した。遺物のトレース及び全体の編集作業は、民間業者に委託して編集・校正作業の終了後、2019（平成 31）年 3 月に報告書を刊行した〔小野本・石川・加藤ほか 2019〕。また、2016 年度に調査した北西側を 2021 年度に石船戸東遺跡 II 第 3 次調査（8 区）として 160 m²の追加調査を行った。報告書は 2023（令和 5）年度に刊行した。

遺跡は、阿賀野川の右岸、標高約 7m の低地に立地する。現況は水田である。縄文時代晚期・古代には遺物の出土はあるものの、遺構もほとんどなく、散発的で集落の形成は認められない。中世（13 ~ 14 世紀）に入ると集落を形成する。遺跡内で約 400m 離れた二つの調査区で建物、井戸等が確認され、集落が 2 か所存在したことが判明した。4 ~ 6 調査区では掘込田と思われる凹地遺構が確認され、集落と農地がセットとなった中世前期に特徴的な散村的な景観が広がっていたものと思われる。集落内の井戸側に転用された丸木舟は非常に保存状態が良く、内水面交通の利用を示す重要な資料である。15 世紀には集落が断絶するが、一方で「火葬土坑」を用いた荼毘場としても利用されていた〔小野本・石川・加藤ほか 2019〕。

C 本発掘調査の経過（第 4 次調査）

2022（令和 4）年度の調査は、1,373 m²を対象に 5 月 16 日から 11 月 7 日まで実施した。調査地は 2 調査区に分かれており、現地調査では北側の調査区を A 区、南側を B 区として調査を進めたが、報告書作成段階で過年度調査との統一性を図るために、A 区を 9 区、B 区を 10 区と改めた（図版 1）。5 月上旬から 9 区の調査準備に着手。草刈りや調査範囲の設定、搬入路の確保、機材の搬入を行った。5 月 16 日から重機にて表土掘削を行い、後追いで順次、整地作業、遺構検出を行った。検出状況の空中写真をドローンにて撮影。オルソ画像から略図を作成し、検出状況図として遺構番号を付した。土層堆積状況が把握できるように断面観察ベルトを設定または半截して、遺構の掘削を移植ゴテや竹ベラ等を用いて行った。記録作成については隨時、遺構断面および完掘写真をデジタルカメラで撮影した。図面の作成は、断面図は手

測り、平面図はトータルステーションにて計測した。調査中の遺構の保護は、コンバネとブルーシートを用いて養生した。

6月24日から10区一部(北半)の表土掘削を行い、9区と並行しながら調査を行った。7月4日、9区上層の完掘写真撮影をラジコンヘリコプターで行った。9区の補足調査、遺構調査を終えて、同月13日より下層の掘削に着手した。標高7.8mの現地表面から約-2.0mの標高6.0mまで掘削して遺構検出を試みたが遺構、遺物ともに確認できなかった。記録を作成した後、同月19日に終了確認を終えた。9区の調査面積は上層572m²、下層38m²である。翌日から埋め戻しを行い、同月28日、9区の調査を終了した。

9区終了後は、10区の調査に専念した。表土掘削を行った北半は8月9日に完掘、同月22日に測量を終え、北半の調査を終了した。残りの南半については、稲作中の水田が東側に隣接するため、崩落等の安全を考慮して掘り下ろし後の9月20日から表土掘削を行い、同月26日より作業員を再度動員して作業を再開した。10区のラジコンヘリコプターでの完掘写真を10月27日に行った。同月28・31日に下層の確認調査を行った。標高8.6mの現地表面から約-2.4mの標高6.2mの砂礫層まで掘削したが、遺構、遺物ともに確認できなかった。10区の調査面積は上層734m²、下層29m²である。11月1日には新潟県観光文化スポーツ部文化課(以下、新潟県とする)による終了確認を終えた。若干の補足調査などを行って、同月7日に現地調査を終え、同月15日に埋め戻しを終了した。

D. 下層(縄文時代)の確認調査

【9区】(図版2・16)

15N~17N、15O~17O グリッドに東西5.3m、南北22.9mのトレンチを設定した。掘削は重機で慎重に行いXⅠ層およびXⅢ層の縄文時代晚期の遺物包含層と遺構の確認を行った。調査面積は38m²となる。標高6.8~6.5mに堆積するXⅠ層は10YR6/1~6/2褐灰色シルトで僅かに炭化物を含む有機土壌で暗色帯となる。標高6.7~6.3mに堆積するXⅢ層は10YR6/1~6/2褐灰色シルトで部分的に炭化物を多く含む有機土壌の暗色帯となる。過年度調査のXⅠ層・XⅢ層に対応していると考えるが、遺構、遺物ともに確認できなかった。XⅢ層以下、標高6.2~6.0mでXVI層5Y6/1灰色細粒砂~中粒砂となり、これより下層には遺物、遺構とともに存在しないと判断した。なお、XVII層は砂脈として上昇し、VI層下面、VII層上面で噴出する噴砂を観察した。砂脈の北側には彎曲のようない不自然な堆積が観察できた。VII層の時期は特定できないが、周辺の事例から9世紀後半に発生した地震の可能性が高い。

【10区】(図版16)

39N・40N、39O・40O グリッドに東西4.2m、南北17.6mのトレンチを設定した。掘削は重機で慎重に行いXⅠ層およびXⅢ層の縄文時代晚期の遺物包含層と遺構の確認を行った。調査面積は29m²となる。標高7.0~6.9mに堆積するXⅠ層は10YR5/2灰黄褐色シルト~粘質土で極僅かに炭化物を含む有機土壌で暗色帯となる。標高6.8~6.7mに堆積するXⅢ層は10YR6/2灰黄褐色粘質土で極僅かに炭化物を含む有機土壌の暗色帯となる。9区同様、過年度調査のXⅠ層・XⅢ層に対応していると考えるが、遺構、遺物ともに確認できなかった。また、XⅢ層以下、標高6.3~6.6mでXVI層10YR4/6褐色粗粒砂~極粗粒砂(砂礫)直径1~10cm程の石が10%以上、これより下層には遺物、遺構とともに存在しないと判断した。

E 整理作業の経過

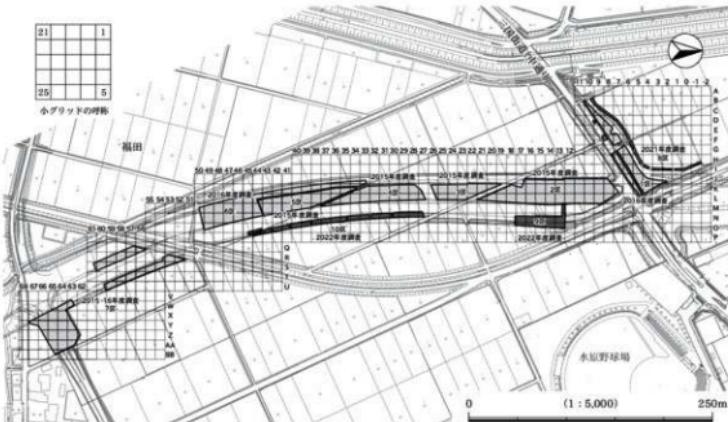
整理作業は、調査と並行しながら、記録類（図面・写真）の整理、遺物の洗浄・注記を現場事務所で行った。発掘調査了後の11月下旬以降は、新潟市江南区曾川甲に所在する株式会社ノガミ整理作業所に移転して遺構図版の作成、遺物のトレイス・図版作成、本文の執筆などの報告書作成を行った。本文・遺構・遺物の図版及び写真図版の作成及び編集は、テキストデータ・押図原図・遺構測量データ・遺構原図・遺物トレイス図・レイアウト図案を作成、印刷用データで納品した。2023年度は印刷用データの確認・調整を行い、株式会社ウイザップに印刷用データを支給して印刷製本し、報告書を刊行した。

報告書作成段階で過年度調査との統一性を図るためA区を9区、B区を10区と改め、本書では9・10区を用いているが、現地調査で作成した記録類は書き写し等の過誤を防ぐため改めていない。

2 調査の概要

A グリッドと調査区の設定（第11図）

調査区の呼称は便宜上、北に位置する調査区を9区（A区）、南の調査区を10区（B区）とした。グリッドの設定は、2015・2016年度の調査で設定したものと踏襲した。国家座標VII系に沿って10mの方眼を組み込み、これを大グリッドとした。大グリッドの呼称は、北から南へアラビア数字で12～45、西から東へアルファベットの大文字でL～Pとした記号を組み合わせ、12L・13L……、12M・13M……、12N・13N……のように表示した。さらに大グリッド内を25分割し、北西隅を1、北東隅を5、南西隅21、南東隅を25となるように番号を付し、大グリッド番号との組み合わせで「12L25」等と表した。10区に近い35Lグリッド北西隅の座標は、X=201,990、Y=62,930である。



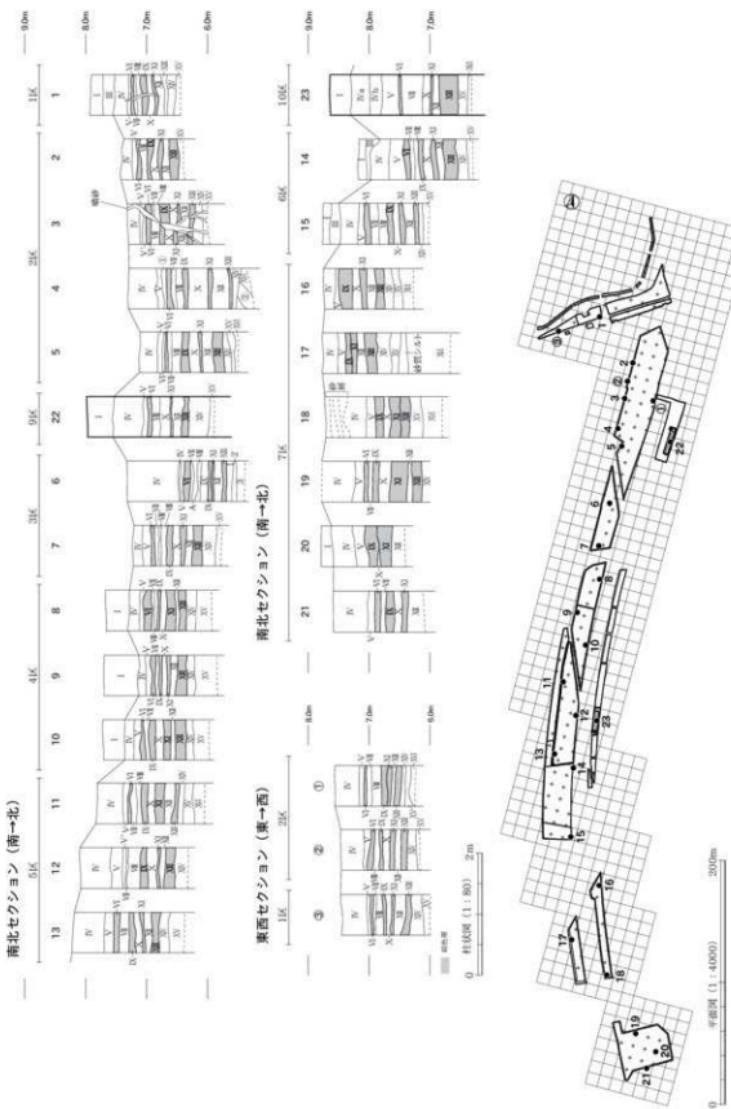
第11図 グリッド設定と調査区

（原図：国土交通省提供 小野本・石川・加藤ほか2019を一部改変）

B 基本層序(図版16・42・55)(第12図)

過年度調査において、基本層はI層～XVI層に分層されており〔小野本・石川・加藤ほか2019〕。今回の調査もその層序を踏襲する(第12図)。今回の調査地9・10区ではII層(中世遺物包含層)・III層(漸移層)はほ場整備による削平が著しく検出できなかった(第12図No.22・23)。遺構の検出面はI層(表土)下のIV層上面となる。VII層とIX層も今回の調査では確認できなかった。炭化物を有する暗色帶はVI・IX・XI・XIII層である。また、地震痕跡が顕著に認められ、XVII層は砂脈として上昇し、VI層下面、VII層上面で噴出する噴砂を確認した。下層の遺物包含層は、XI層とXIII層とされている。遺構・遺物が存在する可能性を考慮しながら慎重に掘削を進めたが、今回の調査では、XI・XIIIに対応する炭化物を含む有機土壌の暗色帶は確認できたが、遺構・遺物ともに確認できなかった。暗色帶の堆積時期は一定期間、地表面であった可能性が高く、一方、暗色帶間の間層は炭化物や混入物を含まない均質なシルトであった。これは洪水性の堆積物である可能性が高く、洪水を繰り返すような土地であったと考えられる。阿賀野川は、かつて遺跡近くの旧百津潟付近を流れており、現在より洪水災害を被る頻度が高かったと推測される。

I層	灰色シルト 表土(現代の水田耕作土)
II層	暗褐色シルト ほ場整備により削平されたため、基本的には残存しない。上層の遺構覆土と共通しており、上層(中世)の遺物包含層に相当すると考えられる。今回の調査では確認していない。
III層	黄褐色シルト 上層の遺物包含層であるII層と、地山であるIV層の間に部分的に認められる漸移層。IV層より、ややくすむ。ほ場整備により削平されているため、基本的には残存しない。
IV層	明黄褐色砂質シルト～にぶい黄色シルト 2.5Y6/3～6/2 黄色系。上層の遺構検出面。
V層	灰白色粘質シルト～灰黄色シルト 2.5Y6/2 灰色系。粒子が細かく粘性が強い。均質。
VI層	にぶい黄褐色シルト～灰黄褐色シルト 10YR4/2～5/2 褐色系の暗色帶。炭化物をまばらに極僅か含む。
VII層	にぶい褐色シルト 7.5YR5/4～5/6
VIII層	灰黄色シルト～黄褐色シルト 2.5Y5/3 暗色帶間の間層。均質。
IX層	浅黄色シルト 2.5Y7/3～6/3 褐色系の暗色帶。炭化物をごくまばらに含む有機土壌。
X層	浅黄色シルト 2.5Y7/3 暗色帶間の間層。IX層と比べると色調が明るい。均質。
XI層	褐灰色シルト 10YR6/1～6/2 粘性が強い。褐色系の暗色帶。炭化物をごくまばらに含む有機土壌。
XII層	浅褐色シルト 2.5Y7/3～6/3 粘性が強い。
XIII層	褐灰色シルト 10YR6/1～6/2 褐色系の暗色帶。部分的に炭化物を多く含む有機土壌。
XIV層	褐灰色シルト 10YR6/1～7/1 粘性が強い。XIII層と比べると明るい色調。
XV層	灰色細粒砂混シルト 2.5Y6/2～7/2 均質な砂混シルト。混入物はない。
XVI層	灰色細粒砂 5Y6/1～褐色粗粒砂～極粗粒砂(砂礫) 10YR4/6 部分的にグライ化作用により青灰色を帯びる。
XVII層	明褐色細～中粒砂 7.5Y5/4～5/6(噴砂)



第12図 基本層序

(小野本・石川・加藤ほか 2019に加筆)

C 遺構・遺物の検出状況

遺跡は、阿賀野川の旧河道にできた旧百津潟の縁に広がる。掘削前の標高は8m程で若干の比高差はあるがほぼ平坦である。調査対象範囲の総延長は南北に650mにも及ぶ広範囲である。過年度調査では、1m程の間層を挟み、大きく上層と下層に分かれる。上層の遺構は表土（耕作土）下で検出しており、いずれも中世（12～14世紀）のものである。過年度調査では、下層の遺物包含層は間層を挟んで上下に細分され、上位のXⅠ層からは縄文時代晚期後半、下位のXⅢ層からは縄文時代晚期前半の遺物が出土している。掘り込みを持つ明瞭な遺構は確認されず、土器が散在するのみと報告されている。

【上層】

中世（12～14世紀）の掘立柱建物6棟、井戸1基、中世および近世以降の土坑37基、溝53条、ピット（小穴）308基、性格不明遺構1基を検出した。中世の遺構は10区の中央に集中する傾向があり、9区は希薄である。近世以降の遺構については詳細を割愛する。

9区の遺構は主に溝である。過年度調査の溝に続く可能性がある。10区の遺構は、掘立柱建物、井戸、土坑、溝、ピット（小穴）群と集落を構成した遺構と捉えられる。遺構の時期は12世紀～14世紀と考えられる。

遺物は珠洲焼・青磁・白磁・土師質土器・砥石・鉄製品などが遺構内及び遺構検出面から出土した。土器類はいずれも小片で器種や形態、時期の特定が困難であるが、近世以降を除いて概ね12～14世紀の範疇で大過ないと考えられる。数は少ないものの、青磁や白磁の存在を勘案すると、相応な階層の存在をうかがい知ることができる。

【下層】

過年度調査において、XⅠ層は縄文時代晚期後半、下位のXⅢ層は縄文時代晚期前半とされている。今回の調査では辛うじて対応する層位を確認することはできたが、炭化物等の有機質の含有率も少なく、遺構や遺物の確認には至らなかった。

3 上層（中世以降）の遺構

A 概 要

発掘調査は対象範囲を9区・10区の2区に分けて行なった。遺構番号は過年度調査に統けて2101番から各区共通で通し番号を付した。基本層序IV層の上面で中世以降の遺構を検出した。このうち中世に属するものは、掘立柱建物6棟、井戸1基、土坑37基、溝32条、ピット（小穴）308基（掘立柱建物を含む）、性格不明遺構1基とした。なお、調査範囲のほぼ全域では場整備等による削平を受けていたため、IV層上面が中世の生活面というわけではない。また、調査範囲は南北方向が長いものの、東西方向が狭く、遺構の全容をつかめないものが多くあった。9区では全域で遺構を確認することができたが、遺構密度は低い。10区は遺構の分布に粗密があるので、35Nグリッドから41Oグリッドにかけて今回調査のほとんどどの遺構が集中した。標高は9区北端部が7.3m、10区南端部では8.4m、調査範囲の南北間約330mの比高差は1.1mあり、IV層の土質は北から南に向かってシルトから極細粒砂の割合が高くなっている。中世遺構の年代は出土遺物が少なく明瞭ではないが、過年度調査や覆土などを参考に検討を行ったところ12～14世紀に属すると考えられる。以下、中世帰属の遺構について述べる。また、近世以降の溝と判

断されるものは、図版で上端のみを図示した。

B 9 区の調査

1) 遺構の検出状況

検出した遺構は、土坑2基、ピット（小穴）21基、溝20条を数える。このうち、土坑2基とピット（小穴）21基、溝10条は中世に帰属すると判断した。ここでは主な遺構について記述する。

2) 土 坑

土坑は2基検出した。

SK2116（図版4）

13Nグリッドに位置する。平面形は梢円形で、規模は長径78cm、深さ24cmを測る。覆土は2層でレンズ状に堆積する。断面形は台形状で、側壁は急斜度・緩やかに立ち上がる。SD2117と重複し、これより新しい。

SK2141（図版4・40）

16Nグリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長径119cm、深さ66cmを測る。覆土は8層でブロック状に堆積する。断面形は台形状で、側壁は垂直に立ち上がる。

3) 溝

溝は10条が中世に帰属すると判断した。SD1は2015年度調査2区で検出された溝の延長である。

SD1（図版3・4・40）

12M、13Mグリッドを北西・南東方向に伸びる。覆土は2層でレンズ状に堆積する。断面は台形状で、壁面は急斜度に立ち上がる。土師質土器、石製品が出土した。

SD2104（図版3・4・40）

13Mグリッドを北西・南東方向に伸びる。覆土は2層でレンズ状に堆積する。断面は台形状で、壁面は急斜度に立ち上がる。

SD2105（図版3・4・40）

15Oグリッドを北東・南西方向に伸びる。覆土は2層で斜位に堆積する。断面は台形状で、壁面は南面が緩やか、北面が急斜度に立ち上がる。

SD2106（図版3・4・40）

15N・Oグリッドを北東・南西方向に伸びる。覆土は1層のみで暗褐色シルトが主体である。断面は漏斗状で、壁面は垂直・緩やかに立ち上がる。遺物は、石製品（蛭石）が出土した。

SD2107（図版3・4・40）

15・16Oグリッドを北西・南東方向に伸びる。覆土は1層のみで暗褐色シルトが主体である。断面は台形状で、壁面は急斜度に立ち上がる。

SD2109（図版3・4・40・41）

15N、16N・Oグリッドを北西・南東方向に伸びる。覆土は2層でレンズ状に堆積する。断面は半円状で、壁面は急斜度に立ち上がる。北端は15N19グリッドで収束するが、同一線上2m先にSD2133の南端がある。西側にSD2110、東側にSD2107が存在し、約2mの間隔で並行関係にある。遺物は、須

恵器壺甕類（図版17-1）、土師質土器、珠洲焼壺・甕（図版17-2・3）、片口鉢が出土した。

SD2110（図版3・4・40・41）

15N、16N・O、17N・Oグリッドを北西・南東方向に伸びる。覆土は5層でブロック状に堆積する。断面は階段状で、壁面は急斜度に立ち上がる。SD2134と重複し、ほぼ同時期に機能したと思われる。SD2109・SD2133と約2mの間隔で並行関係にあり、15N13グリッドでSD2134と直角に交わる。未調査部分を挟むため関連性は不明だが、北西の同一線上にSD1が位置している。遺物は、土師質土器杯（図版17-4～6）、珠洲焼片口鉢・壺甕類（図版17-7～11）、白磁（図版17-12）、珠洲焼転用砥石（図版17-13）出土した。2層から出土した炭化材の樹種はカツラで、年代は13～14世紀との結果を得ている（本章5）。

SD2117（図版3・4・42）

13N・Oグリッドを西からやや南東に湾曲している。覆土は2層でレンズ状に堆積する。断面は台形状で、底面はやや凸凹があり、壁面は急斜度に立ち上がる。SK2116、P2119と重複し、SK2116より古く、P2119より新しい。

SD2133（図版3・4・41・42）

14・15Nグリッドを北西・南東方向に伸びる。覆土は2層でレンズ状に堆積する。断面は漏斗状で、壁面は緩やかに立ち上がる。SD2134と重複し、ほぼ同時期に機能したと思われる。15N 8・9グリッドでSD2134と直角に交わる。同一線上にSD2109の北端がある。遺物は、土師質土器、土製品が出土した。

SD2134（図版3・4・41・42）

15Nグリッドを北東・南西方向に伸びる。覆土は2層でレンズ状に堆積する。断面は半円状で、壁面は急斜度に立ち上がる。SD2110、SD2133と重複し、ほぼ同時期に機能したと思われる。これらとは15N 8・9グリッドでそれぞれ直角に交わる。

C 10 区の調査

1) 遺構の検出状況

上層で検出した遺構は、掘立柱建物6棟、井戸1基、土坑35基、溝33条、ピット（小穴）287基、性格不明遺構1基を数える。このうち、溝11条を除く遺構は中世に帰属すると判断した。調査区は南北に細長く、幅4m前後、長さ190m超である。27N～34Nグリッドまで遺構は疎らで、土坑1基、溝4条、ピット（小穴）3基のみである。35N～38Oグリッド間では、掘立柱建物5棟、井戸1基など多数の遺構が検出されている。調査区西側の約12.5m先には2015年度に調査された4・5・6区が位置している。この5区は遺構が集中しており、中世に帰属する掘立柱建物1棟、土坑21基、ピット（小穴）205基、溝18条、火葬関連遺構10基を検出している。5区北側から中央部にかけて北西から南東へSD838、SD839などの溝が走り、その西側にピット（小穴）が集中している。10区はその東側に位置し、西と南の溝を境にした遺構集中域となっている。ここでは主な遺構について記述する。

2) 掘立柱建物

掘立柱建物は6棟検出した。SB13を除き、SB14～18は調査区外へ展開する。建物型式の内訳は、SB13の二面下屋付梁間一間型建物1棟が型式分類が可能で、残る5棟は梁間一間型建物1棟、一面以上

の下屋付梁間一間型建物1棟、二面下屋付梁間一間型建物2棟、総柱型建物1棟と推測され、梁間一間型建物が主体を占めると考えられる。長軸方向は9°～54°東偏するものと、15°～23°西偏するものがある。面積は調査区内の現状推定でSB14の4.88m²が最も小さく、SB18の47.47m²が最も大きい。SB16は、「馬小屋・厩舎の判断基準」〔篠崎2010〕に基づくと馬小屋の可能性がある。

SB13（図版8・43）

35・36Nグリッドに位置する。梁間1間、桁行1間、二面下屋付梁間一間型建物I a型である。梁行長は2.10m、桁行長は2.85m、面積は5.98m²である。桁行柱間長は1.90～2.13mである。主軸は16°西偏する。SK2317とSD2429と重複し、SD2429より古く、SK2317は不明である。柱穴の平面形は円形・楕円形である。

SB14（図版12・43）

36Nグリッドに位置する。梁間1間、桁行1間以上の梁間一間型建物で類型はII a型と推定される。SB15と重複し、これより古い。梁行長は3.07m、桁行長は1.65m以上、面積は4.88m²以上である。梁行柱間長は1.47～1.57mである。主軸は15°西偏する。柱穴の平面形は円形・楕円形・方形である。

SB15（図版8・43）

36Nグリッドに位置する。梁間1間、桁行1間以上の二面下屋付梁間一間型建物I cもしくはII b型と推定される。SK2318、SB14と重複し、SK2318は新旧不明、SB14より新しい。梁行長は2.20m以上、桁行長は5.60m以上、面積は21.29m²以上である。桁行柱間長は2.34～2.41mである。主軸は54°東偏する。柱穴の平面形は円形・楕円形である。

SB16（図版9・43）

36・37Nグリッドに位置する。梁間1間以上、桁行2間の一面以上の下屋付梁間一間型建物I a型またはI b型と推定される。SD2172と重複し、これらより古い。桁行長は8.15m、梁行長は3.35m以上、面積は27.3m²以上である。身舎桁行長は6.80mである。桁行柱間長は3.12～3.74mである。主軸は23°西偏する。柱穴の平面形は円形・楕円形である。身舎柱間に土坑3基（SK2180・2236・2308）と柱穴4基（P2230・2302・2304・2314）が等間隔で一直線上に配置されている。

SB17（図版10・44）

37N・O、38N・Oグリッドに位置する。梁間2間、桁行3間の二面下屋付梁間一間I cもしくはII b型と推定される。片側の妻側面に妻柱P2249を持つ。梁行長3.92m以上、桁行長5.08m、面積37.2m²である。梁行柱間長は1.40～1.80m、桁行柱間長は1.80～3.07mである。主軸は9°東偏する。柱穴の平面形は円形・楕円形である。また、建物範囲内にSE2161・SK2241が存在する。SE2161は建物内北側に位置し、柱筋とも重複しないことから同一時期に機能していた可能性がある。

SB18（図版11・44）

40・41Oグリッドに位置する。梁間2間、桁行4間の総柱建物と推定される。推定値は梁行長5.86m、桁行長8.10m、面積は47.47m²である。桁行柱間長は1.52～2.00m、梁行柱間長は2.60～2.87mである。主軸は21°東偏する。柱穴の平面形は円形・楕円形である。

3) 井 戸

井戸は1基検出した。2015、2016年度調査では2区で3基、7区で5基を検出している。SE2161の検出面は標高8.08～8.14m、深さ221cmで、標高5.9mあたりで地下水位にあたる。過年度調査で

報告された標高 5.5 ~ 5.7m 以下で地下水が豊富に含まれるという記述と大きな差はない。

SE2161 (図版 12・45)

37N・O、38N・O グリッドに位置し、SB17 の建物範囲内にある。井戸枠の無い素掘りの井戸である [宇野 1982]。覆土は 13 層で水平・レンズ状・水平に堆積する。1・2 層は暗褐色シルト、3・4 層は黒褐色シルト、5・7・8 層は炭化物層である。水溜りである 11 層中から曲物が出土し、掘方は中～粗粒砂を含むオリーブ灰～緑灰色シルトであった。底部 13 層は礫敷である。平面形は円形で、断面形は台形状である。規模は上端長径 136cm、深さ 221cm を測る。遺物は 1 層から砥石 (図版 18-35・36)、5 層から珠洲焼細片、曲物直上の 10 層底部から木製鋸鍼車 (図版 18-37) が出土した。曲物の樹種はスギで、破片の年代は 11 ~ 12 世紀との結果を得ている (本章 5)。

4) 土 坑

土坑は 35 基検出した。SK2180・SK2236・SK2308 は SB16 に付属すると推測される。SK2318 は被熱面、炭化物層を持つが上部のほとんどは削平を受けていたため使用目的は不明である。

SK2157 (図版 12・45)

33N グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長径 96cm、深さ 20cm を測る。覆土は 1 層で褐灰色シルト～極細砂が主体である。断面形は台形状で、側壁は急斜度に立ち上がる。

SK2160 (SB16) (図版 12・45)

37N グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長径 117cm、深さ 39 ~ 50cm を測る。覆土は 3 層でレンズ状に堆積し、1 層下部で炭化物を確認した。2・3 層は炭化物を微量に含む。断面形は台形状で、側壁は緩やかに立ち上がる。SD2172、SD2519 と重複し、これらより古い。遺物は、土師質土器、鉄製品、種子が出土した。

SK2162 (図版 12・46)

39N グリッドに位置する。平面形は梢円形で、規模は長径 127cm、深さ 36cm を測る。覆土は 1 層で暗褐色シルトが主体である。断面形は台形状で、側壁は急斜度に立ち上がる。遺物は、須恵器が出土した。

SK2164 (図版 12・46)

35N グリッドに位置する。平面形は梢円形で、規模は長径 82cm、深さ 26cm を測る。覆土は 1 層で 10mm の炭化物を微量に含む。断面形は台形状で、側壁は急斜度に立ち上がる。P2171 と重複し、これより古い。

SK2165 (図版 12・46)

35N グリッドに位置する。ほ場の排水設備があったため全掘には至っていないが、畔の反対側には平面、断面上とも遺構は認められなかった。平面形は方形もしくは長方形で、規模は長径 190cm、深さ 13cm を測る。覆土は 3 層でブロック状に堆積する。断面形は階段状で、側壁は緩やかに立ち上がる。P2524 と重複し、これより古い。付帯する溝、ピットは認められなかった。

SK2175 (図版 13・48)

35N グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長径 133cm、深さ 10cm を測る。覆土は 1 層で暗褐色シルトが主体である。断面形は不整形で、側壁は緩やかに立ち上がる。P2195 と重複し、これより新しい。

SK2180 (SB16) (図版 9・46)

37N グリッドに位置する。平面形は梢円形で、規模は長径 145cm、深さ 32cm を測る。覆土は 2 層でレンズ状に堆積する。断面形は台形状で、側壁は急斜度に立ち上がる。

SK2190 (図版 6・46)

36N グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長径 53cm、深さ 19cm を測る。覆土は 1 層で暗褐色シルトが主体である。断面形は台形状で、側壁は急斜度に立ち上がる。

SK2200 (図版 13)

39N グリッドに位置する。平面形は梢円形で、規模は長径 71cm、深さ 22cm を測る。覆土は 1 層で暗褐色シルトが主体である。断面形は台形状で、側壁は急斜度に立ち上がる。

SK2210 (図版 13・46)

35N、36N グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長径 113cm、深さ 34cm を測る。覆土は 3 層でブロック状に堆積し、2 層は炭化物を微量に含む。断面形は台形状で、側壁は急斜度に立ち上がる。P2316、P2508 と重複し、これらより古い。遺物は、土師質土器が出土した。

SK2234 (図版 13・47)

36N グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長径 93cm、深さ 38cm を測る。覆土は 2 層でレンズ状に堆積する。断面形は箱状で、側壁は垂直に立ち上がる。P2216、P2445 と重複し、P2216 より古く、P2445 より新しい。

SK2236 (SB16) (図版 9・47)

37N グリッドに位置する。平面形は梢円形で、規模は長径 140cm、深さ 27cm を測る。覆土は 3 層でレンズ状に堆積し、2 層は炭化物を微量に含む。断面形は台形状で、側壁は急斜度に立ち上がる。

SK2303・P2320・P2328 と重複し、SK2303 より新しく、P2320・P2328 と同時期か新しい。遺物は、珠洲焼片口鉢が出土した。

SK2241 (図版 13)

38O グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長径 75cm、深さ 7cm を測る。覆土は 1 層で暗褐色シルトが主体である。断面形は台形状で、側壁は緩やかに立ち上がる。P2315 と重複し、これより古い。

SK2283 (図版 13)

37N グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長径 98cm、深さ 29cm を測る。覆土は 3 層でレンズ状に堆積し、2 層は炭化物を微量に含み、3 層は主に炭化物である。断面形は半円状で、側壁は急斜度に立ち上がる。P2527・P2528 と重複し、これらより新しい。

SK2286 (図版 13・47)

36N グリッドに位置する。平面形は梢円形で、規模は長径 105cm、深さ 32cm を測る。覆土は 1 層で、5mm の焼土ブロック、炭化物を微量に含む。断面形は箱状で、側壁は垂直に立ち上がる。P2287、P2480 と重複し、P2287 より古く、P2480 より新しい。

SK2303 (図版 13・47)

37N グリッドに位置する。平面形は梢円形で、規模は長径 60cm、深さ 21cm を測る。覆土は 1 層で、上半は炭化物を微量に含む。断面形は台形状で、側壁は緩やか・急斜度に立ち上がる。SK2236、P2304 と重複し、これらより古い。

SK2308 (SB16) (図版9・47)

36N、37N グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長径 137cm、深さ 30 ~ 59cm を測る。覆土は5層でブロック状に堆積し、2層は炭化物を微量に含む。断面形は台形状で、側壁は急斜度に立ち上がる。P2230 と重複し、これより古い。遺物は、土師質土器、鉄製品(図版18-38)が出土した。

SK2317 (図版13・48)

35N、36N グリッドに位置する。平面形は梢円形で、規模は長径 102cm、深さ 32cm を測る。覆土は2層でレンズ状に堆積する。断面形は階段状で、側壁は垂直に立ち上がる。遺物は、土師質土器が出土した。

SK2318 (図版13・48)

36N グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長径 177cm、深さ 8 ~ 16cm を測る。覆土は5層で水平に堆積し、1層は炭化物主体で、2層・3層は炭化物を微量に含む。3層上面の一部に被熱が見られ、底面は凹凸がある。断面形は台形状で、側壁は緩やかに立ち上がる。

SK2335 (図版7・48)

40O グリッドに位置する。平面形は梢円形で、規模は長径 110cm、深さ 19cm を測る。覆土は1層で暗褐色シルトが主体である。断面形は不整形で、側壁は垂直・急斜度に立ち上がる。P2515 と重複し、これより古い。

SK2384 (図版13・48)

41O グリッドに位置する。平面形は梢円形で、規模は長径 143cm、深さ 44cm を測る。覆土は2層でレンズ状に堆積する。断面形は階段状で、側壁は急斜度に立ち上がる。P2495、P2496、P2497、P2498 と重複し、これらより新しい。

SK2397 (図版14・48)

43O グリッドに位置する。平面形は方形で、規模は長径 97cm、深さ 42cm を測る。覆土は3層で水平・レンズ状に堆積する。断面形は台形状で、側壁は急斜度に立ち上がるが、東壁上面部は半円状に広がる。SD2403 と重複し、これより新しい。

SK2404 (図版14)

44P グリッドに位置する。平面形は梢円形で、規模は長径 90cm、深さ 15cm を測る。覆土は2層で斜位に堆積する。断面形は台形状で、側壁は急斜度に立ち上がる。遺物は、土師器が出土した。

SK2411 (図版14・48)

44O グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長径 68cm、深さ 15cm を測る。覆土は2層でレンズ状に堆積する。断面形は台形状で、側壁は急斜度に立ち上がる。

SK2422 (図版14)

45O・P グリッドに位置する。平面形は梢円形で、規模は長径 57cm、深さ 10cm を測る。覆土は1層で 5 ~ 20mm の炭化物を含む。断面形は弧状で、側壁は緩やか・急斜度に立ち上がる。

SK2477 (図版14・49)

37N・O グリッドに位置する。平面形は梢円形で、規模は長径 165cm、深さ 63cm を測る。覆土は3層でブロック状に堆積する。断面形は階段状で、側壁は急斜度に立ち上がる。SD2192 と重複し、これより新しい。遺物は、土師質土器・種子が出土した。

SK2479 (図版 14)

37O グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長径 100cm、深さ 20cm を測る。覆土は 1 層で褐色シルトが主体である。断面形は台形状で、側壁は緩やかに立ち上がる。SD2457 と重複し、これより新しい。

SK2483 (図版 14)

35N グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は長径 32cm、深さ 7cm を測る。覆土は 1 層で 20 ~ 30mm の焼土ブロック、炭化物を微量に含む。断面形は台形状で、壁面は垂直に立ち上がる。SD2182 と重複し、これより新しい。

SK2484 (図版 14・48)

35N グリッドに位置する。平面形は不整形である。規模は長径 80cm、深さ 14cm を測る。覆土は 1 層で、5 mm 以下の炭化物を微量に含む。断面形は台形状で、壁面は急斜度・垂直に立ち上がる。SD2182 と重複し、これより新しい。

SK2490 (図版 14・48)

38N グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長径 277cm、深さ 70cm を測る。覆土は 3 層で水平・レンズ状に堆積する。断面形は台形状で、側壁は緩やか・急斜度に立ち上がる。SD2167 と重複し、これより新しい。

SK2499 (図版 15)

38O グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長径 156cm、深さ 70cm を測る。覆土は 2 層でレンズ状に堆積する。断面形は V 字形で、側壁は緩やかに立ち上がる。SD2192・P2510 と重複し、SD2192 より新しく、P2510 より古い。遺物は、珠洲焼片口鉢が出土した。

SK2509 (図版 14)

38O グリッドに位置する。平面形は梢円形で、規模は長径 120cm、深さ 29cm を測る。覆土は 1 層で褐色シルトが主体である。断面形は弧状で、側壁は急傾斜に立ち上がる。SD2167 と重複し、これより古い。

SK2511 (図版 15)

38O グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長径 55cm、深さ 26cm を測る。覆土は 1 層で暗褐色シルトが主体である。断面形は階段状で、側壁は緩やかに立ち上がる。SD2192 と重複し、これより古い。

SK2519 (図版 12)

37N グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長径 62cm、深さ 26cm を測る。覆土は 2 層で斜位に堆積する。断面形は漏斗状で、側壁は急傾斜・垂直に立ち上がる。SK2160、P2309 と重複し、これらより新しい。

5) 溝

溝は 33 条を検出した。このうち 22 条が中世に帰属すると判断した。これら溝の方向は大きく分けて 5 つに分かれる。東西をほぼ直線に走るものは、SD2163・2170・2466 で $90^\circ \pm 2^\circ$ 以内である。北西寄りに向くものは、SD2457 で 76° である。北東寄りに向くものは、SD2149・2156・2172・2182・2420 で $61 \sim 76^\circ$ である。SD2192・2396・2401・2402・2403・2410 は、 $17 \sim 25^\circ$ 西偏し、

SD2192 を除いて 10 区南端に集中する。この SD2192 の北端は SD2420 の西端と直行し、同一の機能を持つ溝の可能性がある。緩やかに湾曲する溝は SD2167・2169・2191 がある。SD2163 と SD2167 はその位置関係から、2015 年度調査 5 区の SD838、SD839 と連続する可能性を持つ。

SD2145 (図版 5)

29M・N グリッドを西・東方向に伸びる。覆土は 1 層のみで黄灰色シルトが主体である。断面は台形状で、壁面は急斜度に立ち上がる。

SD2149 (図版 5・15・49)

31N グリッドを西・東方向に伸びる。覆土は 6 層でブロック状に堆積する。断面は弧状で、壁面は緩やか・急斜度に立ち上がる。SD2148 と重複し、これより新しい。

SD2151 (図版 5)

31N グリッドを西・東方向に伸びる。覆土は 1 層のみで暗灰黄色シルトが主体である。断面は台形状で、壁面は急斜度に立ち上がる。

SD2156 (図版 5・15・49)

33N グリッドを南西・北東方向に伸びる。覆土は 2 層で水平に堆積する。断面は台形状で、壁面は緩やか・急斜度に立ち上がる。SD2158 と並行する。

SD2163 (図版 6・14・50)

39N・O グリッドを西・東方向に伸びる。覆土は 3 層でレンズ状に堆積する。断面は半円状で、壁面は急斜度に立ち上がる。遺物は、珠洲焼片口鉢・壺甌類（図版 17-14～20）、青磁、石製品（砾石）が出土した。

SD2167 (図版 6・14・50)

38N・O グリッドを西・東方向に伸びる。覆土は 3 層で水平に堆積する。断面は台形状で、壁面は急斜度に立ち上がる。P2240、P2344、SK2490、SK2509 と重複し、SK2509 より新しく、P2240、P2344、SK2490 より古い。遺物は須恵器壺甌類（図版 18-22）、土師質土器、珠洲焼壺甌類（図版 18-21・23）、石製品（軽石）が出土した。

SD2169 (図版 6・15・50)

39N・O グリッドを西・東方向に伸びる。覆土は 1 層のみで暗褐色シルトが主体である。断面は台形状で、壁面は垂直・急斜度に立ち上がる。遺物は陶器が出土した。

SD2170 (図版 6・15・50)

39N・O、40O グリッドを西・東方向に伸びる。覆土は 1 層のみで灰黄褐色シルトが主体である。断面は半円状で、壁面は急斜度に立ち上がる。

SD2172 (SB16) (図版 6・9・15)

37N・O グリッドを南西・北東方向に伸びる。覆土は 1 層のみで暗灰黄色シルト～極細粒砂が主体である。断面は台形状で、壁面は急斜度・内傾に立ち上がる。SK2160、P2454、P2518 と重複し、これらより新しい。

SD2182 (図版 6・14・50)

35N グリッドを南西・北東方向に伸びる。覆土は 1 層のみで暗褐色シルトが主体である。断面は箱状で、壁面は垂直に立ち上がる。P2183、SK2483、SK2484 と重複し、SK2483、SK2484 より古く、P2183 より新しい。

3 上層（中世以降）の遺構

SD2191 (図版6・15)

39N・O グリッドを南西・北東方向に伸びる。覆土は1層のみで暗褐色シルトが主体である。断面は台形状で、壁面は急斜度に立ち上がる。SD2466と重複し、これより新しい。遺物は土師質土器杯（図版18-24）、珠洲焼甕（図版18-25）、石製品（砥石）が出土した。

SD2192 (図版6・15・49・51)

37N・O、38O グリッドを北西・南東方向に伸びる。覆土は1層で暗褐色シルトが主体である。断面は台形状で、壁面は垂直・急斜度に立ち上がる。SE2161、P2458、P2459、SK2477、P2491、P2492、SK2499、P2505、P2510、SK2511、P2520、P2521、P2522と重複し、SK2511を除いてこれらより古い。遺物は、土師質土器杯（図版18-26）が出土した。

SD2396 (図版7)

43O グリッドを北西・南東方向に伸びる。覆土は3層でレンズ状に堆積する。断面は台形状で、壁面は急斜度に立ち上がる。SD2401、SD2402、SD2403と並行する。

SD2401 (図版7・15・51)

43O グリッドを北西・南東方向に伸びる。覆土は1層のみで褐色シルトが主体である。断面は弧状で、壁面は緩やかに立ち上がる。SD2403と重複し、これより新しい。SD2396、SD2402、SD2403と並行する。

SD2402 (図版7・15・51)

43O グリッドを北西・南東方向に伸びる。覆土は1層のみで暗オリーブ褐色シルトが主体である。断面は弧状で、壁面は緩やかに立ち上がる。SD2403と重複し、これより新しい。SD2396、SD2401、SD2403と並行する。

SD2403 (図版7・15・51)

43O グリッドを北西・南東方向に伸びる。覆土は2層で斜位に堆積する。断面は弧状で、壁面は緩やかに立ち上がる。SK2397、SD2401、SD2402と重複し、これらより古い。SD2396、SD2401、SD2402と並行する。

SD2410 (図版7・15)

44P グリッドを北西・南東方向に伸びる。覆土は1層のみで、暗褐色シルトが主体である。断面は台形状で、壁面は垂直・急斜度に立ち上がる。

SD2420 (図版7・15)

37N グリッドを南西・北東方向に伸びる。覆土は1層のみで、暗褐色シルトが主体である。断面は台形状で、壁面は急斜度に立ち上がる。SD2192と直角に接する。SD2172と並行する。

SD2429 (図版6・15)

35N、36N グリッドを西・東方向に伸びる。覆土は1層のみで、黒褐色シルトが主体である。断面は弧状で、壁面は急斜度・緩やかに立ち上がる。P2430と重複し、これより新しい。

SD2457 (図版6)

37O グリッドを北西・南東方向に伸びる。覆土は1層のみで、暗褐色シルトが主体である。断面は半円状で、壁面は急斜度に立ち上がる。SK2479と重複し、これより古い。遺物は珠洲焼片口鉢（図版18-29）、鉄製品（図版18-39）が出土した。

SD2466 (図版6・15)

39O グリッドを西・東方向に伸びる。覆土は1層のみで、暗褐色シルトが主体である。断面は台形状で、壁面は緩やかに立ち上がる。SD2191と重複し、これより古い。

SD2517 (図版6・14)

37O グリッドを南西・北東方向に伸びる。覆土は2層で褐色シルトが主体である。断面は階段状で、壁面は急斜度に立ち上がる。SK2479と重複し、これより新しい。

6) 性格不明遺構

性格不明遺構は1基検出した。長さ7.05m、幅6.5mの浅い皿状の凹みで、SB16の付属施設の可能性がある。

SX2529 (図版6・9)

36・37N グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長径705cm、短径292cm、深さ7cmを測る。覆土は1層で黒褐色シルトが主体である。断面形は台形状で、側壁は緩やかに立ち上がる。

4 遺 物**A 記述の方法**

土器・陶磁器の説明は、原則として本文・観察表・図面図版・写真図版を用いて行う。観察表で全てについて記載を行い、代表的なものについて本文で解説することとする。図面図版の縮尺率は基本的に1/3で表した。口径が推測可能な資料はできるだけ復元した。また、実測図及び断面図の実存部分は細線でくくり、推定部分と実存部分の境界は間隔を空けた。写真図版も図面図版と同じ縮尺になるように掲載した。観察表は、図版に掲載した全ての土器について観察項目を設定してその内容を記し、不明なものは空白とした。口径は器形の外寸を計測し、器高・口縁部径・底部径などをcm単位で記した。色調は内外面の色調を『新版 標準土色帖』[小山・竹原2000]に基づき記した。胎土は金雲母・雲母・長石・石英・角閃石・海綿骨針などの鉱物を中心記した。なお、種類不明の不透明な白色の粒は白色粒子として表した。外面及び内面の調整・施文等は部位別に記した。使用痕跡は主に二次的に付着した炭化物等について記した。備考は上記以外の特徴について記した。

須恵器・土師質土器・珠洲焼・輸入陶磁器(白磁・青磁)があり、器形により大別した。分類・年代観については、珠洲焼は吉岡康輔[吉岡1994]、13世紀以前の青磁は山本信夫[山本2000]、14世紀以降の青磁は上田秀夫[上田1982]、白磁は森田勉[森田1982]各氏の論考に準じた。

B 土器・陶磁器(図版17・18・56・57)**1) 遺構出土(1~32)****SD2109 (1~3)**

1は壺蓋類の体部片、外面は格子状タタキ、内面には平行する条線状の当て工具痕がみられる。須恵器または瓷器系陶器か。2・3は珠洲焼の壺蓋類である。2は壺の頸部で、3は壺の体部片である。ともに外面は平行タタキ、内面には円形の当て工具痕がみられる。

SD2110 (4 ~ 13)

4 ~ 6は土師質土器の杯である。4は口縁部が外傾する。5は口縁部が外反する。6は口縁部が大きく外傾する。復元口径は12.4 ~ 13.2cm、器高は2.9 ~ 3.2cmとほぼ同じであるが、底径は4・5が9.6cm・9.0cmに対して6が⁴6.8cmと小さい。7 ~ 11は珠洲焼である。7は片口鉢の口縁部で4目以上の卸目が確認できる。復元口径は28.2cmと大きい。8は壺の頸部から肩部で外面に綾杉状の平行タタキを施す。V字状のヘラ記号が確認できる。内面は円形の當て工具痕がみられる。9・10は壺の体部で9は外面に綾杉状の平行タタキ、10は斜方向の平行タタキ、内面はともに円形の當て工具痕がみられる。11は壺の底部か。12は白磁の皿で口縁部が無釉の所謂、口禿である。13は壺甕類の体部片を転用した砥石である。使用面は外面の約2/3のみである。

SD2152 (27)

27は肥前産染付磁器皿、内面に雪輪文と竹笠文、外面に抽象文を描く。

SD2163 (14 ~ 20)

14 ~ 20はすべて珠洲焼と考えられる。14 ~ 16は片口鉢の口縁部、17は体部である。14の推定口径は31.5cmとなる。内面に13目1単位、15は8目以上の卸目が確認できる。16は小片のため、卸目の有無は確認できなかった。17は底部に近い体部片で8目1単位の卸目がある。また使用により滑面を成す。18・19は壺甕類の体部片である。

18の外面は平行タタキ、19の調整痕は不明。18・19の内面は円形の當て工具痕か。20は壺の底部片、推定底径は13.4cmとなる。

SD2167 (21 ~ 23)

21は珠洲焼の大壺口縁部である。頸部は短く端部は丸く肥厚する。内面には円形の當て工具痕がみられる。吉岡編年IV期頃の所産か。22は須恵器の壺甕類体部片、外面に平行タタキ、内面に同心円の當て工具痕がみられる。23は珠洲焼の壺甕類の体部片、外面は綾杉状のタタキ、内面は円形の當て工具痕がみられる。

SD2191 (24・25)

24は土師質土器の杯、底部から直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は細く窄まる。復元すると口径は12.0cm、底径9.2cm、器高3.5cmとなる。25は珠洲焼甕の口縁部、頸部は短く端部は丸く肥厚する。外面に平行タタキ、内面は円形の當て工具痕がみられる。吉岡編年III ~ IV期頃の所産か。

SD2192 (26)

26は土師質土器の杯の底部、底径は6.2cmを測る。外面には糸切痕が残る。

SD2122 (28)

28は近代以降の平瓦と考えられる。赤褐色の顔料を化粧掛けして焼成している。径0.3cmの小穴を焼成前に穿つ。厚さは1.85cmを測る。

SD2457 (29)

29は珠洲焼の片口鉢、内面に14目1単位の卸目がある。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。復元口径は26.8cmとなる。

P2184 (31)

31は須恵器の壺甕類体部片、外面に平行タタキ、内面に同心円の當て工具痕がみられる。

P2320 (30)

30は珠洲焼の片口鉢口縁部、内面に5目以上の鉢目が確認できる。復元口径は25.7cmとなる。

P2369 (32)

32は青磁碗、外面には鍋連弁文が微かに確認できる。龍泉窯系、14世紀頃の所産か。

2) 遺構外出土 (33・34)

33は内外面ともに調整不明、在地産の箇神系窯の瓷器か。34は珠洲焼壺類の体部片である。外面に平行タタキ、内面に円形の当て工具痕がみられる。

C 石製品・木製品・金属製品 (図版18・57)

SE2161 (35~37)

35・36は扁平な砥石であるが両方とも欠損、欠失している。35は一側面に継ぎの使用痕が確認できる。37は木製の紡錘車で直径5.6cm、厚さ0.5cmを測る。遺存状態が悪く図示していないが、曲物が出土している。曲物は2段が遺存しており底板はない。径36.7~38.1cm、残存高22.0cm、厚さ0.3cmを測る。内面は基段部に継ケビキ、2段目には斜め方向のケビキが施される。

SK2308 (38)

38は現状での長さ26.3cm、最大幅2.9cm、最大厚2.7cmを測る。全体的に錯彫れが著しい。大きさや形状から刀子の可能性が高い。

SD2457 (39)

39は現状での長さ9.8cm、高さ8.7cm、幅15.1cmを測る。全体的に錯彫れが著しい。一方に向かって突起が確認できることから、鉄鍋の可能性が考えられる。

5 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

A はじめに

石船戸東III遺跡では、曲物と炭化材が出土している。今回は、これらの樹種同定および放射性炭素年代測定を行い、材質や年代に関する情報を得る。

B 試 料

試料の詳細は、測定結果と共に第2表に示す。試料は、SE2161より出土した曲物の板材およびSD2110の覆土2層より出土した炭化材の2点である。

C 分析方法

1) 樹種同定

剥刀を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の各切片を作成し、生物顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察して、特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は島地・伊東[1982]、

Wheeler ほか [1998], Richter ほか [2006] を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林 [1991] や伊東 [1995, 1996, 1997, 1998, 1999] を参考にする。

2) 放射性炭素年代測定

木片の周囲を削り落として付着物を除去し、50mg 程度に試料を調整する。塩酸 (HCl) により炭酸塩など酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸などアルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩など酸可溶成分を除去する (酸・アルカリ・酸処理 AAA: Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1mol/L である。試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化 (鉄を触媒とし水素で還元) は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を用いて、¹⁴C の計数、¹³C 濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C) を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局 (NIST) から提供される標準試料 (HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料 (IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料 (IAEA-C1) の測定も行う。δ ¹³C は試料炭素の ¹³C 濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う [Stuiver & Polach 1977]。曆年較正は Oxcal4.4 [Bronk, 2009]、較正曲線は Intcal20 [Reimer et al., 2020] を用いる。

D 結 果

1) 樹種同定

SE2161 の曲物はスギ、SD2110 の炭化材はカツラに同定される (第 2 表)。以下に木材解剖学的所見を述べる。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2 個が多い。放射組織は單列、1 ~ 10 細胞高。

第 2 表 測定試料の樹種と放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	分析方 法	測定年 代 yrBP	δ ¹³ C (‰)	年齢補正 用	測定年代			Code No.						
						年代	標準	標準							
SE2161 曲物 (大木) (AAA) (IM)	木本 ± 20 ± 0.35	940 -26.209 938 ± 20	938 -26.209 938 ± 20	σ cal AD 1044 - cal AD 1053 cal AD 1075 - cal AD 1106 cal AD 1118 - cal AD 1157 2 σ cal AD 1057 - cal AD 1160	906 875 832 913	- 897 - 844 - 793 - 790	calBP 0.085 0.240 0.357 0.954	0.085 0.240 0.357 0.954	pub 14570 YU- 17691						
						cal AD 1303 - cal AD 1321 cal AD 1358 - cal AD 1368 cal AD 1380 - cal AD 1391	647 692 579 654	629 582 559 621							
						cal AD 1329 - cal AD 1341	609	554	pub 14571 YU- 17692						
						cal AD 1396	-	calBP 0.054							
SD2110 炭化材 (カツラ) (AAA) (IM)															
630 -26.2452 631 ± 20															

1) 年代測定の基準は、Libby の半減期 5568 年を使用。

2) 年代測定の誤差は、標準偏差 (One Sigma) を示す。標準偏差 (One Sigma) が ± 20 年未満の場合は ± 10 年未満。

3) IAEA 及びヨーロッパ標準 (HOX-II) の人為炭素を考慮して算出した値。

4) AAA (アルカリ・酸)・酸処理: Ad (アツカシ) の名前を導入した名前。HOX-II 及び標準物質。Edg はエッジング処理。Calx はカルシアン処理。

5) 標準物質の名前は日本語表記としたものであります。

6) 標準物質の名前は日本語表記としたものであります。

7) 1 行目が主なる年代測定結果で、他の行は標準物質を用いた校正された場合の各年齢を示す。1 行目を除いてない。

8) 誤差のうち標準偏差 (One Sigma) は ± 58%、2 σ は ± 30% である。

・カツラ (*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.) カツラ科カツラ属

散孔材で、道管はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-30細胞高。

2) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代値を第2表に併記する。また、暦年較正結果を第14図に示す。各遺跡の試料全てが定法での処理が可能であり、年代測定に必要な炭素量が回収できた。

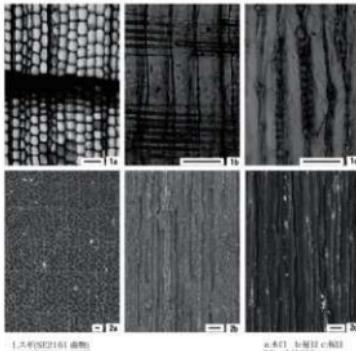
同位体補正を行った年代値は、SE2161より出土した曲物が 940 ± 20 BP、SD2110の覆土2層より出土した炭化物が 630 ± 20 BPである。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期 (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を校正することによって、暦年代に近づける手法である。2 σ の値は SE2161より出土した曲物が calAD1037-1160、SD2110の覆土2層より出土した炭化物が calAD1296-1396 である。

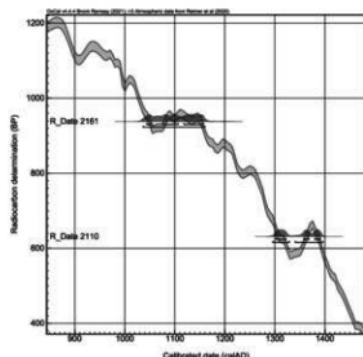
E 考 察

石船戸東IV遺跡の SE2161より出土した曲物は、スギであった。スギは太く直ぐな材が得やすいこと、軽軟で加工が容易であること、水湿に強いこと、木目が美しいことなどから、様々な用途で多用される良材である。建築材としての利用も多く、柱や板材、土台などに利用されている。この暦年較正結果は12世紀代を示すものと思われる。また調査区周辺から得られたものとすれば、調査区付近に自生していたと考えられる。

SD2110の覆土2層より出土した炭化材は、カツラであった。カツラは、やや柔軟で割裂性が大きく、切削など加工しやすく、狂いが少ない。主に器具材や建築材などで利用される。出土木製品用データベース [伊東・山田編, 2012] によれば、建築材や非加工材（自然木や流木など）としての出土が多い。この暦年較正結果は、14世紀代を示すものと思われる。この炭化材についても、周辺から得たとすれば調査区付近の生育と考えられる。



第13図 生材・炭化材の顕微鏡写真



第14図 暦年較正結果

6 調査のまとめ

今回の年代測定結果や植生、植物利用については、今後さらに発掘調査所見を含めて検討する必要がある。

引用文献

- Bronk RC. 2009 「Bayesian analysis of radiocarbon dates」『Radiocarbon』51 337-360.
- 林 昭三 1991 『日本産木葉樹材の顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載I」『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所 81-181.
- 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載II」『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所 66-176.
- 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載III」『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所 83-201.
- 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載IV」『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所 30-166.
- 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載V」『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編) 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』 海青社 449p.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J., Turney, C., Wacker L., Adolphi, F., Buentgen U., Capino M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon, 62 1-33.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編) 2006 『針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修) 海青社 70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .
- Stuiver M., & Polach AH. 1977 Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ^{14}C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』 地球社 176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編) 1998 『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』 伊東 隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修) 海青社 122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

6 調査のまとめ

遺構の分布について

今年度の調査(第4次調査)では、2か所の調査区(9・10区)で中世の時期と考えられる掘立柱建物6棟、井戸1基、土坑37基、溝32条、ピット(小穴)308基、不明遺構1基を検出した。過年度調査との重複は2区と9区の一部のみであり(図版1・2)、調査範囲で完結する井戸や土坑などの遺構を除き、過年度調査で確認された溝などの連続性はほとんど確定できなかった。

過年度調査の報告では中世期の遺構分布として、3つの居住域と1つの生産域を指摘している[小野本・石川・加藤ほか2019]。居住域は「2区北東側」、「4区南側～5区」、「7区③の北側」の3つの居住域が想定されており、いずれも溝が境界と考えられている(第15図)。今回の調査(10区)には遺構が集中する範囲があり、掘立柱建物を6棟想定している(図版5～11)。6棟の掘立柱建物は、極めて狭小な範囲に集中しており、位置関係から過年度調査の居住域「4区南側～5区」に含まれると考えられる。

石船戸東遺跡では、既に報告されているとおり、各調査区で遺構の密度や種類は異なり、時代毎に居住域と田畠などの生産域など用途別の区域が存在することが明らかになっている。今回の調査では、遺構の

希薄な範囲の用途については詳細を解説できなかったが、居住域については、過年度調査の見識を補完する調査結果となった。

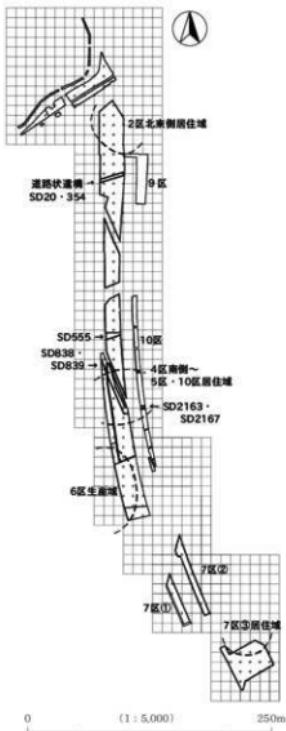
掘立柱建物（SB 16・SB 17）について

前述のとおり、今年度の調査（10区）において、6棟の掘立柱建物を想定した（図版5～11）。個々の詳細については、本報告書の第Ⅲ章3項C節、遺構観察表「石船戸東遺跡10区 掘立柱建物」に委ねるが、6棟すべて同一面での検出であり、時期を特定する遺物もほとんど皆無であった。柱穴の覆土が近世以降の遺構とは明らかに異なるため、中世の遺構と判断したが、詳細な時期は不明である。ただ、主軸は西偏（N-15°～36°-W）するSB 13・14・15・16と東偏（N-9°～21°-E）するSB 17・18に大別でき、時期差や性格の違いを推察できる。

特筆すべきは、土坑や井戸が建物範囲と重複、隣接する掘立柱建物SB 16・SB 17であり（図版9・10）、同時期に併存していれば、特別な性格を有する建物と考えられる。井戸や土坑、竪穴状遺構を伴う掘立柱建物の事例は、新潟県村上市の古渡路遺跡や新潟県上越市の古谷遺跡に類似があり、馬小屋または馬洗い場遺構の可能性を指摘している〔土橋ほか2011・中尾2012・佐藤ほか2022〕。報告事例（第16回）では、東京都日野市の南広間地遺跡9次2号厩舎のように大きな竪穴（土坑）を有する〔篠崎2015〕。また18世紀半ばのものとなるが東京都文京区の東京大学本郷構内の遺跡の個室に横板と尿溜まりを持つ厩舎の形状に類似する〔東京大学埋蔵文化財調査室1990〕。前述の新潟県村上市の古渡路遺跡では、二重溝で囲まれた竪穴を持つ掘立柱建物や大きな土坑を持つSB 2768が検出され、これを馬小屋と推測している〔土橋ほか2011・中尾2012〕。

当遺跡は阿賀野川右岸の沖積地に位置し、阿賀野川の旧河道にできた旧百津潟の自然堤防上に所在している。故に水資源の供給は容易であったと考えられ、多量の水が必要である馬の飼養施設の可能性の検討を試みた。馬小屋の判断要件は、1. カマド・炉がない、2. 竪穴が設けられている、3. 床面が傾斜している、4. 尿溜めがある、5. 張り出しが付くものがある、6. スロープが設けられているものがある、7. 柱が個室の周囲を方形に巡る、としている〔篠崎2010・2015〕。

SB 16（図版9）は、桁行8.5m、梁行3.35m以上の規模である。隣接または重複する遺構に溝1条、土坑4基、性格不明遺構（竪穴状土坑）、さらに関係すると考えられるビット（柱穴）がある。溝（SD 2172）は梁行南西側の雨落溝と考えられる。土坑は、4基存在しており、内3基（SK 2180・SK 2236・SK 2308）はすべて平面形が楕円形で同規模である。桁行北西側の柱間に等間隔に並ぶ。残る土坑（SK 2160）は、平面

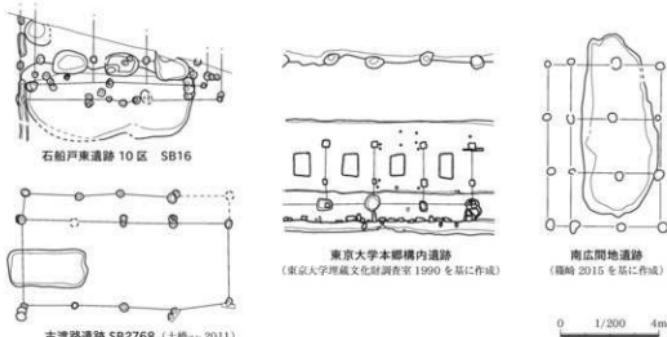


第15図 調査区内における居住域と生産域
（小野本・石川・加藤ほか2019を一部改変）

形はほぼ円形であり、底面付近に全面に広がる炭（灰）層を確認している。性格不明遺構（S X 2529）は、浅い凹み状の土坑で平面形は長楕円形を成す。桁行北西側に位置しており、先の3土坑に切られる。これらの隣接または重複する遺構がS B 16に伴うと仮定すれば、建物内4基のビット（P 2314・P 2304・P 2302・P 2230）に腰板を設けて個室となる馬房を構成した可能性がある。また土坑（S K 2180・S K 2236・S K 2308）は、等間隔に配置されており、前述の個室（馬房）の尿溜めと考えられる。土坑（S K 2160）は、炭化物層を内包しており、蝶・蚊・虻などの害虫を燐り出すために草木を焚いた痕跡と考えられる。性格不明遺構（S X 2529）は、その規模から竪穴状遺構と捉えることもできる。この竪穴状遺構は、馬が横になったのちに自力で起きやすくするために側壁を利用して傾斜をつくり、馬の蹄は屎のアルカリに弱く劣化することから保護を目的に竪穴に藁などを敷き詰めた施設の可能性がある。この馬の糞尿は敷き藁が吸収し、のちに良質な厩肥として利用が可能であるという【篠崎 2010】。桁行北西側の外側には8基以上のビット（小穴）が存在しており、個室の周囲を巡る庇的な機能を有する可能性もある。これらの重複、隣接する遺構を検討した結果、馬小屋の7つの判断要件のうち4要件を満たしており、他の3要件についても不明であるがまったく否定するものでもない、故に馬小屋としての可能性も充分考えられる。

S B 17（岡版10）は、梁間2間、桁行3間で、梁行3.92m以上、桁行5.08mの規模である。北側半分に土間のような空間を持つ構造で、この土間にあたる空間に井戸（S E 2161）を検出した。掘立柱建物と井戸が同時期の所産であるとすれば、位置関係から井戸を有する掘立柱建物の可能性があり、馬洗い場遺構の可能性が考えられる。

これらの2棟の掘立柱建物は近接しており、推測の域を出ないが、馬の飼養に関する施設の可能性がある。自然堤防上に立地する本遺跡は、過年度調査から田畠などの生産域が存在したと考えられている。水田で根刈りした藁は馬小屋に運び込み厩肥生産に用いられ、厩肥は再び耕作に用いられただろう。また収穫した農作物の運搬に馬が用いられたと考えられる。本遺跡はこうした阿賀野川周辺における中世農村集落の様相の一端を示しているといえる。



第16図 馬小屋と推定される掘立柱建物の報告事例

第IV章 蕪木遺跡II

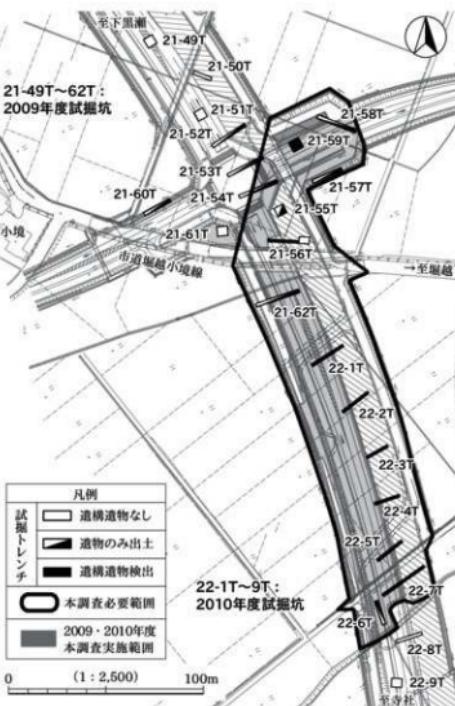
1 調査経過

A 試掘確認調査

1) 2009年度・2010年度試掘調査

蕪木遺跡に関する試掘調査は、埋文事業団が2009・2010(平成21・22)年度の2か年にわたり行った。調査期間は、2009年5月18日から6月17日の23日間、2010年6月3日から6月17日の11日間である。調査地点は、一般国道49号阿賀野バイパス用地である福田集落近くの福島潟西部幹線用水路から小里川間である。試掘調査は、調査対象地に調査坑を任意に設定し、重機及び人力による掘削・精査を行い遺構・遺物の有無を確認した。その後、土層堆積状況、トレンチ位置、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真等に記録した。2009年度は50,715m²を調査対象面積とし、63か所に試掘トレンチを設定した(21-1T～62T、20-124T再試掘)。実質調査面積は2,065.4m²で、試掘率は4.1%である。2010年度は29,163m²を調査対象面積とし、26か所に試掘トレンチを設定した(22-1T～26T)。実質調査面積は907.7m²で、試掘率は3.1%である。

調査の結果、福田集落北西側、小境集落東側、市道南耕堀越線の北側の大きく3つの範囲で遺構・遺物を検出した。このうち福田集落北西側は、2008年度の試掘調査で新発見した石船戸東遺跡の範囲拡大である。また、市道南耕堀越線の北側は向野遺跡として登録したが、2014(平成26)年度の再試掘調査の内容から本発掘調査は不要とされた[佐藤2015]。蕪木遺跡は、市道堀越小境線を挟んだ21-55～59T・62T、22-1～7Tの区域で(第17図)、22-1～7T



第17図 2009・2010年度の試掘トレンチ位置図

(原図：国土交通省提供 鈴木・荒川ほか2018を一部改変)

1 調査経過

では表土直下から土坑・溝・ピットなどを検出し、遺構の分布密度が比較的高い。遺物は古代の土師器・須恵器を主体とし、このほかは中世の青磁・珠洲焼などが少量出土した。以上から、蕪木遺跡は 21-55 ~ 59・62T、22-1 ~ 7T の範囲とし、本発掘調査必要面積は 13,325m²とした〔鈴木・荒川ほか 2018〕。

2) 2020 年度 確認調査

2020 年 12 月 4 日、県教委による確認調査が行われた。調査対象地に 1か所のトレンチを設定し、調査が行われた(第 18 図)。調査面積は 40m²である。調査の結果、遺物が 2 点出土したが、遺構は確認されなかった。出土した遺物は、いずれも二次堆積物であり、対象範囲については本発掘調査不要と判断された〔加藤ほか 2021〕。

B 本発掘調査(第 1・2 次調査)

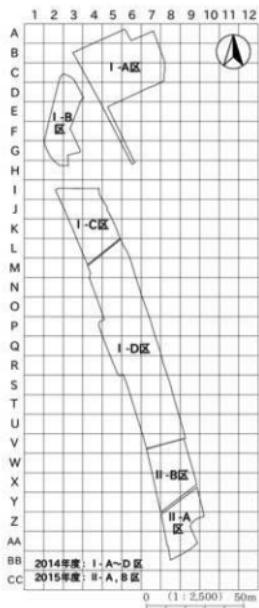
2014 年度と 2015 年度の本発掘調査は 2014 年 7 月 28 日から 11 月 30 日、2015 年 9 月 7 日から 11 月 17 日の期間に行われた。

調査地点は、市道堀越小境線を挟んだ南北の区域で、国家座標の X 座標 =201,160.000 (北緯 37 度 48 分 38.23413 秒)、Y 座標 =63,480.000 (東経 139 度 13 分 15.44538 秒) を基点(1A 杭)とする 10m 方眼のグリッドを設定し、調査が行われた(第 19 図)。2014 年度の調査区は、市道堀越小境線と工事用道路により 4 つに分断されるため、これらを境界に北から I-A 区・I-B 区・I-C 区・I-D 区と便宜的に呼称し、2015 年度の調査区は、調査区中央部を東西に横切る用排水路を境に南を II-A 区、北を II-B 区と便宜的に呼称した(第 19 図)。調査方法は、バックホー及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認し、土層堆積状況、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真等に記録した。調査面積は、2014 年度は 5,915m²、2015 年度は 1,048m²である。

調査の結果、古墳時代から近・現代に至るまでの遺構・遺物を検出し、中心時期は平安時代(9 世紀後葉)であることが確認された。平安時代の遺構は、掘立柱建物を 5 棟検出し、なかには 140m²を超える大型建物が存在することが確認された。建物の規模から、検出した建物群は、郡の関連施設ないしは在地有力者の居宅などが想定されている〔鈴木・荒川ほか 2018〕。遺物は、土師器類を中心須恵器の各器種や黒色土器が多数出土したほか、稀少品の耳皿・灰釉陶器皿・アスファルト塊などがわずかに出土した。中世の遺構は、13 ~ 14 世紀頃の井戸・火葬土坑などが検出されており、珠洲焼・瓷器



第 18 図 2020 年度のトレンチ位置図
(原図:国土交通省提供)



第 19 図 2014・2015 年度の調査区位置図
(鈴木・荒川ほか 2018) 加筆

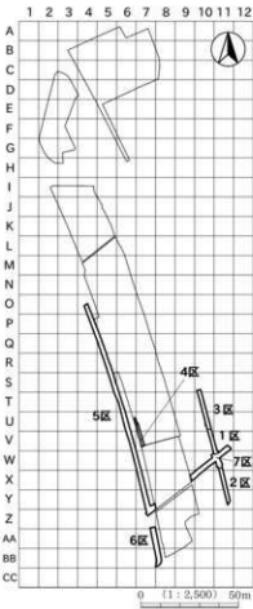
系陶器、曲物や漆器椀などが出土した。

C 本発掘調査（第3次調査）

本発掘調査は2022年4月15日から7月5日、9月26日から11月16日の期間で行った。調査区は、幅2mほどの溝状に設定され総延長約230mに及ぶため、地点ごとに調査を進めた。調査区の呼称は、調査を開始した順番に1～7区と便宜的に呼称した（第20図）。また、調査は前半・後半に分かれ、調査区が現在の水田の畔にかかる5・6区と、排水溝を撤去する必要がある7区については、隣接する水田の稲刈り後に調査を開始した。

4月15日、トータルステーションを用いて全調査区の位置出しを行い、5月13日に1区の表土掘削を開始した。5月17日から作業員を入れて、遺構検出から作業を進めた。遺物包含層は残存しておらず、現地表面の直下で古代～中世の溝跡・ピット・土坑を検出した。埋土は前回までの調査成果を元に、褐灰色シルトを主体とするものは近世以降、暗褐色シルトを主体とするものは中世、にぶい黄褐色シルトを主体とするものは古代に属するものと考えた。5月25日に1区の遺構掘削が完了し、2区の表土掘削を開始した。6月1日、2区の北部で、古代から中世と思われる道を検出した。6月9日に2区の遺構掘削が完了し、6月13日から3・4区の表土掘削を開始した。6月16日、3区の遺構検出を行い、建物の柱穴が想定されるP2035・P2037などを検出した。6月24日、4区の遺構検出を行なったが、昭和初期のは場整備に伴う削平が地山の深い部分まで及んでおり、遺構は確認されなかつた。6月29日、1～4区の航空写真撮影を行つた。その後、3区で検出したP2035の埋土に柱根が残存し、調査区外に延びていたことから、7月1日から5日にかけて、調査区を1.0 m × 0.35mの範囲で拡張し、新たに検出した部分の柱穴の平面形と埋土を記録し、木製品の取上げを行つた。7月5日、前半分の調査が終了した。

約2か月半の中止期間を経て、9月26日に後半分の調査を開始した。9月26日から5区、9月29日から6区の表土掘削を開始した。10月3日、6区の遺構検出を行い、中・近世の溝跡や旧河道を検出した。10月5日、5区の遺構検出を開始した。5区は2014年度・2015年度の調査区と隣接することから、遺構分布状況も類似し、5Q～Sグリッドにかけて古代の遺構が集中し、これ以外では希薄となる状況を確認した。また、5Rグリッドで検出したP2089は、2014年度の調査で検出したSB5に付属する柱穴と思われ、SB5はさらに本調査区の西側に延びている可能性があることを確認した。10月24日、5区南部にかかるU字溝の除去作業を行い、U字溝部分の表土掘削と遺構検出を行つたが、地山が大きくな削られており、この地点から新たな遺構は検出されなかつた。10月26日、7区の表土掘削を開始した。10月28日、7区の遺構検出を行い、灰釉陶器などを含む9世紀代の遺物や、大規模地震の痕跡と思わ



第20図 調査区位置図

（鈴木・荒川ほか 2018に加筆）

1 調査経過

れる多数の砂脈を検出した。11月11日に5～7区の航空写真撮影を行った。11月14日から16日にかけて、全体測量と下層の確認調査などを行った。下層の確認調査では、6Tグリッドで検出した砂脈の両側で層の高さがずれていることを確認した。11月16日、新潟県が終了確認を行い、現地での調査は全て終了した。

D 整理作業の経過

整理作業は2022(令和4)年7月から9月と、11月から2023(令和5年)3月の期間を行った。7月4日、現場事務所において遺物の洗浄を開始した。7月6日、図面修正、写真整理、遺構台帳の作成を開始した。8月1日、遺物の接合と注記を開始した。遺物の接合については、土師器、須恵器等に分類し、接合作業を実施した。8月25日、遺物の実測と写真撮影を開始した。実測遺物の抽出については、遺構に伴う遺物が少ないことから、古代から中世の遺物については、遺構外出土であっても器種が判別できるものを中心抽出した。また、実測作業が終了した遺物から観察表の作成を開始した。9月22日、現場再開のために整理作業を中断した。

11月14日、現場事務所において後半分の遺物洗浄を開始した。11月25日、遺物および資器材を株式会社ノガミ整理作業所へ搬出し、11月28日以降は同所において整理作業を行った。12月5日、遺構図のデジタルトレースを開始した。12月14日、原稿執筆を開始した。遺物の洗浄・注記・接合作業は、12月に終了した。1月11日、P2035・P2120から出土した木製品について、パリノ・サーヴェイ株式会社に自然科学分析を委託した。1月20日、遺物の実測が終了し、順次遺物実測図のデジタルトレースを開始した。報告書作成のためのトレース図の編集作業、版組レイアウトの作成は1月から開始し、本調査における遺構平面図・断面図・微細図等は、発掘調査中に図化した図面を基に修正を加え、本書の挿図とした。3月末、編集・校正作業が終了した。

第3表 発掘調査・整理作業工程

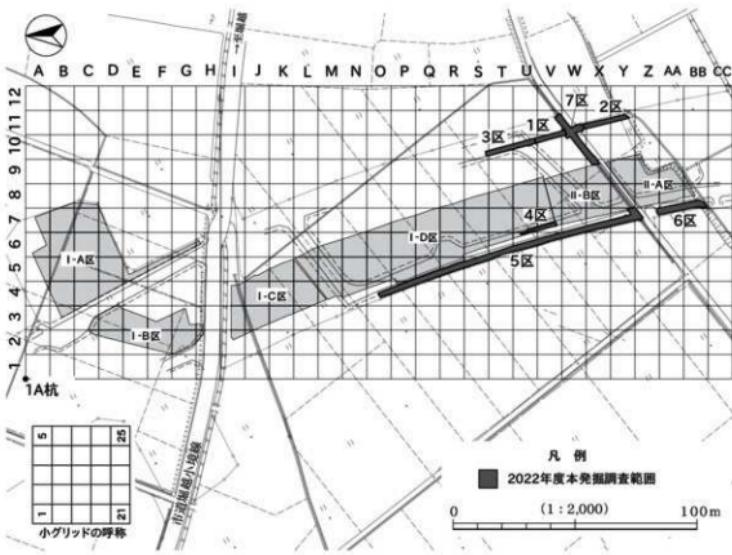
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
本 発 掘 調 査	準備工												
	表土掘削												
	遺構検出												
	遺構照刷												
	全体測量												
	収集作業												
整 理 作 業	図面整理												
	遺物水洗・注記												
	遺物接合・復元												
	遺物実測												
	図版作成												
	原稿執筆												
	編集・校正												

2 調査の概要

A グリッドと調査区の設定

猿木遺跡の阿賀野バイパス建設予定地内における総面積は13,325m²であり、このうち2014年度に5,915m²、2015年度に1,048m²の調査を行った。今回は3度目の本発掘調査で、調査面積は422m²である。調査区は、7か所の地点に区切って調査を行なったため、開始した順番に1～7区と便宜的に分けた（第21図）。

グリッドの設定は、2014年度の調査で設定されたものを踏襲した（第21図）。国家座標のX座標=201,160.000（北緯37度48分38.23413秒）、Y座標=63,480.000（東経139度13分15.44538秒）を基点（1A杭）とし、南北・東西それぞれ10mの方眼を組み、大グリッドとした。大グリッドの呼称は、遺跡を覆う方眼を西から東に向けて算用数字（1・2・3…）、北から南に向けてアルファベット（A・B…Z、AA、BB…）を付し、これを組み合わせた。両者の組み合わせにより「10T」「7AA」のように表示した。小グリッドは大グリッドの中を2m四方に25分割した。小グリッドには1～25の番号を付し、北西隅を1、南東隅を25となるように配列した。グリッドは、大グリッドと小グリッドを組み合わせ、「10T2」「7AA20」のように表記した。5区の6T1-北西隅はX座標=200,970.000、Y座標=63,530.000、7区付近の10X1-北西隅はX座標=200,930.000、Y座標=63,570.000である。

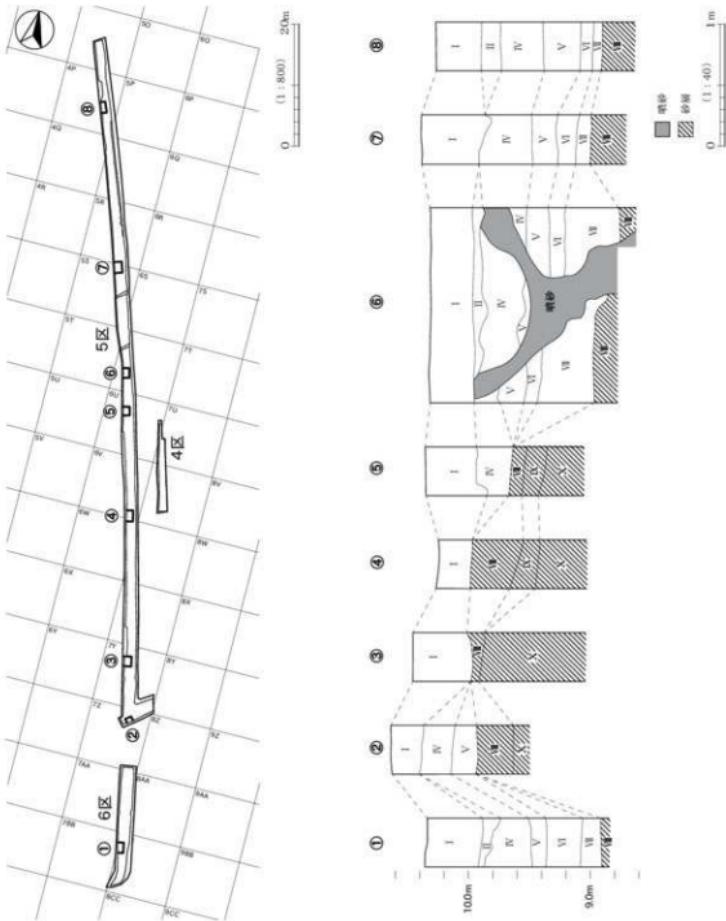


第21図 グリッド設定と調査区

(原図: 国土交通省提供)

B 基本層序

燕木遺跡は、阿賀野川右岸の沖積地に立地し、標高は9.6～10.6mを測る。本調査区は昭和初期のほ場整備により、遺物包含層の大部分が削平されており、基本的には表土直下が古代から中世の遺構検出面となる。基本層序は、下層確認調査により表土から約1.5m下までの土層を確認し、2014年度・2015年度の調査に準じてI～X層に大別した(第22図)。遺構検出面はIV層上面である。V層以下は無遺物層で、VII層以下は砂層である。なお、今回の調査でIII層は確認されていない。



第22図 基本層序

- I層 表土、現代の耕作土・水田床土。
- II層 暗灰色シルト (5YR4/1)。部分的に浅黄橙色シルトとなる。II層は残存状況が希薄で、I層の形成に伴い削平されたものと考えられる。近世陶磁器が出土しており、近世～近代の耕作土と考えられる。
- IV層 明黄褐色シルト (10YR6/6)。IV層上面は古代・中世の遺構検出面で、層厚は約40cmを測る。^⑤ ~^⑧では、部分的に粘性の弱い砂質土層となる。
- V層 灰白色シルト (10YR8/1)。層厚は約20cmを測る。VI層よりも粘性・しまりが強い。V層は③~^⑤では認められない。
- VI層 橙色砂質シルト (7.5YR6/6)。層厚は約15cmを測る。VI層は②~^⑤では認められない。
- VII層 緑灰色粘質シルト (10GY6/1)。層厚は約10cm~45cmを測る。部分的に鉄分を多く含み、橙色シルトとなる。VII層は②~^⑤では認められない。
- VIII層 明褐色砂 (7.5YR5/6)。層厚は10~40cmを測る。直径1~10cmの亜円礫を含み、部分的に青灰色砂となる。
- IX層 浅黄色砂 (5Y7/3)。層厚は約15cmを測る。部分的に緑灰色粘質シルトとなる。
- X層 暗赤褐色砂 (5YR3/6)。直径1~20cmの亜円礫を多量に含む。

C 蕉木遺跡の旧地形について

今回の調査では、旧地形の確認のため調査区内の8地点で深掘りを行った(第22図)。なお、VII層までは昭和初期のほ場整備による削平の影響を受けており、旧地形の確認はVII層以下に着目した。

遺跡周辺の地形は、調査区外の南側に旧河道の痕跡が認められる(第23・24図)。この旧河道は、庚塙遺跡の調査成果から、古代に機能していたものと推測されており【佐藤ほか2009】、この旧河道右岸の斜面と思われるSR2023とSR2061を今回の調査で検出している。このうちSR2061は、第22図①と同一地点にあり、VII層上面の標高値はこのSR2061から北側に向かって徐々に高くなり、②から④の範囲が最も高くなることを確認した。さらに④の北側は徐々に低くなり、⑥の北側は比較的平坦である。以上から、今回の調査区内における蕉木遺跡の旧地形は、②から④の範囲に旧河道に沿う自然堤防の頂部が存在し、その北側には比較的平坦な微高地が広がっていたものと推測される。



第23図 蕉木遺跡と旧河床

(国土地理院発行「新津」1:25,000原図に加筆)



第24図 遺跡南部の航空写真（北西から）

3 遺構

A 概要

2022年度の調査区は、2014年度調査のI-D区、2015年度調査のII-A・B区の東側と西側に位置し、主に南北に伸びる溝状に設定された。検出した遺構は、掘立柱建物2棟、土坑14基、溝25条、道1条、ピット77基、性格不明遺構1基で、このほか旧河道と地震痕跡である噴砂や砂脈を検出している。

遺構番号は2001から付し、道は道1とした。掘立柱建物は過年度調査と同一遺構と考えられたため踏査した。中心となるのは古代と中世で、そのほか近世から近・現代の遺構を確認している。

分布状況は、古代の遺構は5Q～S、10T～X、11V～Xグリッドに比較的集中し、中世以降は6V・W、7W・Zグリッドを除く全域に分布する。以下に遺構種別ごとに記述する。

B 掘立柱建物

掘立柱建物は2014年度調査で検出したSB4・SB5の西側を新たに確認した。建物型式は〔宮本1999〕に従った(第5図)。

SB4(図版23・24・61・69)

5・6Rグリッドに位置し、南側は調査区外へ伸びる。位置関係からSB5と重複する。構成ピットはP2090と、2014年度調査のP371・378・377・380である。梁間1間、桁行3間の梁間一間型住居Ia型と思われる。

SB5(図版23・24・61・69)

5・6R、5・6Sに位置し、西側と南側は調査区外へ伸びる。位置関係からSB4と重複する。構成ピットはP2086・P2089と、2014年度調査のP369・374・376・379である。梁間2間、桁行3間の梁間一間型住居と思われる。遺物はP2086から土師器無台椀(図版31-21)、P2089の柱痕から土師器無台椀(図版31-22)と土師器片3点、黒色土器片1点、掘方埋土から土師器片1点が出土した。

C 土坑

土坑は14基検出した。出土遺物・埋土などの特徴から、古代に所属するものは10基(SK2010・2020・2024・2038・2050・2057・2060・2076・2101・2102)、中世以降は4基(SK2011・SK2095・2104・2106)と判断した。ここでは古代の建物に伴う可能性のあるものと、堆積物に特徴があるものを記す。

SK2010(図版21・25・62)

10V5グリッドに位置し、西側の大半は調査区外となる。P2006と重複し、これより古い。平面形は不整形と推測され、埋土は褐灰色シルトの単層である。底面はやや凹凸があり、側壁は緩やかに立ち上がる。

SK2011(図版21・25・62)

11X18・19グリッドに位置し、東端は調査区外となる。平面形は楕円形である。埋土は3層からなるレンズ状堆積である。1・2層は暗褐色シルトを主体とし、3層にはぶい黄褐色砂質シルトである。底面は平坦で、側壁は急斜度に立ち上がる。

SK2024(図版21・25・62)

10T6・7グリッドに位置し、西側の大半は調査区外となる。平面形は楕円形と推定される。P2056と

重複し、これより新しい。埋土は水平堆積で、6層に分層した。1層が褐灰色のシルト層で、2～6層がにぶい黄褐色・灰黄褐色のシルト層である。底面は平坦で、側壁は急斜度に立ち上がる。遺物は、1層から須恵器横瓶（図版31-3）と、土師器長胴甕（図版31-1）、土師器片2点が出土した。

SK2038（図版21・25・63）

10T22・23 グリッドに位置し、西側の大半は調査区外となる。平面形は梢円形と推定される。P2036と重複し、これより古い。埋土はブロック状堆積で、2層に分層でき、灰黄褐色シルトを主体とする。底面はやや凹凸があり、側壁は急斜度に立ち上がる。

SK2050（図版21・25・63）

10U19・24 グリッドに位置し、西側の大半は調査区外となる。平面形は梢円形と推定される。P2055と重複し、これより新しい。埋土は4層からなる水平堆積である。1層が黒褐色のシルト層で、2～4層がにぶい黄褐色シルトを主体とする。底面は凹凸があり、側壁は緩やかに立ち上がる。

SK2057（図版21・25・63）

10U3 グリッドに位置する。平面形は梢円形である。P2046と重複し、これより古い。埋土は灰褐色シルトの単層で、土師器片が1点出土した。底面はやや凹凸があり、側壁は緩やかに立ち上がる。

SK2076（図版23・25・63）

5Q22 グリッドに位置し、南西端は調査区外となる。平面形は方形である。埋土は3層からなるレンズ状堆積で、にぶい黄橙色・灰黄褐色のシルト層である。底面は中央が一番深く、側壁は急斜度に立ち上がる。

SK2101（図版21・25・63）

11V24、11W4 グリッドに位置し、南東部の大半は調査区外となる。平面形は不整形である。埋土は水平堆積で、5層に分層した。1・2層は黒褐色シルトを主体とし、3～5層はにぶい褐色シルトを主体とする。底面は凹凸があり、側壁は急斜度に立ち上がる。土坑としたが、柱穴が2基切り合っている可能性も考えられる。遺物は、須恵器杯（図版31-5）と土師器片12点が出土した。

SK2102（図版21・25・63）

11W3・4 グリッドに位置し、南東部の大半は調査区外となる。平面形は不整形である。埋土は水平堆積で、5層に分層した。1層は黒褐色シルトで、2～5層はにぶい褐色シルトを主体とする。底面は凹凸があり、側壁は急斜度に立ち上がる。規模・形態がSK2101と類似しており、土坑としたが、柱穴が2基切り合っている可能性も考えられる。遺物は、黒色土器碗（図版31-7）と土師器片9点が出土した。

SK2104（図版21・25・64）

10W17・18・22 グリッドに位置し、北西部の大半は調査区外となる。平面形は梢円形と推定される。埋土は水平堆積である。5層に分層でき、褐灰色シルトを主体とする。底面は平坦で、側壁は急斜度に立ち上がる。

D 溝

道の側溝を除く溝は25条検出した。出土遺物が僅かであるため詳細な時期は不明だが、埋土の特徴などから古代に所属するものは2条（SD2042・2058）で、その他は中世以降と判断した。

SD2001（図版21・26・64）

10U・V、10・11W グリッドに位置する。P2006・P2059・SK2060と重複し、これらより新しい。ほぼ南北方向に伸びる。調査区内の全長は24.20mを測り、幅は1.12～0.36m、深度は19～29cmを測る。

断面形は北部が弧状、南部が台形状で、立ち上がりは急斜度である。底面は若干傾斜しており南部の方が低くなる。埋土は2層に分層でき、1層が灰褐色シルトで、2層は明黄褐色シルトである。10W10グリッドに土坑状の付属施設を持ち、長径1.09m、短径0.94mで、深さは遺構底面から20cmである。そのほか10W10グリッドでは、遺構底面から噴砂を検出した。この噴砂脈を本遺構が切っていることから、SD2001の構築前または埋没前に吹き上がったものとみられる。遺物は1層から青磁碗（図版31-8・9）、土師器片9点、須恵器片1点が、2層から土師器片1点が出土した。

SD2002（図版21・26）

10W5、11W1グリッドに位置する。東西方向に伸びる溝と推測する。検出した全長は2.00mで東側・西側は調査区外へ続く。幅は0.48m、深度は6cmを測る。断面形は台形状で、立ち上がりは急斜度である。埋土はにぶい黄褐色シルトの単層である。

SD2021（図版21・26）

11X23・24、11Y3・4グリッドに位置する。東西方向に伸びる溝と推測する。検出した全長は1.91mで東側・西側は調査区外へ続く。幅は1.10m、深度は5cm程である。断面形は弧状で、立ち上がりは緩やかである。埋土は灰黄褐色砂質シルトの単層である。遺物は1層から土師器の細片が2点出土している。

SD2030（図版21・26・64）

10S22、10T2・7・8・12・13・18グリッドに位置する。SD2031・SD2058と重複し、これらより新しい。ほぼ南北方向に伸び、SD2031と併走する。検出した全長は8.60mで北側は調査区外へ続く。幅は0.34～0.60m、深度は21cmを測る。断面形は半円状で、立ち上がりは急斜度である。埋土は2層に分層でき、1層が褐灰色、2層にはにぶい黄橙色の粘質シルト層である。遺物は1層から土師器片3点、須恵器片4点が、2層から土師器片1点が出土した。

SD2031（図版21・26・64）

10S22、10T2・7・12グリッドに位置する。SD2030・SD2058と重複し、SD2058より新しく、SD2030より古い。ほぼ南北方向に伸び、SD2030と併走する。検出した全長は6.04mで北側は調査区外へ続く。幅は0.29m、深度は6cmを測る。断面形は弧状で、立ち上がりは緩やかである。埋土は灰黄褐色シルトの単層である。

SD2034（図版21・26・64）

10U3・4グリッドに位置する。東西方向に伸びる溝と推測する。検出した全長は2.31mで東側・西側は調査区外へ続く。幅は0.36m、深度は16cmを測る。断面形は半円状で、立ち上がりは急斜度である。埋土は2層に分層でき、1層が黒褐色・にぶい黄褐色のシルト層である。遺物は1層から土師器片が2点出土している。

SD2040（図版21・26・64）

10T17・18・22・23グリッドに位置する。調査区壁断面ではP2049と重複することが確認され、これより新しい。東西方向に伸びる溝と推測する。検出した全長は1.40mで北側は調査区外へ続く。幅は0.48m、深度は15cmを測る。断面形は半円状で、立ち上がりは急斜度である。埋土は暗褐色シルトの単層である。また、本遺構底面において連続するビット4基を検出した。いずれも径10～20cm、溝底面からの深さ8cmを測る。

SD2042（図版21・27・64）

10T12グリッドに位置する。東西方向に伸びる溝と推測する。検出した全長は0.92mで西側は調査区

外へ続く。幅は0.28m、深度は11cmを測る。断面形はU字状で、立ち上がりは急斜度である。埋土は3層に分層でき、灰褐色シルトを主体とする。遺物は1層から土師器片が1点出土している。

SD2058 (図版21・27・65)

10S21・22、10T1・2グリッドに位置する。SD2030・SD2031と重複し、これらより古い。東西方向に伸びる溝と推測する。調査区内の全長は1.80mを測り、幅は0.66m、深度は9cmを測る。断面形は半円状で、立ち上がりは急斜度である。埋土は2層に分層でき、にぶい黄橙色・明褐灰色のシルト層である。

SD2062 (図版22・27・65)

7・8AAグリッドに位置する。東西方向に伸びる溝と推測され、SD2063と併走する。検出した全長は2.10mで東側と西側は調査区外へ続く。幅は0.65m、深度は14cmを測る。断面形は半円状で、立ち上がりは緩やかである。埋土は3層に分層でき、灰褐色シルトを主体とする。

SD2063 (図版22・27・65)

7・8AAグリッドに位置する。東西方向に伸びており、SD2062と併走する。2015年度調査のSD1301と一連の溝と思われる。検出した全長は2.34mで東側と西側は調査区外へ続く。幅は1.42m、深度は36cmを測る。断面形は半円状で、立ち上がりは急斜度である。北側の壁面にピット状の付属施設が3基認められ、いずれも幅は22～28cm、深度は13～20cmを測る。埋土は3層に分層でき、黒褐色・暗褐色・にぶい黄橙色のシルト層である。

SD2064 (図版22・27)

7AAグリッドに位置する。東西方向に伸びる。2015年度調査のSD1303と一連の溝と思われる。検出した全長は2.11mで東側と西側は調査区外へ続く。幅は0.77m、深度は10cmを測る。断面形は弧状で、立ち上がりは緩やかである。埋土は2層に分層でき、黒褐色・にぶい黄橙色のシルト層である。

SD2068 (図版23・27・65)

6Uグリッドに位置する。北東～南西方向に伸びる。2014年度調査のSD35と一連の溝と思われる。調査区内の全長は2.16mを測り、北東側と南西侧は調査区外へ続く。幅は0.92m、深度は12cmを測る。断面形は弧状で、立ち上がりは緩やかである。埋土は4層に分層でき、1・2層が黒褐色シルトを主体とし、3層がにぶい黄橙色の砂質シルト層、4層にはにぶい黄橙色のシルト層である。

SD2070 (図版23・27・65)

5Rグリッドに位置し、東西方向に伸びる。2014年度調査のSD20と一連の溝と思われる。調査区内の全長は2.25mを測り、幅は1.40m、深度は10cmを測る。断面形は弧状で、立ち上がりは緩やかである。底面には凹凸がある。埋土は3層に分層でき、暗褐色・褐灰色・にぶい黄橙色のシルト層である。遺物は1層から土師器片4点、3層から土師器片1点が出土した。

SD2071 (図版23・27)

5Rグリッドに位置する。東西方向に伸びる。2014年度調査のSD22と一連の溝で、6R4・9グリッドでSD2072と合流する。調査区内の全長は1.61mを測り、幅は0.53m、深度は15cmを測る。断面形は半円状で、立ち上がりは急斜度である。埋土は3層に分層でき、黒褐色・灰黃褐色・にぶい黄橙色のシルト層である。遺構底面からは噴砂を検出した。この噴砂脈を本遺構が切っているため、遺構の構築前または埋没前に吹き上がったものとみられる。遺物は1層から須恵器片1点が出土した。

SD2072 (図版 23・27・65)

5R グリッドに位置する。東西方向に伸びる。2014 年度調査の SD22 と一連の溝で、6R4・9 グリッドで SD2071 と合流する。調査区内の全長は 1.61m を測り、幅は 0.68m、深度は 18cm を測る。断面形は台形状で、立ち上がりは急斜度である。埋土は 2 層に分層でき、灰黄褐色・にぶい黄褐色のシルト層である。遺物は土師器片 2 点が出土した。

SD2073 (図版 23・27・65)

5Q グリッドに位置する。北西—南東方向に伸びる。2014 年度調査の SD23 と一連の溝である。SD2074 と重複し、これより古い。この結果、SD2074 と一連の溝である SD14 は SD23 より新しいことが確認できた。調査区内の全長は 2.27m を測り、幅は 0.62m、深度は 8cm を測る。断面形は弧状で、立ち上がりは緩やかである。埋土は 2 層に分層でき、1 層が黒褐色のシルト層、2 層がにぶい黄褐色の砂質シルトである。

E 道

旧河道 (SR2023・SR2061) 右岸の自然堤防頂部と思われる位置で道 1 を検出した。後世の削平があり、路面を確認することはできなかったが、道 1 の側溝は、2015 年度調査で検出した SD1308・SD1309 の東側と西側にそれぞれ位置することから、SD1308・SD1309 は道 1 の側溝の一部である可能性が高い。ここでは、道 1 の東部と西部が同一遺構である確証がないため、道 1 東・道 1 西と分けて記述する。

道 1 東 (図版 21・28・65・66)

9 ~ 11X, 11W グリッドに位置する。調査区内の全長は 16.90m を測り、主軸方向は N-77°-E を示す。北側溝 SD2054、南側溝 SD2013 の掘り直し等から、2 時期の変遷が確認できる。

1 期は SD2054B・SD2013B を両側溝とし、側溝中心間は 4.0m を測る。側溝底面は若干傾斜があり、東部の方が低くなる。SD2054B は、幅 1.70m、深度 48cm を測る。断面形は台形状で、立ち上がりは急斜度である。埋土は 3 層に分層でき、褐灰色シルトが主体で上層には砂が混入する。遺物は須恵器無台杯 (図版 31-16)、須恵器窯の転用研磨具 (図版 32-46) のほか、土師器片が 10 点、須恵器片が 2 点、黒色土器片が 1 点出土した。SD2013B は、幅 1.00m、深度 16cm を測る。断面形は弧状で、底面に凹凸がある。立ち上がりは緩やかである。埋土は 4 層に分層でき、主体となるのはにぶい黄橙色シルトで、にぶい赤褐色の砂層を含む。

2 期は SD2054A・SD2013A を両側溝とする。ほぼ 1 期の位置を踏襲するが、20 ~ 40cm ほど南側へ移動する。側溝中心間は 4.10m を測る。SD2054A は、幅 1.90m、深度 30cm を測る。断面形は台形状で、立ち上がりは急斜度である。埋土は 2 層に分層でき、暗褐色シルトが主体である。遺物は土師器片が 1 点出土した。SD2013A は、幅 1.20m、深度 26cm を測る。断面形は台形状で立ち上がりは北側が緩やかで南側が急斜度である。埋土は 6 層に分層でき、主体となるのは暗褐色シルトで、褐色の砂層を含む。両側溝間の路面に相当する部分には 5cm 程のシルト質の盛土が確認されたが、硬化面は認められなかつた。

道 1 西 (図版 22・28・66)

7X・Y グリッドに位置する。調査区内の全長は 2.02m を測り、主軸方向は N-70°-E を示す。SD2079 を北側溝、SD2066 を南側溝とする。側溝中心間は 5.10m を測る。SD2079 は、幅 0.94m、深度 15cm を測る。断面形は台形状で、立ち上がりは急斜度である。埋土は 3 層に分層でき、暗褐色シ

ルトが主体である。SD2066は、幅1.08m、深度46cmを測る。断面形は台形状で、立ち上がりは急斜度である。埋土は2層に分層でき、1層が黒褐色のシルト層、2層が黒褐色の砂質シルト層である。遺物は土師器片が14点出土した。

F ビ ッ ト

掘立柱建物の柱穴を除くピットは77基検出した。調査区幅が2mほどであるため、建物を組むことは出来なかつたが、10Uグリッドで検出したP2006・2035・2037などは、平面形が方形で比較的深く、柱痕も確認できることから建物の存在が想定される。ここでは、建物に伴う可能性の高いものを中心記す。

P2006 (図版21・29・62・69)

10U23・24、10V3・4グリッドに位置し、西部の大半は調査区外となる。SK2010・SD2001と重複し、SK2010より新しく、SD2001より古い。平面形は方形と推定され、深度は46cmを測る。埋土は4層に分層でき、1層は黒褐色のシルト層、2・3層はにぶい黄褐色・褐灰色のシルト層、4層は灰白色の粘質シルト層である。1層は柱痕と思われ、径15～20cmほどの柱が据えられていたと推測される。

P2025 (図版21・29・66・69)

10U19グリッドに位置し、西部は調査区外となる。平面形は梢円形で、深度は30cmを測る。埋土は5層に分層した。1層は黒褐色のシルト層、2～5層はにぶい黄褐色を主体とするシルト層で、1層が柱痕と思われる。

P2035 (図版21・29・66・67・69)

10U18・19グリッドに位置する。平面形は方形で、深度は83cmを測る。埋土は11層に分層でき、1・2層は褐灰色を主体とするシルト層、3・4層は黒褐色を主体とするシルト層、5層は黒色の粘質シルト層、6～9層は灰褐色・黒褐色・にぶい黄橙色・灰黄褐色のシルト層、10層は灰白色粘質シルト層、11層は灰白色の粘土層である。3～5層は柱痕で、5層下部には柱根が残存する。また、柱根の底面には礎板の痕跡が認められ、柱根の側面からは板材が出土した。柱根と板材の材質はスギで、放射性炭素年代測定の結果、暦年較正年代が11～12世紀とされる（本章5）。

P2036 (図版21・29・63・69)

10T23グリッドに位置する。西部の大半は調査区外となる。SK2038と重複し、これより新しい。平面形は梢円形と推定され、深度は46cmを測る。埋土は6層に分層した。1層は黒褐色のシルト層、2・3層は暗褐色・浅黄橙色・にぶい黄褐色のシルト層、5層は灰白色的粘質シルト層で、1層が柱痕と思われる。

P2037 (図版21・29・67・69)

10U8・9グリッドに位置する。平面形は方形で、深度は46cmを測る。遺構の形状と主軸方向がP2035と類似する。埋土は5層に分層でき、1層は黒褐色シルト、2～4層は黄褐色を主体とするシルト層、5層は灰白色的粘質シルト層である。1層は柱痕と思われ、径15～20cmほどの柱が据えられたと推測される。

P2041 (図版21・29・67・69)

10U3グリッドに位置する。平面形は梢円形で、深度は49cmを測る。埋土は6層に分層した。1・2層は黒褐色を主体とするシルト層、3・4層は黒色・褐灰色の粘質シルト層、5・6層はにぶい黄褐色

を主体とするシルト層で、1・2層が柱痕と思われる。

P2044 (図版 21・29・67・69)

10U8 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、深度は 55cm を測る。埋土は 4 層に分層した。1 層は黒褐色のシルト層、2 層はにぶい黄褐色の粘質シルト層、3・4 層は暗褐色・にぶい黄褐色の砂質シルト層で、1 層が柱痕と思われる。

P2045 (図版 21・29・68・69)

10U19 グリッドに位置に位置する。平面形は隅丸方形で、深度は 35cm を測る。埋土は 5 層に分層した。1 層は黄褐色のシルト層、2 層は黒褐色のシルト層、3・4 層は灰黄褐色のシルト層、5 層は灰白色の粘質シルト層で、2 層が柱痕と思われる。

P2046 (図版 21・29・68・69)

10T23, 10U3 グリッドに位置する。SK2057 と重複し、これより新しい。平面形は楕円形で、深度は 53cm を測る。埋土は 3 層に分層した。1 層は黒褐色のシルト層、2 層は褐灰色のシルト層、3 層は灰黄褐色のシルト層で、1 層が柱痕と思われる。

P2059 (図版 21・29・68・69)

10U4・9 グリッドに位置する。東部の大半は調査区外となる。SD2001 と重複し、これより古い。平面形は楕円形と推定され、深度は 52cm を測る。埋土は 6 層に分層した。1～4 層は黒褐色シルトを主体とし、5 層は褐灰色の粘質シルト層、6 層はにぶい黄橙色のシルト層で、4 層が柱痕と思われる。

P2120 (図版 21・30・69)

11W2・3・7・8 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、深度は 26cm を測る。埋土は 5 層に分層でき、1 层はにぶい黄褐色のシルト層、2 層は黄褐色の砂層、3 層は黒褐色の粘質シルト層、4 層は灰黄褐色のシルト層、5 層はにぶい黄褐色のシルト層である。2 層には木材が残存し、底面に刺さった状態で出土した。この木材は放射性炭素年代測定により近世以降の年代が得られているが、現代の地下水などが浸透したことによる誤測定の可能性もある（本章 5）。なお、遺構底面と側面からは噴砂が検出された。噴砂の砂は 2 層にも含まれていたが、埋没時に周囲の噴砂が入ったものと考えられる。

G 旧河道

調査区の南端において旧河道を 2 地点で検出した。調査区外の南側には現在の地形にも旧河道の痕跡が認められており（第 23・24 図）。今回検出した SR2023 と SR2061 はこの旧河道右岸の斜面と思われる。

SR2023 (図版 21・30・69)

11Y グリッドに位置し、東西方向に伸びる。検出最大幅は 6.97m、検出長は 1.92m を測る。周辺の地形から流路は東から西に流れていたと思われる。埋土は 2 層に分層でき、1 層は灰白色砂質シルト、2 層はにぶい橙色砂である。遺物は出土しなかったが、埋土中に杭とも思える木材の痕跡が認められた。

SR2061 (図版 22・30・70)

7・8BB グリッドに位置する。北東—南西方向に伸びる。検出最大幅は 6.07m、検出長は 2.12m を測る。周辺の地形から流路は北東から南西に流れていたと思われる。埋土は 4 層に分層でき、1 層は明褐灰色粘質シルト、2 層は明赤褐色砂質シルト、3 層は青灰色砂質シルト、4 層は青灰色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

H 性格不明遺構

掘り込みが不明瞭で、埋土に炭化物を多く含む遺構を性格不明遺構とした。

SX2124 (図版 21・30・70)

11・12V グリッドに位置する。北西部の大半は調査区外となり、南東部は擾乱に切られる。確認できた範囲が一部であるため不明な点が多いが、長径 2.50m 以上、短径 2.30m 以上で、深さは 30cm を測る。立ち上がりは急斜度で、底面には凹凸がある。埋土は 8 層に分層でき、1～7 層が黒褐色を主体とするシルト層、8 層はにびい黄橙色のシルト層でしまりが強い。3 層を除き 3～20mm の炭化物を含む。出土した遺物は 56 点で、須恵器の杯類 (図版 31-26～34)、須恵器の甕 (図版 31-35・36)、土師器の楕類 (図版 31-24)、土師器の長胴甕 (図版 31-25)、製鉄炉の炉壁片 (図版 32-48) などが出土した。

I 噴砂

遺構検出面 (IV 層上面) において地震痕跡である噴砂 7～11 を検出した (第 25 図)。2014 年度調査で確認された噴砂 3～5 は、残留磁化測定により噴砂 3 が A.D.800～900 年、噴砂 4、5 が A.D.850～1000 年の年代が推定されている [酒井ほか 2018]。全ての噴砂脈はおおむね東西方向に走り、土層断面の観察では陥没や断層が認められる。

噴砂 7 (図版 21・61)

10W・11V・W グリッドに位置する。調査区内の全長は 12.6m で、東西方向を蛇行しながら走る砂脈である。SK2102・SD2001・SD2009・P2007・P2120・P2023・P2122・SX2124 と切り合いがあり、全ての遺構に切られており、これらの遺構の構築前または埋没前に吹き上がったものと思われる。

噴砂 8 (図版 23)

6U グリッドに位置する。調査区内の全長は 2.19m で、北西～南東方向に走る。2014 年度調査の噴砂 3 と関連する砂脈と思われる。

噴砂 9 (図版 23・62)

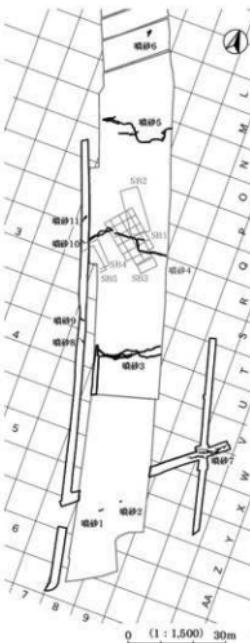
6T グリッドに位置する。調査区内の全長は 1.54m で、北西～南東方向に走る。2014 年度調査の噴砂 3 と一連の砂脈と思われる。断層が認められ、砂脈の両側で層の高さが約 25cm ずれている。

噴砂 10 (図版 23)

5R グリッドに位置する。調査区内の全長は 1.69m で、東西方向を蛇行しながら走る。2014 年度調査の噴砂 4 と一連の砂脈である。SD2071 と切り合いがあり、これに切られる。

噴砂 11 (図版 23)

5Q グリッドに位置する。調査区内の全長は 2.31m で、北東～南西方向に走る砂脈である。



第 25 図 噴砂位置図

(鈴木・荒川ほか 2018 に加筆)

4 遺 物

A 概 要

遺物は、古代の土器 230 点・灰釉陶器 1 点・土製品 1 点・鍛治関連遺物 1 点・木製品 3 点と、中世以降の遺物 37 点が出土した。古代の土師器・須恵器については 9 世紀代のものが主体となっている。出土遺物の器種分類や年代観については、古代の土器は〔春日 1999〕、貿易陶磁の分類は〔山本 2000〕を参考にした。墨痕が認められる須恵器（図版 31-27・30）については、新潟県立歴史博物館に赤外線鑑定を依頼し、墨痕の有無を確認した。

B 遺構出土遺物（図版 31・32・71・72）

SK2024（図版 31・71）

1 は土師器甕類で、内外面はロクロナデ、口縁端部が直立する。2 は長胴甕の体部片で、内外面にカキメがあり、外面にススが付着する。3 は須恵器横瓶で、外面に格子目タタキ、内面に同心円の当て工具痕があり、一部自然釉がかかる。小泊窯産。

SK2101（図版 31・71）

4 は土師器椀の口縁部片で、ロクロ成形されている。5 は須恵器杯で、胎土は精良で白色粒子を含む。

SK2102（図版 31・71）

6 はロクロ成形の土師器椀で、器壁はやや薄手である。7 は黒色土器の椀で、内面と外面の口縁部にミガキの後、黒色処理される。

SD2001（図版 31・71）

8・9 は龍泉窯系の青磁椀で、いずれも外面に鍋蓮弁文が施される。8 は口縁が外反し釉は厚く均一である。椀皿類に比定でき、13 世紀中頃から 14 世紀初頭前後の所産と考えられる。

SD2030（図版 31・71）

10 は土師器長胴甕の胴部である。体部外面に平行タタキがみられる。11 は須恵器の瓶類で、全体の器形は不明だが内面にロクロナデの凹凸が顕著に残り、外面に一部自然釉がかかる。12 は須恵器の甕類で胎土に砂粒を多く含む。

SD2034（図版 31・71）

13 は土師器の小片で、鍋と思われる。焼成が不良で摩耗が著しい。口縁部がやや肥厚し、端部は上方につまみ上げられる。

SD2070（図版 31・71）

14 は土師器無台椀である。内外面はロクロナデで、底部の切り離しは摩耗が著しく不明である。

SD2071（図版 31・71）

15 は須恵器甕の小片で、内面は当て工具痕、外面は格子目タタキがみられる。胎土には砂粒を含む。

道 1（図版 31・32・71・72）

16 は須恵器無台杯である。口縁部を欠損し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は精良で白色粒子を含み、器壁が薄く底面は凹凸が著しい。春日編年 IV 1 期に位置付けられる。

46 は道 1 の北側溝（SD2054B）から出土した須恵器甕体部片で、砥石として二次利用している。外面タ

タキ部分と破断面一か所の二面を砥面とする。

P2008 (図版 31・71)

17 は須恵器の甕類で、内面は同心円の當て工具痕、外面は平行タタキとカキメがみられる。胎土には砂粒を含む。

P2033 (図版 31・71)

18 は土師器の小片で、長胴甕または鍋と思われる。口縁端部は僅かに上方に屈曲する。

P2035 (図版 32・72)

49 はスギの板目材を使用した柱根である。底面は鋸歯状に切り落とされている。50 は柱根の側面に据えられていた板材である。上面側の木口は腐食し失われている。

P2044 (図版 31・71)

19 は須恵器無台杯の体部片である。胎土は精良で白色粒子を含む。

P2046 (図版 31・71)

20 は須恵器杯の口縁部片である。胎土は精良で白色粒子を含む。

P2086 (図版 31・71)

21 はロクロ成形の土師器無台椀で、やや内湾しながら立ち上がる。

P2089 (図版 31・71)

22 はロクロ成形の土師器無台椀で、やや厚手で、口縁端部は丸くおさめられる。

P2120 (図版 32・72)

51 はマツ属の板目材を使用した柱根で、底面が尖る。中央に穴が開いているが、腐食によるものと思われる。

P2123 (図版 31・71)

23 は灰釉陶器皿である。器壁はやや薄く、口縁の外反は弱い。底部は欠損するが、底部付近は内外面とも露胎である。

SX2124 (図版 31・32・71・72)

24 はロクロ成形の土師器椀で、器壁が薄くやや内湾しながら立ち上がる。25 は土師器長胴甕で、口縁端部はやや内側へ短く屈曲し、体部外面にはカキメがみられる。26 は須恵器無台杯で口縁部が僅かに外反する。胎土と器形から阿賀北で生産されたものと考えられる。27 は須恵器無台杯で、内面にわずかに墨痕がみられ、器面には使用による摩耗痕跡がみられる。立ち上がりは直線的で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。28 は須恵器無台杯で、底部の切り離しは回転ヘラ切りで、切り離し後にその痕跡をナデ消している。器面にはロクロナデの凹凸が顕著に残り、胎土は精良で白色粒子を含む。29 は須恵器無台杯で、底部は回転ヘラ切りである。内面には指頭圧痕が残る。30 は内面に墨痕が認められる須恵器無台杯で、立ち上がりは直線的である。不明瞭であるため墨痕としたが、墨書である可能性もある。31・34 は須恵器無台杯で、34 は器面には使用による摩耗痕がみられる。32・33 は須恵器杯で、いずれも底部は欠損する。35・36 は須恵器の甕または横瓶で、いずれも内面は同心円の當て工具痕、外面は平行タタキとカキメがみられる。35 は小泊窯産で外面に自然釉が認められる。48 は炉壁片である。表面が溶融し、多数の気泡を有する。溶融面側は黒色で、破損面側は赤褐色である。

SX2124 からは 9 世紀後半の土師器長胴甕 (25) や、9 世紀第 2 四半期と考えられる在地産の須恵器無台杯 (26)、小泊窯産の須恵器無台杯 (27・29) が出土している。春日編年に照らし合わせれば V 2 期か

らVI 1期に位置づけられるものと思われる。

C 遺構外出土遺物（図版 32・72）

37は土師器無台椀で、内外面はロクロナデ、底部には糸切り痕がみられる。38は土師器の小甕で、口縁端部は上方につまみ上げられ、割れ口を含めて内面に黒色付着物がみられる。39は土師器長胴甕の口縁部片で、口縁端部が上方に短く屈曲する。40は土師器鍋で、内面に素文の当て工具痕とカキメ、外面に格子目タタキがみられる。41は黒色土器の椀である。42～44は須恵器の甕または横瓶で、いずれも内面には同心円の当て工具痕があり、外面には42・44は平行タタキとカキメ、43は格子目タタキがみられる。45は須恵器の甕類で、胎土に細かい長石粒を含む。47は断面方形の和釘で、頭は折れ曲がるが明瞭ではない。

5 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

A はじめに

蕉木遺跡IIでは、柱材が出土している。このうち、P2035の覆土5層では柱の下部に横から支えるような形で板が見られた。またP2120では柱の上位や周間に噴砂とみられる堆積構造が認められた。今回は、柱材などの樹種同定および放射性炭素年代測定を実施して、柱などの材質や年代に関する情報を得る。

B 試 料

試料の詳細は、測定結果と共に第4表に示す。

蕉木遺跡IIの試料はP2035の覆土5層より出土した柱材および覆土6層より出土した柱横の支え板と考えられる木材、P2120の覆土2層より出土した柱材の合計3点である。

C 分析方法

1) 樹種同定

剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の各切片を作成し、生物顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察して、特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東〔1982〕、Wheeler他〔1998〕、Richter他〔2006〕を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林〔1991〕や伊東〔1995,1996,1997,1998,1999〕を参考にする。

2) 放射性炭素年代測定

本片の周囲を削り落として付着物を除去し、50mg程度に試料を調整する。塩酸(HCl)により炭酸塩など酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸などアルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩など酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元）はElementar社のvario

ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を用いて、¹⁴C の計数、¹³C 濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C) を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局 (NIST) から提供される標準試料 (HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料 (IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料 (IAEA-C1) の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ¹³C 濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からの差を千分偏差(%)で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う [Stuiver & Polach 1977]。暦年較正は Oxcal4.4 [Bronk, 2009]、較正曲線は Intcal20 [Reimer et al., 2020] を用いる。

D 結 果

1) 樹種同定

結果を表 4 に示す。燕木遺跡 II の試料のうち、P2035 の柱材および板と考えられる木材はいずれもスギ、P2120 の覆土 2 層より出土した柱材はマツ属複雑管束亞属に同定される。

以下に検出された種類の木材解剖学的所見を述べる。

第4表 測定試料の樹種と放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	分析方法	測定年代 yBP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	標本較正 年	樹年較正年代					Code No.	
						年代	標準偏差	標準偏差	標準偏差	標準偏差		
No.51 P2035 (6 枝) H (大木)	木材 (大木) (1M)	AAA	905	-25.17	965	ad AD 1032	ad AD 1047	918	+ 903	calBP	0.163	
			± 20	0.43	± 20	ad AD 1083	ad AD 1127	867	- 823	calBP	0.439	
						ad AD 1140	ad AD 1149	810	- 801	calBP	0.081	
	木材 (大木)	(1M)	2 e	ad AD 1026	ad AD 1054	924	- 896	calBP	0.234	14567	17668	
						ad AD 1075	ad AD 1158	875	- 792	calBP	0.720	
						ad AD 1050	ad AD 1081	900	- 869	calBP	0.352	
No.53 P2035 (6 枝) H (大木)	木材 (大木) (1M)	AAA	905	-24.60	906	ad AD 1172	ad AD 1177	798	- 773	calBP	0.262	
			± 20	0.39	± 20	ad AD 1193	ad AD 1202	757	- 748	calBP	0.069	
						2 e	ad AD 1045	ad AD 1086	905	- 864	calBP	0.381
	木材 (大木)	(1M)				ad AD 1092	ad AD 1105	858	- 845	calBP	0.033	
							ad AD 1120	ad AD 1215	830	- 735	calBP	0.540
No.153 P2120 (2 枝) H	木材 (マツ属 複雑管束 亞属)	AAA	140	-26.23	138	ad AD 1683	ad AD 1699	267	- 251	calBP	0.095	
			± 20	0.38	± 20	ad AD 1722	ad AD 1735	228	- 215	calBP	0.077	
						ad AD 1802	ad AD 1814	147	- 136	calBP	0.067	
						ad AD 1859	ad AD 1875	115	- 104	calBP	0.111	
						ad AD 1929	ad AD 1935	415	- 385	calBP	0.195	
	木材 (マツ属 複雑管束 亞属)	(1M)	2 d	ad AD 1675	ad AD 1700	275	- 184	calBP	0.316	14567	17669	
						ad AD 1774	ad AD 1776	176	- 174	calBP	0.004	
						ad AD 1895	ad AD 1906	152	- 55	calBP	0.453	
						ad AD 1962	ad AD 1943	48	- 7	calBP	0.185	

1) 年代較正の基準は、Libby の半減期 5568 年を使用。

2) calBP 年代は、1950 年を基点として算出された年齢である。

3) 测定した試料は、既定年齢 ± (既定年齢の 68% よりも範囲) を年齢に換算した値。

4) AAA は第一級 A 一級精度。AA は A ランクの精度を有した試料。ICR は指標物質。Edg はエッジング抽出法を示す。

5) 標準試料は日本国内で入手したものを用いた。

6) 测定年代は既定年齢より±(既定年齢の 68% よりも範囲) を年齢に換算して求めている。

7) 1 例目は丸太の外皮部分が、樹脂組織は通常の木質部よりも厚く、壁孔は比較的多く存在している。2 例目は丸太の内側。

8) 放射性炭素の測定結果は標準偏差 ± 68%、2 = ± 3σ で示す。

・マツ属単維管束東亜属 (*Pinus subgen. Haploxylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。垂直樹脂道は晩材部に近い場所に認められる。放射組織は、仮導管、柔組織、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁は滑らかで鋸歯は認められない。放射組織は單列、1-15 細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔

はスギ型で、1分野に2個が多い。放射組織は単列、1~10細胞高。

2) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代値を第4表に併記する。また、曆年較正結果を第27図に示す。

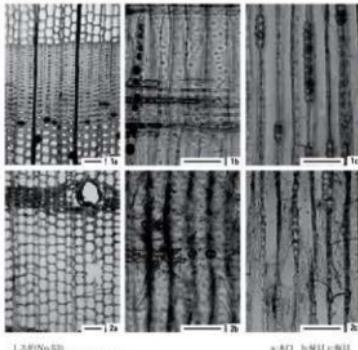
各遺跡の試料全てが定法での処理が可能であり、年代測定に必要な炭素量が回収できた。同位体補正を行った年代値は、P2035の柱材が 965 ± 20 BP、柱横の木材が 905 ± 20 BP、P2120の柱材が 140 ± 20 BPである。

曆年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正することによって、曆年代に近づける手法である。 2σ の値は、P2035の柱材がcalAD1026-1158、柱横の木材がcalAD1045-1215、P2120の柱材がcalAD1675-1943である。

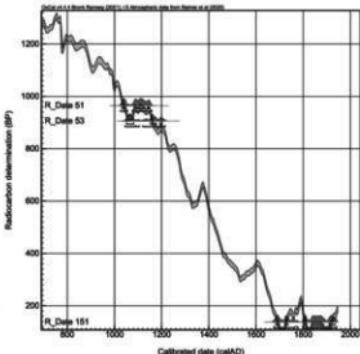
E 考 察

P2035の柱材および柱横の木材はスギであった。スギは太く真っ直ぐな材が得やすいこと、軽軟で加工が容易であること、水温に強いこと、木目が美しいことなどから、様々な用途で多用される良材である。建築材としての利用も多く、柱や板材、土台などに利用されている。一方、P2120の覆土2層より出土した柱材はマツ属複雑管束亞属であった。これは瘦地でも生育が可能で、植生破壊が進んだ場所に先駆的に侵入して二次林を構成し、人里近くに多い樹木である。強度があり、建築材や土木材として利用されることが多い。出土木製品用材データベース[伊東・山田編,2012]によれば、スギは様々な用途での材が出土しており、建築材としての出土もある。マツ属複雑管束亞属はスギと同様で、建築材や施設材、土木材としての出土が多い。

P2035出土の木材は、曆年較正結果が11~12世紀を示す。一方、P2120の柱材は近世~現代に当たる。覆土には噴砂の痕跡が認められている。残留磁気による推定年代はAD800~1,000であり、AD863年の中越・越後地震に伴う可能性が指摘されている[酒井ほか,2018]。ただし、現代の地下水などが浸透することで、元來の年代を示さないことも考えられる。そのため、今回の測定結果については今後さらに発



第26図 生材の顕微鏡写真



第27図 曆年較正結果

掘調査所見を含めて検討する必要があろう。

引用文献

- Bronk RC. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 337-360.
- 林 昭三 1991 「日本産木材顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載I」『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所 81-181.
- 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載II」『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所 66-176.
- 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載III」『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所 83-201.
- 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載IV」『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所 30-166.
- 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載V」『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編) 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』 海青社, 449p.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Buentgen U., Caprano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talma S. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62 1-33.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編) 2006 『針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修) 海青社 70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 酒井英男・石田桃子・泉 吉紀・菅頭明日香・ト部厚志 2018 「阿賀野市熊木遺跡で認められた噴砂の磁化研究」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第277集 熊木遺跡』 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 62-66.
- Stuiver M., & Polach AH. 1977 Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ^{14}C Data. *Radiocarbon*, 19 355-363.
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』 地球社 176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編) 1998 『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東 隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修) 海青社 122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

6 調査のまとめ

蕉木遺跡は、阿賀野川の右岸、標高9.6～10.6mの沖積低地に立地している。第1次調査は2014年7月から11月、第2次調査は2015年9月から11月にかけて、併せて6,963m²を対象に実施している。第1・2次調査では掘立柱建物5棟（古代5）、井戸1基（中世）、火葬土坑1基（中世）、土坑41基（古代23、中世～近世12、近・現代6）、溝26条（古代5、近・現代21）、道路状遺構1条（中世～近世1）、柵1条（中世～近世1）、ピット200基（古代172、中世～近世28）、性格不明遺構10基（中世～近世6、近・現代4）が確認され、9世紀中葉～後葉にある程度の社会的地位を持つ有力者が造営したと思われる大型建物群が存在したこと、13世紀から15世紀に井戸や火葬土坑が存在し、周囲に集落の存在が伺えることなどが確認された〔鈴木・荒川ほか2018〕。また、2020年には理文事業団1A区の北東部に隣接する位置で阿賀野市教育委員会（以下、市教委とする）による調査が行なわれた。第1・2次調査で確認された遺構に先行する9世紀前半の掘立柱建物や井戸状遺構などが確認され、春日編年〔春日1999〕のVI1期頃に遺跡内で集落が断絶または再編があった可能性が考えられている〔古澤ほか2022〕。

今回の第3次調査は、第1・2次調査で設定された調査区の東と西に溝状に設けられた調査区422m²を対象に実施し、ここから第1次調査で確認されたSB4・SB5の西側と、土坑14基（古代9、中世～近世5）、溝25条（古代2、中世～近世17、近・現代6）、道1条（古代～中世）、ピット77基（古代39、中世～近世38）、旧河道、性格不明遺構1基（古代1）を検出している。ここでは過去の調査成果を踏まえながら古代・中世の遺構について概要を述べ、若干の考察を交えまとめてとする。

A 古代

蕉木遺跡でこれまでに検出した古代の遺構は全て9世紀代に属しており、当遺跡において9世紀代は最も盛んに土地利用がなされていた時期と想定される。また、調査区内には大規模地震の痕跡である砂脈が11地点で確認されており、遺構との重複関係や残留磁化測定の結果〔酒井ほか2018〕などから、地震は9世紀代に発生した可能性が高いと考えられる。以下では第28図に示した掘立柱建物群、土坑・ピット群、旧河道・道に分けて概要する。

掘立柱建物群

第1次調査では大型の掘立柱建物群（第28図）が確認されている。今回は、このうち第1次調査時に調査区外であったSB4とSB5の西側の調査を行い、そこからP2086・P2089・P2090を検出している。遺構の位置関係や規模、埋土などから、P2086・P2089はSB5、P2090はSB4に付属するものと考えられ、いずれも梁間一間型建物であると推定される。SB4・SB5からは年代の根拠となる遺物が出土しなかつたが、過去の調査においてSB2・3・4→SB1・5と変遷することが推定されている〔鈴木・荒川ほか2018〕。また、出土遺物からSB1の年代が、春日編年のVI2期頃と考えられることや、周囲からV2期まで遡る遺物がみられないこと等から、SB4の年代はVI1～2期頃、SB5はVI2～3期頃である可能性が考えられる。

土坑・ピット群

今回は、11V・Wグリッドにおいて多数のピット・土坑・性格不明遺構がまとまって確認された（第28図 土坑・ピット群1）。このうち、P2123の埋土から9世紀後半と思われる灰釉陶器皿（図版31-23）が

出土するなど、出土遺物には官衙的色彩を有するものが若干含まれる。SX2124 からは 9 世紀後半の土師器長胴甕（図版 31-25）が出土したが、須恵器は小泊窯産が約 75%、在地産が約 25% で、須恵器の無台杯は春日編年の V2 期に位置づけられるものが主体となっている。このことから SX2124 は VI 1 期頃までには埋没したものと考えられる。

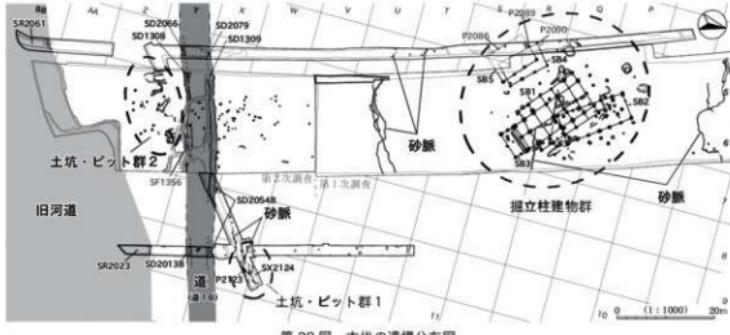
第 2 次調査では、8Y・Z、9Y・Z グリッドにおいて柱痕をもつ多数のビットがまとまって確認された（第 30 図 土坑・ビット群 2）。建物は復元されなかつたが、柱穴の規模や並びから建物域 1 よりかなり小型の建物があったことが推定されており〔鈴木・荒川ほか 2018〕、付近の土坑からは墨書き土器などが出土している。

この 2 つの土坑・ビット群はいずれも自然堤防の微高地頂部手前に位置しており、頂部に存在したと思われる道との関わりが注目される。

旧河道・道

調査区南部で旧河道と道を検出している（第 28 図 旧河道、道）。このうち旧河道は、2007 年に行なわれた庚塚遺跡の調査において流路の底に 9 世紀後半から 10 世紀初頭の土器を含む層が良好に残っていたことから、古代に機能していたものと推定されている〔佐藤ほか 2009〕。今回の調査で確認された道 1 は、この旧河道に沿う自然堤防微高地の頂部（第 22 図 ②から④の範囲）にあり、旧河道と併走するように東西方向に延びている。側溝中心間は 4 ~ 5 m ほどで、SD2054・SD2079 を北側溝、SD2013・SD2066 を南側溝とし、道 1 の東部では両側溝に 2 回の掘り直しがあることを確認した。北側溝は、第 2 次調査で確認された SD1309 と接しており、SD2054 → SD1309 → SD2079 と繋がるものと考えられる。北側溝の埋土には亜円礫が含まれており、この礫は道路通行部の構築に使用された可能性が考えられる。南側溝は、埋土や壁面の立ち上がりに若干ばらつきがあるが、道が延びる方向などから SD2013 → SD1308 の一部 → SD2066 と繋がる可能性が考えられる。

今回の調査において道 1 には 2 時期の変遷があることが確認され、埋土・出土遺物などから古い道が古代（道 1B）、新しい道が中世（道 1A）であると考えられる。道 1B の北側溝の埋土には古代の遺物包含層土である黒褐色シルトが含まれる。古代の遺物包含層は、今回の調査区では 10W、11V・W グリッドのみ調査区壁断面で確認されており、2020 年の市教委調査区で確認された III 層（黒色土）と同一のものである可能性が考えられる。市教委調査区で確認された III 層は、出土した炭化材の放射性炭素年代測定の



第 28 図 古代の遺構分布図

結果、7世紀後半から8世紀後半の年代が得られている〔古澤ほか2022〕。また、この道を挟んだ北と南に古代のビットと土坑、性格不明遺構が点在していることからも、当該期の道の存在が推定される。

遺物は、道1Bの北側溝から、春日編年のVI1期に位置づけられる小泊窯産の須恵器無台杯（図版31-16）が出土している。

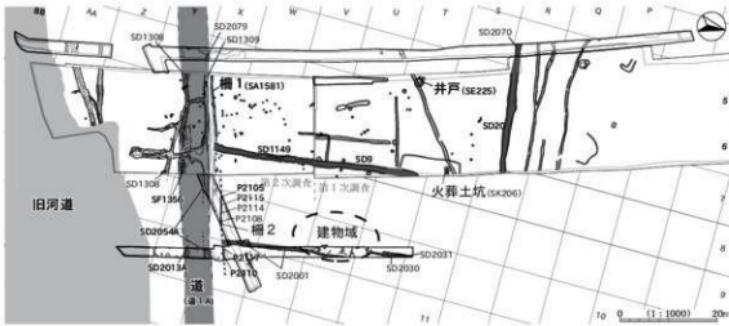
以上の状況から、蕉木遺跡は旧河道に近接した場所で営まれた集落跡と考えられ、今回の調査で、旧河道と掘立柱建物群との間に古代の道が存在することが確認された。遺跡内からは墨書き器や墨痕の認められる須恵器が出土していることから、集落内で文字が使用されたことが伺え、当集落内における上層階級者の存在が推定される。また、SX2124から出土した須恵器無台杯は春日編年V2期のものが主体であり、2020年の市教委調査区で確認された遺構の時期と一部重なる可能性が高い。市教委調査区はSX2124から約230m北東に位置すると蕉木遺跡で営まれた9世紀代の集落の痕跡は未調査区域の広い範囲に及ぶ可能性が考えられる。

B 中世

調査区南部の旧河道沿いに中世の道が確認され、道の250m北には建物域が存在することが確認された。道沿いには柵が設けられた痕跡があり、そのほか第1次調査では13～15世紀の井戸と火葬土坑が確認されている。なお、調査区の南側にある旧河道は平安期から近世のいずれかの時期に本遺跡の約900m西へ河川の流路が変わったと推定されているが〔潮田2014〕、その後も小規模な河川や渓として残存した可能性が考えられる。以下では第29図に示した建物域、道、柵、溝について概要する。

建物域

10T～Vグリッドでは、柱痕をもつビットがまとまって確認された（第29図建物域）。このうちP2035からは柱根と柱の支え板と考えられる板材が出土しており、柱材にはスギが使用され、柱の太さは約15cmである。出土した柱根と板材は放射性炭素年代測定により11世紀から12世紀の年代が得られている（本章5）。第1次調査ではこの建物域から約380m西で13世紀後半から14世紀末の井戸（第29図井戸）が確認され、250m北西で13世紀末から15世紀初頭の火葬土坑（第29図火葬土坑）が確認されている〔鈴木・荒川ほか2018〕。今回出土した柱材の年代は建物の構築時期の参考年代であるため、第1次調査で確認された井戸・火葬土坑と大きな時期差がない可能性も考えられる。



第29図 中世の遺構分布図

調査範囲が狭く建物を復元することは出来なかつたが、周囲で検出している区画溝と同様に建物の主軸方向はの N-7° -W 前後である可能性等が考えられる。

道・柵

古代の道（道 1 B）とほぼ同じ位置で中世の道（道 1 A）を検出している（第 29 図道）。第 2 次調査では、これとは別に道と推定される遺構（SF1356）を検出しているが、この遺構は重複関係から、道 1 A の一部か、道 1 A と道 1 B の中間に存在した道と思われる。また、8Y グリッドにおいて道 1 の南側溝と考えられる SD1308 が分岐して途中から二手に分かれていることから、道は継続的に機能し位置を変えながらさらにいくつかの段階を得ている可能性が考えられる。

道 1 の北側で柵と考えられる多数のビットを検出した（第 29 図柵 1・柵 2）。これらのビットは概ね 1.7 ~ 2.0m 間隔で並び、道 1 A に併走する。道と屋敷地等の区画である可能性が考えられる。

溝

中・近世の遺構には、多くの溝が検出されている。このうち SD2001（第 29 図）は、南北方向に延びる溝で、埋土中から中世の青磁碗が出土している。出土した青磁碗（図版 31-8）は体部外面に鍋連弁文が施される龍泉窯系のもので、時期は 13 世紀中頃から 14 世紀初頭前後と考えられる。

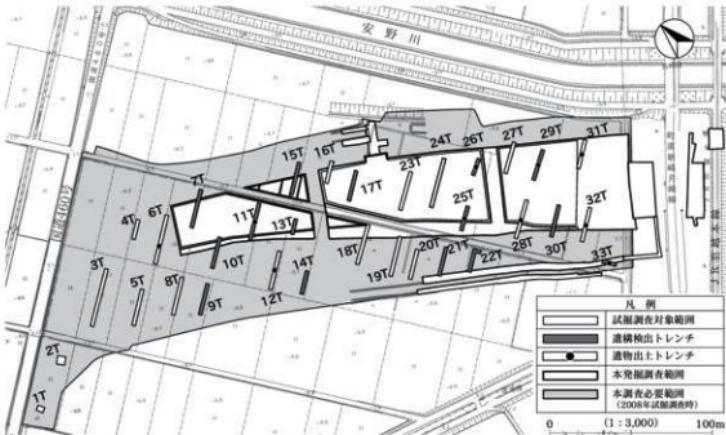
SD2001 は、SD2030・SD2031 や第 1・2 次調査で確認された SD9・SD1149（第 29 図）とは主軸が類似し、SD20・SD2070（第 29 図）とは主軸が直交する。このことから、これらの溝はひとつのまとまりである可能性があり、柵と同様に何らかの区画を示すことが考えられる。

第V章 山口野中遺跡V

1 調査経過

A 試掘確認調査

山口野中遺跡のバイパス法線に関する試掘調査は、埋文事業団が2008年5月8日から5月22日に行つた。調査地点は国道460号からJR羽越本線の間である（第30図）。調査対象面積は35,960m²、実質調査面積は1,042m²、試掘確認率は2.9%である。試掘調査は、調査対象地に試掘坑を任意に設定し、重機（バックホー）及び人力による掘削・精查を行い、遺構・遺物の有無を確認した。その後、土層堆積状況、トレンチ位置、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真に記録する方法で行った。試掘トレンチは33か所設定し、遺物はトレンチ西端から2m単位で取り上げた。



第30図 試掘トレンチ位置図

（原図：国土交通省提供 村上ほか2015を一部改変）

調査の結果、北西側の7～15T、17T付近と南東側の21～26T、29～33Tの大きく4つの範囲で遺構を検出した。9・10Tでは柱穴・土坑・土坑状炭窯・溝を検出した。出土遺物から中世集落の一部とみられる。また、このほかは溝を主体に検出した。溝の覆土は灰色系と灰褐色・褐色系に2分できる。中世の遺物が方眼される遺構は後者、近世以降の遺物が出土する遺構は前者であり、こうした傾向は本発掘調査の結果と整合する。

以上から、山口野中遺跡は試掘トレンチでの遺構検出を基に4か所（7～15T、17T付近、21～26T、29～33T周辺）を範囲とし、本発掘調査必要面積は20,785m²として、平成20年8月7日付、新理第172号で県教委に試掘調査報告書を提出した（第30図）[村上ほか2015]。

B 本発掘調査（第6次調査）

令和4年度の調査区は令和3年度調査までの呼称を継承して12区とし、本発掘調査は2022（令和4）年7月13日から7月29日まで行った。当初、調査面積は144m²であったが、本調査区の南東側を走る市道七島月崎線に近い場所は、安全を確保するため道路から一定幅を残して掘削を行う必要があったため、国土交通省との協議のうえで調査範囲を調整し、最終的な調査面積は延べ81m²となった。

7月13日から重機を用いて表土掘削を開始し、7月20日から作業員を入れて遺構検出から作業を進めた。遺物包含層は残存しておらず、現地表面の直下で中・近世と思われる溝跡などを検出した。7月29日に新潟県が終了確認を行い、同日ラジコンヘリコプターによる空撮を行った。8月2日に埋め戻しを行い、全ての作業を終了した。

C 整理作業

整理作業は、8月1日から現場事務所において遺物の洗浄・注記等の基礎的な作業を行った後、8月8日から株式会社ノガミ整理作業所において遺構図面の整理、遺物の実測、本文の原稿執筆等の作業を行った。遺構図面は、台帳作成などの基礎的な整理を行なった後、平・断面図の校正とデジタルトレースを行った。出土した遺物は3点であったが、このうち器種が判別できる2点について、写真撮影と実測を行った。その後、報告書の図面図版・写真図版のレイアウトを行い、2023年3月末、編集・校正作業が終了した。

2 調査の概要

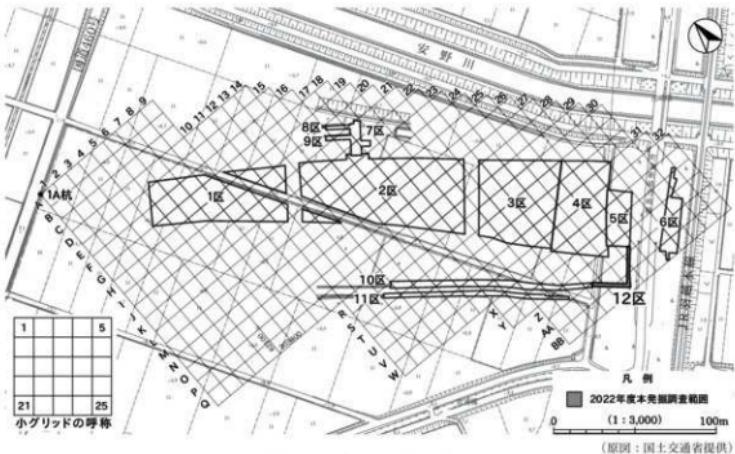
A グリッドと調査区の設定

調査区の呼称は、従来の区分を継承し12区とした。本調査区は、L字状に調査区が設けられており、北東端では2015年度に調査が行われた5区と接し、北西端では2021年度に調査が行われた10区と接している。

グリッドの設定は、2012年度の調査で設定したものと踏襲した（第31図）。国家座標のX座標=202,570.000（北緯37度49分56.75682秒）、Y座標=62,050.000（東経139度12分17.72584秒）を基点（A杭）とし、南北・東西それぞれ10mの方眼を組み、大グリッドとした。大グリッドの呼称は、遺跡を覆う方眼を西から東へ向けて算用数字（1・2・3…）、北から南へ向けてアルファベット（A・B…Z、AA、BB…）を付し、これを組み合わせた。両者の組み合わせにより「26Z」「23AA」のように表示した。小グリッドは大グリッドの中を2m四方に25分割した。小グリッドには1～25の番号を付し、北西隅を1、南東隅を25となるように配列した。グリッドは、大グリッドと小グリッドを組み合わせ、「26Z23」「23AA9」のように表記した。12区付近の25BB1北西隅はX座標=203,300.000、Y座標=62,290.000である。

B 基本層序

遺跡は、阿賀野川右岸の自然堤防上に位置する。現況は調査区の東側は市道新崎月崎線沿いに雑木等が生い茂っていた。西側は工事用の碎石が散き詰められており、工事が入る以前は水田であった。調査前の標高は碎石直下で7.4～7.5mを測る。調査区は昭和初期の耕地整理・開田によりⅡ層及びⅢ層は削平されている。このため表土や耕作土の直下が遺構検出面となる。また調査区全体が擾乱の影響を受けており、



第31図 グリッド設定と調査区

(原図：国土交通省提供 小野本ほか 2016 を一部改変)

とくに西側の24BBグリッド以北は大きな擾乱によってIVb層上面まで失われている。

基本層序は新潟県埋蔵文化財調査事業団による山口野中遺跡の発掘調査報告書（『山口野中遺跡』[村上ほか2013]、『山口野中遺跡Ⅱ』[村上ほか2015]、『山口野中遺跡Ⅲ』[小野本ほか2016]）を参照とした。このうち、2015年度調査の5区の基本層序は、今回の調査区に隣接するため直接の基準とした。ただし、遺跡全体の土層は複雑であり、調査地点が離れると層もかなり変化する。その結果、一部の層は前回調査と一致しない個所もあるため、標高や土質等で判断した。なお第32図には2015年度調査の5区（2015-1T）の基本層序も比較のため掲載した。

I層 表土・耕作土

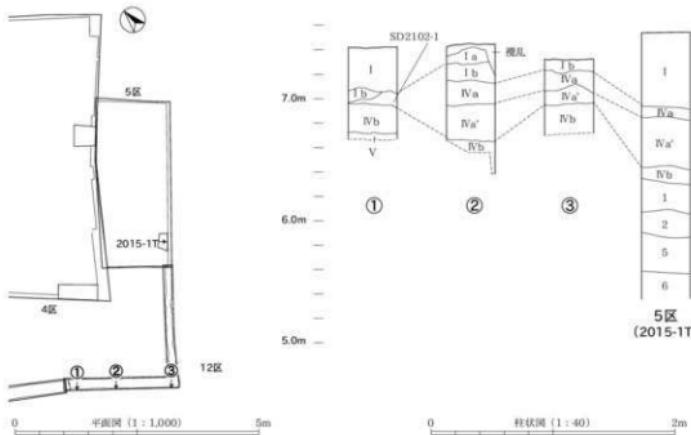
調査区の西側は水田耕作土と考えられる。Ia層褐灰色シルト（10YR6/1）が主体となる。層厚は10～20cmを測り、下半部には酸化鉄の影響による赤色粒子が認められる。調査区の東側は雜木林になっていたため、Ib層灰黄褐色砂質シルト（10YR4/2）が主体である。層厚は30～40cmを測る。

IV層

にぶい黄褐色から黄褐色のシルトである。IV層はその粒径からさりに3層に分層され、上層から下層に向かって粒径が粗くなっている。標高7.3～6.9mにはIVa層ににぶい黄褐色粘質シルト（10YR4/3）が確認され、その上面は中世の遺構確認面である。層厚は15～25cmを測る。その下の標高7.1～6.9mにはIVa'層ににぶい黄褐色シルト（10YR4/4）が確認される。IVa層より粒径が大きくなり、粘性が弱くなる。層厚は15～30cmを測る。その下の標高6.9～6.6mにはIVb層黄褐色砂質シルト（10YR5/6）が確認される。IVa'よりさらに粒径が大きくなり、砂に近くなる。層厚は20～30cmを測る。

V層

褐灰色砂質シルト（10YR6/1）である。IVb層と粒径はほぼ同じである。標高6.7～6.5mで、層厚は15cm以上を測る。確認した個所は調査区の北西端の大きな擾乱の下位である。



第32図 基本層序

3 遺構

A 概要

今回の調査区は2015年度調査の5区、2021年度調査の10区と隣接する。検出した遺構は、溝6条、ピット1基で、遺構番号は2101から付した。出土遺物・埋土などの特徴から溝の所属時期はいずれも中世から近世と思われる。全ての溝は並行関係にあり、主軸方位N-69°~82°-Wの範囲にまとまる。規模は、上端幅1m以上が5条、1m以下が1条となっており、以下ではこれらの溝について述べる。

B 溝

SD2102 (図版35・74)

23AAグリッドに位置する。東西方向に伸びる溝と推測する。北西・南東側は調査区外へ続く。幅1.18m、深度は34cmを測る。断面形は半円状で、立ち上がりは急斜度である。埋土は3層に分層でき、1層はにぶい黄橙色粘質シルト、2層は灰黄褐色粘質シルト、3層は褐灰色粘質シルトである。

SD2103 (図版35・74)

23・24AAグリッドに位置する。東西方向に伸びる溝と推測する。北西・南東側は調査区外へ続く。西側の大半は攪乱で失われ、底面付近がわずかに残存する。幅1.08m、深度45cmを測る。断面形は台形状で、立ち上がりは急斜度である。埋土は4層に分層でき、1~3層は褐灰色・淡黄色の粘質シルトで、4層が灰白色の粘質シルトへ粘土である。

SD2105 (図版35・36・75)

25AAグリッドに位置する。東西方向に伸びる溝と推測する。北西・南東側は調査区外へ続く。幅2.06m、深度71cmを測る。断面形は漏斗状で、立ち上がりは北側では緩やか、南側では急斜度である。埋土は

5 調査のまとめ

4層に分層でき、1～3層が灰黄褐色・にぶい黄褐色シルトで、4層は黄褐色砂質シルトである。遺物は、4層から珠洲焼片口鉢（図版36-1）が出土した。

SD2106（図版36・75）

25・26AAグリッドに位置する。東西方向に伸びる溝と推測する。北西・南東側は調査区外へ続く。北側が一部SD2109と重複しており、本遺構の方が新しい。幅93cm、深度33cmを測る。底面はやや凹凸があり、断面形は半円状～台形状で、立ち上がりは緩やかである。埋土は灰黄褐色シルトの単層である。

SD2107（図版35・75）

25AA・BBグリッドに位置する。東西方向に伸びる溝と推測する。北西・南東側は調査区外へ続く。幅1.85m、深度45cmを測る。断面形は半円状で、立ち上がりは急斜度である。埋土は5層に分層でき、レンズ状に堆積する。1～3層が灰黄褐色・にぶい黄褐色・にぶい黄橙色シルト、4層は灰黄褐色粘質シルト、5層は黄褐色シルトである。

SD2109（図版36・75）

25・26AAグリッドに位置する。東西方向に伸びる溝と推測する。北西・南東側は調査区外へ続く。SD2106と重複しており、本遺構の方が古い。底面はほぼ平坦で、側壁は段を持ちながら立ち上がる。埋土は3層に分層でき、1・2層が灰黄褐色・にぶい黄褐色シルト、3層はにぶい黄褐色粘質シルトである。遺物は3層から土師器の細片が出土しているが、埋土の特徴から遺構に伴うものではなく、混入したものと考えられる。

4 遺 物

A 概 要

SD2105から中世の珠洲焼1点、SD2109から土師器1点、遺構外から縄文土器1点が出土した。出土遺物は破片のみで全形を知り得るものはない。珠洲焼の器種分類・年代観は[吉岡1994]を参考にした。

B 出 土 遺 物（図版36・75）

SD2105（1）

1は、珠洲焼片口鉢の底部である。底部の径が小さいことから、中・小鉢と思われる。内面には剥し目がみられ、7目を1単位とする。焼成は良好で黄灰色を呈する。Ⅲ～Ⅳ期に比定でき、13世紀中葉～14世紀中葉頃の所産と考えられる。

遺構外（2）

2は、縄文土器の破片で、体部外面には浮線文が施される。鳥屋2式に比定される。

5 調査のまとめ

山口野中遺跡は、標高6.4～7.5mの旧百津潟の自然堤防上に立地する。第1次調査（1・2区）は2012年4月から9月、第2次調査（3・4区）は2013年4月から11月、第3次調査（5・6区）は2015年4月から8月、第4次調査（7区）は2020年2月から3月、第5次調査（8～11区）は2021年9月から11月に、併せて26,301m²を対象に実施している。これまでの調査で、縄文時代晩期の集落跡、

平安時代の集落跡が確認されたほか、中世の掘立柱建物、井戸、道、火葬土坑などが確認され、13世紀後半を中心とする居住域が展開し、14世紀後半以降は火葬場へと変遷するものと考えられている〔小野本ほか2016〕。

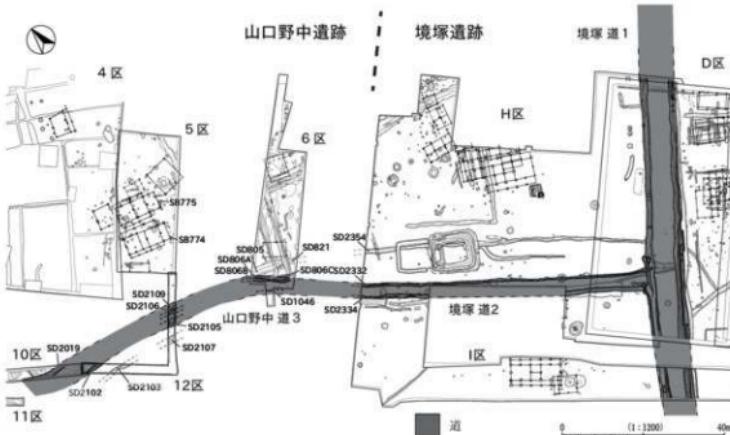
今回の第6次調査では2022年7月13日から7月29日の期間に、12区とした81m²の調査区において、中世の溝6条、ピット1基を検出した。調査面積が狭いことから溝の全容は不明な点が多いが、周辺には北東に5区、北西に10区、東に6区、さらに南東には境塚遺跡が存在するため、ここでは周辺の調査成果との関連を踏まえながら概要を述べる。

A 6区・10区との関係

今回の調査では、調査区西部でSD2102・SD2103、調査区東部でSD2105・SD2106・SD2107を検出した(第33図)。このうちSD2102とSD2105、SD2103とSD2107は溝の規模や方向などから同一の溝と考えられる。

山口野中遺跡の6区では、SD806Aを北東側溝、SD1046を南西側溝とする道3(第33図 山口野中道3)が確認されている。道3は北西・南東方向に伸び、側溝中心間は約3mで、北東側溝は2回の掘り直しがあることが確認されている(第33図 SD806B・C)〔小野本ほか2016〕。

今回の調査ではSD2106とSD2109が掘り直された同一の溝と思われ、断面形や深度、重複関係からSD806AとSD2109、SD806BとSD2106がそれぞれ対応する溝と推定される。10区では、この北西側溝が伸びる延長線上にSD2019があり(第33図)、道3の北東側溝はSD806A→SD2109→SD2019と繋がる可能性が考えられる。道3の北西側溝と推定した溝の特徴は、埋土がにぶい黄褐色シルトを主体とし、底面が平坦で壁面が急斜度で立ち上がる事などが挙げられる。なお、SD2109の2層には径5~15cmほどの亜円礫が含まれており、この礫は道路通行部の構築に使用された可能性が考えられる。



第33図 中世の道推定図

(村上ほか2015・小野本ほか2016・飯坂ほか2018・伊藤ほか2023から作成)

5 調査のまとめ

道3の南西側溝は、6区のSD1046が大きく攪乱されているため不明な点が多いが、道が伸びる方向などからSD1046→SD2105→SD2102と繋がる可能性が考えられる。SD2105は下層から13世紀中葉～14世紀中葉に比定できる珠洲焼片口鉢が出土している。

B 5区・境塚遺跡との関係

道3は、境塚遺跡D・H区で確認された道2（第33回 境塚道2）と同一遺構と考えられ、今回の調査での道が10区の西側まで伸びる可能性が高いことが確認された。境塚遺跡の道2は、道1（第33回 境塚道1）から枝分かれし、北西・南東方向に直線的に伸びる。道が機能した時期は13世紀後半～14世紀前半と考えられている〔飯坂ほか2018〕。境塚遺跡から山口野中遺跡6区まで直線的に伸びる道3は、6区と12区の間で緩やかに曲がり、12区では東西方向となる。さらに10区の西壁際では主軸を北西・南東方向に戻すように再び緩やかに曲がる様子がうかがえる。また、5区では大型の掘立柱建物であるSB774・SB775が確認されている（第33回）。掘立柱建物の主軸方向はいずれもN-70°-Wで、12区における道3と主軸方向がほぼ一致することが確認された。このことから掘立柱建物は道に沿って計画的に配置された可能性が考えられる。

以上から、今回の調査では、当初直線的に伸びると考えられた道3が、途中で緩やかに蛇行すること、5区で検出した大型の掘立柱建物は、蛇行する道3に主軸を合わせて造られた可能性があることが新たに確認された。

引用・参考文献

- 相澤 央 2004 「蝦夷『征伐』と安久遺跡」『葦神村史』通史編 新潟県葦神村
- 相田泰臣ほか 2015 『大沢谷内遺跡Ⅳ 第19・20・21次調査』 新潟市教育委員会
- 阿賀野市教育委員会 2008 『阿賀野市文化財年報』3
- 秋山泰利ほか 2016 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第263集 新町遺跡』 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史ほか 2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 青田遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第153集 大坪遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史 2007 「阿賀北・大坪遺跡—中世初頭の居館跡—」『御館の時代』 高志書院
- 荒川隆史ほか 2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第232集 境塚遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史 2016 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第262集 境塚遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史 2019 「阿賀野バイパスの調査成果」『第23回遺跡発掘調査報告会シンポジウム「白河莊の考古学」』 新潟県埋蔵文化財センター
- 荒谷伸郎ほか 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第215集 山口遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 愛知県史編さん委員会 2007 『愛知県史別編 精業2中世・近世瀬戸系』 愛知県
- 飯坂盛泰ほか 2018 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第278集 境塚遺跡Ⅲ』 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 諫山えりか 2004 『新潟市山木戸遺跡』 新潟市教育委員会
- 石川日出志ほか 1992 『六野瀬遺跡 1990年調査報告書』 新潟県安田町教育委員会
- 伊藤啓雄 2006 『新潟県における中世土師器と輸入陶磁器・瀬戸美濃製品—中世後半～近世初頭の様相—』『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』 北陸中世考古学研究会
- 伊藤正志ほか 2023 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第264集 山口遺跡Ⅲ第4次調査・山口野中遺跡Ⅳ第4・5次調査・境塚遺跡Ⅴ第5次調査・新町遺跡Ⅱ第2次調査・石船戸東遺跡Ⅱ第3次調査』 (公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 宇野隆夫 1982 「井戸考」『史林』65-5 史学研究会
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 潮田恵幸 2014 「第VII章総括 第3節まとめ 1) 遺跡の立地について」『細池寺道上遺跡Ⅱ 第25次調査』 新潟県
新潟市教育委員会
- 大矢正彦・加藤康彦 1984 「阿賀野川水害地形分類図説明書」 建設省北陸地方建設局阿賀野川工事事務所
- 小田由美子 1999 「第5章 第5節 五頭山麓古窯跡群」『新潟県の考古学』
- 小田由美子・浦部頼之 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第99集 堀越館跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県
埋蔵文化財調査事業団

- 小田由美子著 2002『新潟県埋蔵文化財調査報告書第117集 赤坂山中世窯跡・赤坂山B遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小野本敦著 2016『新潟県埋蔵文化財調査報告書第266集 山口野中遺跡III』新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小野本敦著 2017『新潟県埋蔵文化財調査報告書第270集 桟木遺跡III』新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小野本敦・石川智紀・加藤 学著 2019『新潟県埋蔵文化財調査報告書第279集 石船戸東道路』新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999「第4章 古代 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』高志書院
- 春日真実 2004「報告編 第1章 阿賀北地域の環境」「越後阿賀北地域の古代土器様相」新潟古代土器研究会
- 加藤 学・荒川隆史 1999『新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 泉A遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学著 2010『新潟県埋蔵文化財調査報告書第223集 村前東A遺跡・村前東B遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2013「貞觀五年越中・越後地震に関する一考察」「研究紀要7」(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学著 2013『新潟県埋蔵文化財調査報告書第237集 桟木遺跡II』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学著 2021『新潟県埋蔵文化財調査報告書第290集 令和元・2年度県内遺跡試掘・確認調査報告書』新潟県教育委員会
- 金内 元・飯坂盛泰 2018「第VII章 まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第278集 墓塚遺跡III』新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鶴井幸彦・安井 賢 2004「古地理でたどる越後平野の生い立ち」『土と基礎 地盤工学会誌52号』(公社)地盤工学会
- 川上貞雄 1977『水原城館址及水原代官所址発掘調査報告書』新潟県水原町教育委員会
- 川上貞雄 1979『安田町文化財調査報告4 上野林丘陵埋蔵文化財発掘調査報告書1 横峯経塚群』安田町教育委員会
- 小池義人 1994「中世の凹地遺構と溝について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第59集 細池遺跡寺道上遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 国土地理院 1988『土地条件図「新津」解説面』国土地理院
- 小松 彰著 1995『新潟県歴史の道調査報告書第8集 三国街道中通り』新潟県教育委員会
- 小山正忠・竹原秀雄 2000『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社
- (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2011『唐三彩 報道資料』
- 斎藤慎一 2010『中世東国の道と城館』(財)東京大学出版会
- 酒井英男著 2013『山口野中遺跡で認められた噴砂の磁化の研究』『新潟県埋蔵文化財調査報告書第248集 山口野中遺跡』新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 酒井英男著 2018『阿賀野山熊木遺跡で認められた噴砂の磁化研究』『新潟県埋蔵文化財調査報告書第277集 熊木遺跡』新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 坂井秀弥 1997『中世集落の展開と城館の動向』『中・近世の北陸—考古学が語る社会史一』桂書房

- 佐藤友子^著 2009 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 203 集 庚塚遺跡・狐塚遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤友子^著 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 216 集 桟木日本道跡 I』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤友子 2015 「一般国道 49 号阿賀野バイパス関係」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 260 集 平成 26 年度県内遺跡 試掘・確認調査』 新潟県教育委員会
- 佐藤友子^著 2019 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 282 集 土橋北遺跡』 新潟県教育委員会・(公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤友子^著 2022 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 292 集 堂古遺跡II 第 3 次調査』 新潟県教育委員会・(公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 蘿崎謙治 2010 『馬小屋の考古学』 高志書院
- 蘿崎謙治 2015 『堅穴を持つ中世の厩舎遺構』 土曜考古 第 37 号 土曜考古学研究会
- 鈴木俊成・荒川隆史^著 2018 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 277 集 焼木遺跡』 新潟県教育委員会・(公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋 保^著 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 157 集 住吉遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄^著 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 172 集 鶴深甲遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄^著 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 215 集 山口遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高濱信行・野崎 保 1981 「新潟平野東縁、五頭山地西麓の土石流発達史」『地質学雑誌 第 87 卷 第 12 号』 (一社) 日本地質学会
- 田村 裕 2004 「南北朝・室町前期の白河荘」『笛神村史』通史編 新潟県笛神村
- 立木宏明^著 2019 『細池寺道上遺跡Ⅳ 第 48 次調査』 新潟市教育委員会
- 立木宏明^著 2019 『細池寺道上遺跡Ⅴ 第 29・31 次調査』 新潟市教育委員会
- 鶴巻康志 2005 『新潟県北部の中世陶器窯』『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料編』 全国シンポジウム「中世窯業の諸相・生産技術の展開と編年-」実行委員会
- 鶴巻康志 2015 『新潟平野の潟に面した古代集落—新潟県曾根遺跡—』『入り海の記憶 知られざる出雲の面影』 島根県立古代出雲歴史博物館
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 4 東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地 第 2 分冊 御殿下記念館地点の調査』 東京大学埋蔵文化財調査室
- 土橋由理子^著 2011 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 221 集 古渡路遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 中尾七重 2012 『中世館外の厩集落 新潟県古渡路（ふるとろ）遺跡 武藏大学総合研究所紀要 No.21』 武藏大学総合研究所
- 中川成夫 1959 「笛神村權兵衛塚址の調査」『水原郷』 新潟県教育委員会
- 中野豈任 1976 「白河荘について」『社会科学』第 12 集 新潟県高等学校教育研究会社会科学部会
- 成田國之 2000 「百津潟を探し求めて」『水原郷土誌料』第 28 集 新潟県水原町教育委員会

- 新潟県立歴史博物館編 2006 『中世人の生活と信仰－越後・佐渡の神と仏－展示図録』
- 樋口真巳 2004 「白河荘の成立と城氏の展開」『鎌倉期の白河荘』『笠神村史』通史編 新潟県笠神村
- 藤沢良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』 高志書院
- 古澤妥史 2002 『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 町道上遺跡』 新潟県京ヶ瀬村教育委員会
- 古澤妥史 2005 『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 土居内西遺跡』 新潟県阿賀野市教育委員会
- 古澤妥史^{ほか} 2011 『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集 県営灌水防除事業関連道路発掘調査報告書III 境塚遺跡・山口野中遺跡・三辺稻荷遺跡』 阿賀野市教育委員会
- 古澤妥史^{ほか} 2016 『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集 市道安野川右岸線道路改良工事に伴う遺跡発掘調査報告書 山口野中遺跡』 阿賀野市教育委員会
- 古澤妥史^{ほか} 2018 『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集 県営灌水防除事業関連道路発掘調査報告書IV 石船戸遺跡』 阿賀野市教育委員会
- 古澤妥史^{ほか} 2022 『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第16集 蕉木遺跡』 阿賀野市教育委員会
- 細野高伯^{ほか} 2012 『大沢谷内遺跡II 第7・9・11・12・14次調査』 新潟市教育委員会
- 水澤幸一 2002 「阿賀北の中世石佛」『新潟考古』第13号 新潟県考古学学会
- 水澤幸一 2005 「越後の中世土器」『新潟考古』第16号 新潟県考古学学会
- 水澤幸一 2007 「中世越後の土器と陶磁器－11～14c.前半』『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』 北陸中世考古学研究会
- 水澤幸一 2009 「日本海流通の考古学－中世武士団の消費生活－』 高志書院
- 宮本長二郎 1999 「日本中世住居の形成と発展」『建築史の空間』 中央公論美術出版
- 村上章久^{ほか} 2013 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第248集 山口野中遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 村上章久^{ほか} 2015 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第258集 山口野中遺跡II』 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 山本信夫 2000 『太宰府条坊跡XV－陶磁器編－』 太宰府市教育委員会
- 安田町史編さん委員会 1997 『安田町史 中世編』 安田町
- 古岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- 古岡康暢 2003 「珠洲焼概論」『平成15年度 文化財専門職員研修「講義」・「事例報告」資料集』 新潟県教育庁 文化行政課

観察表

石船戸東遺跡9区 土坑 観察表

遺構番号	グリッド	標出位置	変遷経緯	形態		規模(cm)						前面標高	裏土層状況	主軸方向	出土遺物	切り合い%	備考
				平面	断面	立ち上り	上端傾斜	上端高	下端傾斜	下端高	深度						
2116	13N22	N	中世 掘り跡	台形状	急斜面 傾きかく・斬段	(417) 328	96 252	58	37	24	6.991	A	N 53° E			>SD2117	
2141	10N2	N	中世 (7M8)	台形状	傾きかく	(107) 129	259	1200	227	66	6.876	C	N 52° W				

石船戸東遺跡9区 溝 観察表

遺構番号	グリッド	標出位置	変遷経緯	形態		規模(cm)						前面標高	裏土層状況	主軸方向	出土遺物	切り合い%	備考
				平面	断面	立ち上り	上端傾斜	上端高	下端傾斜	下端高	深度						
1	12M.13M	N	中世	台形状	急斜面	(313) 303	96	(320)	58	38	6.915	A	N 23° W	上耕土層・石製品		>SD0	
3	12M.13M	N	近世	掘り跡	傾きかく・斬段	(417) 328	96	(252)	97	37	7.070	A	N 22° E			>SD1	
2104	13M	N	中世	台形状	急斜面	(41)	32	(34)	18	10	7.213	A	N 7° W				
2105	15G	N	中世	台形状	傾きかく・急斜面	200	47	175	39	17	7.328	F	N 81° E				
2106	15M.15G	N	中世	掘り跡	傾きかく・傾きかく	(482) 56	(420)	23	24	7.197	D	N 81° E	石製品(研石)				
2107	15G.16G	N	中世	台形状	急斜面	459	42	445	25	10	7.374	D	N 21° W				
2108	16G.17G	N	近世	台形状	傾きかく・急斜面	(1752) 33	(1650)	15	5 ~ 9	7.295	D	N 12° E			>SD2109, >SD2110		
2109	15N.16N. 16G	N	中世	円筒狀	急斜面	(1483) 83	(1457)	40	31 ~ 46	6.988	A	N 24° W	遺道土・土耕土層・土 石製品		>SD2106, >SD2135		
2110	15N.16N. 16G.17G	N	中世	圓筒狀	急斜面	(2625)	125	(2500)	70	44 ~ 52	6.281	C	N 20° W	遺道機・土耕土層・ 白磁・鐵化物		>SD2108, >SD2109, ≈ SD2134, ≈ SD2135, ≈ SD2136	
2117	13N.13G	N	中世	台形状	急斜面	(706)	56	(674)	32	7 ~ 29	7.102	A	N 78° W			>SD2116, >SD2119	
2118	13N.13G	N	近世	台形状	急斜面	(772)	160	(750)	130	6 ~ 10	7.080	A	N 69° W	磁磚・陶器・石製品(研 石)・灰		>SD2123	
2122	12N.13N	N	近世	台形状	急斜面	(491)	175	(471)	121	20 ~ 31	7.039	A	N 42° E	陶器		>SD2123	
2123	13N	N	近世	「台形 状」	傾きかく	(387)	(830)	(265)	(71)	25	7.087	A	N 68° W			>SD2122	
2126	14N	N	近世	掘り跡	傾きかく	347	67	330	52	16	7.104	A	N 25° E			>SD2129	
2128	14N	N	近世	台形状	急斜面	379	63	335	40	20	7.096	A	N 17° E	磁磚		>SD2130, >SD2133	
2132	14N.15N	N	近世	台形状	急斜面	(434)	56	348	45	16	7.049	A	N 16° E			>SD2129, ≈ SD2134	
2133	14N.15N	N	中世	圓筒狀	傾きかく	(872)	85	(725)	43	45	6.761	A	N 24° W	上耕土層・石製品		>SD2132, ≈ SD2134	
2134	15N	N	中世	円筒狀	急斜面	(192)	57	(212)	32	22	7.027	A	N 56° E			≈ SD2110, ≈ SD2112	
2135	15N.16N. 17N	N	近世	台形状	急斜面	2500	30	2485	20	6 ~ 11	7.260	B ~ D	N 10° E	陶器・磁磚		>SD2109, >SD2110	
2142	15N.16N	N	近世	低坑	傾きかく	310	19	258	10	±	7.374	D	N 11° E			>SD2110	

石船戸東遺跡9区 ピット 観察表

遺構番号	グリッド	標出位置	変遷経緯	規模(cm)		前面標高	裏土層状況	出土遺物	切り合い%	備考
				平面	断面					
2101	12M.13M.13M1	N	28	(20)	26	7.293	E			
2103	13M	N	(22)		20	7.310	D			
2111	14G.17	N	39	38	79	6.451	E			
2112	14G.021	N	28	22	7	7.262	D			
2113	14G.022	N	36	32	19	7.127	E			
2114	16N	N	35	25	13	7.325	E			
2115	16G.016	N	30	26	16	7.238	E			
2119	13N.14	N	48	36	15	6.986	G			>SD2117
2120	12N.14~19	N	37	28	16	7.090	E			
2121	14N.9	N	28	24	18	7.094	E			
2124	12N.21	N	25	(10)	15	7.155	A			
2125	14N.19	N	38	20	8	7.210	F			
2127	14N.25	N	41	27	21	7.077	F	粗粘		
2129	14N.13	N	62	37	11	7.098	C			>SD2128
2130	14N.24	N	24	24	8	7.217	D			
2131	14N.24	N	27	26	7	7.208	D			
2136	16N.15~20	N	46	42	19	7.176	E			
2137	15N.20	N	43	30	13	7.281	A			
2138	16N.5	N	26	25	22	7.229	E			
2139	16N.3	N	33	30	24	7.160	C			
2140	16N.22	N	(31)	(18)	32	6.716	A			

石船戸東遺跡10区 捨立柱建物 観察表

遺構番号	形式	グリッド	標出位置	規模(cm)		前面標高	裏土層状況	出土遺物	切り合い%	備考	
				平面	断面						
13	一面下部材梁間一隅材	35N. 36N	1	2.10	1.90	1.90 ~ 1.88	0.52 ~ 0.45	2.85	2.13 ~ 1.90	4.04	5.98
14	梁間一隅材	36N.	1 (1)	3.07	(3.07)	1.57 ~ 1.47		(1.65)	1.61	N 15° W	(4.88)
15	二面下部材梁間一隅材	36N.	1 (1)	2.20	2.27	2.27 ~ 2.00	0.90 ~ 0.60	5.60	(3.95)	2.41 ~ 2.34	N 5° E
16	一面下部材梁間一隅材	36N. 37N.	(1)	3.25	(2.90)	1.80 ~ 1.40	0.88 ~ 0.48	5.08	0.99	3.74 ~ 3.12	N 23° W
17	二面下部材梁間一隅材	37N. 37O. 38N. 38O.	2, 3	(3.92)	3.44	1.80 ~ 1.40	0.88 ~ 0.48	5.08	0.99	3.07 ~ 1.89	N 9° E
18	磁瓦建物	40G. 41O	2	4	(5.86)	(5.86)	2.87 ~ 2.60	(8.10)	(8.10)	2.09 ~ 1.52	N 21° E
										(47.47)	中世

観察表

石船戸東遺跡 10 区 井戸 観察表

遺跡番号	グリット	検出部位	発達時間	断面			断面(cm)					直面 標高 (m)	直上直下 標高 (m)	主縮方向	出土遺物	切り合い
				平面	側面	立ち上がり	上端 直傾	上端 斜傾	下端 直傾	下端 斜傾	深度					
2161	37N8. 37O3	IV	中世	円形	台形状	急斜度	(136)	133	50	50	221	5.727	A・G	井筒機、右(46) >SD2192		

石船戸東遺跡 10 区 土坑 観察表

遺跡番号	グリット	横出し	表面	断面			断面(cm)					直面 標高 (m)	直上直下 標高 (m)	主縮方向	出土遺物	切り合い		
				平面	側面	立ち上がり	上端 直傾	上端 斜傾	下端 直傾	下端 斜傾	深度							
2167	33N17	IV	中世	円形	台形状	急斜度	96	(48)	68	(26)	20	7.653	D	N-12°-W	土御賀土器、瓶 丸形、楕円	<SD2172、>SD2519		
2160	37N8. 13-14	IV	中世	(円形)	台形状	緩やか	117	(65)	88	(40)	39-50	7.597	A	N-26°-E	土御賀土器、瓶 丸形、楕円	<SD2456、>P2524		
2162	39N10. 15	IV	中世	(円形)	台形状	急斜度	(127)	127	(100)	94	36	7.131	D	N-8°-E	土御賀土器	>P2195		
2164	35N18	IV	中世	楕円形	台形状	急斜度	82	56	53	24	26	7.604	D	N-0°		>P2171		
2165	35N9. 13-14	IV	中世	(円形)	台形状	緩やか	190	(103)	166	(95)	13	7.833	C	N-82°-E	土御賀土器、瓶 丸形	<SD2456、>P2524		
2175	35N19	IV	中世	(長方形)	台形状	緩やか	131	(60)	106	(50)	10	7.881	D	N-7°-W				
2176	37N9	IV	中世	円形	台形状	急斜度	145	103	105	60	32	7.562	A	N-37°-W		& SX2529		
2190	36N9. 10	IV	中世	木桶形	台形状	急斜度	53	43	14	12	19	7.552	D	N-29°-W				
2200	39N15. 20	IV	中世	楕円形	台形状	急斜度	71	(41)	38	(23)	22	7.835	D	N-11°-W	土製品			
2210	35N21. 20	IV	中世	長方形	台形状	急斜度	(113)	85	72	(67)	34	7.378	C	N-25°-W	土御賀土器	>P2316、>P2508		
2254	34N4. 5-9	IV	中世	円形	楕状	直済	93	(91)	72	54	36	7.531	A	N-61°-W		>P2216、>P2445		
2256	37N2. 4	IV	中世	楕円形	台形状	急斜度	140	96	115	71	27	7.595	A	N-27°-W	土御賀土器	& SX2303、& P2320、& SX2529		
2261	38N11	IV	中世	(円形)	台形状	緩やか	75	(50)	61	40	7	8.075	D	N-7°-W		>P2315		
2283	37N8. 5-9	IV	中世	木桶形	平円形	急斜度	98	62	45	31	29	7.497	A	N-38°-E		>P2527、>P2528		
2286	36N18. 19	IV	中世	木桶形	楕状	直済	105	39	81	19	32	7.686	D	N-78°-E		>P2287、>P2480		
2303	37N4. 8-9	IV	中世	楕円形	台形状	緩やか	(60)	58	39	33	21	7.667	D	N-5°-W		& SX2256、& P2204		
2308	36N23. 24.37N3	IV	中世	木桶形	台形状	急斜度	(127)	(123)	(105)	(102)	30-59	7.584	C	N-25°-W	土御賀土器、瓶 丸形	<SD2299、>P2230、& SX2529		
2317	35N13. 20	IV	中世	楕円形	直済	直済	108	82	72	48	32	7.522	A	N-35°-E	土御賀土器			
2318	36N13. 14	IV	中世	木桶形	直済	緩やか	(177)	110	(160)	86	8-16	7.833	B	N-79°-E				
2326	29N1. 6	IV	中世	木桶形	台形状	急斜度	66	47	50	40	13	7.959	D	N-8°-W				
2335	40N13. 18	IV	中世	(木桶形)	木桶形	急斜度	(110)	(70)	73	30	19	8.066	D	N-83°-E		>P2515		
2384	41N17. 18	IV	中世	楕円形	台形状	急斜度	143	111	69	64	44	7.826	A	N-52°-W		& P2495、>P2496、 & P2497、>P2498		
2397	43N25	IV	中世	方形	台形状	緩やか	97	84	60	54	42	7.970	G	N-71°-W		>SD2403		
2404	44P11	IV	中世	楕円形	台形状	急斜度	90	71	64	44	15	8.257	F	N-50°-E	土御賀土器			
2411	44N14. 19	IV	中世	(円形)	台形状	急斜度	68	(33)	47	(26)	15	8.233	A	N-16°-W				
2422	45N10. 15.45P9.	IV	中世	(木桶形)	楕状	緩やか、 急斜度	(57)	52	(46)	32	10	8.359	D	N-88°-E				
2477	37N2. 21	IV	中世	(楕円形)	直済	急斜度	(165)	(138)	(109)	(48)	63	7.709	C	N-9°-W	土御賀土器、瓶 丸形	<SD2166、>SD2192		
2479	37N11. 16	IV	中世	(木桶形)	台形状	緩やか	104	(28)	88	(22)	20	8.066	D	N-9°-W		>SD2457		
2483	35N14	IV	中世	(円形)	台形状	直済	(32)	(25)	(27)	(20)	7	7.847	D	N-84°-E		& SD2182		
2484	35N14	IV	中世	(木桶形)	台形状	急斜度	80	(16)	66	(12)	14	7.843	D	N-7°-W		& SD2182		
2490	38N19. 20-24.25	IV	中世	(木桶形)	台形状	緩やか	277	(162)	214	(77)	70	7.450	G	N-10°-W		& SD2167、>SD2168		
2499	38N1. 6	IV	中世	(木桶形)	V字形	緩やか	(156)	(29)	(60)	(9)	70	7.602	A	N-8°-W	土御賀土器	& SD2192、>P2510		
2509	38N11. 12	IV	中世	(木桶形)	楕状	急斜度	(120)	27	(70)	(16)	29	7.918	D	N-33°-W		& SD2167		
2511	38N11. 12	IV	中世	(長方形)	直済	緩やか	(55)	(25)	(26)	(26)	20	7.886	D	N-17°-W		& SD2192		
2519	37N8. 13-14	IV	中世	(長方形)	楕状	急斜度	(62)	(60)	(24)	7	26	7.602	F	N-45°-W		& SD2160、>P2309		

観察表

石船戸東遺跡 10 区 溝 観察表

遺構 番号	グリット	検出 部位	発達 時期	形態		規格 (cm)				底面 状況	出土層 厚さ (cm)	主堆方向	出土遺物	切り合い	備考		
				断面	底上り 直角	上端 直角	下端 直角	下端 斜角	深度								
2145	29N,29N	N	中世	台形状	急斜度	(445)	92	(430)	58	24	7.664	D	N 79° -W				
2146	29N,30N	N	近世	台形状	急斜度	(853)	40	(814)	20	23	7.479	A	N 5° -E				
2147	30N	N	近世	台形状	急斜度	(303)	34	(325)	20	16	7.600	D	N 10° -E				
2148	30N,31N	N	近世	台形状	急斜度	(403)	48	(381)	25	10	7.610	D	N 3° -E	<SD2149			
2149	31N	N	中世	弧状	緩やか	(435)	155	(401)	55	41~50	7.247	C	N 26° -E	>SD2148			
2151	31N	N	中世	台形状	急斜度	(74)	50	(62)	37	10	7.691	D	N 85° -E				
2152	31N,32N	N	近世	階段状	緩やか	(798)	34	(749)	16	10~20	7.653	D	N 82° -W	磁鐵	<SD2153		
2153	31N,32N	N	近世	台形状	急斜度	(811)	38	(846)	25	13	7.634	D	N 83° -E	N 2° -W	>SD2152		
2156	33N	N	中世	台形状	緩やか	(394)	132	(396)	105	20	7.620	B	N 72° -E				
2158	33N	N	近世	弧狀	直角	(64)	31	(60)	20	10	7.906	D	N 67° -E				
2163	39N,39O	N	中世	円凹状	急斜度	(541)	215	(305)	57	52	7.645	A	N 88° -W	鹿鹿骨、上顎骨 脛骨、馬頭骨、舟骨、 右(446)、歯製品	<SK2477, >P2421		
2166	37N,37O	N	近世	台形状	直角	(487)	54	(480)	28	22~43	7.626	A	N 90°	鉄製品	>SK2477, >P2421		
2167	38N,38O	N	中世	台形状	急斜度	(458)	176	(297)	62	65~83	7.375	B	N 83° -E	鹿鹿骨、上顎骨 脛骨、馬頭骨、右(446)、歯製品	<SD2168, >P2420		
2168	38N,38O	N	中世	台形状	緩やか	(516)	93	(470)	28	34	7.752	A	N 85° -W	珠洲鏡、磁鐵	<SD2167, >SK2490		
2169	39N,39O	N	中世	台形状	直角	(485)	99	(475)	40	17	8.301	D	N 87° -W	陶瓶			
2170	39N,39O, 40O	N	中世	円凹状	直角	(485)	95	(467)	26	23	7.859	D	N 89° -W				
2172	37N,37O	N	中世	台形状	直角	(506)	32	(500)	20	17	7.566	D	N 66° -E		<SK2160, >P2454, >P2518, >SK2529		
2182	35N	N	中世	弧状	直角	(216)	73	(194)	52	26	7.736	D	N 66° -E		>P2183, >SD2426, >SK2484		
2191	39N,39O	N	中世	台形状	急斜度	(467)	111	(462)	54	32	6.414	D	N 81° -E	上顎骨、鹿鹿骨 脛骨、右(446)	>SD2466		
2192	37N,37O, 38O	N	中世	台形状	直角 - 急斜度	930	38	894	22	17~60	7.725	D	N 17° -W	上顎骨、鹿 鹿鹿骨	>SK2161, >P2458, >P2459, >SK2477, >P2419, >P2491, >P2509, >SK2526, >P2510, >SK2511, >P2512, >P2521, >P2520		
2209	36N,36O, 37N,37O	N	近世	台形状	直角 - 急斜度	(506)	68	(497)	26	26~30	7.714	D	N 85° -W		>SK2308, >P2482, >P2507, >SK2529		
2356	40O	N	近世	台形状	急斜度	(460)	68	(465)	39	38	6.216	D	N 88° -W		>P2153, >P2154, >P2359, >P2360		
2396	43O	N	中世	台形状	急斜度	170	66	54	52	20~42	7.803	A	N 25° -W				
2401	43O	N	中世	弧状	緩やか	(740)	460	(500)	200	31	8.043	D	N 20° -W	磁鐵	>SD2403		
2402	43O	N	中世	弧状	緩やか	233	40	211	18	13	8.116	D	N 21° -W		>SD2403		
2403	43O	N	中世	弧状	緩やか	(192)	600	(110)	17	27	8.110	F	N 19° -W		>SK2397, >SD2402		
2410	44P	N	中世	台形状	直角	(488)	347	(425)	220	17	8.334	D	N 29° -W				
2420	37N	N	中世	台形状	直角	(68)	26	(59)	16	4~7	7.950	D	N 61° -E				
2426	35N	N	近世	台形状	直角	(246)	45	(246)	21	29	7.786	D	N 89° -W		>SK2165, >SD2182		
2429	35N,36N	N	中世	弧状	急斜度	60	(42)	(42)	35	19~21	7.814	D	N 87° -E		>P2430		
2457	37O	N	中世	円凹状	直角	92	41	(55)	16	42	7.850	D	N 26° -W	珠洲鏡、熟製品	>SK2479		
2466	39O	N	中世	台形状	緩やか	(74)	(68)	(44)	(31)	20	8.016	D	N 90° -E		>SD2191		
2517	37O	N	中世	階段状	急斜度	(160)	40	(52)	26	28~36	7.995	E	N 57° -E		>SK2479		

石船戸東遺跡 10 区 性格不明遺構 観察表

遺構 番号	グリット	検出 部位	発達 時期	形態		規格 (cm)				底面 状況	出土層 厚さ (cm)	主堆方向	出土遺物	切り合い	備考	
				平面	断面	底上り 直角	上端 直角	上端 斜角	下端 直角							
2529	36N,19°, 35N,24°, 35,37N2- 4- 5- 9- 10- 14- 15	N	中世	直方形	台形状	緩やか	705	(292)	650	250	7	7.851	N 19° -W			SD2172, >SK2180, >SK2236, >P2275, > P2276, >P2282, >SK2293, >P2292, >P2293, >P2294, >P2295, >P2296, >P2297, >P2298, >SD2299, >P2305, >P2306, >P2307, >P2308, >P2310, >P2311, >P2312, >P2314, >P2315, >P2316, >P2317, >P2318, >P2319, >P2418, >P2419, >P2420, >P2421, >P2422, >P2512, >P2527, >P2528

観察表

石船戸東遺跡 10 区 ピット 観察表 (1)

遺構番号	ブリッド	横出 傾斜	上面長径 (cm)	上面短径 (cm)	深度	前面標高 (m)	面土層厚 状況	出土物類	図り合ひ	備考
2150	3IN13	N	25	23	35	7.420	E			
2154	3IN16	N	25	19	14	7.642	E			
2155	3IN22,3IN2	N	29	29	21	7.621	D			
2159	3IN9	N	36	33	33	7.791	E			
2171	3IN18・23	N	30	22	16	7.774	E		>SK2164	
2173	3IN23	N	49	41	57	7.220	E			
2174	3IN23	N	32	31	35	7.472	E			
2176	3IN3	N	15	(8)	24	7.790	D			
2177	3IN24・25	N	50	42	42	7.613	E			
2178	3IN23	N	34	25	22	7.661	D		>P2179	
2179	3IN23	N	27	(16)	24	7.610	E		>P2178	
2181	3IN24,3IN4	N	39	(22)	31	7.573	E		>P2184	
2183	3IN4	N	24	23	32	7.379	D		>SE0182	
2184	3IN24,3IN4	N	48	39	35	7.513	E		>P2181	個別層
2185	3IN9	N	26	20	17	7.655	E			
2186	3IN3	N	27	23	22	7.550	E			
2187	3IN8	N	27	24	40	7.405	D			
2188	3IN19・19	N	33	32	20	7.728	E		>P2440, >P2441	
2189	3IN10	N	25	22	16	7.757	E			
2193	3IN8	N	39	19	13	7.723	E			
2194	3IN8	N	25	16	22	7.627	E			
2195	3IN19	N	44	(37)	43	7.468	E		>SK2175	
2196	3IN19	N	30	28	37	7.536	E			
2197	3IN19・24	N	55	46	44	7.416	E	土製品	>P2319	
2198	3IN24	N	28	27	26	7.647	C			
2199	3IN4	N	49	44	79	7.701	E	土師器口縁		
2201	3IN14・15	N	26	25	30	7.484	E			
2202	3IN14・15	N	38	28	10	7.795	E		>P2203	
2203	3IN14・15	N	36	31	46	7.328	E		>P2202	
2204	3IN8・9・13・14	N	30	26	35	7.463	E			
2205	3IN13	N	34	23	21	7.652	E			
2206	3IN18	N	24	10	19	7.674	C			
2207	3IN13	N	20	19	19	7.816	E			
2208	3IN18	N	24	20	7	7.796	E			
2209	3IN23・24	N	44	37	25	7.557	E			
2211	3IN4	N	27	22	32	7.550	D			
2212	3IN9	N	21	19	13	7.707	E			
2213	3IN4	N	40	32	19	7.665	E			
2214	3IN4・9	N	24	24	24	7.339	D			
2215	3IN9	N	23	21	32	7.491	D			
2216	3IN9	N	34	(30)	31	7.550	A		>SK2234	
2217	3IN9	N	33	29	37	7.473	E			
2218	3IN9・10	N	25	19	32	7.588	E			
2219	3IN9	N	25	20	15	7.745	D			
2220	3IN9・14	N	22	19	27	7.575	E			
2221	3IN14	N	18	15	39	7.511	D			
2222	3IN14	N	19	18	7	7.822	E			
2223	3IN15・20	N	28	23	48	7.403	D			
2224	3IN24	N	27	34	45	7.767	D			
2225	3IN29	N	33	30	60	7.447	E			
2226	3IN20	N	26	25	14	7.854	E		>P2284	
2227	3IN20・25	N	49	(20)	49	7.807	E			
2228	3IN18	N	25	23	44	7.741	D			
2229	3IN18	N	22	20	15	7.764	D			
2230	3IN23	N	27	(14)	76	7.317	E		>SK2208	
2231	3IN4	N	44	(42)	43	7.403	E		>P2232	
2232	3IN4	N	42	40	44	7.457	E		>P2231	
2233	3IN4	N	28	24	10	7.768	D			
2235	3IN4	N	30	27	45	7.491	E	土師器		
2237	3IN20	N	32	28	20	7.953	D		>P2238	
2238	3IN20	N	28	(23)	18	7.931	D		>P2237	
2239	3IN19	N	28	22	19	7.966	E			
2240	3IN16	N	30	22	25	7.908	D		>SD2167	
2242	3IN011	N	24	21	10	8.040	D			
2243	3IN011	N	29	25	14	8.034	D			
2244	3IN15,3IN011	N	39	30	30	7.927	E			
2245	3IN15	N	42	30	26	7.925	A			
2246	3IN15	N	28	24	66	7.511	D			
2247	3IN15	N	23	23	26	7.820	D			
2248	3IN15	N	30	27	27	7.766	E			
2249	3IN15	N	30	26	35	7.757	D			
2250	3IN15	N	30	26	39	7.779	E			
2251	3IN06・11	N	33	(31)	18	7.945	E		>P2252	
2252	3IN06	N	34	32	22	7.947	E		>P2251	
2253	3IN06	N	28	23	13	8.007	D			
2255	3IN06	N	30	(20)	35	7.805	D		>P2256	
2256	3IN0,3IN06	N	40	34	27	8.023	D		>P2255	
2257	3IN10	N	49	38	38	7.763	D			
2258	3IN10	N	30	29	33	7.832	E			
2259	3IN10	N	31	21	8	8.022	D			
2260	3IN10	N	29	28	46	7.606	D			
2261	3IN10	N	28	22	15	7.947	D			

観察表

石船戸東遺跡 10 区 ピット 観察表 (2)

遺跡番号	グリッド	緯度	経度 (cm)	深度 (cm)	前面標高 (m)	面土壠積状況	出土遺物	見り合い	備考
2262	38N9' - 10'	N	37	30	26	7.839	E		>P2263
2263	38N9'	N	39	(26)	17	7.848	E		>P2262
2264	38N14'	N	31	28	13	7.972	D		
2265	38N5, 38S03'	N	36	28	17	7.901	D		
2266	38N5'	N	27	27	20	7.909	D		
2267	38N5'	N	40	37	30	7.793	E		
2268	38N5'	N	27	24	37	7.462	E	鉄製品	
2269	38N4'	N	29	26	30	7.729	E		
2270	38N4'	N	27	22	19	7.829	D		
2271	38N4'	N	40	34	20	7.682	E		
2272	38N14'	N	32	25	29	7.574	E		>P2273
2273	38N14' - 15'	N	(23)	22	30	7.642	D		>P2272
2274	37N5'	N	51	32	42	7.569	F		
2275	37N15'	N	59	41	52	7.429	E		≤ SX2529
2276	37N9'	N	25	21	23	7.621	D		≤ SX2529
2277	37N20'	N	26	22	23	7.798	D		
2278	37N19'	N	32	25	23	7.804	D		
2279	37N30' - 25'	N	35	30	33	7.716	D		
2280	37N14'	N	35	27	21	7.737	E		
2281	37N14'	N	27	23	23	7.746	D		
2282	37N14' - 15'	N	25	25	32	7.621	D		
2284	36N20'	N	(15)	(15)	20	7.780	F		>P2235, < P2285
2285	36N20'	N	33	(25)	22	7.767	E		>P2284
2287	36N18' - 19'	N	23	(20)	27	7.650	D		>P2286, >P2480
2288	36N18'	N	26	22	20	7.741	A		>P2287, >P2480
2289	36N18'	N	28	23	16	7.778	D		>P2290
2290	36N18'	N	27	(23)	10 ~ 13	7.806	F		>P2290, >P2291
2291	36N18'	N	32	(27)	12	7.814	D		>P2290
2292	37N5'	N	38	30	18	7.715	E		≤ SX2529
2293	37N5'	N	40	35	18	7.759	D		≤ SX2529
2294	37N4' - 5'	N	44	32	43	7.474	D		≤ SX2529
2295	37N4'	N	32	28	39	7.492	E		≤ SX2529
2296	36N24.3, 37N4'	N	32	30	29	7.409	A		≤ SX2529
2297	37N4'	N	28	21	12	7.755	A		≤ SX2529
2298	37N4'	N	35	28	40	7.442	E		≤ SX2529
2301	37N3'	N	33	27	60	7.547	E		
2304	37N9'	N	30	30	40	7.471	D		>SK2303
2305	36N24'	N	33	(25)	25	7.557	E		>P2306, ≤ SX2529
2306	36N23' - 24'	N	44	33	32	7.381	E		>P2306, >P2307, ≤ SX2529
2307	36N23'	N	39	(33)	31	7.430	E		>P2306, ≤ SX2529
2309	37N8'	N	40	(15)	54	7.610	C		SX2519
2312	37N10'	N	26	20	14	7.788	D		≤ SX2529
2313	37N4'	N	31	30	28	7.564	C		土壤剖面, 木製品
2314	37N14'	N	38	31	60	7.359	D		≤ SX2529
2315	38O1.1'	N	28	25	48	7.670	D		>SK2241
2316	36N3' - 4'	N	54	46	36	7.488	A		>SK2210, >P2508
2319	35N24'	N	52	(45)	55	7.297	D		>P2197
2320	37N3'	N	24	24	15	7.519	F		鉄製品
2321	35N23'	N	20	15	31	7.599	D		≤ SK2236
2322	35N23'	N	25	20	11	7.772	D		
2323	36N19'	N	37	30	25	7.689	D		
2324	36N19'	N	15	15	18	7.772	D		
2327	36N3' - 8'	N	36	34	19	7.487	E		
2328	37N3' - 4'	N	29	20	13	7.526	E		≤ SK2236
2329	36N24.3, 37N4'	N	31	21	33	7.738	D		
4001	N	39	25	23	7.841	B			
4001	N	24	34	29	7.815	D			
4006	N	31	30	31	7.837	D			
4007' - 12'	N	42	40	39	7.647	E			
4007' - 8'	N	22	20	31	7.884	D			
4007' - 18'	N	42	29	32	8.017	A			
4007'	N	39	28	32	7.763	D			
4008'	N	34	33	40	7.724	D			
40021 - 22'	N	36	33	32	7.444	D			
4007' - 18'	N	32	30	34	7.861	A			
40017	N	25	21	22	7.930	E			
40017	N	26	23	19	7.973	D			
40012	N	30	25	19	7.648	F			
38016	N	29	(13)	(41)	7.616	C		>SD2167	
40023	N	56	48	47	7.660	C		>P2347, >P2464	
40023	N	25	(10)	-	-	D			
40023	N	28	23	20	7.971	D		>P2345	
40053	N	28	25	40	7.784	D			
40022	N	36	28	17	7.962	D			
40022	N	29	22	12	7.972	D			
40031	N	24	22	25	7.715	D			
40016	N	32	(27)	-	7.949	E		>SD2356, >P2368	
40017	N	32	30	36	7.711	A		>SD2356, >P2359	
40022	N	24	20	22	7.809	D			
37N24	N	32	31	48	7.563	E			
37N24	N	31	23	22	7.751	D			

観察表

石船戸東遺跡 10 区 ピット 観察表 (3)

遺構番号	ブリッド	横径	縦径 (cm)	底面標高 (m)	廻土層状況	出土物	図り合ひ	備考
2369	40017	N	(31)	30	32	7.099	D	>P2354, <SD2356
2369	40017	N	15	11	8	7.732	D	>SD2356
2361	4103	N	36	28	40	7.731	E	>P2361, >P2364, <P2365
2362	4103	N	36	30	41	7.691	E	>P2361, >P2363, >P2364, >P2365
2363	4102・3	N	26	22	30	7.917	D	>P2362
2364	4103	N	24	(19)	10	8.132	D	>P2361, <P2362
2365	4103	N	25	(19)	19	8.090	E	>P2361, <P2362
2366	4103	N	23	18	21	7.904	D	
2367	4103	N	22	17	30	7.917	D	
2368	40016	N	46	(36)	36	8.142	E	>P2353
2369	4108・9	N	48	40	30	8.194	E	青磁 >P3475
2370	4108	N	48	41	30	7.971	E	
2371	4107・8	N	51	42	30	7.980	E	
2372	4107	N	84	77	54	7.725	E	
2373	4108	N	66	48	32	7.968	E	
2374	4107・8	N	75	72	57	7.720	E	
2376	41012・13	N	66	65	45	7.768	E	
2377	4105・13	N	53	46	30	7.655	E	
2378	41013・13・14	N	79	71	36	7.747	E	>P2476
2379	41011	N	53	46	51	7.717	E	>P2380, >P2381
2380	41013	N	42	(20)	11	7.979	E	>P2378, >P2381
2381	41013・16	N	45	39	36	7.753	E	>P2378, >P2380
2382	41018・19	N	46	44	34	7.979	E	
2383	41018	N	48	40	35	7.990	E	>P2381
2385	41018	N	63	53	39	7.856	E	
2386	41019	N	62	60	53	7.818	E	>P2387
2387	41018・19	N	63	62	30	8.019	E	>P2386
2388	41024	N	46	42	24	8.119	E	
2389	41024	N	50	48	37	8.002	E	
2390	41023	N	47	45	33	7.983	E	
2391	4209	N	48	46	39	7.872	E	
2395	4309	N	41	33	14	8.061	E	
2398	43025,4405	N	37	31	9	8.301	D	
2406	44P12	N	23	19	22	8.159	D	
2407	44P11	N	25	(16)	18	8.232	D	
2408	44P11	N	34	29	27	8.069	D	
2409	44P16・17	N	35	28	47	7.934	D	
2414	45P6	N	36	31	27	8.164	A	
2415	44P17	N	30	(21)	52	7.946	D	黒色土層
2416	30N14・19	N	24	21	18	7.708	D	
2417	37N9	N	31	30	34	7.592	D	>P2418, & SX2329
2418	37N9・10	N	(28)	25	15	7.728	D	>P2419, & SX2317, & SX2329
2419	37N9・10	N	28	27	15	7.735	D	& P2418, & SX2329
2421	37N24	N	23	(10)	59	7.581	D	& SX2166
2423	4200・8	N	62	60	40	7.759	F	
2424	4208	N	40	38	24	7.870	D	
2425	36N18	N	33	25	11	7.806	E	
2428	44P17	N	22	(13)	22	8.166	D	
2430	36N5	N	55	40	60	7.432	D	>SD2429
2431	36N5	N	47	33	13	7.915	D	
2432	36N10	N	32	(16)	59	7.483	D	
2433	36N15	N	36	(20)	52	7.547	D	
2434	36N20	N	37	(27)	27	7.768	D	
2435	36N20	N	25	22	14	7.886	D	
2436	36N20	N	27	25	16	7.851	D	
2437	36N25	N	50	(17)	12	7.894	D	
2438	36N25	N	22	(18)	15	7.858	D	
2439	36N25	N	31	30	7	7.940	D	
2440	35N13・18	N	32	(32)	19	7.748	E	>P2188
2441	35N18・19	N	42	41	19	7.692	E	>P2188
2442	35N24・25	N	41	38	17	7.723	E	
2444	36N30	N	40	36	9	7.721	E	
2445	36N4・9・10	N	30	24	11	7.453	D	>SK2234
2447	37N5,37O1	N	44	35	55	7.206	E	
2448	37N5,37O1	N	44	35	52	7.495	E	>P2493
2450	37N5・10,37O1・6	N	42	35	46	7.565	E	>P2494
2451	37N10,37O1	N	70	53	31	7.716	D	
2452	37O6	N	30	22	14	7.948	D	
2454	37O6・11	N	30	20	7	8.024	D	>SD2172
2455	37O11	N	80	(47)	56	7.387	E	>P2456
2456	37N15,37O11	N	(41)	(22)	41	7.728	D	>P2455, <P2514
2458	38O1	N	37	(15)	29	7.953	D	>SD2192
2459	38O6	N	44	38	28	7.576	D	>SD2193
2463	40O8・13	N	55	28	54	7.731	D	
2464	40O9-3	N	50	(25)	15	8.133	D	>P2345
2465	40O9-3	N	62	(27)	10	8.160	D	
2467	41O3	N	30	22	18	8.090	D	
2468	41O2・3	N	86	63	72	7.558	C	
2469	36N5・10	N	34	(24)	21	7.875	D	
2470	36N10	N	36	(20)	44	7.394	E	>P2481

観察表

石船戸東遺跡 10 区 ピット 観察表 (4)

遺構番号	グリッド	緯度	周囲 (cm)	周囲標高 (m)	南北差傾き状況	出土遺物	切り合い	備考
			上端長径 上端短径 深度					
2471	36N10	N	28 (20)	39	7.701	D		
2472	36N10	N	31 (22)	34	7.730	D		
2473	35N20	N	50 42	10	7.901	D		
2474	35N30・25	N	22 18	10	7.915	D		
2475	41O3・4・8・9	N	67 57	58	7.917	E	>P2369	
2476	41O8・9	N	51 40	50	7.947	E	>P2378	
2478	41O12・13	N	64 55	50	7.856	E		
2480	36N18	N	(28) (23)	16	7.683	A		
2481	36N10	N	28 (10)	43	7.664	E	>P2388 >P2470	
2482	36N24	N	40 35	35	7.499	E	>SU2299, & SX2529	
2485	36N15	N	33 31	45	7.640	D		
2486	36N10・15	N	28 (14)	22	7.873	D		
2491	37N15・20	N	25 22	21	7.817	D	>SD2192, >P2492	
2492	37N15・20	N	40 (33)	24	7.797	D	>SD2192, >P2491	
2493	37N5	N	26 (15)	21	7.797	D	>P2448	
2494	37N5,37O3	N	24 (19)	31	7.700	E	>P2450	
2495	41O17・18	N	21 20	14	7.708	D	>SK2384	
2496	41O17	N	18 15	16	7.668	D	>SK2384	
2497	41O17	N	20 15	16	7.704	D	>SK2384	
2498	41O17	N	16 14	14	7.847	D	>SK2384	
2500	41O18・23	N	43 43	25	8.078	E		
2501	41O12	N	62 50	36	7.859	E		
2502	38N14	N	37 (27)	11	7.919	E		
2503	38N9	N	39 27	14	7.884	E		
2504	38O6	N	38 (15)	26	7.853	E		
2505	38O1	N	39 23	19	7.692	E	>SD2192	
2506	43P21	N	36 (29)	45	7.960	D		
2507	36N24,37N4	N	58 42	34	7.446	E	土製品	>SD2299, & SX2529
2508	36N3	N	52 38	63	7.205	D		>SK2210, <P2316
2510	38O1	N	28 (13)	44	7.769	D		>SD2192, & SK2499
2512	36N23	N	32 28	40	7.539	E		& SX2529
2514	37O11	N	42 30	30	7.849	D	>P2456	
2515	40O13・18	N	43 25	21	7.871	D	>SK2335	
2516	40O03	N	39 35	34	7.730	D		
2518	37N15	N	49 38	25	7.741	D		>SD2192, >P2521
2519	38O1	N	(40) (20)	13	8.110	D		>SD2192, >P2520, >P2522
2521	38O1	N	24 16	58	7.643	D		>SD2192, >P2521
2522	38O1	N	27 24	12	8.106	D		>SD2192, >P2520, >P2522
2523	38O11・12	N	32 31	35	7.472	有		
2524	35N13・14	N	35 (10)	25	7.774	D		>SK2166
2525	35N2・3	N	34 30			D		
2526	35N4	N	32 32			D		
2527	37N5	N	35 30	24	7.678	D		>SK2283, >P2528, >P2529
2528	37N4・5・9・10	N	31 (26)	23	7.479	D		>SK2283, >P2527, & SX2529

石船戸東遺跡 10 区 挖立柱建物の柱穴 観察表 (1)

SB13	グリッド	緯度	周囲 (cm)			出土遺物	柱底	切り合い
			上端長径	上端短径	深度			
2173	35N23		49 41	57	7.220			
2174	35N23		32 31	35	7.472		有	
2197	35N19・24		55 48	44	7.418	土製品	有	>P2319
2199	36N4		49 44	70	7.701	土製品上部	有	
2231	36N4		44 (42)	43	7.403		有	>P2232
2232	36N4		42 40	44	7.457		有	>P2231
2271	36N4		40 34	26	7.582		有	
2316	36N2・4		54 46	36	7.488			>SK2210, >P2508
2319	35N24		52 (45)	55	7.297			>P2197
2508	36N3		52 38	63	7.205			>SK2210, >P2316

SB14	グリッド	緯度	周囲 (cm)			出土遺物	柱底	切り合い
			上端長径	上端短径	深度			
2203	36N14・15		36 31	46	7.328		有	>P2202
2223	36N15・20		28 23	48	7.482			
2226	36N20		26 25	14	7.854			>P2284
2436	36N20		27 25	16	7.851			
2480	36N10・15		28 (14)	22	7.873			

観察表

石船戸東遺跡 10 区 坑立柱建物の柱穴 観察表 (2)

通標 番号	グリッド	断面 (cm)			底面標高 (m)	出土遺物	柱種	切り合い
		上端直径	下端直径	深度				
2187	36N8	27	24	40	7.425			
2189	36N10	25	22	15	7.767		有	
2194	36N8	25	18	22	7.627		有	
2201	36N14・15	26	25	30	7.484		有	
2204	36N8・9・13・14	30	26	35	7.483		有	
2212	36N9	21	19	13	7.707		有	
2214	36N4・9	24	24	24	7.339			
2218	6N9・10	25	19	32	7.588		有	
2219	36N9	25	20	15	7.745			
2220	36N9・14	22	19	27	7.675		有	
2221	36N14	18	15	39	7.511			
2222	36N14	19	18	7	7.822		有	
2228	36N18	25	23	44	7.741			
2233	36N4	28	24	10	7.768			
2272	36N14	32	25	29	7.574		有	>P2273
2416	36N14・19	24	21	18	7.708			
2430	36N5	55	40	60	7.432			=SD2429
2432	36N10	32	(15)	59	7.483			
2445	36N4・9・10	30	24	11	7.453			=SK2234
2481	36N10	28	(10)	43	7.664		有	>P2470
2485	36N15	33	31	45	7.640			

通標 番号	グリッド	断面 (cm)			底面標高 (m)	出土遺物	柱種	切り合い
		上端直径	下端直径	深度				
2220	36N18	22	20	15	7.764			
2230	36N23	27	(14)	76	7.317		有	>SN2308
2275	37N15	90	41	52	7.429			≤ SX2529
2276	37N9	25	21	22	7.621		有	≤ SX2529
2280	37N14	35	27	21	7.737			
2282	37N14・15	25	25	32	7.621			≤ SX2529
2287	36N18・19	23	(20)	27	7.650			=P2288, >P2480
2288	36N18	26	22	39	7.741			>P2287, >P2480
2289	36N18	26	23	16	7.778			>P2590
2290	36N18	27	(23)	10 ~ 13	7.806		有	=P2289, >P2291
2291	36N18	32	(27)	12	7.814			>P2590
2295	37N4	33	29	39	7.492		有	≤ SX2529
2296	36N24, 37N4	32	30	29	7.409			≤ SX2529
2297	37N4	23	21	12	7.755			≤ SX2529
2298	37N4	35	28	40	7.442		有	≤ SX2529
2302	37N3	33	27	60	7.547			
2304	37N9	30	30	40	7.471			>SK2303
2306	36N23・24	44	33	32	7.381		有	>P2305, >P2307, ≤ SX2529
2307	36N23	39	(33)	32	7.381		有	=P2306, ≤ SX2529
2313	37N4	31	30	28	7.564	上端貫土器, 土製品		≤ SX2529
2314	37N14	38	31	60	7.359			≤ SX2529
2417	37N9	31	30	34	7.592			>P2418, ≤ SX2529
2418	37N9・10	(28)	25	15	7.728			>P2419, >P2417, ≤ SX2529
2419	37N9・16	28	27	15	7.785			>P2418, ≤ SX2529
2507	36N24, 37N4	58	42	34	7.446			=SD2599, ≤ SX2529
2512	36N23	32	28	40	7.539		有	≤ SX2529
2518	37N15	49	38	25	7.741			=SD2172
2527	37N9	35	30	24	7.678			=SK2283, >P2528, ≤ SX2529
2528	37N4・5・9・10	31	(26)	23	7.479			=SK2283, >P2527, ≤ SX2529

観察表

石船戸東遺跡 10 区 坑立柱建物の柱穴 観察表(3)

遺構 番号	グリッド	断面(cm)			真高標高 (m)	出土遺物	柱種	切り合い
		上端長径	上端短径	深度				
2129	38N9	36	33	33	7.791		有	
2235	38N4	30	27	45	7.451	土師器	有	
2242	38O11	24	21	10	8.040			
2243	38O11	29	25	14	8.034			
2244	38N15,38O11	39	30	29	7.927		有	
2245	38N15	42	30	26	7.925			
2247	38N15	23	23	26	7.820			
2248	38N15	30	27	27	7.786		有	
2249	38N15	30	26	35	7.757			
2251	38O6・11	32	(31)	18	7.945		有	>P2252
2252	38O6	34	32	22	7.947		有	>P2251
2253	38O6	28	23	13	8.007			
2256	38N10,38O6	40	34	27	8.023			>P2255
2256	38N10	30	29	33	7.832		有	
2259	38N10	31	21	8	8.022			
2260	38N10	29	28	46	7.608			
2261	38N10	28	22	15	7.947			
2264	38N14	31	28	13	7.972			
2265	38N5,38O1	30	28	17	7.901			
2266	38N5	27	27	29	7.909			
2267	38N5	40	37	30	7.793		有	
2268	38N5	27	24	37	7.482	鉄製品	有	
2269	38N4	29	26	30	7.729		有	
2270	38N4	27	22	19	7.829			
2274	37N20	51	32	42	7.569		有	
2277	37N20	26	22	23	7.798			
2278	37N19	32	25	23	7.804			
2279	37N20・25	35	30	33	7.716			
2315	38O11	28	25	48	7.670			>SK2241
2337	37N24	32	31	48	7.563		有	
2450	38O6	44	28	28	7.576			>SD2192
2502	38N14	37	(27)	11	7.919		有	
2503	38N9	30	27	14	7.684		有	
2504	38O6	38	(15)	26	7.853		有	
2505	38O1	30	23	19	7.692		有	>SD2192
2510	38O1	28	(13)	44	7.769			>SD2192, >SK2499
2521	38O1	24	16	58	7.643			>SD2192, >P2520, >P2522
2522	38O1	27	24	12	8.106			>SD2192, >P2521

遺構 番号	グリッド	断面(cm)			真高標高 (m)	出土遺物	柱種	切り合い
		上端長径	上端短径	深度				
2348	41O23	28	25	40	7.784	青磁	有	>P2475
2369	41O8・9	48	40	30	8.194		有	
2372	41O7	84	77	54	7.725		有	
2377	41O8・12	53	46	30	7.655		有	
2381	41O13・18	45	39	35	7.753		有	>P2379, >P2380
2382	41O16・19	46	44	34	7.979		有	
2383	41O18	48	40	35	7.990		有	>P2381
2385	41O18	63	53	39	7.856		有	
2389	41O24	50	48	37	8.002		有	
2469	41O2・3	86	63	72	7.558		有	
2478	41O12・13	64	55	50	7.856		有	
2500	41O18・23	42	43	25	8.078		有	

観察表

石船戸東遺跡III 土器・陶磁器 観察表

報告番号	基種	出土場所	遺物 / 断片	種類	基盤	口径	高さ	底径	法量 (cm)			内面色調	外面色調	胎土	調査 / 文様	使用状況	備考
									口徑	高さ	底径						
1	16011	SD2109	1	須恵器	帶輪				6.0	1.0		灰白色	灰白色	砂	内面: 手行丁子工具 外面: 手行丁子工具 内面: 手行タタキ		体部
2	16017	SD2109	1	須恵器	帶				灰白	灰白		灰、白	灰、白	砂	内面: 手行丁子工具 外面: 手行タタキ	縫隙	
3	16N5	SD2109	1	須恵器	蓋				灰灰色	灰白		灰、白	灰白	砂	内面: 手行丁子工具 外面: 手行タタキ		
4	15N24	SD2110	3	上縁貫入器	杯	13.2	3.1	9.0	灰灰白	浅灰白色		薄灰白色	薄灰白色	砂	内面: ナマテ 外面: ナマテ		全体的に摩耗
5	15N24	SD2110	3	上縁貫入器	杯	12.4	2.9	9.0	灰灰白	灰白		灰、白	灰白	砂	内面: ナマテ 外面: ナマテ		全体的に摩耗
6	15N25	SD2110	3	上縁貫入器	杯	12.6	3.2	6.8	褐灰白	灰白		灰、白	灰白	砂	内面: ナマテ 外面: ナマテ		全体的に摩耗、底部に切欠
7	15N4	SD2110	1	須恵器	片口縫		28.2		灰白	灰白		灰、白	灰白	砂	内面: 1条以上の割目 外面: ナマテ		残存1/9以下
8	15N25	SD2110	1	須恵器	帶				灰白	灰白		砂	内面: 手行丁子工具 外面: 手行丁子工具 内面: 手行タタキ		縫隙		
9	17N5	SD2110	1	須恵器	帶輪				灰白色	灰白色		砂	内面: 手行丁子工具 外面: 手行タタキ		縫隙		
10	17O12	SD2110	2	須恵器	帶				灰白	灰白		砂	内面: 手行丁子工具 外面: 手行タタキ		体部、粘土層上 底部		
11	15N18	SD2110	3	須恵器	帶				灰白	灰白		砂	内面: ナマテ 外面: ナマテ		底部		
12	17O1	SD2110	1	白磁	瓶	10.0			灰白色	灰白色						口光	
13	16N20	SD2110	1	須恵器	板付 鉢底				灰白	灰白		黑	内面: 手行丁子工具 外面: 手行タタキ			一端(火照)の焼 成原因	
14	38N5	SD2163	1	須恵器	片口縫		31.5		灰灰白	灰白		砂	内面: 手行丁子工具 外面: ナマテ				
15	39N5	SD2163	1	須恵器	片口縫				灰白	灰白		砂	内面: 1条以上の割目 外面: ナマテ			内面: 磨耗化	
16	39N5	SD2163	1	須恵器	片口縫				灰白	灰白		砂	内面: ナマテ 外面: ナマテ				
17	39N5	SD2163	1	須恵器	片口縫				褐灰白	灰白		砂、灰	内面: 1条以上の割目 外面: ナマテ			体部、内面: 傷 地に手干手印	
18	39N5	SD2163	1	須恵器	帶輪				灰白	灰白		砂	内面: 手行丁子工具 外面: 手行タタキ			内面: 黑分?	体部
19	39O1	SD2163	1	須恵器	帶輪				灰白	灰白		砂	内面: 手行丁子工具 外面: 小形 内面: ナマテ			林部	
20	39N5	SD2163	1	須恵器	帶				灰白	灰白		砂	内面: ナマテ			底部	
21	38O16	SD2167	1	須恵器	蓋				褐灰白	灰白		砂	内面: ナマテ 外面: ナマテ			(1縫隙、最高11 cm、幅10.5cm)	
22	38N20	SD2167	1	須恵器	帶輪				灰白	灰白		砂	内面: 手行丁子工具 外面: ナマテ			体部	
23	38N25	SD2167	2	須恵器	帶輪				灰白	灰白		砂	内面: 手行丁子工具 外面: ナマテ			内面: 磨耗化	体部
24	39O16	SD2191	2	上縁貫入器	杯	12.0	3.5	9.2	灰、白 灰、白	灰、白		砂	内面: 5条以上の割目 外面: ナマテ			内面: 磨耗化	残存1/6以下
25	39O16	SD2191	1	須恵器	蓋				灰白	灰白		砂	内面: 手行丁子工具 外面: 手行タタキ			口縫隙	
26	38O6	SD2192	1	上縁貫入器	杯				灰白	灰白		砂	内面: ナマテ 外面: 手干手印				底部のみ
27	32N2	SD2152	1	磁	瓶	13.2			白白色	白白色			内面: 手行丁子工具 外面: 手行タタキ				把手 なます直
28	13N2	SD2122	1	陶器	瓦				暗赤褐色	暗赤褐色			内面: 手行丁子工具 外面: 手行タタキ				近代?
29	37N16	SD2457	1	須恵器	片口縫		26.8		灰白	灰白		砂	内面: 1条以上の割目 外面: ナマテ				
30	37N3	P2230	1	須恵器	片口縫		25.3		灰白	灰白		砂	内面: 5条以上の割目 外面: ナマテ				
31	35N24	P2184	1	須恵器	帶輪				灰白	褐灰白			内面: 手行丁子工具 外面: ナマテ				体部
32	41O8	P2369	1	青磁	瓶	14世紀			明オリーブ 灰褐色	明オリーブ 灰褐色			内面: ナマテ 外面: 有				藍染窯系
33	35N14	選選外	N	須恵器	蓋				灰白	灰白		砂	内面: ナマテ? 外面: ナマテ				体部、管理窯系 等
34	35N20	選選外	N	須恵器	帶輪				暗赤褐色	褐灰白		砂	内面: 手行丁子工具 外面: 手行タタキ				林部

石船戸東遺跡III 石製品 観察表

報告番号	基種	出土地			法量 (cm × g)			石材	付着物	使用歴など	保存状況	備考	
		グリッド	遺物	部位	長さ	幅	厚さ						
35	砾石	38N5	SE2161	1	(6.65)	3.4	1.4	39.7	粘土質 or 砂岩		擦痕	片端部消失	日土砾
36	砾石	38N5	SE2161	1	(3.7)	5.0	1.3	25.9	褐岩		擦痕	片端部消失	中砾

石船戸東遺跡III 木製品 観察表

報告番号	基種	出土地			法量 (cm)			保存状況	備考
		グリッド	遺物	部位	長さ	幅	厚さ		
37	船櫓竿	37N25	SE2161	10	5.6	(4.8)	0.45 ~ 0.5	一部欠失	冠

石船戸東遺跡III 金属製品 観察表

報告番号	基種	出土地			法量 (cm)			保存状況	備考
		グリッド	遺物	部位	長さ	幅	厚さ		
38	刀子?	36N	SK2308	2	26.3	2.9	2.7		
39	鉗輪?	27O	SD2457	1	9.8	1.51	(4.8) 8.7		

観察表

熊本遺跡II 挖立柱建物 観察表

遺跡番号	形式	グリッド	発行年	実行年	算行年	身寄行年	発行柱間幅	発行下部高	倒行高	身寄行高	発行行長	主軸方向	緯度	経度	測量時間
SH4	梁間一間型	5 - GR	3	1	5.02	5.02	-	-	8.66	8.66	2.64 ~ 2.96	N-43°W	43.0	43.0	古代
SH5	梁間一間型	5 - GR	3	2	(6.16)	(6.1)	3.12	-	8.38	8.38	2.68 ~ 2.88	N-47°W	52.0	52.0	古代

熊本遺跡II 挖立柱建物の柱穴 観察表

SH4	遺跡番号	グリッド	検出部位	規格(cm)			真高(高さ)(cm)	面上	出土遺物	切り合い
				上端長辺	上端短辺	深度				
	2090	SH13	N	(49)	41	21	9.59	E		

SH5	遺跡番号	グリッド	検出部位	規格(cm)			真高(高さ)(cm)	面上	出土遺物	切り合い
				上端長辺	上端短辺	深度				
	2096	559	N	46	42	53	9.25	B	土師陶片	
	2099	SH18	N	76	44	58	9.22	E	土師陶片、黒色土器片	

熊本遺跡II 土坑 観察表

遺跡番号	グリッド	検出部位	遺跡名	形態			真高(高さ)(cm)	面上	主軸方向	出土遺物	切り合い			
				平面	断面	立ち上がり								
2010	10V5	N	古代	木挽軸	直軸	縦やか	(73)	(20)	(63)	(15)	28 ~ 9.76	D-N-16°W	>P2006	
2011	11X18-19	N	中・近世	櫛門形	半円形	急斜度	(28)	(56)	(50)	(43)	21	9.65	A-N-24°W	
2020	11X20	N	古代	木挽軸	直軸	縦やか・急斜度	(116)	(15)	(90)	(15)	13	9.84	D-N-12°W	
2024	10H6-7	N	古墳	櫛門形	直軸	急斜度	(95)	(32)	(82)	(22)	34	9.63	B-N-18°W	出土遺物無、筒瓦 瓦片、土師陶片
2028	10T22-23	N	古墳	櫛門形	直軸	急斜度	(42)	(41)	(32)	(30)	20	9.66	C-N-78°W	>P2026
2050	10H19-24	N	古墳	櫛門形	直軸	縦やか	(106)	(55)	(27)	(25)	27	9.545	B-N-38°W	>P2055
2057	10U3	N	古墳	櫛門形	直軸	縦やか	(75)	45	49	25	11	9.674	D-N-58°W	土師陶片
2060	10U14	N	古墳	櫛門形	半円状	急斜度	(28)	(16)	(12)	(10)	41	9.607	A-N-20°W	>SD2001
2076	5422	N	古代	木挽軸	直軸	急斜度	(9)	(81)	(64)	(58)	29	9.634	A-N-8°E	
2095	40E23-24	N	近・現代	櫛門形	直軸	急斜度	(95)	(63)	(70)	(39)	17	9.414	A-N-53°W	>SD2077
2101	11V24-11W4	N	古代	木挽軸	直軸	急斜度	(95)	(27)	(55)	(9)	39	7.74	B-N-53°E	土師陶片、筒瓦 瓦片
2102	11W3-4	N	古代	木挽軴	半円状	急斜度	(129)	(44)	(92)	(11)	51	9.660	B-N-55°E	土師陶片、黒色土器 瓦片、土師陶片
2104	10W17-18-22	N	中・近世	櫛門形	半円状	急斜度	(35)	(38)	(114)	(34)	22	9.793	B-N-68°E	
2106	10W18	N	中・近世	長方形	半円状	急斜度	(103)	(35)	(88)	(27)	11	9.844	A-N-59°E	>P2107-P2116

熊本遺跡II 渾 穏観察表

遺跡番号	グリッド	検出部位	遺跡名	形態			真高(高さ)(cm)	面上	主軸方向	出土遺物	切り合い			
				平面	断面	立ち上がり								
2061	10U-11V-10-11	N	中世	木挽軸	直軸	急斜度	(242)	36 ~ 112	(239)	20 ~ 74	19 ~ 29	9.434	A-N-7°W	T-標記点、筒瓦 瓦片
2062	10W5-11W6	N	中・近世	白陶軸	直軸	急斜度	(200)	48	(200)	34	6	9.838	D-N-68°E	>P2006 >P2105 >SD2060
2069	11V-W	N	近世	白陶軸	直軸	急斜度	(354)	41	(344)	25	8 ~ 12	9.860	A-N-56°E	磁器、金銀製品
2071	11X20-24-12-13-14	N	中・近世	木挽軸	直軸	縦やか	(191)	110	(187)	55	5	9.830	D-N-68°E	土師陶片
2030	10T2-7-12-13-18	N	中・近世	半円軸	急斜度	(860)	34 ~ 60	(804)	21	9.402	B-N-74°W	T-標記点、筒瓦 瓦片		
2031	10T2-7-12-13-18	N	中・近世	木挽軸	直軸	縦やか	(604)	29	(598)	16	6	9.586	D-N-7°W	>SD2030
2034	10U3	N	中・近世	半円軸	急斜度	(231)	36	(218)	20	16	9.680	A-N-83°E	土師陶片	
2040	10T17-18-22-23	N	中世	木挽軸	直軸	急斜度	(140)	48	(130)	16	15	9.476	D-N-84°E	>P2049
2043	10T12	N	古墳	U字軸	直軸	急斜度	(92)	28	(82)	16	11	9.623	A-N-71°-E	土師陶片
2058	10S-11S-22-10T-11T	N	古墳	半円軸	急斜度	(180)	66	(160)	44	9	9.623	F-N-81°E	>SD2030 >SD2031	
2062	7-8AA	N	中・近世	半円軸	直軸	縦やか	(210)	65	(210)	34	14	9.720	A-N-76°E	
2063	7-8AA	N	中・近世	半円軸	直軸	急斜度	(234)	142	(192)	39	36	9.489	A-N-72°E	
2064	7AA	N	中・近世	半円軸	直軸	縦やか	(211)	77	(211)	41	10	9.855	A-N-76°E	
2068	6U	N	中・近世	半円軸	直軸	縦やか	(216)	92	(202)	50	12	9.736	A-N-50°E	
2069	5-6S	N	近・現代	V字軸	直軸	急斜度	(248)	94	(185)	25	74	9.023	A-N-82°-W	土師陶片、瓦片、 ガラス製品
2070	5R	N	中・近世	木挽軸	縦やか	(225)	140	(210)	114	10	9.659	A-N-87°-E	T-標記点、竹筒 竹筒	
2071	5R	N	中・近世	半円軸	直軸	急斜度	(161)	53	(158)	28	15	9.660	A-N-75°-E	瓦片
2072	5R	N	中・近世	白陶軸	直軸	急斜度	(161)	68	(155)	45	18	9.577	C-N-60°-E	土師陶片
2073	SQ	N	中・近世	木挽軸	直軸	縦やか	(227)	62	(204)	39	8	9.680	A-N-73°-W	>SD2074
2074	SQ	N	近・現代	半円軸	直軸	急斜度	(142)	50	(135)	24	16	9.645	A-N-80°-E	>SD2073
2075	4-5Q	N	近・現代	半円軸・ 台形軸	直軸	急斜度	210	(180)	(128)	66	43	9.298	A-N-84°-E	
2077	40-P	N	近・現代	白陶軸	直軸	急斜度	(626)	35	(585)	327	42	9.025	B-N-10°-E	土師陶片、磁器、瓦 瓦片
2078	80	N	近・現代	-	半円軸	急斜度	(163)	69	(150)	45	8	9.432	B-N-87°-E	>SD2054
2092	4P	N	近・現代	-	木挽軸	縦やか	(312)	129	(264)	125	16	9.473	A-N-62°-W	
2094	4P	N	近・現代	-	木挽軸	縦やか・急斜度	(213)	49	(182)	24	10	9.499	A-N-44°-W	>SD2077

観察表

蕉木遺跡 II 道 観察表

遺跡番号	グリッド#	検出位置	変遷時期	断面							断面 (cm)				真面標高 (m)	縦土	主縦方向	出土遺物	切り合い
				平面	断面	立ち上がり	上端	上端	下端	下端	下端	下端	下端	深度					
2013A	11X	N	古代	-	台形狀	緩やか・急斜度	(178)	120	(174)	32	26	9.711	C	N 77°-E			>2013B		
2013B	11X	N	古代	-	台形狀	緩やか	(178)	100	(174)	46	16	9.760	C	N 77°-E			<2013A		
2054A	11W, 9°-10°-11X	N	古代	-	台形狀	急斜度	(1690)	190	(1690)	36 ~ 80	30	9.520 ~ 9.746	A	N 78°-E	土礫巣片		>2054B		
2054B	11W, 9°-10°-11X	N	古代	-	台形狀	急斜度	(1690)	170	(1690)	100 ~ 180	48	9.403 ~ 9.556	A	N 78°-E	土礫巣片		<2054A, >P212B		
2066	7Y	N	古代	-	台形狀	急斜度	(202)	108	(183)	42	46	9.573	A	N 70°-E	土礫巣片				
2079	7X-Y	N	古代	-	台形狀	急斜度	(114)	94	(98)	45	15	9.606	F	N 70°-E					

蕉木遺跡 II 自然流路 観察表

遺跡番号	グリッド#	検出位置	断面 (cm)					真面標高 (m)	主縦方向	出土遺物	切り合い
			上端	上端	下端	下端	深度				
2023	11Y	N	(1697)	(1902)	(630)	(178)	32 ~ 114	8.770 ~ 9.580	N 80°-E		
2061	7-8BH	N	(1697)	(212)	(530)	(205)	21 ~ 115	8.720 ~ 9.640	N 61°-E		

蕉木遺跡 II 性格不明遺構 観察表

遺跡番号	グリッド#	検出位置	変遷時期	断面							断面 (cm)				真面標高 (m)	縦土	主縦方向	出土遺物	切り合い
				平面	断面	立ち上がり	上端	上端	下端	下端	下端	下端	下端	深度					
2124	11-12V	N	古代	不整形	台形狀	急斜度	(256)	(230)	(315)	(75)	30	9.700	C	N 52°-E	粗面巣跡・粗面巣塊・圓底巣塊・土礫巣塊・土礫巣片・砂巣片				

熊木遺跡 II ピット 観察表

遺跡番号	グリッド	経緯	面積 (cm)			底面埋高 (m)	面E	出土遺物	割り合い
			上端長軸	上端短軸	深度				
2003	11W1	N	38	25	20	9.675	E		
2004	10V10	N	40	36	17	9.658	A	土壁断片	
2005	11W1	N	27	18	14	9.836	D		
2006	10U21・24, 10V3・4	N	(96) (56)	46	9.544	E	土壁断片	>SK2010, >SD2001	
2007	11W1・6	N	49	36	17	9.712	F		
2008	11V16・21	N	28	26	16	9.740	B	底面断片	
2012	11X23・24	N	50	35	19	9.747	A		
2014	11X2	N	26	23	5	9.820	D		>P2015
2015	11X2	N	69	35	9	9.790	F		>P2014・P2016
2016	11X2	N	43	36	7	9.809	D		>P2015
2017	11X23・24, 11V3・4	N	74	45	12	9.792	A		>SD2021
2018	11X8・13	N	(26) (26)	26	9.740	A			
2019	11X18	N	(50) (19)	22	9.765	A			
2022	11X19	N	(57) (27)	22	9.770	C	土壁断片		
2025	10U19	N	(32) (26)	30	9.660	E			
2026	10U14	N	27	20	17	9.675	F		
2027	10U9	N	25	24	12	9.703	E		
2028	10U3・4・8・9	N	31	26	42	9.442	E		
2029	10U3・4	N	27	25	19	9.651	E		
2032	10U4	N	44	38	16	9.707	D	底面断片	
2033	10T23	N	64	60	12	9.632	D	土壁断片, 底面断片, 磁器	
2035	10U18・19	N	61	58	83	9.010	E	底面断片, 杜柄, 鋼材	
2036	10T23	N	(38) (32)	46	9.519	E		>SK2038	
2037	10U8・9	N	79	78	46	9.380	E		
2039	10U14	N	33	29	15	9.659	A		
2041	10U3	N	39	39	49	9.294	E		
2043	10T22・23	N	32	24	16	9.614	D		
2044	10U1	N	41	30	55	9.296	E	底面断片	
2045	10U19	N	67	56	35	9.452	E		
2046	10T23, 10U3	N	35	29	53	9.500	E	底面断片	>SK2057
2047	10U19	N	24	20	18	9.689	D		
2048	10T17・18	N	37	29	16	9.620	A		
2049	10T17	N	(18) (9)	26	9.699	D	土壁断片	>SD2040	
2055	10U24	N	(29) (16)	21	9.857	D		>SK2050	
2056	10T1	N	(39) (10)	46	9.560	A			
2059	10U4・9	N	(34) (17)	52	9.473	E		>SD2001	
2066	7T7・12	N	(66) (14)	19	9.827	C			
2080	8U7	N	43	(13)	34	9.650	C		
2081	8U13	N	58	52	36	9.476	C		
2082	8U17	N	40	32	13	9.680	C		
2083	6B8・11	N	(26) (24)	32	9.651	A			
2084	6T22, 8U2	N	34	32	16	9.696	C		
2085	8T11	N	35	32	17	9.615	E		
2087	5B4	N	42	36	23	9.520	E		
2088	5B18・23	N	59	47	13	9.602	A		
2091	5B18・19	N	72	41	28	9.606	E		
2093	9Q10・5Q6	N	(61) (33)	22	9.579	A			
2096	5Q22	N	(29) (14)	17	9.600	B			
2097	5Q16・21	N	37	26	31	9.345	C	土壁断片	
2098	5Q22	N	(49) (41)	29	9.530	C	土壁断片, 土壁瓦片		
2099	5R2	N	63	(38)	41	9.416	E		
2100	11W2	N	24	23	16	9.736	A		
2103	11W3・8	N	(41) (31)	31	9.750	D			
2105	10W21	N	(24) (21)	29	9.736	A			
2107	10W18	N	33	31	24	9.679	F		>SK2106
2108	10W23・24	N	73	48	24	9.670	C		
2109	11W2	N	28	27	30	9.616	B		
2110	11W12・17	N	36	26	18	9.692	A		
2111	11W17	N	34	25	20	9.692	B		
2112	11W2	N	33	(26)	30	9.698	F		>SD2009
2113	11W7・8	N	49	(37)	34	9.736	A		
2114	10W23	N	38	22	7	9.640	A		
2115	10W22	N	33	27	14	9.709	C		
2116	10W18	N	36	28	23	9.732	E		>SK2106
2117	11W16	N	(25) (24)	26	9.626	A		>P2118	
2118	11W16	N	(28)	21	13	9.638	A		>P2117
2119	11W16・17	N	38	(30)	22	9.623	F		
2120	11W2・3・7・8	N	41	36	26	9.700	E	杜柄	
2121	11W8	N	(33) (20)	20	9.870	D			
2122	11W3	N	30	28	20	9.785	B		>P2123
2123	11W3	N	(72) (34)	30	9.881	C	土壁断片, 黒色土器片, 斧頭陶器類	>P2122, >SK2102	
2125	10W19	N	39	26	32	9.620	A		
2126	10W23, 10X3	N	31	19	22	9.700	A		
2127	10X1	N	36	30	22	9.738	A		
2128	9X8, 10X3	N	69	56	27	9.697	A	土壁断片	>SD2054
2129	11W17	N	34	29	13	9.743	D		
2131	11V22, 11W2	N	33	28	28	9.633	A	土壁断片	>SD2009

観察表

蕉木遺跡II 土器・陶磁器 観察表

(右上: 錫・鉛鉢、三・金賞冠、白・白色粒子、黒・黑色粒子、青・青緑色伴材、其・瓦石)

番号	出土位置 (グリッド)	遺物 / 種類	規形	表面 / 時期	法面 (cm)	内面色調	外面部調	地土	調査 / 支拂	使用跡	備考	
1	10T7	SK2024	1脚	土師器 鉢形	古代	20.3 (5.1)	淡青白	に少し黒	土・鉛	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
2	10T7	SK2024	1脚	土師器 鉢形	古代	19.5 (4.8)	淡青白	に少し黒	土・鉛	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ	外面上部	
3	10T7	SK2024	1脚	土師器 鉢形	古代	11.4 (3.9)	7.5YR6/6	7.5YR7/4	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ	小泊遺産	
4	11W4	SK2101	3脚	土師器 杯	古代	12.6 (1.6)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ	小泊遺産	
5	11W4	SK2101	3脚	土師器 杯	古代	13.2 (2.4)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ	小泊遺産	
6	11W4	SK2102	3脚	土師器 杯	古代	10.8 (1.6)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ	小泊遺産	
7	11W3	SK2102	1脚	土師器 杯	古代	12.3 (3.6)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ, ロ緑泥セラミック		
8	10W10	SD2001	1脚	青磁 杯	中世	17.7 (3.1)	5Gv6/1	5Gv6/1	土	内面: ロクロナメ 外面: 銀蓮青文	高田遺跡 複数個	
9	10V4	SD2001	1脚	青磁 杯	中世	17.5 (3.1)	5Gv6/1	5Gv6/1	土	内面: ロクロナメ 外面: 銀蓮青文	高田遺跡	
10	10T2	SD2030	1脚	土師器 麻製織	古代	10.5 (1.6)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
11	10T13	SD2030	1脚	土師器 麻製織	古代	10.3 (1.6)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ, 自然鉄	小泊遺産	
12	10T7	SD2030	1脚	土師器 麻製織	古代	10.5 (1.6)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ, 自然鉄		
13	10U9	SD2034	1脚	土師器 杯	古代	10.5 (1.6)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
14	5R23	SD2070	1脚	土師器 無台座 杯	古代	6.0 (1.6)	5Gv6/1	5Gv6/1	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
15	5R13	SD2071	1脚	土師器 無台座 杯	古代	5.5 (1.6)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
16	9X5	道1区 14脚	土師器 無合口 杯	古代	1.9 (0.4)	オーラー/黒	オーラー/黒	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ			
17	11V23	P2006	1脚	土師器 無合口 杯	古代	1.9 (0.4)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
18	10T23	P2033	1脚	土師器 無合口 杯	古代	1.9 (0.4)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
19	10U8	P2044	1脚	土師器 無合口 杯	古代	1.9 (0.4)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ	小泊遺産	
20	10U3	P2046	3脚	土師器 無合口 杯	古代	1.9 (0.4)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ	小泊遺産	
21	5S9	P2086	3脚	土師器 無合口 杯	古代	1.9 (0.4)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
22	5R18	P2089	1脚	土師器 無台座 杯	古代	1.9 (0.4)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
23	11W3	P2123	1脚	灰質陶器 杯	古	14.0 (2.1)	淡青白	7.5YR7/3	7.5YR7/3	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ	K90式
24	11V19	SN2124	1脚	土師器 杯	古	13.8 (2.1)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
25	11V24	SN2124	2脚	土師器 長柄鋤	古	24.6 (6.8)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ, カキメ		
26	11V23	SN2124	1~3脚	土師器 長柄鋤	古	13.4 (3.1)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
27	11V19	SN2124	2脚	土師器 長柄鋤	古	11.8 (2.9)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ	小泊遺産 内面墨斑	
28	11V23	SN2124	1~3脚	土師器 長柄鋤	古	12.8 (2.9)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
29	11V19~23	SN2124	1~6脚	土師器 長柄鋤	古	12.2 (3.1)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ	小泊遺産 内面墨斑	
30	11V23	SN2124	3脚	土師器 長柄鋤	古	14.6 (2.7)	9.2	9.0	9.0/5Gv6/1	9.0/5Gv6/1	内面墨斑	
31	11V23	SN2124	1脚	土師器 長柄鋤	古	11.4 (2.9)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ	小泊遺産	
32	11V23	SN2124	1~3脚	土師器 長柄鋤	古	13.2 (3.2)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
33	11V23	SN2124	1脚	土師器 杯	古	13.2 (3.2)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
34	11V23~24	SN2124	1~3脚	土師器 杯	古	1.7 (0.8)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ	内面に使用による 削耗	
35	11V23	SN2124	2脚	土師器 杯	古	11.4 (2.9)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
36	11V23	SN2124	1脚	土師器 杯	古	13.2 (3.2)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
37	7X22	カクシ	1脚	土師器 無台座	古	2.2 (0.5)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
38	10T18	IV	1脚	土師器 小鉢	古	7.0 (1.6)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ	内面墨斑に 剥離有り	
39	7X22	カクシ	1脚	土師器 無台座	古	24.6 (3.2)	淡青白	7.5YR8/4	7.5YR7/3	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ	
40	10C8	II	1脚	土師器 細縁	古	19.2 (3.2)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ	外面上部 化粧物有り	
41	5R18	I	1脚	土師器 細縁	古	19.2 (3.2)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ	黑色地	
42	11V23	I	1脚	土師器 細縁	古	19.2 (3.2)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
43	10T-U	I	1脚	土師器 細縁	古	19.2 (3.2)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
44	11N8	I	1脚	土師器 細縁	古	19.2 (3.2)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		
45	10C8	II	1脚	土師器 細縁	古	19.2 (3.2)	褐色	褐色	土	内面: ロクロナメ 外面: ロクロナメ		

観察表

蕉木遺跡 II 土製品（土器転用研磨具）観察表

報告番号	出土地	転用前 基材	法量(cm)			重さ (g)	備考		
			長さ	幅	厚さ				
46	10X6	道上車	14 植	鉄鉱石	8.3	3.8	1.3	54.1	転用研磨

蕉木遺跡 II 金属製品・鍛冶関連遺物 観察表

報告番号	面種	出土品			法量(cm)		重さ (g)	備考
		グリッド	造形	部位	長さ	幅		
47	打	10T ~ V		I	6.3	0.65	0.45	10.3
48	9-4P	11W23	SN2124	1脚	5.7	3.3	2.2	23.6

蕉木遺跡 II 木製品 観察表

報告番号	面種	出土品			法量(cm)			備考	加工・特徴等
		グリッド	造形	部位	長さ	幅	厚さ		
49	10U16	P2035	5脚	柱頭	板目	16.5	14.5	8.9	スギ
50	10U16	P2035	5脚	板目	14.3	13.3	1.5	スギ	
51	11W8	P21203	2脚	柱頭	板目	21.0	6.0	2.7	マツ風 内部に穴

山口野中遺跡 V 測 観察表

遺物番号	グリッド	測定			断面			測定 標高 (m)	測定 標高 (m)	主垂 方向	出土遺物	切り合ひ	
		横幅 平面	断面 平面	立上上がり	上端 基盤	上端 断面	下端 断面						
2102	23AA	N/a	-	平門抜	急斜度	(444)	118	(380)	51	34	6.651	A	N.82°-W
2103	23AA, 24AA	N/a	-	台形状	急斜度	(519)	108	(450)	68	45	6.659	A	N.76°-W
2105	25AA	N/a	-	脛斗状	緩やか~急斜度	(206)	206	(131)	47	71	6.327	A	N.69°-W
2106	25AA, 26AA	N/a	-	平門抜~台形状	緩やか	(187)	93	(127)	19	33	6.669	D	N.69°-W
2107	25AA, 25BB	N/a	-	平門抜	急斜度	(205)	185	(139)	54	45	6.508	A	N.74°-W
2109	25AA, 26AA	N/a	-	階段状	急斜度	(219)	162	(126)	60	72	6.301	A	N.69°-W
												< SD2109	

山口野中遺跡 V ピット観察表

遺物番号	グリッド	測定			断面			測定 標高 (m)	測定 標高 (m)	主垂 方向	出土遺物	切り合ひ	
		横幅 平面	上端 基盤	上端 断面	深度	底面 断面	側壁 断面						
2108	26Z23	N/a	29	25	21	6.683	D						

山口野中遺跡 V 中世 陶器類観察表

報告番号	出土位置 (グリッド)	遺物 / 断片	種類	基材	断面			法量(cm) (1件)	内面色	外表面色	胎上	調査 / 支拂	使用痕跡	備考
					長さ	幅	厚さ							
1	25AA19	SD2105	4	陶器縫	有口鉢	中世	(4.4)	9.9	薄黄	黄白	胎上	内面：剥し目7日 底部：静止系		剥離

(白上：白～陶器骨料、白＝白色粒子)

山口野中遺跡 V 繩文時代 土器観察表

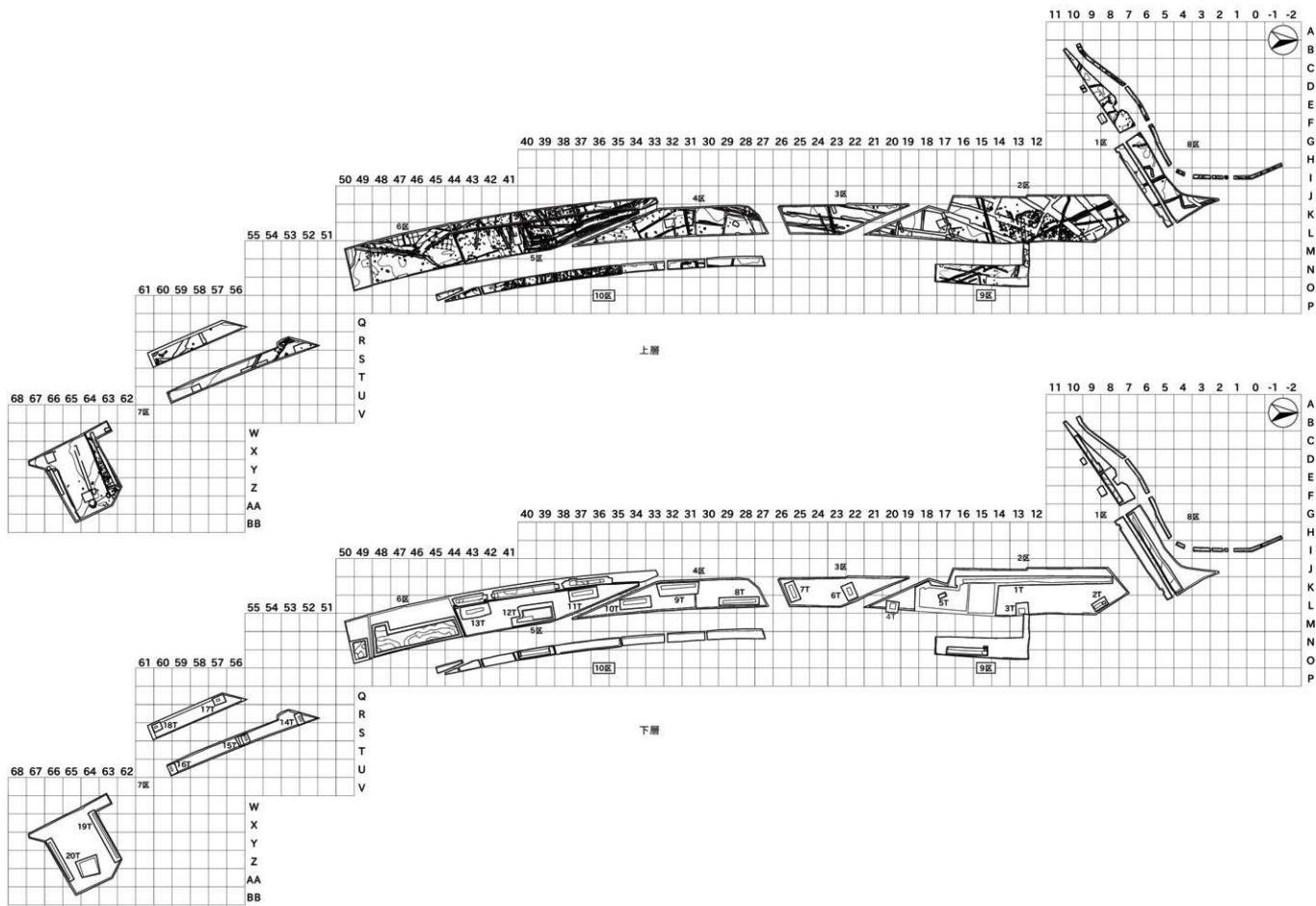
報告番号	出土位置 (グリッド)	遺物 / 断片	種類	基材	断面			法量(cm) (1件)	内面色	外表面色	胎上	調査 / 支拂	使用痕跡	備考
					長さ	幅	厚さ							
2	26Z23	N/a	縫		1	1	1	(4.5)	内面：褐色 (2.5)×(0.5)	内面：褐色 (2.5)×(0.5)	胎上	良・實	内面：青磁文	

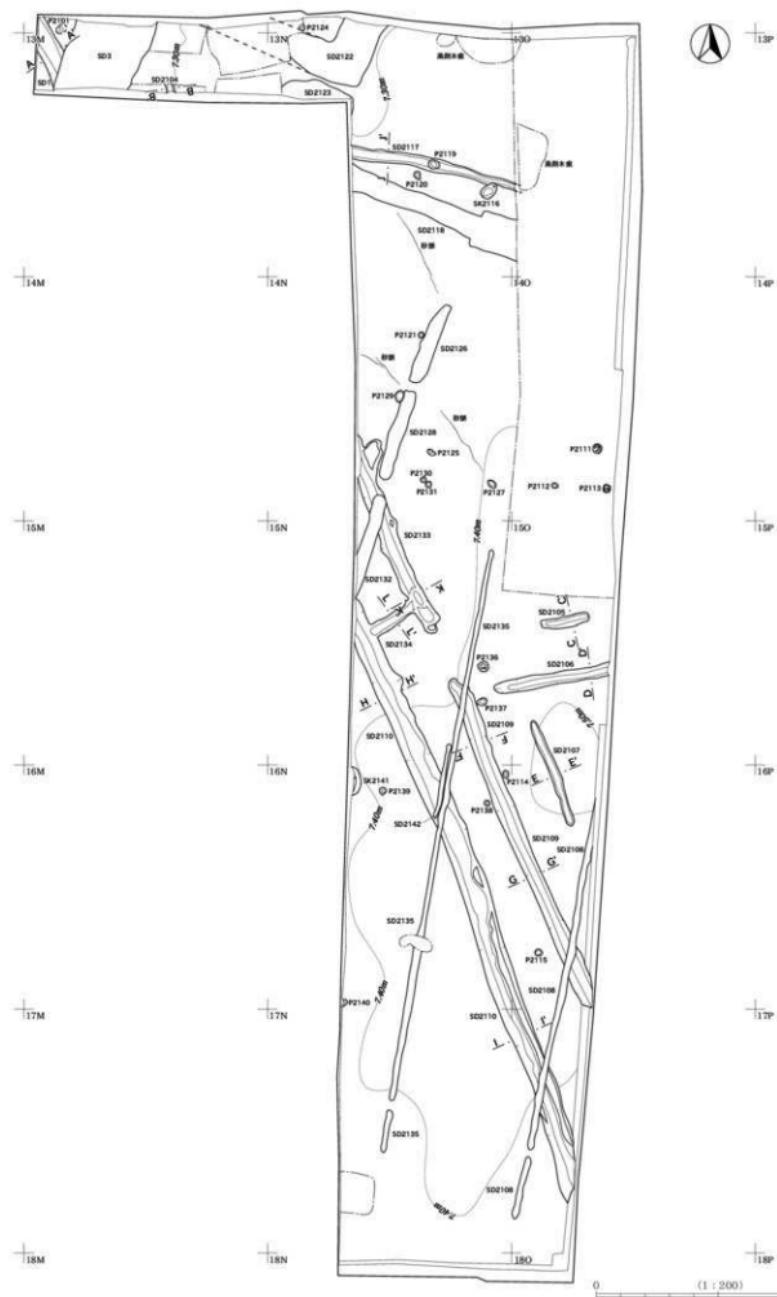
図 版

凡 例

- 炭化物
- 噴 砂
- 使用痕

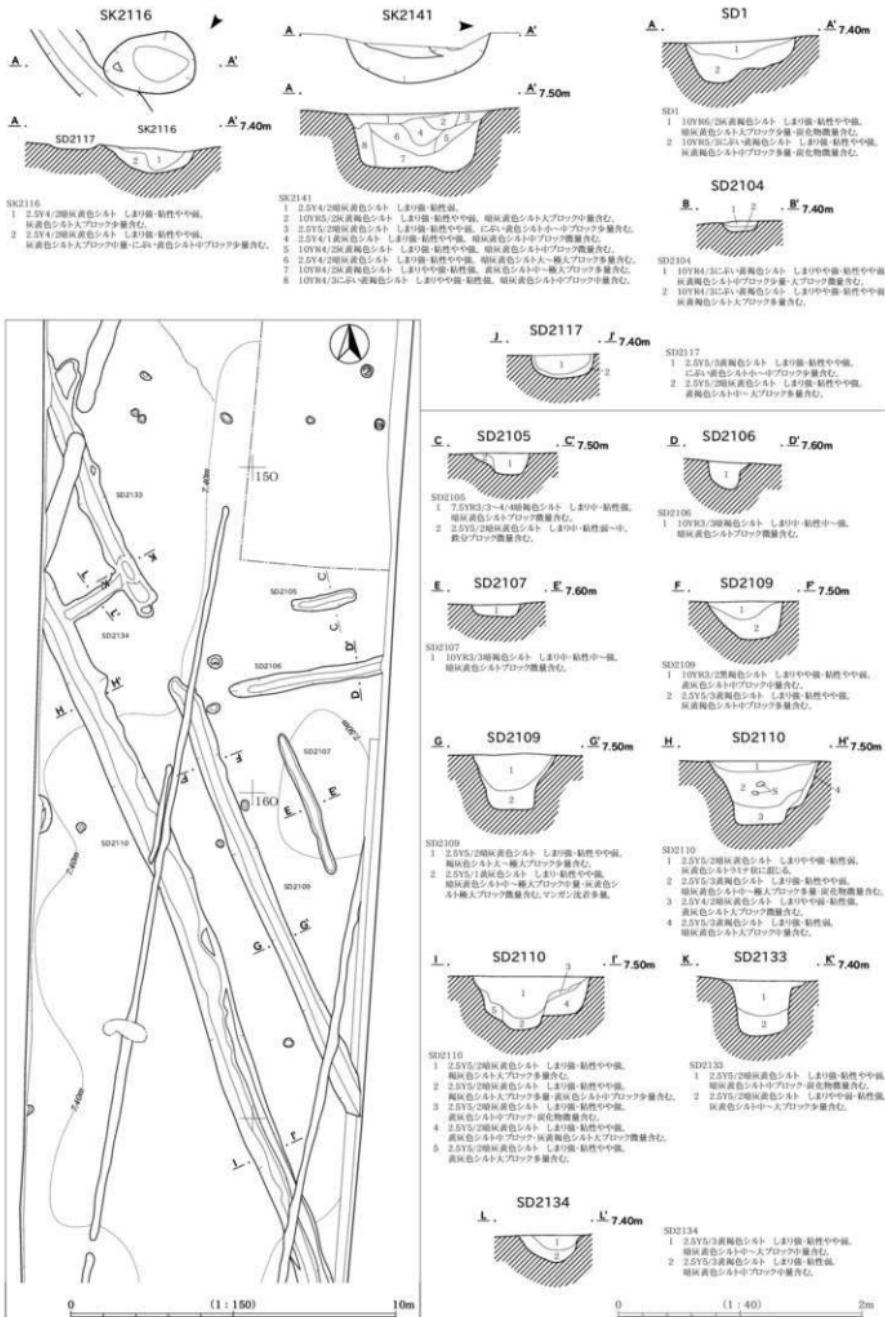


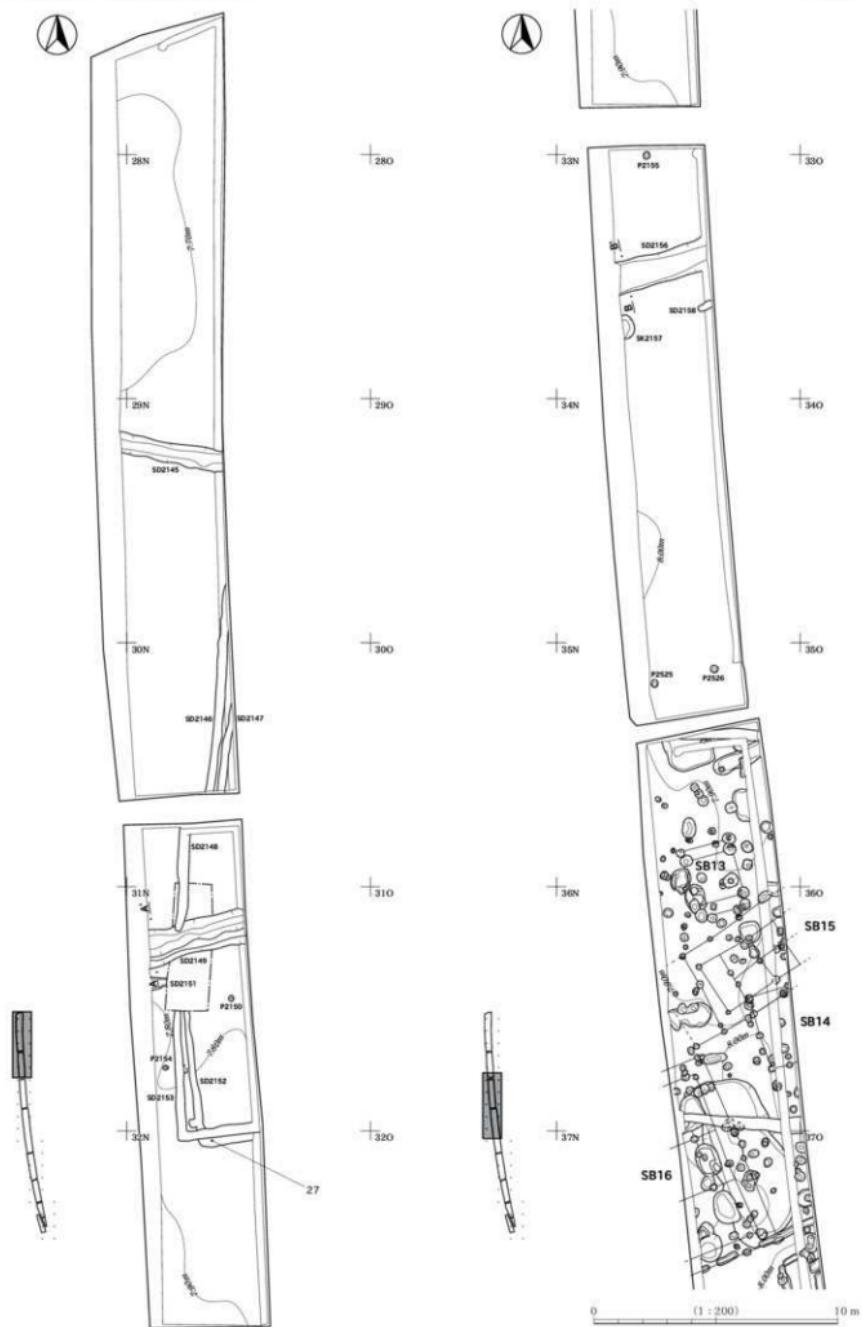




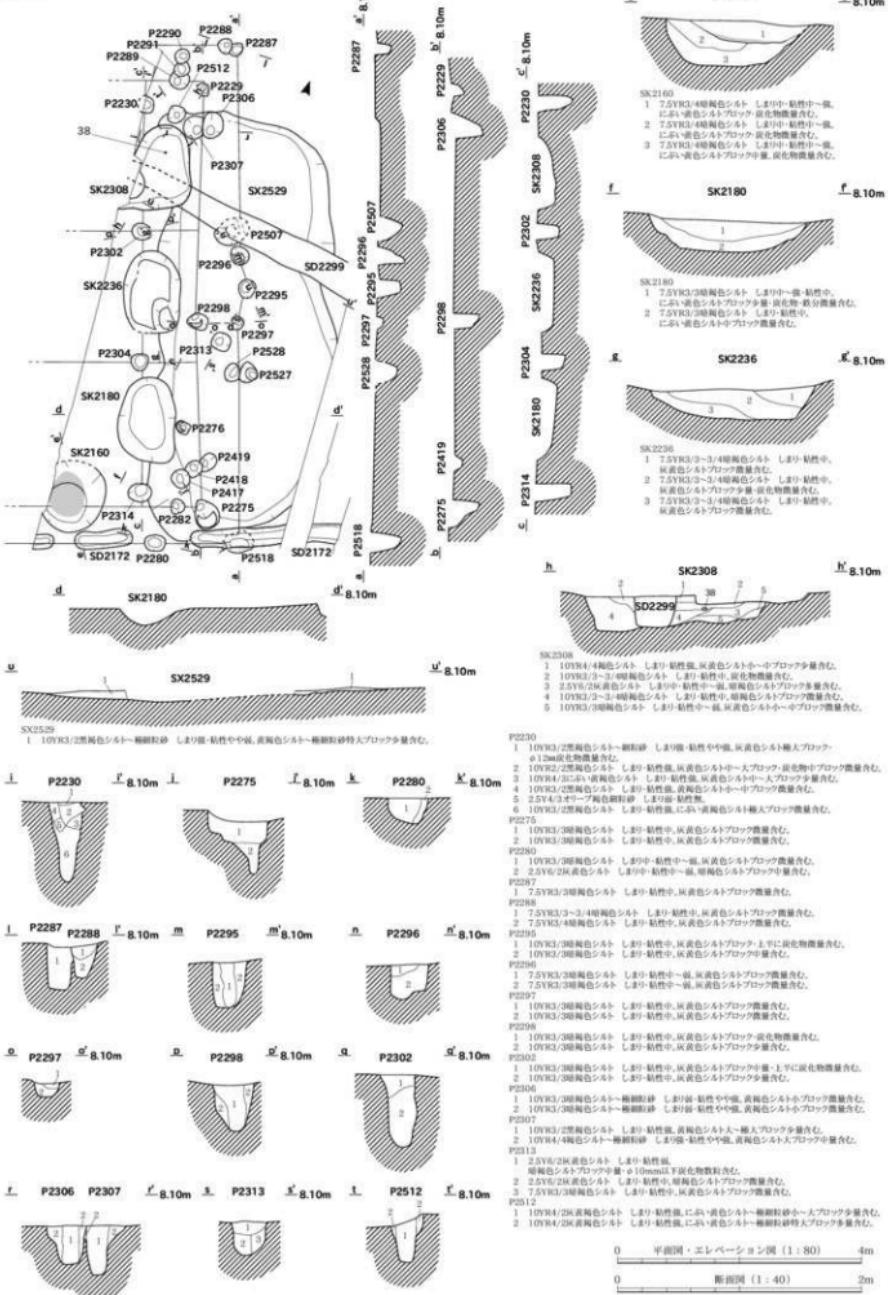
図版 4

石船戸東遺跡Ⅲ 9区遺構個別図

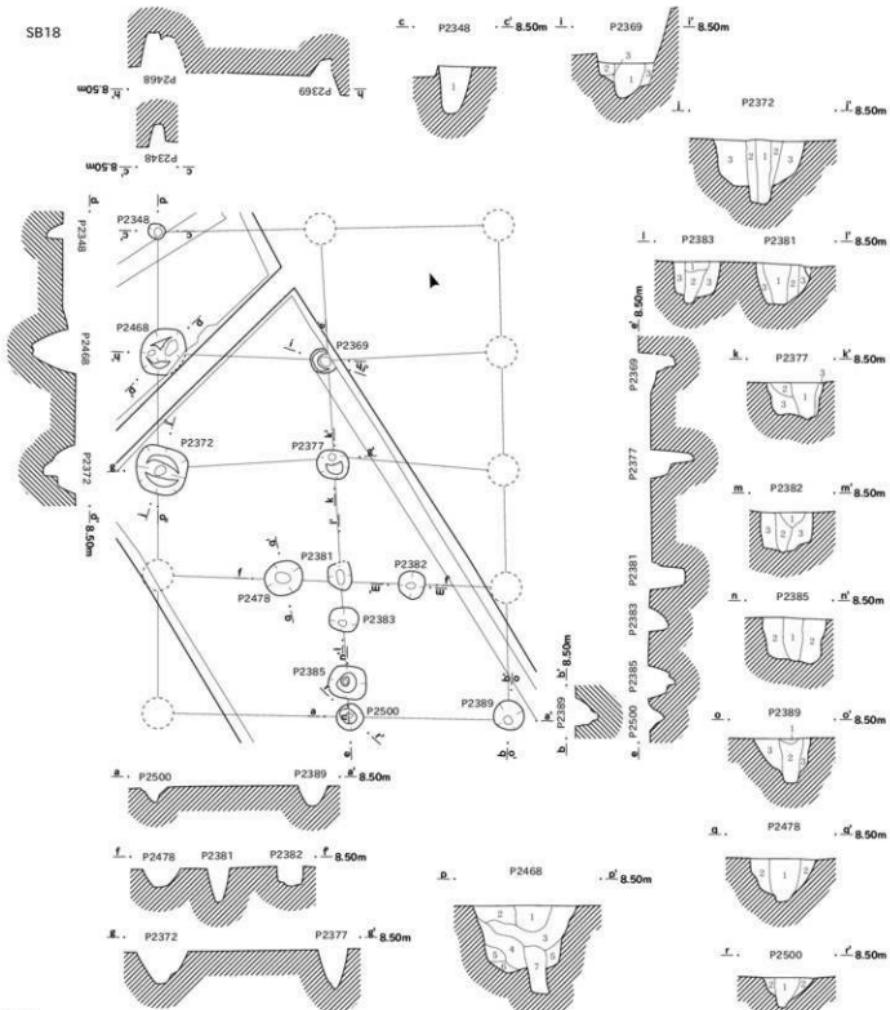




SB16



石船戸東遺跡III 10区遺構個別図 (4)

P2348
1. 10YR4/4褐色シルト しまり-粘性中-弱, 黄褐色極薄層混在。P2369
1. 10YR4/3に近い黄褐色シルト しまり-粘性強, 黑褐色シルトからブロッケ多量含む。

2. 2.5Y5/3黒褐色シルト しまり-粘性中-強, 黑褐色シルトからブロッケ少量含む。

3. 10YR4/4褐色シルト しまり-粘性中, 黄褐色シルトからブロッケ少量含む。

P2372
1. 10YR3/2褐色シルト しまり-粘性強, 黑褐色シルトからブロッケ多量含む。

2. 10YR3/3褐色シルト しまり-粘性強, 黑褐色シルトからブロッケ多量含む。

3. 2.5Y5/3C黒褐色シルト しまり-粘性強, 黑褐色シルトからブロッケ多量含む。

P2377
1. 10YR3/2褐色シルト しまり-粘性中, こなれ色シルトからブロッケ多量含む。

2. 10YR3/3褐色シルト しまり-粘性中, こなれ色シルトからブロッケ多量含む。

3. 2.5Y5/3C黒褐色シルト しまり-粘性中, こなれ色シルトからブロッケ多量含む。

P2381
1. 10YR3/4褐色シルト しまり-粘性中, 黄褐色シルトからブロッケ多量含む。

2. 10YR3/4褐色シルト しまり-粘性中, 黄褐色シルトからブロッケ多量含む。

3. 2.5Y5/2C黒褐色シルト しまり-粘性中, 黄褐色シルトからブロッケ多量含む。

P2383
1. 10YR3/4褐色シルト しまり-粘性中, 黄褐色シルトからブロッケ多量含む。

2. 2.5Y5/2C黒褐色シルト しまり-粘性中, 黄褐色シルトからブロッケ多量含む。

P2385
1. 10YR3/4褐色シルト しまり-粘性中, 黄褐色シルトからブロッケ多量含む。

2. 10YR3/3褐色シルト しまり-粘性中, 黄褐色シルトからブロッケ多量含む。

3. 2.5Y5/3C黒褐色シルト しまり-粘性中, 黄褐色シルトからブロッケ多量含む。

P2387
1. 10YR3/4褐色シルト しまり-粘性中, 黄褐色シルトからブロッケ多量含む。

2. 2.5Y5/2C黒褐色シルト しまり-粘性中, 黄褐色シルトからブロッケ多量含む。

P2389
1. 10YR3/4褐色シルト しまり-粘性中, 黄褐色シルトからブロッケ多量含む。

2. 2.5Y5/2C黒褐色シルト しまり-粘性中, 黄褐色シルトからブロッケ多量含む。

P2389
1. 2.5Y5/1黄褐色シルト しまり-粘性中。

2. 黄褐色シルトからブロッケ多量含む。

3. 2.5Y5/2C黒褐色シルト しまり-粘性中。

P2468
1. 10YR4/2に近い黄褐色シルト しまり-粘性中。

2. 黄褐色シルトや粘土。

3. 黄褐色シルトからブロッケ多量含む。

4. 10YR4/3に近い黄褐色シルト しまり-粘性中。

5. 黄褐色シルトからブロッケ多量含む。

6. 10YR4/3に近い黄褐色シルト しまり-粘性中。

7. 黄褐色シルトからブロッケ多量含む。

P2478
1. 2.5Y5/3黄褐色シルト しまり-粘性中-弱。

2. 黄褐色シルトから特大ブロッケ多量含む。

3. 黄褐色シルトから特大ブロッケ多量含む。

P2500
1. 10YR4/2に近い黄褐色シルト しまり-粘性中。

2. 黄褐色シルトからブロッケ多量含む。

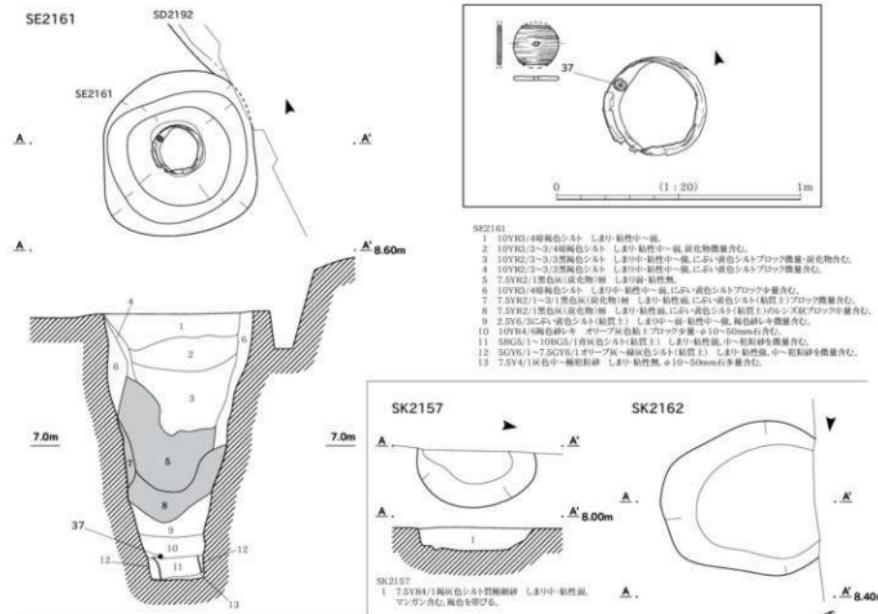
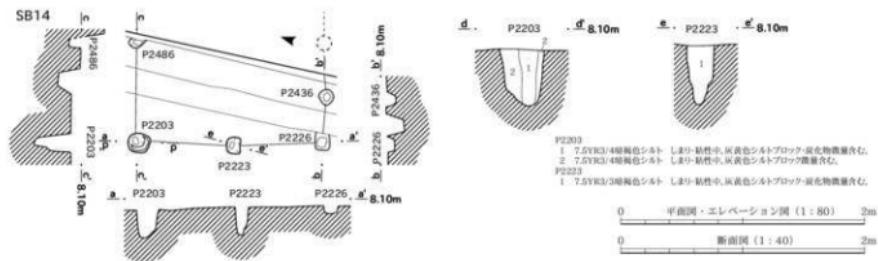
3. 黄褐色シルトからブロッケ多量含む。

4. 黄褐色シルトからブロッケ多量含む。

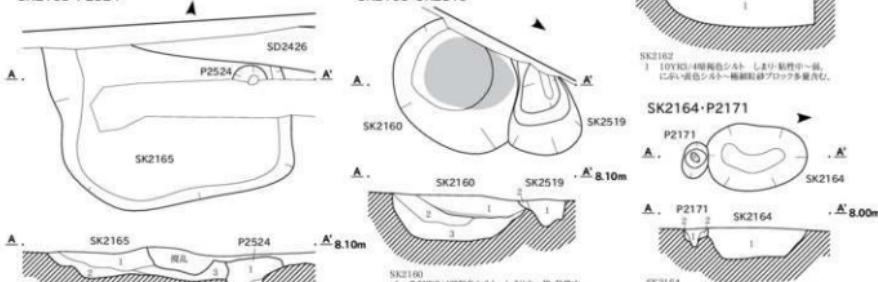
P2488
0 平面図・エレベーション図 (1:80) 4m
0 断面図 (1:40) 2m

図版 12

石船戸東遺跡III 10区遺構個別図(5)



SK2165·P2524



1000

- SK2165
 1 10VR3/3暗褐色シルト しまり・粘性中、灰褐色シルトブロック西面含む。
 2 10VR3/3~4/3暗褐色シルト しまり・粘性中、赤色を帯びる。
 3 10VR3/3暗褐色シルト しまり・粘性中。

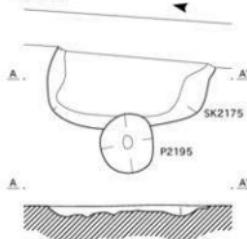
F2524
 1 10VR3/3暗褐色シルト しまり・粘性中、灰褐色シルトブロック少面含む。
 2 10VR3/3暗褐色粘質シルト しまり・粘性中、灰褐色シルトブロック少面含む。

1 100%

8. UV-R3/360萬色RGBシート しまり巾・耐性中～強、黄緑色シート・クロック機能搭載

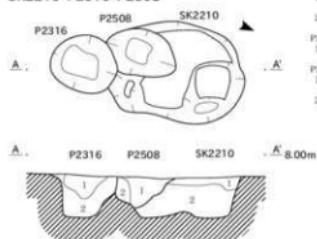
石船戸東遺跡III 10区遺構個別図 (6)

SK2175



SK2175
1. 7.0VR3/4暗褐色シルト しまり・粘性中~強。
灰褐色シルトブロック微量含む。

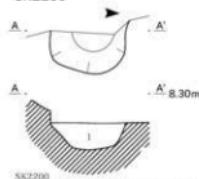
SK2210-P2316-P2508



SK2210

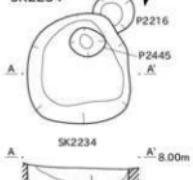
1. 7.0VR3/4暗褐色シルト しまり・粘性中。
灰褐色シルトブロック多量含む。赤色を帯びる。
 2. 7.0VR3/4暗褐色シルト しまり・粘性中~強。
灰褐色シルトブロック微量含む。赤色を帯びる。
- P2316
1. 7.0VR3/4暗褐色シルト しまり・粘性中。
灰褐色シルトブロック微量含む。赤色を帯びる。
 2. 7.0VR3/4暗褐色シルト しまり・粘性中。
灰褐色シルトブロック微量含む。赤色を帯びる。
- P2508
1. 7.0VR3/4暗褐色シルト しまり・粘性中。
灰褐色シルトブロック微量含む。赤色を帯びる。
 2. 7.0VR3/4暗褐色シルト しまり・粘性中。
灰褐色シルトブロック微量含む。赤色を帯びる。

SK2200



SK2200
1. 10YR3/3暗褐色シルト しまり・粘性中~弱。
灰褐色シルトブロック微量含む。

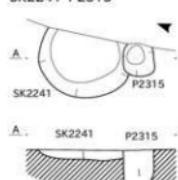
SK2234



SK2234
1. 10YR3/3暗褐色シルト しまり・粘性中。
灰褐色シルトブロック微量含む。

2. 10YR3/3暗褐色シルト しまり・粘性中。
灰褐色シルトブロック微量含む。

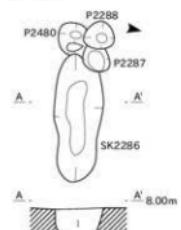
SK2241-P2315



SK2241
1. 10YR3/4暗褐色シルト しまり・粘性中。
灰褐色シルトブロック微量含む。

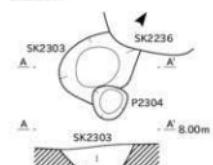
P2315
1. 10YR3/4暗褐色シルト しまり・粘性中。
灰褐色シルトブロック微量含む。

SK2286



SK2286
1. 7.5YH3/4暗褐色シルト しまり・粘性中。
灰褐色シルトブロック微量含む。
φ3mm機器ブロック数點含む。赤色を帯びる。

SK2303



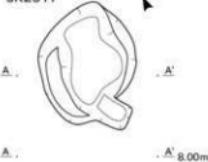
SK2303
1. 10YR3/3暗褐色シルト しまり・粘性中。
灰褐色シルトブロック少量上に灰化物微量含む。

SK2190



SK2190
1. 7.0VR3/4暗褐色シルト しまり・粘性中。
灰褐色シルトブロック微量含む。赤色を帯びる。

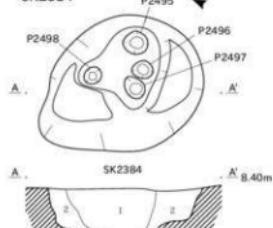
SK2317



SK2317
1. 7.0VR3/4暗褐色シルト しまり・粘性中~強。
灰褐色シルトブロック微量含む。赤色を帯びる。

2. 7.5YH3/4-4暗褐色シルト しまり・粘性中~強。
灰褐色シルトブロック微量含む。

SK2384

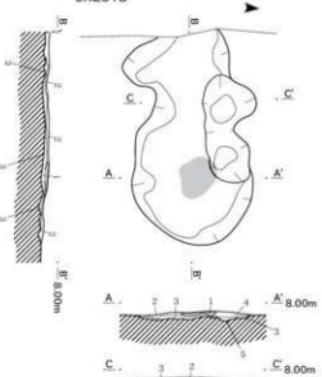


SK2384
1. 7.5YH3/3-3/4暗褐色シルト しまり・粘性中。
灰褐色シルトブロック微量含む。

2. 2.5-3.5YR3/3-3/4暗褐色シルト しまり・粘性中~強。
灰褐色シルトブロック微量含む。

P2497
1. 10YR4/3-2/3暗褐色シルト 樹根断片
しまり・粘性中~強。灰褐色シルトブロック微量含む。

SK2318



SK2318
1. 10YR3/2暗褐色シルト 樹根断片 しまり・粘性や干縮。
黒色の4-5%樹根断片中に入づく(地盤)。

2. 10YR3/2黑褐色シルト 樹根断片 しまり・粘性中~強。
灰褐色シルトブロック微量含む。

3. 10YR3/2黑褐色シルト 樹根断片 しまり・粘性や干縮。
灰褐色シルトブロック微量含む。

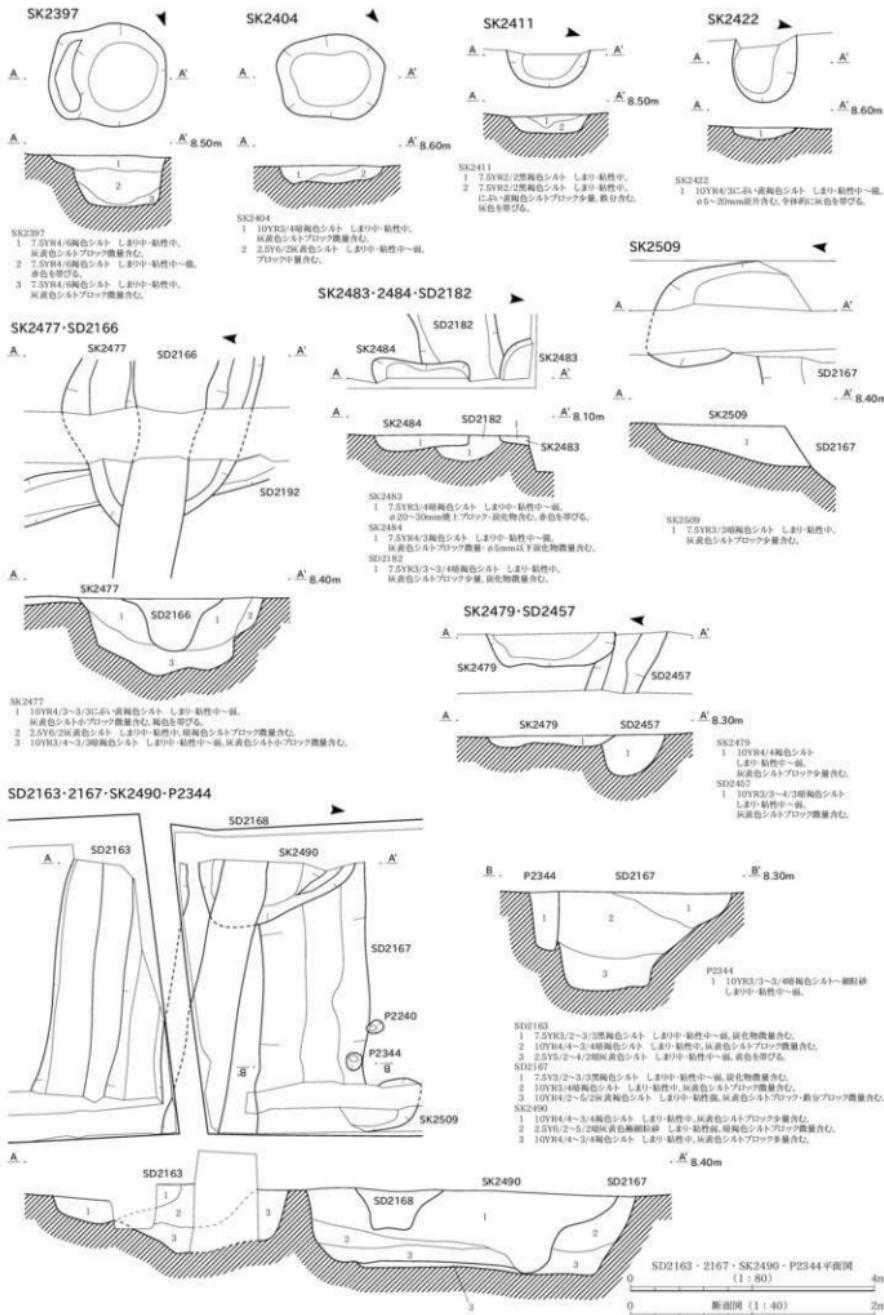
4. 10YR5/5/4-5黑褐色シルト 樹根断片 灰化物微量含む。

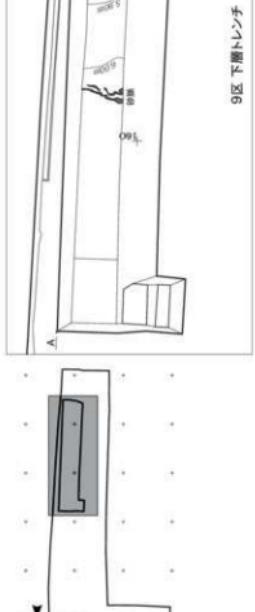
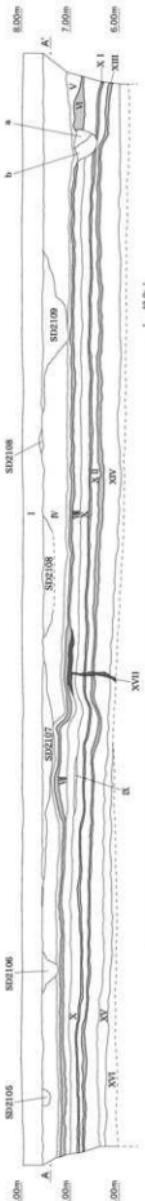
5. 10YR4/3-3/4暗褐色シルト 上に灰化物微量含む。

6. 10YR4/3-3/4暗褐色シルト 樹根断片 上に灰化物微量含む。

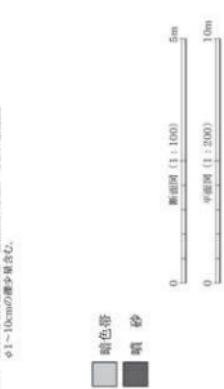
図版 14

石船戸東遺跡III 10区遺構個別図 (7)



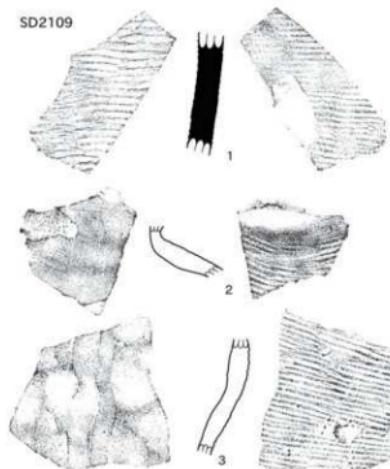


9区 下層トレンチ

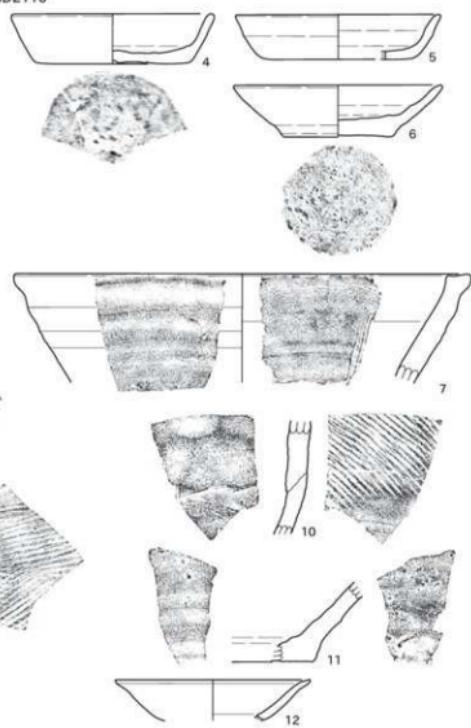


10区 下層トレンチ

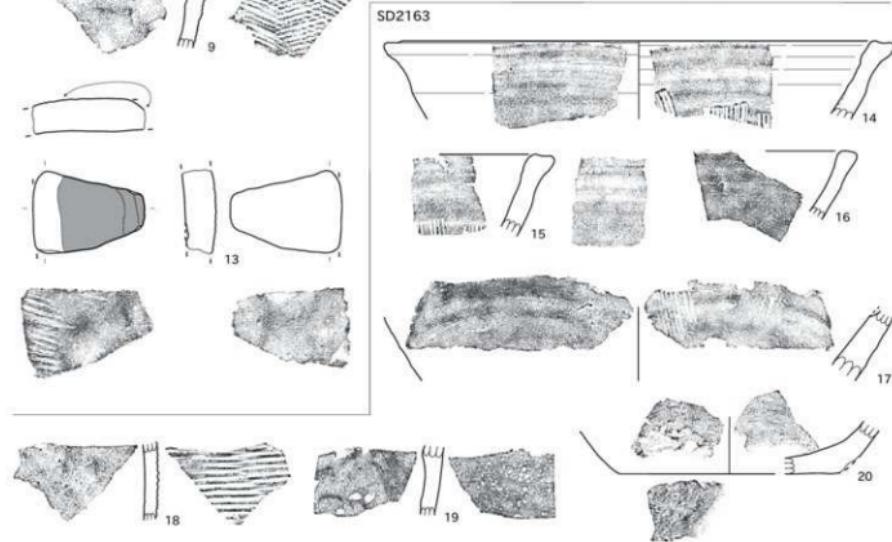
SD2109



SD2110



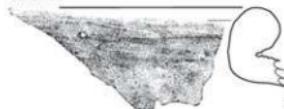
SD2163



0

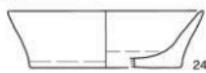
15cm (1:3)

SD2167



21

SD2191



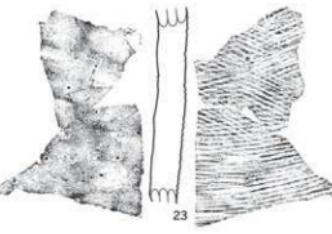
24



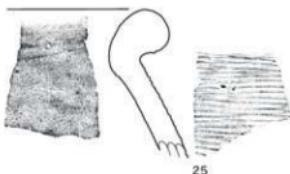
21



22

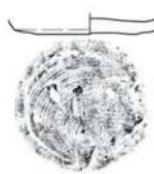


23



25

SD2192

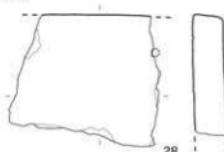


SD2152



26

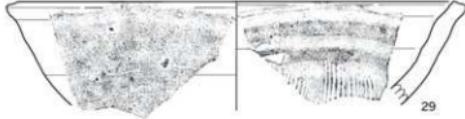
SD2122



28

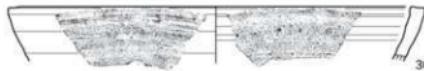


SD2457



29

P2320



30

遺構外



33



P2184



31

P2369

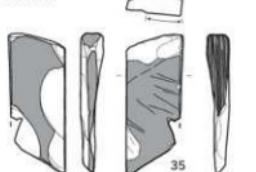


32

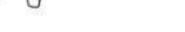
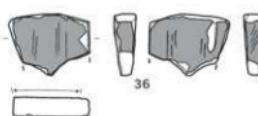


34

SE2161

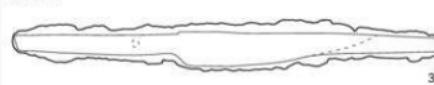


35



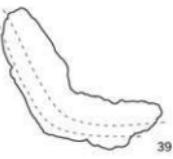
36

SK2308

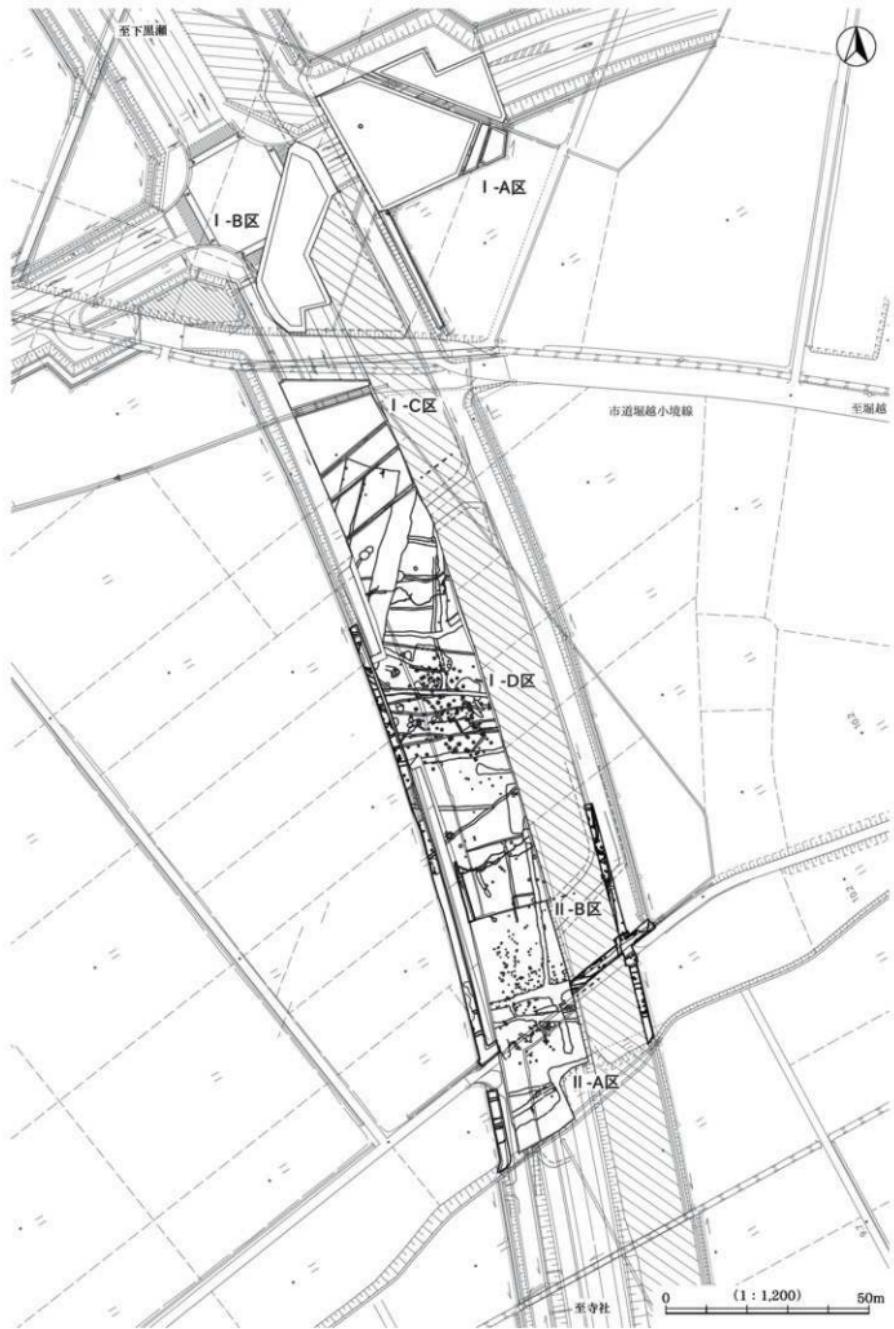


38

SD2457



39





BB

AA

Z

Y

X

W

V

U

T

S

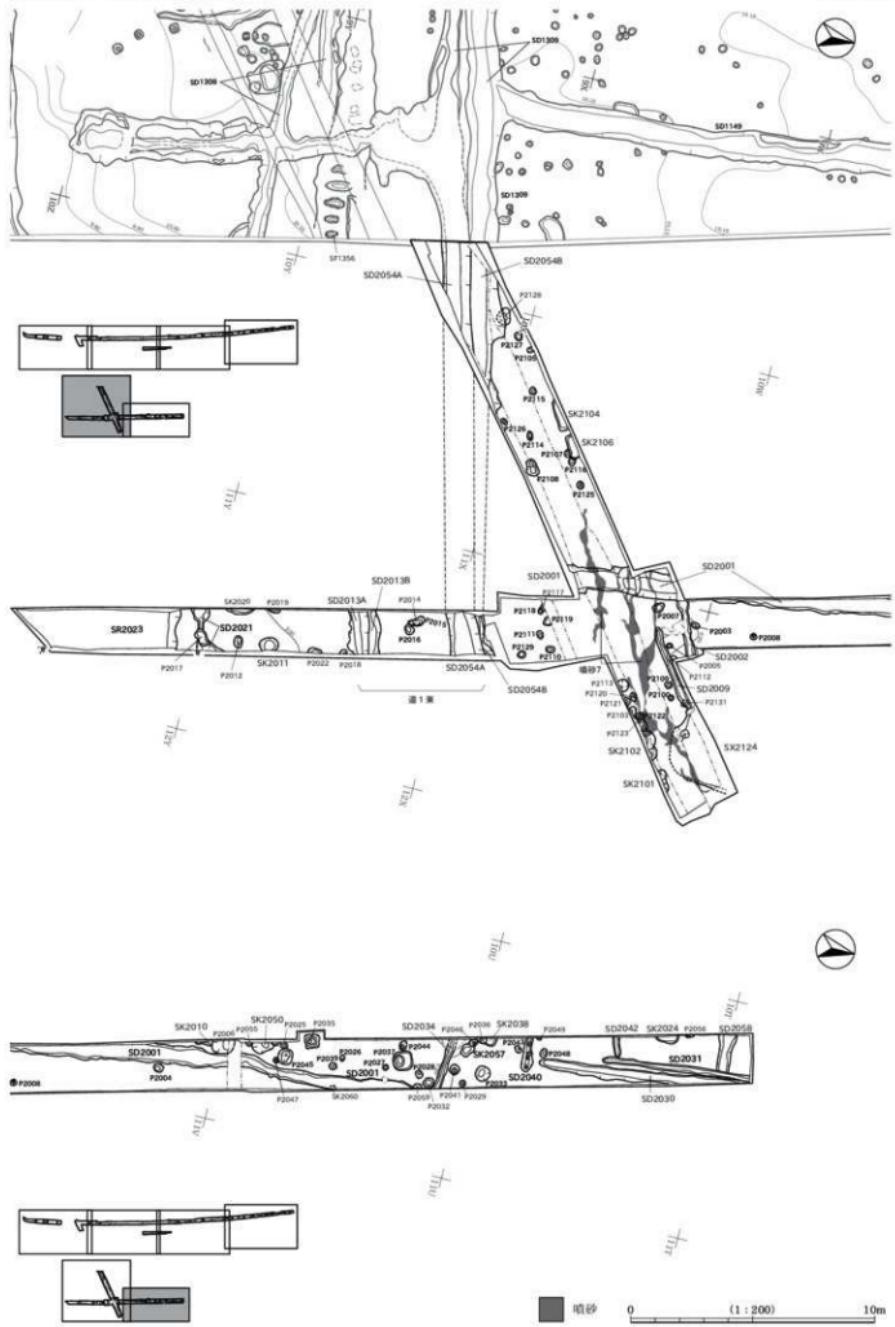
R

Q

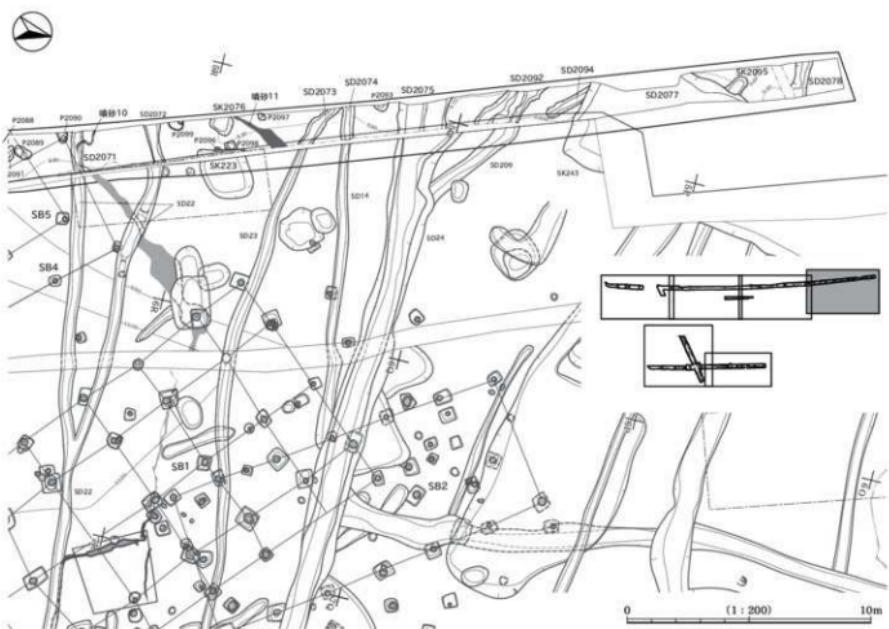
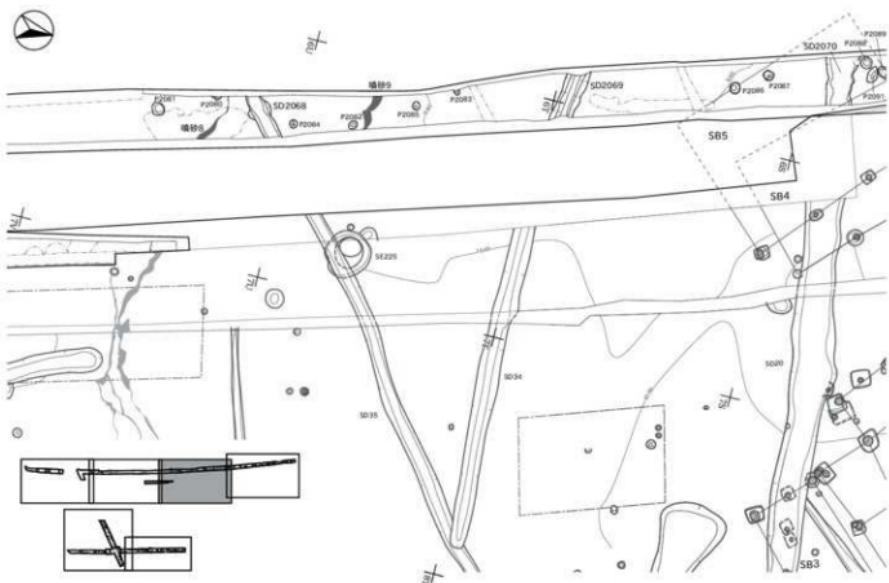
P

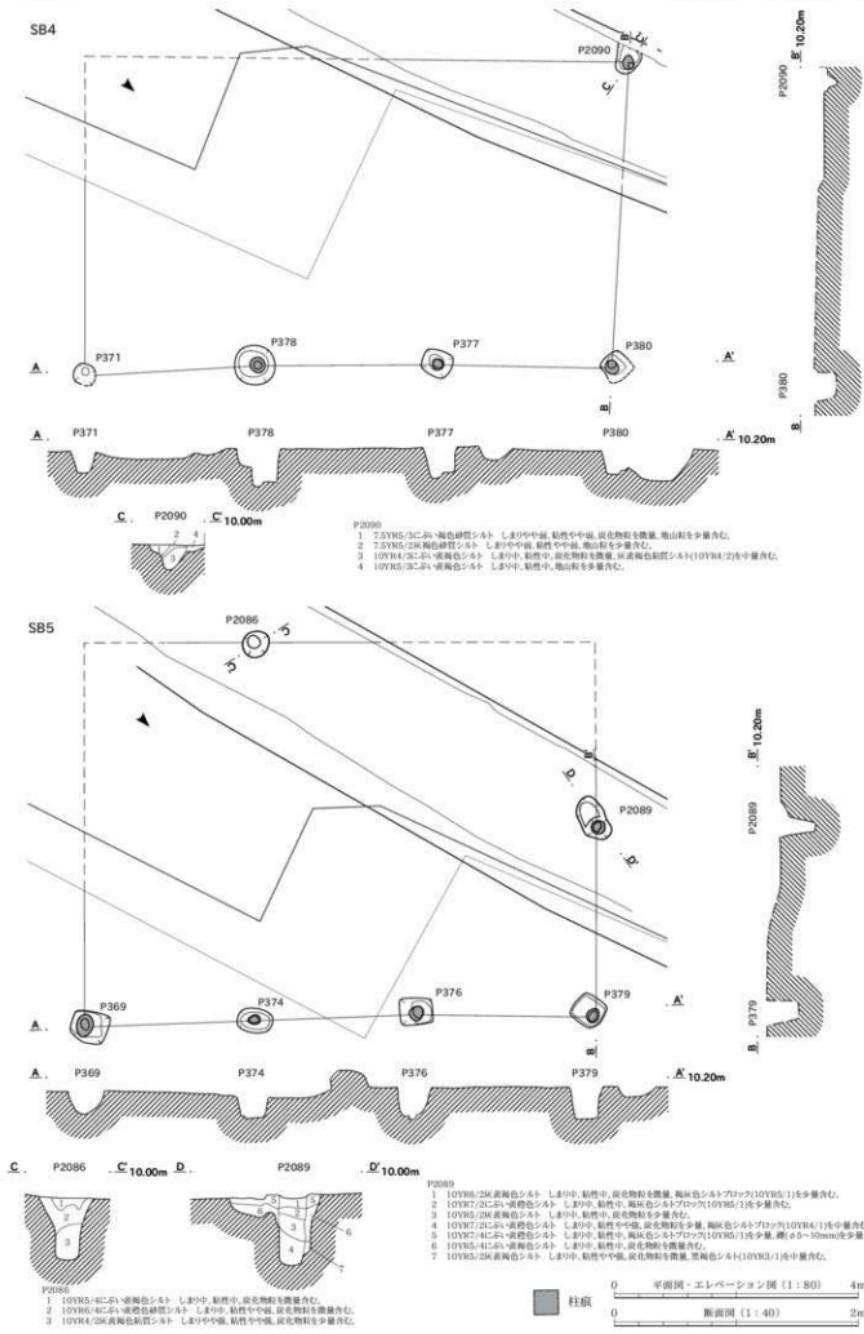
O



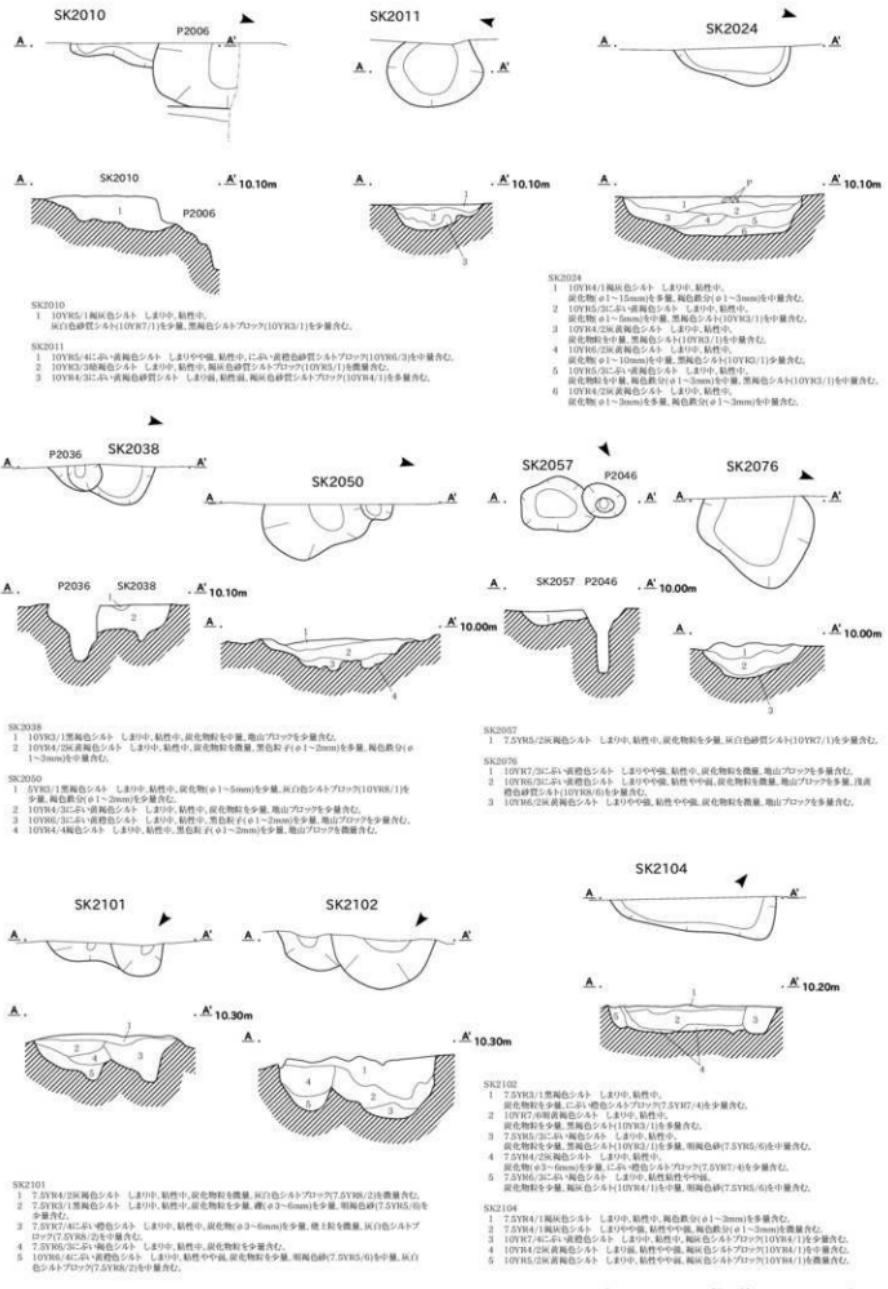


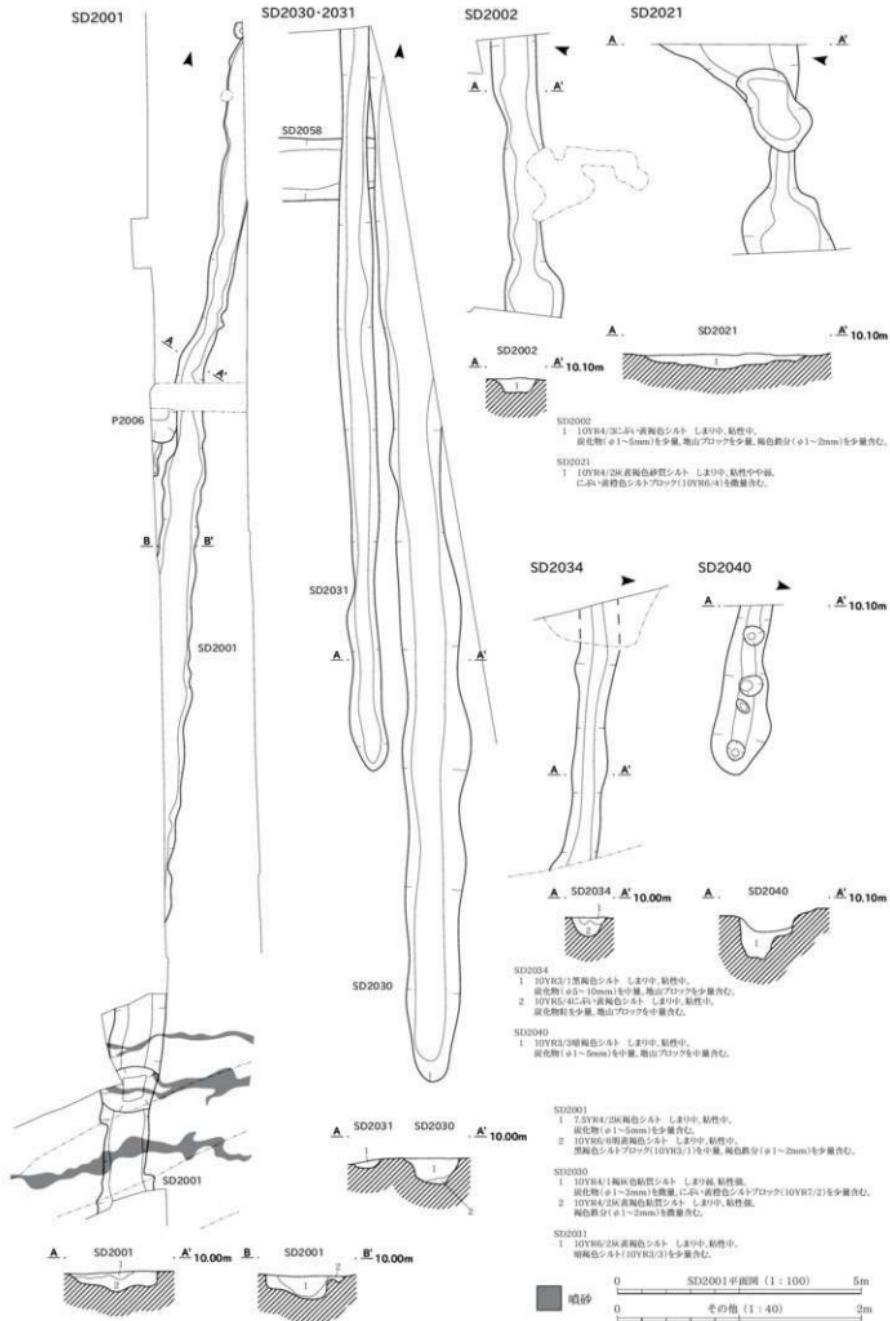




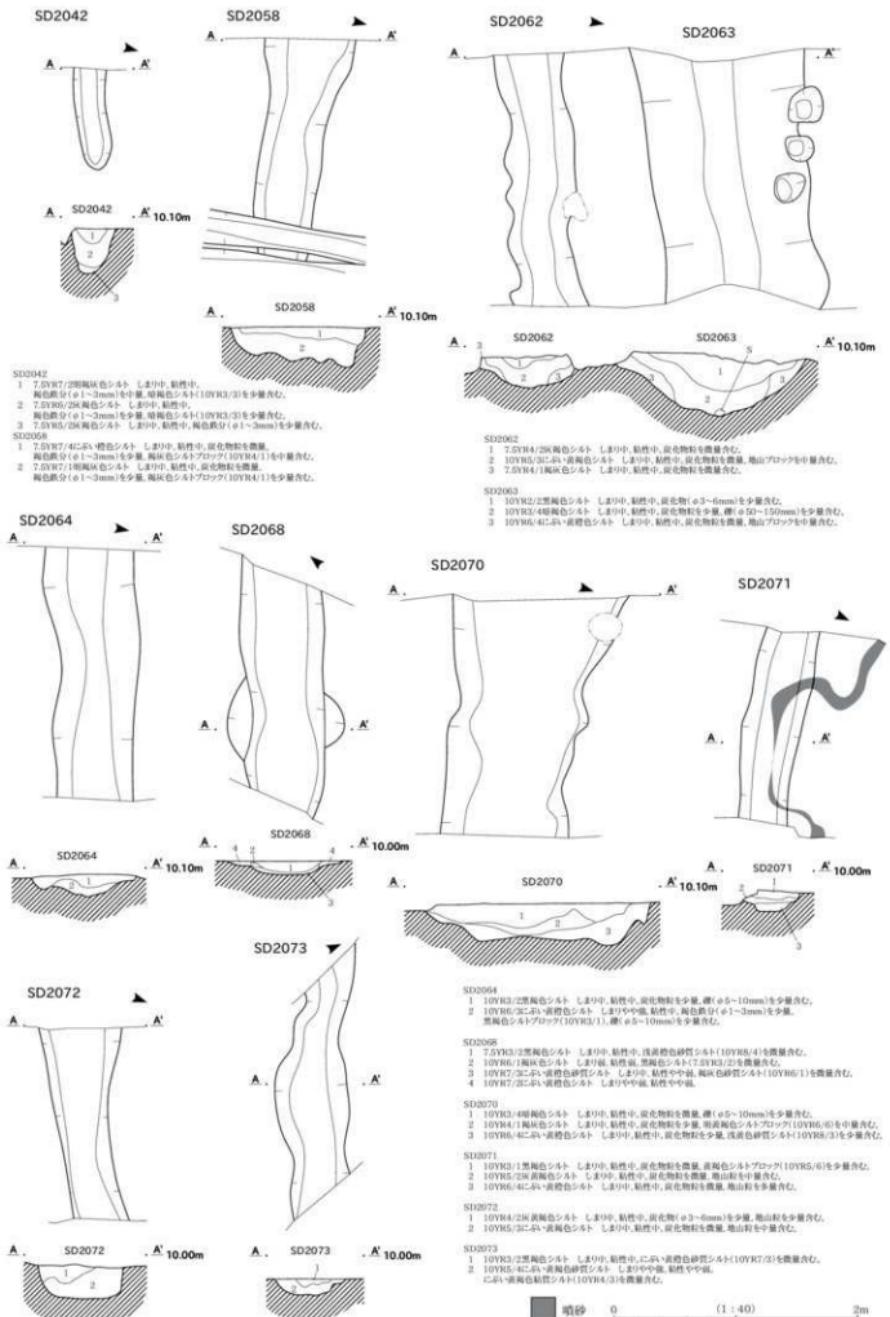


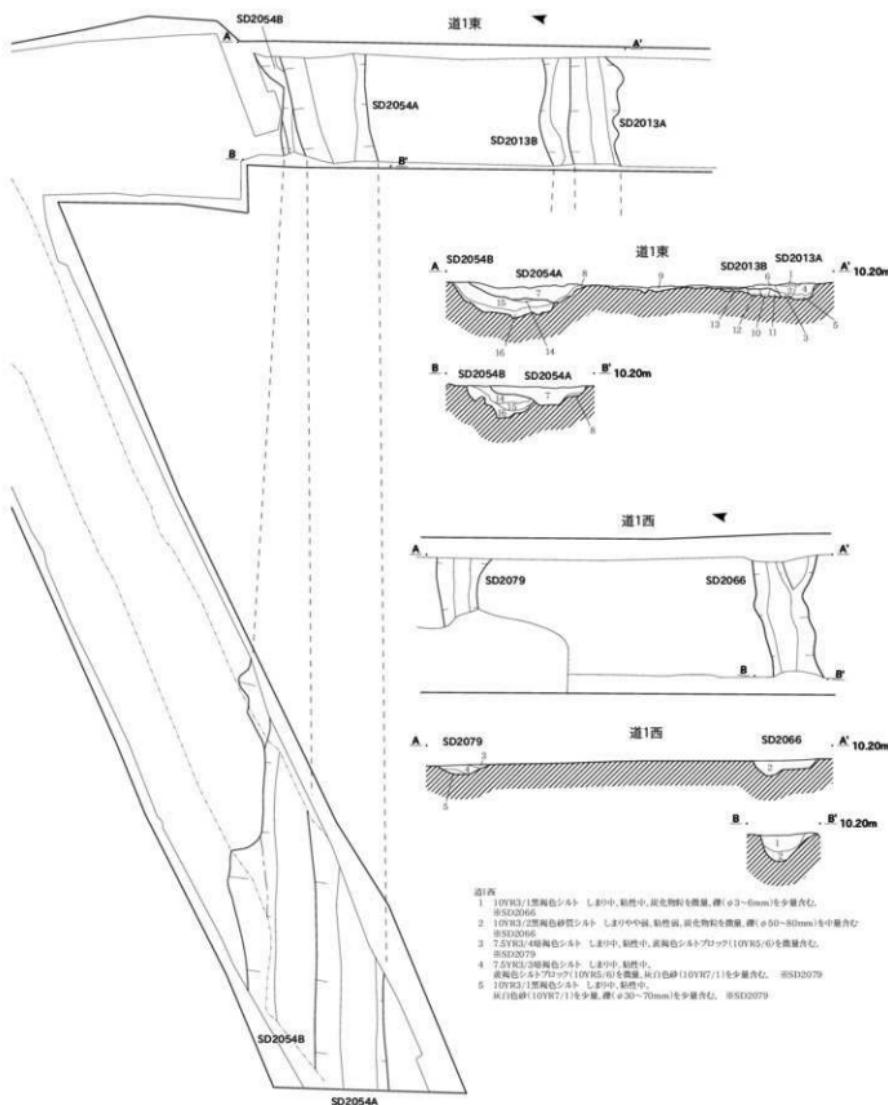
蘿木遺跡II 遺構個別図(2)





藪木遺跡 II 造構個別図 (4)





道1東

- 1 7.5VR5/28灰褐色シート しらゆ中, 粘性少, 黒色粒($\phi=1\sim5mm$)を少量含む。 #SD2013A
- 2 10YR4/4灰褐色 しらゆ中, 粘性少, 粒($\phi=3\sim10mm$)を中量含む。 #SD2013A
- 3 10YR5/3C-5A 黄褐色 しまゆ中, 粘性少, 粒($\phi=1\sim3mm$)を少量含む。 #SD2013A
- 4 10YR5/3C-5A 黄褐色 しまゆ中, 粘性少, 粒($\phi=1\sim3mm$)を少量含む。 #SD2013A
- 5 10YR5/3C-5A 黄褐色 しまゆ中, 粘性少, 粒($\phi=1\sim3mm$)を少量含む。 #SD2013A
- 6 10YR5/3C-5A 黄褐色 しまゆ中, 粘性少, 粒($\phi=1\sim3mm$)を少量含む。 #SD2013A
- 7 10YR5/3C-5A 黄褐色 しまゆ中, 粘性少, 黑色粒($\phi=1\sim3mm$)を少量含む。 #SD2013A
- 8 10YR5/3C-5A 黄褐色 しまゆ中, 粘性少, 黑色粒($\phi=1\sim3mm$)を少量含む。 #SD2013A
- 9 7.5VR5/28灰褐色シート しらゆ中, 粘性少, 黑色粒($\phi=1\sim3mm$)を少量含む。 #SD2054A

SD2054B

SD2054A

SD2013A

SD2013B

SD2079

SD2066

SD2054A

- 10 7.5VR5/28灰褐色シート しらゆ中, 粘性少, 黑色粒($\phi=1\sim3mm$)を少量含む。 #SD2054B
- 11 10YR5/4C-5A 黄褐色シート しらゆ中, 粘性少, 黄色粒($\phi=1\sim3mm$)を少量含む。 #SD2013B
- 12 10YR5/4C-5A 黄褐色シート しらゆ中, 粘性少, 黑色粒($\phi=1\sim3mm$)を少量含む。 #SD2013B
- 13 10YR5/3C-5A 黄褐色シート しらゆ中, 粘性少, 黑色粒($\phi=1\sim3mm$)を少量含む。 #SD2013B
- 14 10YR5/3C-5A 黄褐色シート しらゆ中, 粘性少, 黑色粒($\phi=1\sim3mm$)を少量含む。 #SD2013B
- 15 10YR5/3C-5A 黄褐色シート しらゆ中, 粘性少, 黑色粒($\phi=1\sim3mm$)を少量含む。 #SD2013B
- 16 10YR5/4C-5A 黄褐色シート しらゆ中, 粘性少, 黑色粒($\phi=1\sim3mm$)を少量含む。 #SD2013B

SD2054B

SD2054A

SD2013A

SD2013B

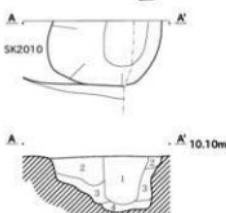
SD2079

SD2066

SD2054A

藪木遺跡 II 遺構個別図 (6)

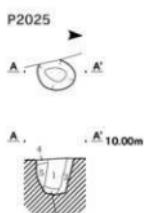
P2006



P2006

- 1 10YR5/1 黒褐色シート しまり中、粘性少、炭化物を少量、地山ブロックを少量含む。
- 2 10YR4/4 にじみ黄褐色質シート しまり少、粘性少。
- 3 地山ブロックを多量含む(φ1~2mm)を少量含む。
- 4 10YR7/4 黑褐色シート しまり中、粘性少、炭化物を少量、炭化物シート(10YR4/1)を少量含む。
- 5 10YR7/2G 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を少量、黒褐色シート(10YR3/1)を少量含む。

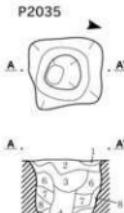
P2025



P2025

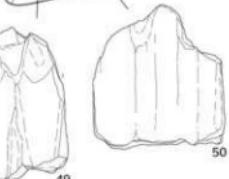
- 1 10YR5/1 黒褐色シート しまり少、粘性少、炭化物を少量、地山ブロックを少量含む。
- 2 10YR7/4 にじみ黄褐色質シート しまり少、粘性少。
- 3 地山ブロックを多量含む(φ1~2mm)を少量含む。
- 4 10YR7/4 黑褐色シート しまり中、粘性少、炭化物を少量、炭化物シート(10YR4/1)を少量含む。
- 5 10YR7/2G 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を少量、黒褐色シート(10YR3/1)を少量含む。

P2035

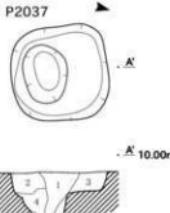


P2035

- 1 10YR5/2 黑褐色色シート しまり少、粘性少、炭化物(φ1~3mm)を少量含む。
- 2 7.5YR7/1 黑褐色色シート しまり少、粘性少、炭化物(φ1~3mm)を少量含む。地山ブロックを少量含む。
- 3 10YR7/1 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を少量、炭化物シート(10YR4/1)を少量含む。
- 4 10YR3/1 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を少量、炭化物シート(10YR4/1)を少量含む。
- 5 10YR7/1 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を少量、地山ブロックを少量含む。
- 6 10YR7/1 黑褐色シルトブロック(10YR4/1)を少量含む。
- 7 10YR7/1 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を少量、地山ブロックを少量含む。
- 8 10YR7/1 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を少量、地山ブロックを少量含む。
- 9 10YR7/1 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を少量、地山ブロックを少量含む。
- 10 10YR7/1 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を少量、地山ブロックを少量含む。
- 11 10YR7/1 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を少量含む。
- 12 10YR7/1 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を少量、黒褐色シート(10YR2/1)を少量含む。
- 13 10YR8/2 白色粘土 しまり強、粘性強、炭化物を微量含む。



P2036



P2036

- 1 10YR5/1 黒褐色シート しまり少、粘性少、炭化物を少量含む。
- 2 10YR7/3 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を少量含む。
- 3 10YR7/4 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を少量含む。
- 4 10YR7/10 黑褐色シルト しまり中、粘性少、炭化物を微量、炭化物シート(10YR2/1)を少量含む。
- 5 10YR6/3C 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を微量、黒褐色シート(10YR2/1)を少量含む。

P2037

- 1 10YR5/1 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物(φ1~2mm)を少量含む。
- 2 10YR5/6 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を少量含む。
- 3 10YR4/2 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物(φ1~3mm)を微量含む。
- 4 10YR6/5 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物(φ1~3mm)を微量含む。
- 5 10YR7/16G 白色粘土 しまり少、粘性強、炭化物(φ1~3mm)を微量含む。
- 6 黑褐色粘土(φ1~3mm)を微量含む。

P2041



P2041

- 1 10YR3/1 黑褐色シルト しまり中、粘性少、炭化物(φ1~2mm)の中量、地山ブロックを少量含む。
- 2 10YR3/3 黑褐色シルト しまり中、粘性少、炭化物を少量、地山ブロックを少量含む。
- 3 10YR2/1 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物(φ1~3mm)を微量含む。
- 4 10YR7/1 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を微量、地山ブロックを微量含む。
- 5 10YR4/3C 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物(φ1~3mm)を微量含む。
- 6 10YR6/6C 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を微量、地山ブロックを微量含む。

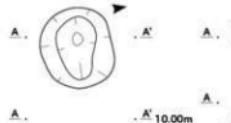
P2044



P2044

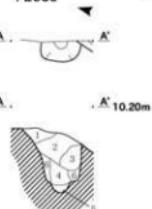
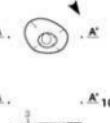
- 1 10YR3/1 黑褐色シルト しまり中、粘性少、炭化物を微量、地山ブロックを微量含む。
- 2 10YR4/3C 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物(φ1~2mm)を微量含む。
- 3 10YR2/3 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物(φ1~2mm)を微量含む。
- 4 10YR7/4C 黑褐色粘土 しまり少、粘性少、炭化物を微量、地山ブロックを微量含む。
- 5 10YR6/4C 黑褐色粘土 しまり少、粘性少、炭化物(φ1~3mm)を微量含む。
- 6 黑褐色粘土(φ1~3mm)を微量含む。

P2045



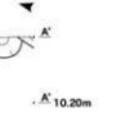
- 1 10YR5/6 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物(φ1~3mm)を少量含む。
- 2 10YR3/1 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を微量含む。
- 3 10YR7/1 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を微量含む。
- 4 10YR7/2 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を微量含む。
- 5 10YR7/14K 白色粘土 しまり少、粘性強、炭化物(φ1~5mm)を微量含む。

P2046



- 1 10YR5/6 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物(φ1~3mm)を微量含む。
- 2 10YR3/1 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物(φ1~3mm)を微量含む。
- 3 10YR7/1 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物(φ1~5mm)を微量含む。

P2059



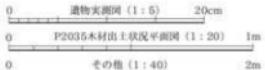
- 1 10YR2/2 黑褐色シルト しまり中、粘性少、黒褐色子(φ1~2mm)を少量含む。
- 2 10YR3/1 黑褐色シルトブロック(10YR7/1)を少量含む。
- 3 10YR2/1 黑褐色シルトブロック(10YR7/1)を中量含む。
- 4 10YR7/1 黑褐色シルト しまり中、粘性少、炭化物(φ1~5mm)を少量含む。
- 5 10YR4/1 黑褐色粘土 しまり少、粘性少、炭化物(φ1~3mm)を微量含む。
- 6 10YR5/4C 黑褐色粘土 しまり少、粘性少、炭化物を微量、地山ブロックを微量含む。
- 7 黑褐色子(φ1~2mm)を少量含む。地山ブロックを微量含む。

P2048

- 1 10YR5/6 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を微量、地山ブロックを少量含む。
- 2 10YR3/1 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を微量、地山ブロックを少量含む。
- 3 10YR7/2C 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を微量、炭化物を微量含む。

P2049

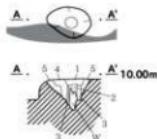
- 1 10YR5/6 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を微量、地山ブロックを少量含む。
- 2 10YR3/1 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を微量、地山ブロックを少量含む。
- 3 10YR7/2C 黑褐色シルト しまり少、粘性少、炭化物を微量、炭化物を微量含む。



図版 30

蕉木遺跡 II 遺構個別図 (7)

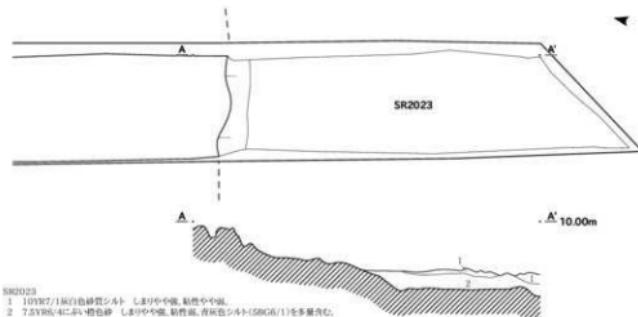
P2120



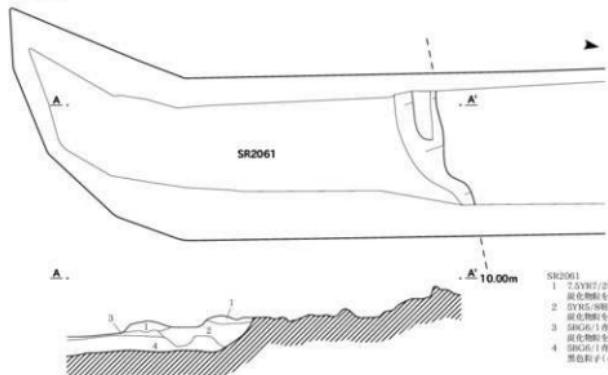
P2120

1. 10YR7/4C-3 黄褐色シルト しまり中, 粘性中,
炭化物を微量, 地山7D-2を少量含む。
2. 10YR6/6(暗褐色) 黒褐色シルト
炭化物を微量, 硫化物を微量含む。
3. 10YR1/1黒褐色粘土シルト しまり強, 粘性強,
炭化物を微量含む。
4. 10YR6/2C-3 黑褐色シルト しまり中, 粘性中,
炭化物を微量含む。
5. 10YR5/3C-3 黑褐色シルト しまり中, 粘性中,
炭化物を微量, 地山粒を少量含む。

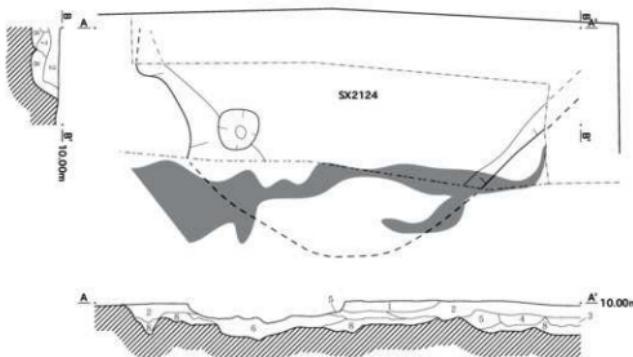
SR2023



SR2061



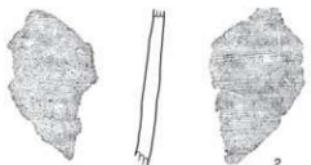
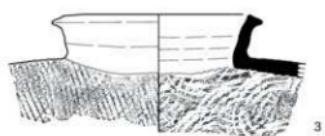
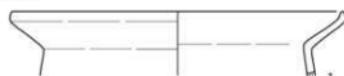
SX2124



砂

0 SR2023・SR2061 (1:80) 4m
0 その他 (1:40) 2m

SK2024



SK2101



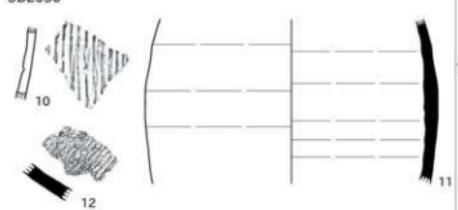
SK2102



SD2001



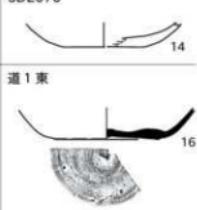
SD2030



SD2034



SD2070



P2008



17

P2033



P2044



P2046



P2086



P2089



SX2124



P2123

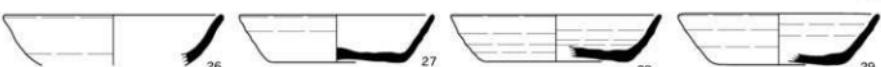


26

27

28

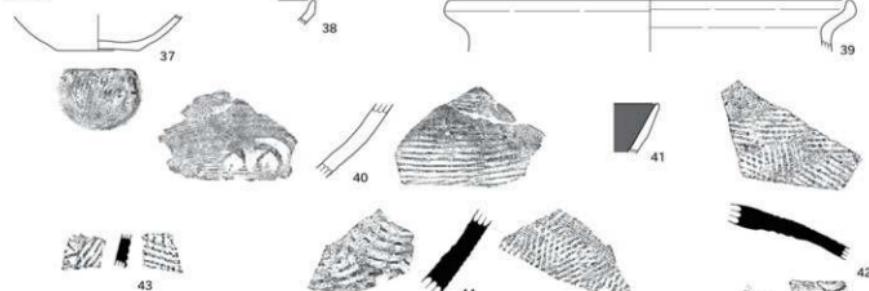
29



■ 黒色處理

0 15cm (1:3)

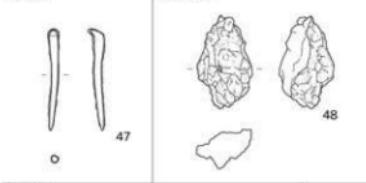
遺構外



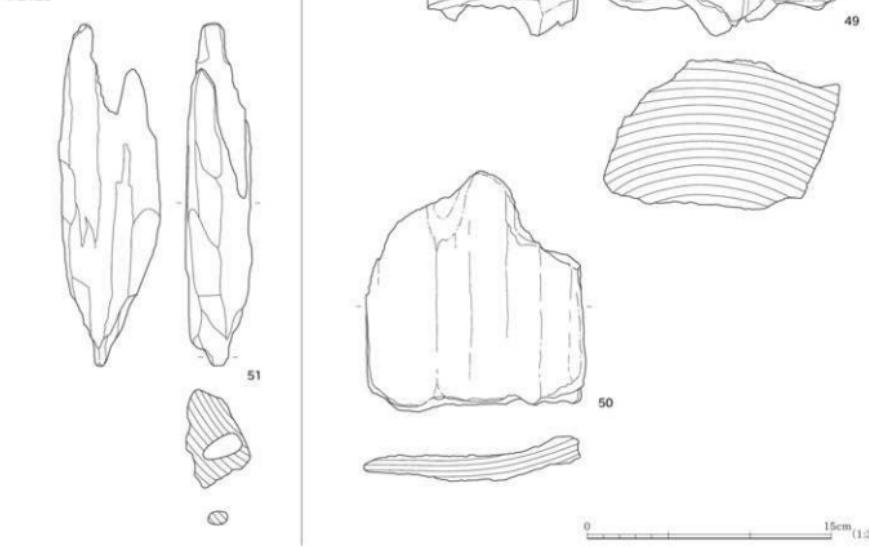
道1東

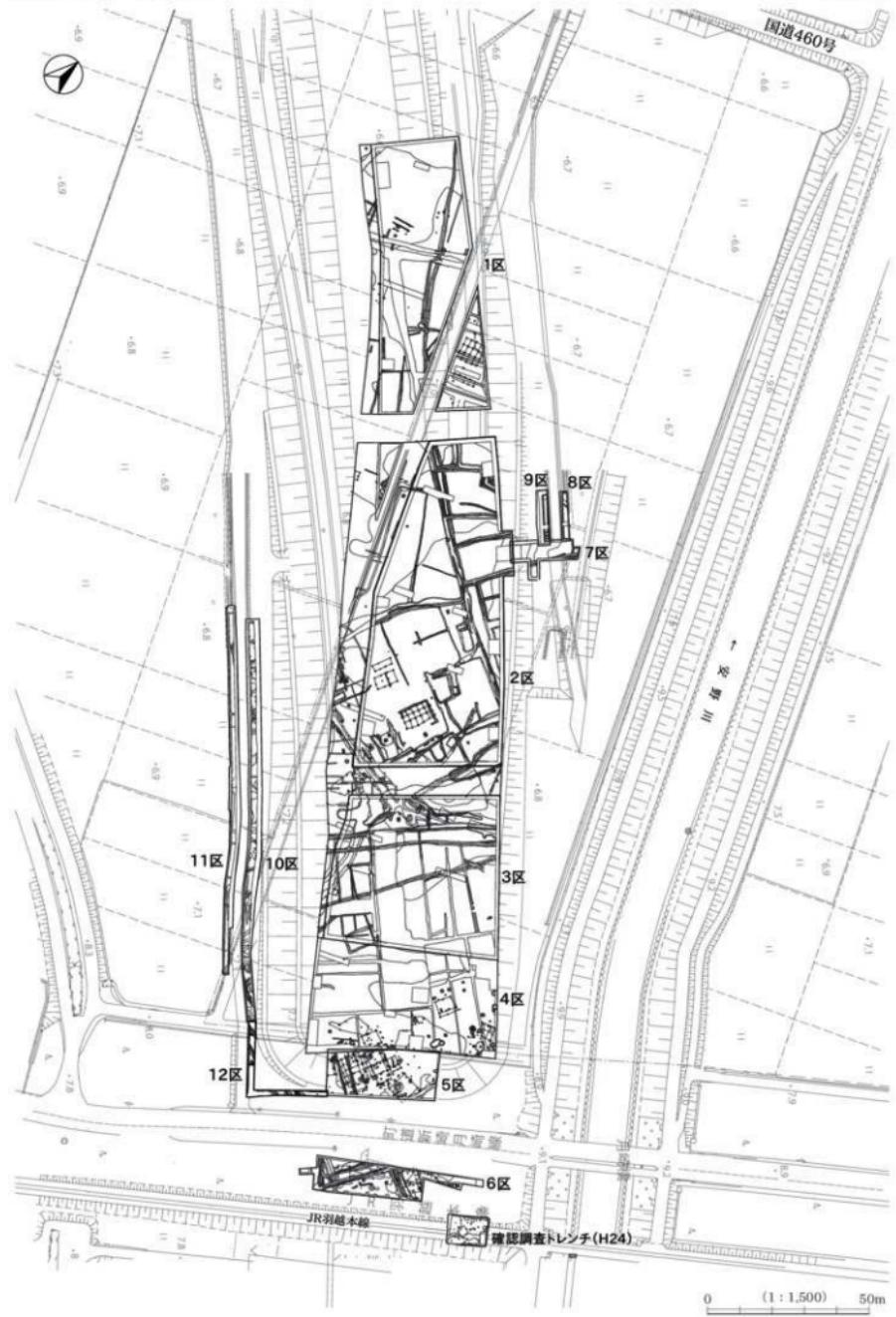


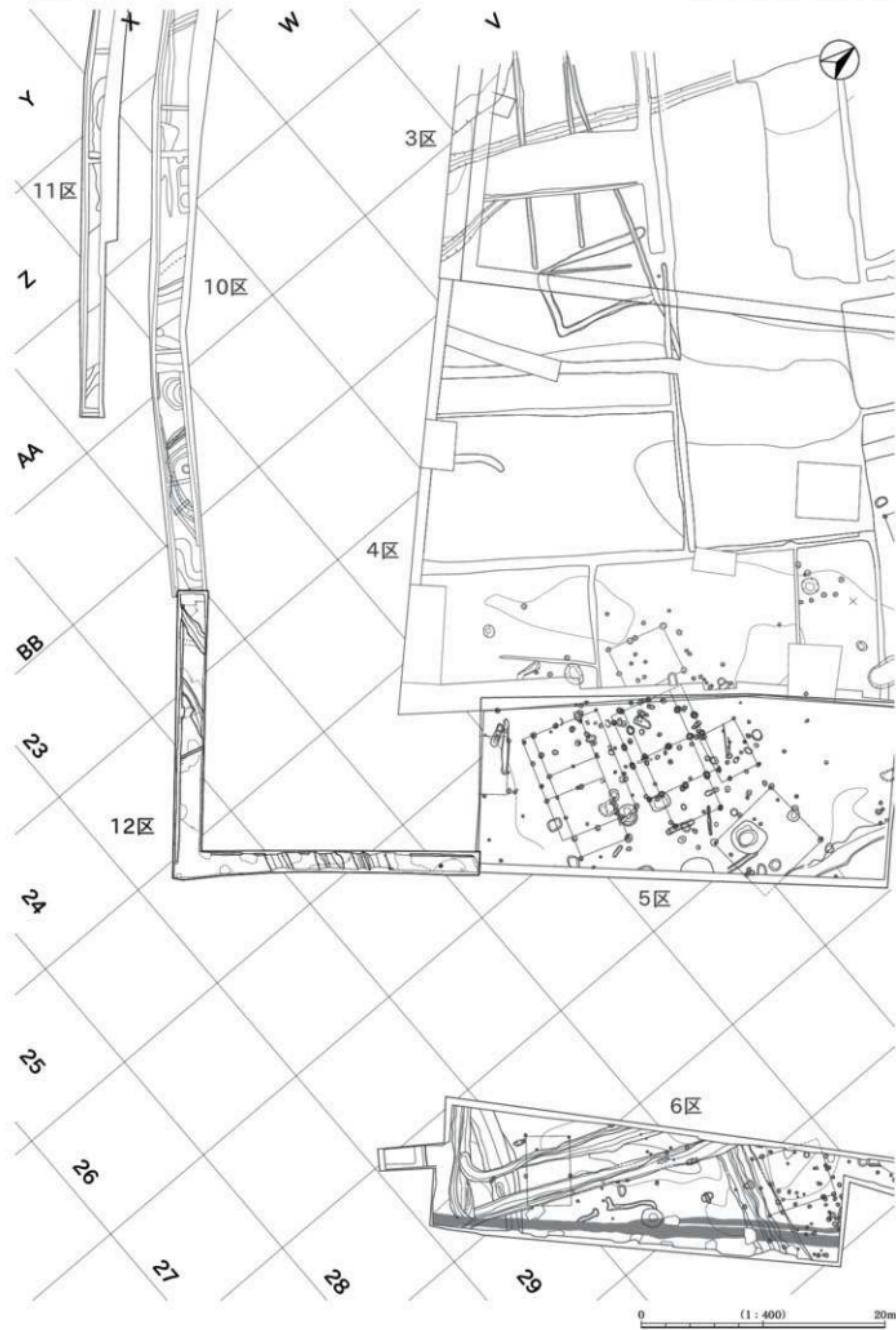
遺構外

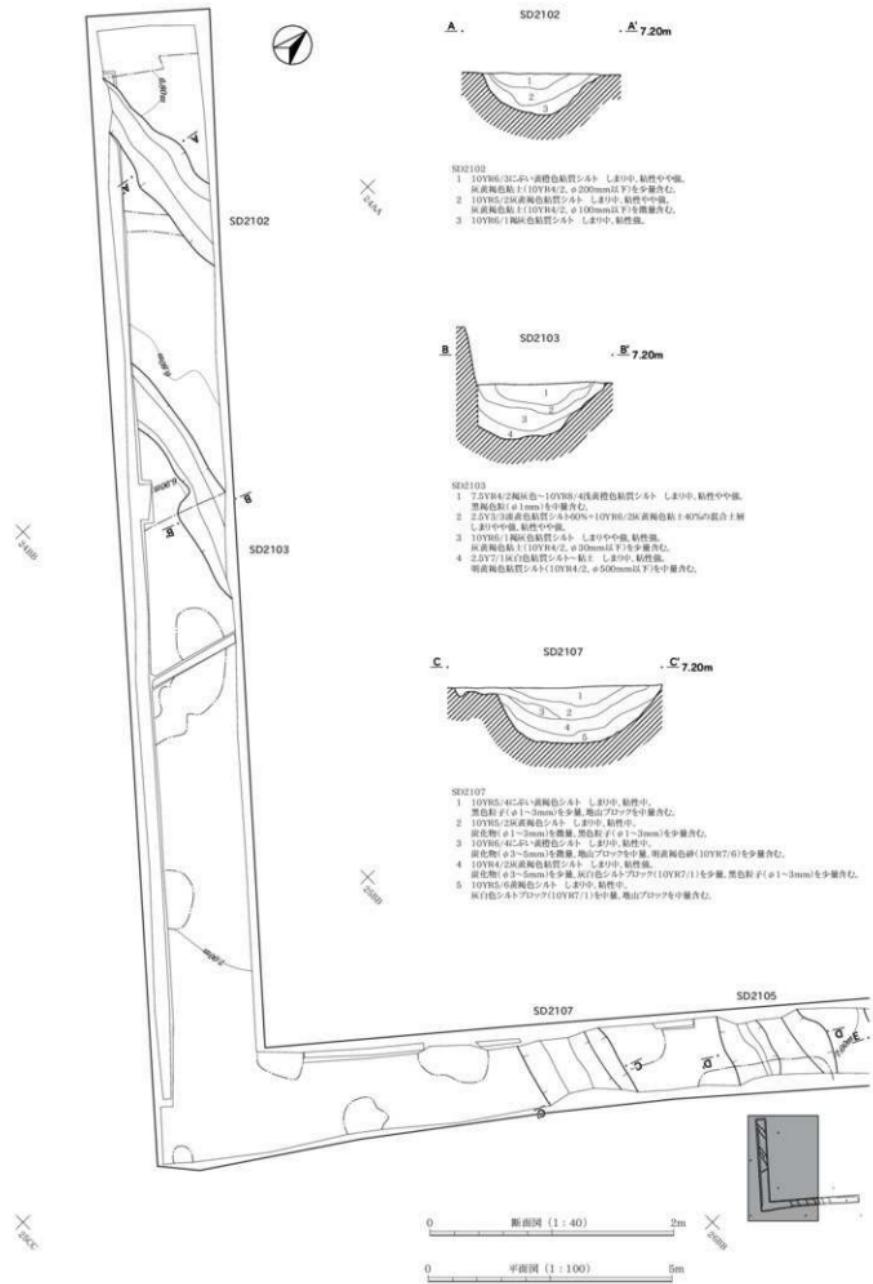


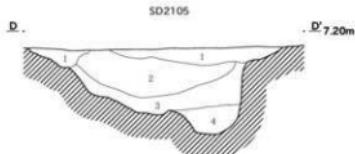
P2120





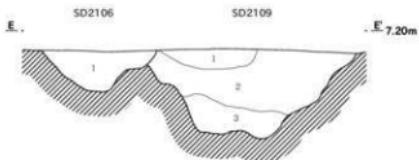






SD2105

- 1 10YR4/2K黄褐色シルト しまり中、粘性中、炭化物(φ1~8mm)を微量含む。
- 2 10YR4/3C-5H-10M-10S 黒色シルト しまり中、粘性中、
- 3 10YR5/4C-5H-10M-10S 黑褐色シルト しまり中、粘性中、炭化物を微量、白色粒子(φ1~3mm)を少量化む。
- 4 10YR5/6C-5H-10M-10S 黑褐色砂質シルト しまり中、粘性中、
- 5 炭化物を微量、白色粒子(φ1~3mm)を少量化む。

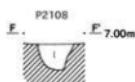


SD2106

- 1 10YR4/2K黄褐色シルト しまり中、粘性中、炭化物(φ1~3mm)を微量、
- 6 黑色砂質(φ1~3mm)を少量、地山ブロックを少量化む。

SD2109

- 1 10YR4/2K黄褐色シルト しまり中、粘性中、
- 2 10YR4/3C-5H-10M-10S 黑褐色シルト しまり中、粘性中、
- 3 10YR5/4C-5H-10M-10S 黑褐色砂質シルト しまり中、粘性中、
- 4 10YR5/6C-5H-10M-10S 黑褐色砂質シルト しまり中、粘性中、
- 5 炭化物(φ1~3mm)を微量、白色粒子(φ1~3mm)を少量化む、
- 6 黑色粒子(φ1~3mm)を少量化む、白色粒子(φ1~3mm)を少量化む。



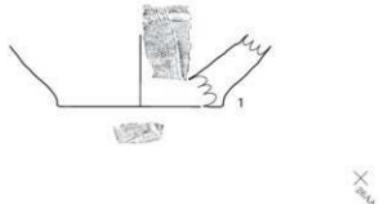
P2108

- 1 10YR3/1黑褐色シルト しまり中、粘性中、黑色粒子(φ1~3mm)を微量、地山ブロックを少量化む。

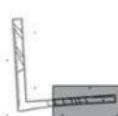
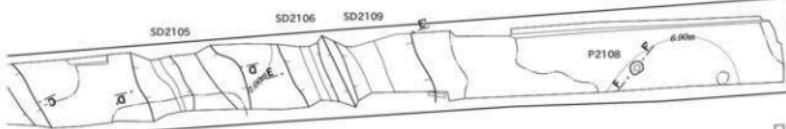
0 (1 : 40) 2m

SD2105

遺構外



0 15cm (1:3)



X
25x40

X
25x40

0 (1 : 100) 5m



遺跡遠景（南から）



遠景（西から）



9区 完掘（西から）



10区 完掘（西から）



10区 遺構集中・北側（西から）



10区 遺構集中・南側（西から）



SK2141 断面（東から）



SD 1 完掘（北西から）



SD2104 断面（北西から）



SD2105 断面（東から）



SD2106 完掘（南から）



SD2107 断面（南から）



SD2109 断面（南から）



SD2109 断面（北から）



SD2109 遺物出土状況（南から）



SD2109 遺物出土状況（北西から）



SD2110 断面B-B' (南東から)



SD2110 遺物出土状況（南から）



SD2110 遺物出土状況（西から）



SD2110 遺物出土状況（東から）



SD2110 遺物出土状況（北東から）



SD2109・SD2110・SD2133・SD2134 完掘（北西から）



SD2117 断面 B-B' (東から)



SD2133 断面 (北から)



SD2134 断面 (南西から)



P2115 断面 (南から)



P2121 断面 (西から)



下層 全景 (南から)



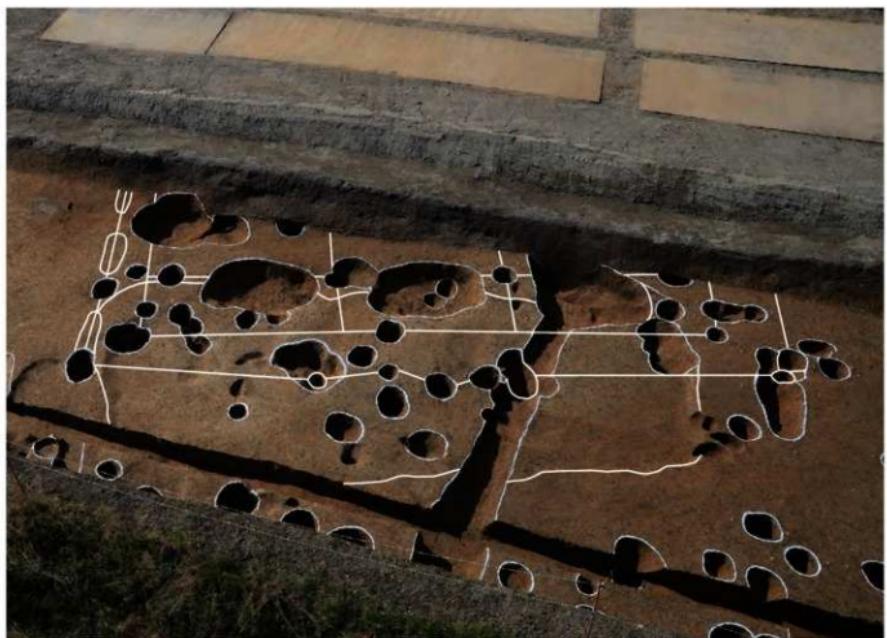
下層 東壁断面 (南西から)



下層 砂脈・噴砂 (西から)



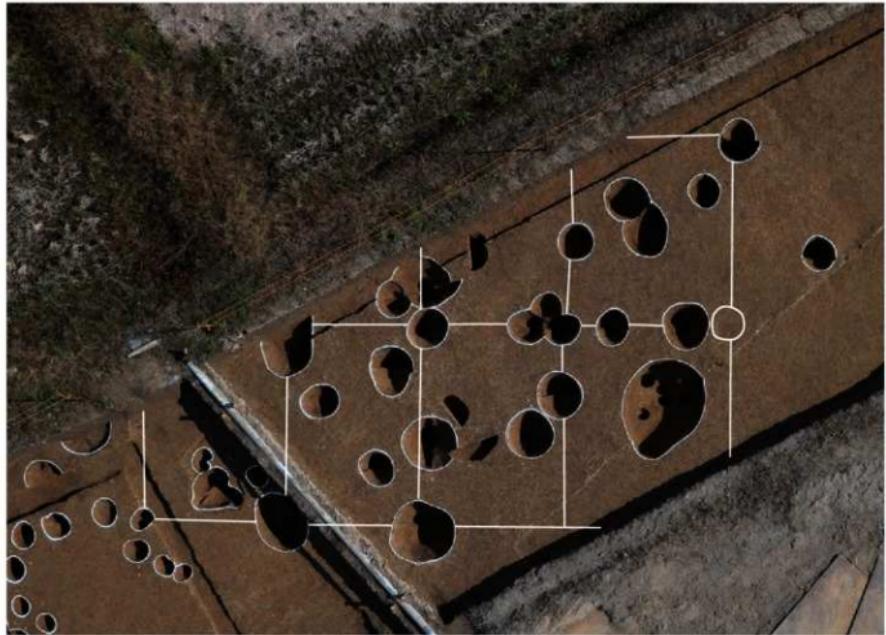
SB13-14-15 完掘（南西から）



SB16 完掘（北東から）



SB17 完掘（北西から）



SB18 完掘（北西から）



SE2161 断面（南から）



SE2161 遺物出土状況 俯瞰（東から）



SE2161 新面（南西から）



SE2161 遺物出土状況 近接（南から）



SE2161 完掘（東から）



SK2157 断面（東から）



SK2160・SK2519 断面（北東から）



SK2160 炭化物出土状況（東から）



SK2162 断面（北から）



SK2164・P2171 断面（東から）



SK2165 完掘（南東から）



SK2180 断面（東から）



SK2180 完掘（東から）



SD2182 断面（西から）



SK2190 断面（西から）



SK2210 断面（北東から）



SK2234 断面（北から）



SK2234 完掘（西から）



SK2236 断面（東から）



SK2236 完掘（北東から）



SK2286 断面（東から）



SK2303 断面（南東から）



SK2308 断面（東から）



SK2308 遺物出土状況（東から）



SK2175 完振（東から）



SK2317 断面（南東から）



SK2318 検出状況（東から）



SK2318 断面 A-A'（東から）



SK2335 断面（西から）



SK2384 断面（西から）



SK2397 断面（北東から）



SK2411 断面（東から）



SK2477 完掘（西から）



SK2484・SK2483 完掘（東から）



SK2490 断面（東から）



SD2145 完掘（北から）



SD2149 断面（東から）



SD2149 完掘（西から）



SD2151 完掘（東から）



SD2156 断面（東から）



SD2163・SD2167・SD2168・SK2490 完掘（東から）



SD2167・SD2168・SK2490 断面 A-A'（東から）



SD2169 断面 A-A'（東から）



SD2169・SD2191・SD2170 完掘（西から）



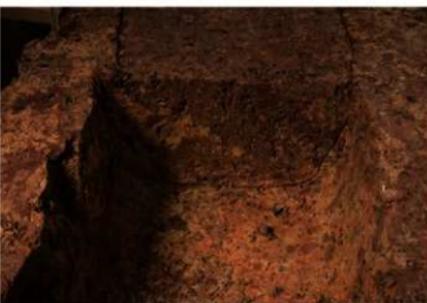
SD2170 断面（東から）



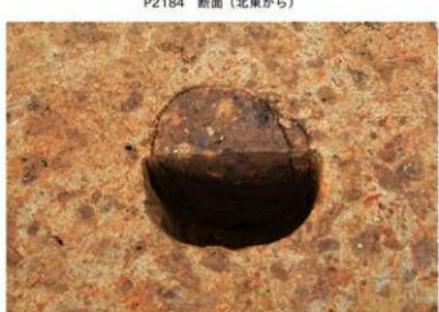
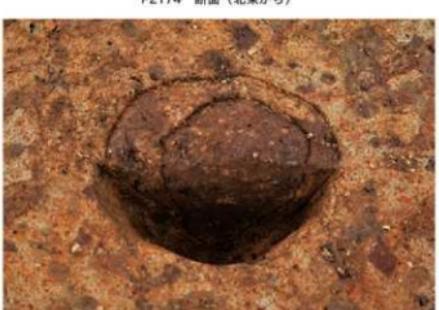
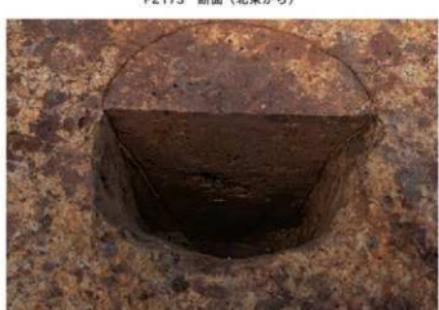
SD2182 完掘（南西から）



SD2191 断面 B-B'（西から）



SD2192 断面（北西から）





P2203 断面（東から）



P2211 断面（南から）



P2213 断面（東から）



P2216 断面（西から）



P2225 断面（西から）



P2244 断面（北から）



P2257 断面（北から）



P2258 断面（北から）



P2262・P2263 断面（北東から）



P2267 断面（南から）



P2282 断面（北から）



P2297 断面（北から）



P2353 断面（南から）



P2355 断面（南から）



P2373 断面（南東から）



P2377 断面（南東から）



P2378 断面（北西から）



P2378・P2476 完整（西から）



P2381 断面（南東から）



P2383 断面（南東から）



P2385 完整（南東から）



P2391 断面（北東から）



P2396 断面（南から）



P2421 断面（東から）



P2425 断面（西から）



P2468 断面（北から）



P2468 完掘（北から）



P2372 完掘（南東から）



P2504 断面（東から）



下層 全景（北から）



下層東壁（北西から）



下層断面（基本層序）（西から）







1~4区遠景（南から）



1~3区遠景（北から）



1～4 区全景（東から）



5～7 区遠景（北から）



5~7区全景（東から）



7区全景（北西から）



SB4・5 完掘（南東から）



噴砂7（東から）



噴砂9（東から）



SK2010・P2006 断面（東から）



SK2011 完掘（西から）



SK2024 遺物出土状況（東から）



SK2024 断面（東から）



SK2038 · P2036 断面(東から)



SK2050 断面(東から)



SK2057 · P2046 完掘(北東から)



SK2076 完掘(東から)



SK2101 遺物出土状況(北西から)



SK2101 完掘(北西から)



SK2102 断面(北西から)



SK2102 完掘(北西から)



SK2104 完掘（北西から）



SD2001 新面（南から）



SD2001 完掘（北から）



SD2030・SD2031 新面（南から）



SD2030・SD2031 完掘（北から）



SD2034 完掘（南から）



SD2040 完掘（南から）



SD2042 完掘（東から）



SD2058 完掘(南から)



SD2062・SD2063 完掘(東から)



SD2068 完掘(西から)



SD2070 完掘(東から)



SD2072 完掘(東から)



SD2073 完掘(東から)



道1東(SD2054A) 断面(東から)



道1東(SD2013A) 断面(西から)



道1東 (SD2013・SD2054) 完掘 (西から)



道1東 (SD2054) 完掘 (西から)



道1西 (SD2079) 断面 (西から)



道1西 (SD2066) 完掘 (東から)



P2025 断面 (東から)



P2035 断面 (東から)



P2035東部 完掘 (東から)



P2035 柱根出土状況 (東から)



P2035 板材出土状況（東から）



P2035 碑板出土状況（東から）



P2035 完掘（東から）



P2037 断面（東から）



P2037 完掘（東から）



P2041 断面（北東から）



P2044 断面（南から）



P2044 完掘（南から）



P2045 断面（東から）



P2045 完整（東から）



P2046 断面（北から）



P2059 断面（西から）



P2086 断面（南から）



P2086 完整（南から）



P2089 断面（南東から）



P2089 完整（南東から）



P2090 断面（北から）



P2090 完掘（北から）



P2120 完掘（北西から）



SR2023 断面（西から）



P2006・2025・2035・2036・2037・2041・2044・2045・2046・2059 完掘（東から）



SR2061 完掘(東から)



SR2061 完掘(北東から)



SX2124 遺物出土状況(東から)

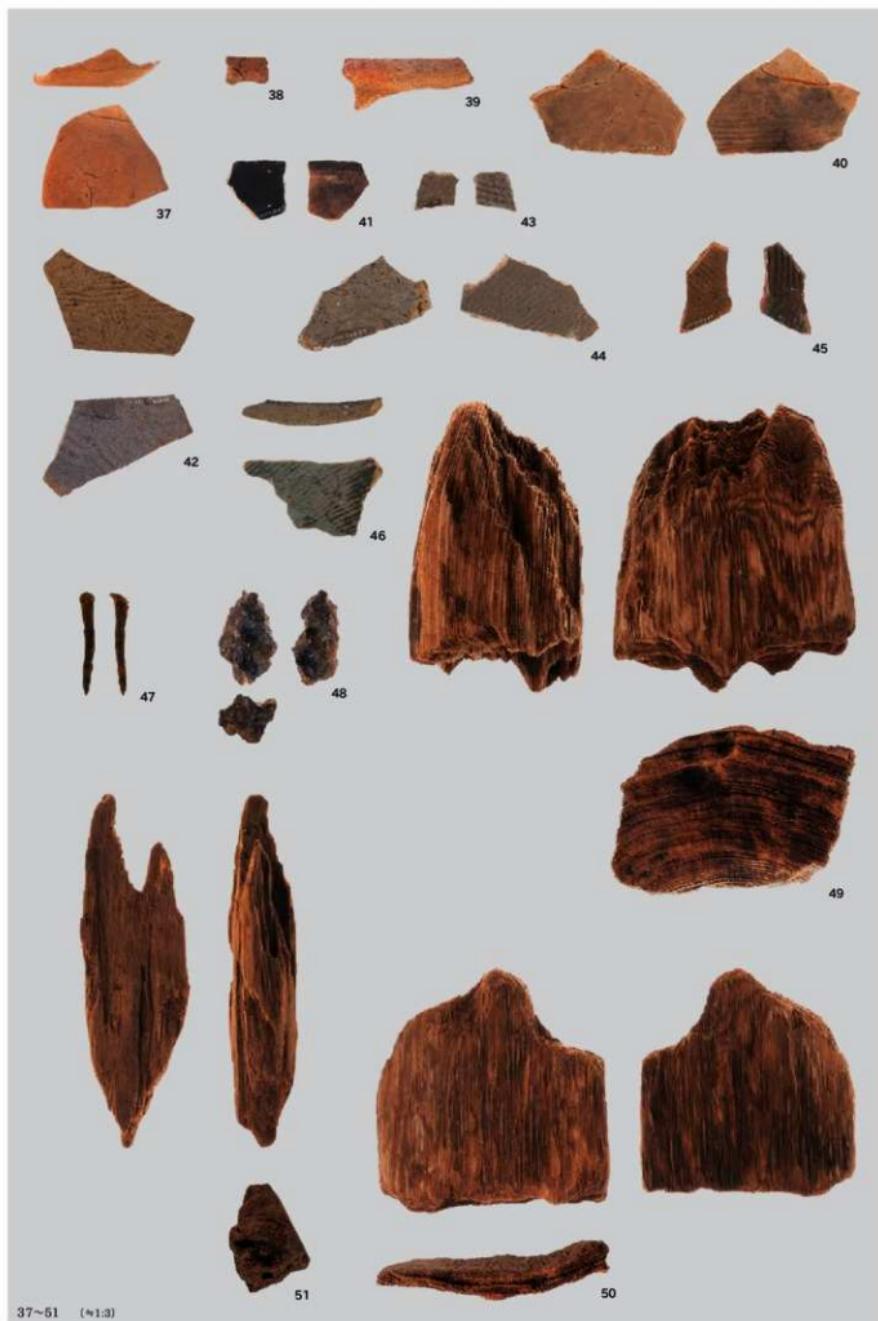


SX2124 断面(南東から)



SX2124 完掘(東から)







調査区遠景（南西から）



調査区遠景（西から）



調査区全景（北西から）



SD2102 断面（北西から）



SD2102 完掘（南東から）



SD2103 断面（北西から）



SD2103 完掘（北西から）



SD2105 新面（北西から）



SD2105 珠洲焼出土状況（南東から）



SD2106・SD2109 断面（南東から）



SD2106・SD2109 完掘（北西から）



SD2107 新面（北西から）



SD2107 完掘（北西から）

SD2105



1

遺構外



2

(×1.3)

報告書抄録

ふりがな	いしむなとひがしいせきさんたいよじちょうさ・かぶらわせきにたいさんじちょうさ・やまぐちのなかせきごたいくじょうさ						
書名	石船戸東遺跡Ⅲ 第4次調査・蕉木遺跡Ⅱ 第3次調査・山口野中遺跡Ⅴ 第6次調査						
副書名	一般国道49号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書						
巻次	19						
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第297集						
編著者名	藤本隆之・中山悟朗・高野恒一・小村正之(以上、株式会社ノガミ)、荒川隆史(理文事業団)、赤堀房人・馬場健司・田中義文・東澤翔(パリノ・サーヴェ株式会社)						
編集機関	公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981						
発行年月日	2023(令和5)年7月28日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	調査面積 m ²	調査原因
石船戸東遺跡	新潟県阿賀野市 百津地内	15222 403	37°49'8"	139°12'53"	20220516～ 20220822 20220920～ 20221107	1,373m ²	一般国道49号 阿賀野バイパス建設
蕉木遺跡	新潟県阿賀野市 埴越地内	15222 405	37°48'32"	139°13'18"	20220415～ 20220705 20220926～ 20221116	422m ²	一般国道49号 阿賀野バイパス建設
山口野中遺跡	新潟県阿賀野市 月崎地内	15222 400	37°49'48"	139°12'27"	20220713～ 20220729	81m ²	一般国道49号 阿賀野バイパス建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
石船戸東遺跡	散布地 集落跡	中世 近世	掘立柱建物6棟、井戸1基、溝53条、土坑37基、ピット(小穴)308基、性格不明遺構1基	須恵器、土師質土器、珠洲焼、青磁、白磁、砥石、曲物、紡錘輪、刀子			
蕉木遺跡	集落跡	平安時代 中世 近世	掘立柱建物2棟、道1条、溝25条、土坑14基、ピット77基、流路2条、性格不明遺構1基	土師器、黒色土器、須恵器、灰陶器、土師質土器、育磁、陶器皿、釘、如壁、板材、柱根	古代・中世の道 砂礫 灰釉陶器		
山口野中遺跡	集落跡	中世 近世	溝6条、ピット1基	繩文土器、土師器、珠洲焼	中世の道		
要約	石船戸東遺跡	9世紀代において旧河道沿いで掘立柱建物群が存在し、旧河道と建物群の間に道が存在することが確認された。出土遺物は9世紀代の土師器・須恵器が主体で、灰陶器皿など、官衙的色彩を有するものが若干含まれる。中世では13～14世紀頃の居住域と思われる多数の柱穴が確認され、付近から青磁碗などが出土した。					
	蕉木遺跡	山口野中遺跡	山口野中遺跡から境塚遺跡にかけて延びる中世の道が、途中で緩やかに蛇行していることが確認された。道の側溝の可能性がある溝からは、珠洲焼の片口鉢の破片が出土した。				

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第297集

一般国道49号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書19

石船戸東遺跡Ⅲ 第4次調査

蕉木遺跡Ⅱ 第3次調査

山口野中遺跡V 第6次調査

2023(令和5)年7月27日印刷 編集・発行 公益財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

2023(令和5)年7月28日発行

〒 956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1

電話 0250(25)3981

FAX 0250(25)3986

印刷・製本 株式会社 ウィザップ

〒 950-0963 新潟市中央区南出来島2丁目1番25号

電話 025(285)3311

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第297集『石船戸東遺跡III(第4次)・燕木遺跡II(第3次)

山口野中遺跡V(第6次)』 正誤表

2023年8月追加

頁	位置	誤	正
抄録	石船戸東遺跡 市町村コード	1 5 2 2 2	1 5 2 2 3
抄録	燕木遺跡 市町村コード	1 5 2 2 2	1 5 2 2 3
抄録	山口野中遺跡 市町村コード	1 5 2 2 2	1 5 2 2 3